

愛知県埋蔵文化財センター調査報告書 第165集

西 浦 遺 跡

2011

公益財団法人 愛知県教育・スポーツ振興財団
愛知県埋蔵文化財センター

愛知県埋蔵文化財センター調査報告書 第165集

にし うら い せき
西 浦 遺 跡

2011

公益財団法人 愛知県教育・スポーツ振興財団
愛知県埋蔵文化財センター

序

愛知県の東南部に所在する豊橋市は、東三河の人口の過半を占める中核市であり、貿易港である三河港や各鉄道会社のターミナル駅となっている豊橋駅などを中心に商業・工業が栄えた産業都市として発展しています。市域は豊橋平野の上に広がり、南部は高師原や天伯原と呼ばれる台地があり、西に豊川が流れ、東には低い山々が連なる弓張山系が存在します。その弓張山系には標高 358 メートルを測る石巻山が聳え、山麓には三河国八名郡で唯一の延喜式内社である石巻神社が鎮座しています。

今回、発掘調査を行いました西浦遺跡は、その霊峰石巻山の南麓に立地しており、縄文時代から江戸時代までのさまざまな時代の遺構や遺物が発見されました。特に弥生時代以降の建物跡が多数確認されており、集落の変遷を知る上で貴重な資料になったといえるでしょう。本書は、こうした遺構や遺物を紹介し、成果をまとめたものであります。

こうした調査成果が、豊橋市域や、ひいては愛知県域の歴史を追究していく上で一助となることが期待されます。また、埋蔵文化財の保護や啓蒙活動に活用されることも願っております。

最後になりましたが、発掘調査の実施に際しては、地元住民の方々をはじめとする関係者および関係諸機関のご理解とご協力を賜りましたことに対し、厚くお礼申し上げます。

平成 23 年 3 月

公益財団法人 愛知県教育・スポーツ振興財団

理事長 今 井 秀 明

例 言

- 1 本書は愛知県豊橋市石巻町に所在する西浦遺跡（県遺跡番号 790349）の発掘調査報告書である。
- 2 調査は、道路改良工事（主）東三河環状線建設工事に伴う事前調査として、愛知県建設部道路建設課より愛知県教育委員会を通じて委託を受けた公益財団法人愛知県教育・スポーツ振興財団愛知県埋蔵文化財センターが実施した。
- 3 調査期間は平成 18 年 7 月から平成 19 年 3 月までで、6700 m² の面積を行った。整理および報告書作成作業は平成 21 年 4 月から平成 22 年 3 月にかけて実施した。
- 4 調査担当者は、宮腰健司（本センター主任専門員：当時主査）・鈴木正貴（本センター調査研究専門員：当時主任）・岡久雅浩（現県立岡崎北高等学校：当時調査研究員）である。発掘調査は株式会社パスコの支援を受けて実施した。なお、株式会社パスコの調査スタッフは、現場代理人小林広美、調査補助員大杉規之、測量技師関山俊弘である。
- 5 調査にあたっては、愛知県教育委員会生涯学習課文化財保護室、愛知県埋蔵文化財調査センター、愛知県建設部道路建設課、豊橋市教育委員会をはじめとする、多くの関係諸機関のご協力を得た。
- 6 本書の執筆と編集は鈴木正貴が担当したが、一部に分担執筆がある。
 - 第 3 章 第 2 節 宮腰健司
 - 第 4 章 第 1 節 鬼頭剛
 - 第 2 節 佐々木由香、バンダリ スダルシャン、
 - 第 3 節 黒沼保子
- 7 整理作業は鈴木正貴が担当した。整理作業は三浦里美、小島裕子、伊藤あけみ（整理補助員）の協力を得て実施し、遺物実測（一部）とトレース作業を国際文化財株式会社に、遺物の写真撮影は写真工房遊に、大型植物遺体と樹種同定分析をパレオ・ラボ株式会社に、報告書編集作業（遺構図作成を含む）は加藤建設株式会社にそれぞれ作業を委託した。
- 8 本書に提示した座標数値は、国土交通省に定められた平面直角座標第Ⅶ系に準拠する。海拔表記は東京湾平均海面（T.P.）の数値である。
- 9 遺物は、本書に掲載された遺物図版番号を登録番号として整理した。
- 10 写真や図面などの調査記録は愛知県埋蔵文化財センターで保管している。

〒498-0017 愛知県弥富市前ヶ須町野方 802-24（0567-67-4161）
- 11 出土遺物は愛知県埋蔵文化財調査センターで保管している。

〒498-0017 愛知県弥富市前ヶ須町野方 802-24（0567-67-4164）
- 12 本書の作成に至るまでに、本センター専門委員・職員をはじめとして下記の方々から多くのご教示とご助言を得ている。記して感謝したい。

（五十音順：敬称略）足立順司・磯谷和明・岩原剛・岡本恒治・河合修・北村和宏・小林久彦・都築暢也・中野晴久・贅元洋・野口哲也・藤澤良祐・余合昭彦

目 次

第 1 章 調査の概要

第 1 節 調査の経緯	1
第 2 節 調査の方法と経過	4
第 3 節 地理的・歴史的環境	5

第 2 章 遺 構

第 1 節 基本層序と遺構の概要	7
第 2 節 竪穴建物跡	9
第 3 節 掘立柱建物跡	73
第 4 節 墓	89
第 5 節 井戸	92
第 6 節 溝	94
第 7 節 その他の遺構	100

第 3 章 遺 物

第 1 節 遺物の概要	103
第 2 節 B 期の遺物	104
第 3 節 C 期の遺物	119
第 4 節 D 期の遺物	126
第 5 節 E 期の遺物	129

第 4 章 自然科学的分析

第 1 節 豊橋市北部、西浦遺跡における地下層序と表層地形解析	145
第 2 節 西浦遺跡出土の大型植物遺体	154
第 3 節 西浦遺跡出土木製品の樹種同定	159

第 5 章 考察・まとめ

第 1 節 遺構の変遷	161
第 2 節 総 括	165

遺構図版	167
------------	-----

写真図版	187
------------	-----

抄 録	219
-----------	-----

挿図目次

第1図	遺跡位置図(1)	1	第60図	掘立柱建物跡 1501SB～1510SB 遺構図	74
第2図	遺跡位置図(2)	2	第61図	掘立柱建物跡 1511SB～1522SB 遺構図	76
第3図	周辺の遺跡分布図	3	第62図	掘立柱建物跡 1523SB～1533SB 遺構図	78
第4図	調査区位置図	6	第63図	掘立柱建物跡 1534SB～1542SB 遺構図	80
第5図	A区・E区基本土層断面図	7	第64図	掘立柱建物跡 1543SB～1550SB 遺構図	82
第6図	竪穴建物跡 170SB, 321SB 遺構図	10	第65図	掘立柱建物跡 1551SB～1558SB 遺構図	83
第7図	竪穴建物跡 309SB 遺構図	11	第66図	掘立柱建物跡 1559SB～1564SB 遺構図	85
第8図	竪穴建物跡 538SB, 949SB 遺構図	13	第67図	掘立柱建物跡 1565SB～1568SB, 1573SA, 1574SA 遺構図	87
第9図	竪穴建物跡 539SB, 579SB 遺構図	14	第68図	掘立柱建物跡 1569SB～1572SB 遺構図	88
第10図	竪穴建物跡 542SB 遺構図	15	第69図	方形周溝墓 1601SZ～1603SZ 遺構図	90
第11図	竪穴建物跡 546SB, 547SB, 548SB 遺構図	16	第70図	土器棺墓 3667SK 遺構図	91
第12図	竪穴建物跡 568SB 遺構図	18	第71図	井戸 304SK, 305SK, 426SK, 428SK, 2290SK 遺構図	93
第13図	竪穴建物跡 584SB 遺構図	19	第72図	溝遺構図(1)	95
第14図	竪穴建物跡 759SB, 849SB, 888SB 遺構図	20	第73図	溝遺構図(2)	98
第15図	竪穴建物跡 2190SB, 5131SB 遺構図	22	第74図	煙道付炉穴 2326SK 遺構図	100
第16図	竪穴建物跡 2205SB, 2206SB 遺構図	23	第75図	集石遺構 236SK, 431SK, 2637SK 遺構図	101
第17図	竪穴建物跡 2209SB, 2210SB 遺構図	24	第76図	杭列・746SK 遺構図	102
第18図	竪穴建物跡 2261SB, 2264SB, 2741SB 遺構図(1) ..	26	第77図	B期の遺物実測図(1)	105
第19図	竪穴建物跡 2261SB, 2264SB, 2741SB 遺構図(2) ..	27	第78図	B期の遺物実測図(2)	106
第20図	竪穴建物跡 2262SB, 2380SB 遺構図(1)	28	第79図	B期の遺物実測図(3)	108
第21図	竪穴建物跡 2262SB, 2380SB 遺構図(2)	29	第80図	B期の遺物実測図(4)	109
第22図	竪穴建物跡 2263SB 遺構図	30	第81図	B期の遺物実測図(5)	110
第23図	竪穴建物跡 2379SB 遺構図	31	第82図	B期の遺物実測図(6)	112
第24図	竪穴建物跡 2384SB, 3331SB 遺構図	32	第83図	B期の遺物実測図(7)	114
第25図	竪穴建物跡 3140SB, 2390SB 遺構図	33	第84図	B期の遺物実測図(8)	115
第26図	竪穴建物跡 2417SB, 2418SB 遺構図	34	第85図	B期の遺物実測図(9)	116
第27図	竪穴建物跡 2420SB 遺構図	36	第86図	B期の遺物実測図(10)	117
第28図	竪穴建物跡 2422SB 遺構図	37	第87図	B期の遺物実測図(11)	118
第29図	竪穴建物跡 2440SB, 3665SB 遺構図	38	第88図	C期の遺物実測図(1)	120
第30図	竪穴建物跡 2469SB, 3320SB 遺構図	39	第89図	C期の遺物実測図(2)	121
第31図	竪穴建物跡 2475SB, 2476SB 遺構図	40	第90図	C期の遺物実測図(3)	122
第32図	竪穴建物跡 2477SB 遺構図	41	第91図	C・D期の遺物実測図(1)	124
第33図	竪穴建物跡 2662SB 遺構図	42	第92図	C・D期の遺物実測図(2)	125
第34図	竪穴建物跡 2663SB 遺構図	44	第93図	D期の遺物実測図	127
第35図	竪穴建物跡 2664SB, 2665SB 遺構図	45	第94図	E期の遺物実測図(1)	130
第36図	竪穴建物跡 2724SB 遺構図	46	第95図	E期の遺物実測図(2)	131
第37図	竪穴建物跡 2745SB 遺構図(1)	47	第96図	E期の遺物実測図(3)	132
第38図	竪穴建物跡 2745SB 遺構図(2)	48	第97図	E期の遺物実測図(4)	133
第39図	竪穴建物跡 2750SB 遺構図	50	第98図	E期の遺物実測図(5)	134
第40図	竪穴建物跡 2754SB 遺構図	51	第99図	E期の遺物実測図(6)	136
第41図	竪穴建物跡 2755SB, 2419SB 遺構図	52	第100図	E期の遺物実測図(7)	137
第42図	竪穴建物跡 2756SB 遺構図	53	第101図	E期の遺物実測図(8)	138
第43図	竪穴建物跡 2804SB 遺構図	54	第102図	E期の遺物実測図(9)	139
第44図	竪穴建物跡 2806SB 遺構図	55	第103図	E期の遺物実測図(10)	140
第45図	竪穴建物跡 2807SB 遺構図	57	第104図	E期の遺物実測図(11)	141
第46図	竪穴建物跡 2851SB 遺構図	58	第105図	E期の遺物実測図(12)	142
第47図	竪穴建物跡 2853SB 遺構図	59	第106図	E期の遺物実測図(13)	143
第48図	竪穴建物跡 2854SB 遺構図	60	第107図	E期の遺物実測図(14)	144
第49図	竪穴建物跡 2902SB, 2903SB 遺構図	61	第108図	西浦遺跡における深掘調査地点	146
第50図	竪穴建物跡 2906SB 遺構図	62	第109図	南北層序断面図柱	147
第51図	竪穴建物跡 2907SB 遺構図	63	第110図	地点1における深掘地層断面写真	148
第52図	竪穴建物跡 2908SB 遺構図	64	第111図	地点4における深掘地層断面写真	149
第53図	竪穴建物跡 3086SB, 3180SB 遺構図	65	第112図	西浦遺跡周辺の等高線図	150
第54図	竪穴建物跡 3088SB, 3089SB 遺構図	67	第113図	南北(A-A')地形断面図	151
第55図	竪穴建物跡 3114SB 遺構図	68	第114図	南東—北西(B-B')地形断面図	152
第56図	竪穴建物跡 3309SB, 3311SB 遺構図	69	第115図	主要遺構変遷図(1)	162
第57図	竪穴建物跡 3315SB 遺構図	70	第116図	主要遺構変遷図(2)	163
第58図	竪穴建物跡 3316SB 遺構図	71			
第59図	竪穴建物跡 3317SB 遺構図	72			

挿表目次

第1表	放射性炭素年代測定結果	153	第3表	西浦遺跡から産出した大型植物遺体	158
第2表	西浦遺跡の大型植物遺体試料一覧	157	第4表	樹種同定結果一覧	160

第1章 調査の概要

第1節 調査の経緯

西浦遺跡は、愛知県豊橋市石巻町^{いしまき にしうら}西浦に位置する遺跡である（第1～3図）。昭和40年に農地構造改善工事の際に木下克己によって発見された遺跡で、同氏は昭和51年に刊行された『愛知県八名郡の先史遺跡』で、弥生時代から中世までの遺跡と評価し、住居址の存在を予測した。以下、『愛知県八名郡の先史遺跡』の西浦遺跡の解説文（全文）を抜粋する。

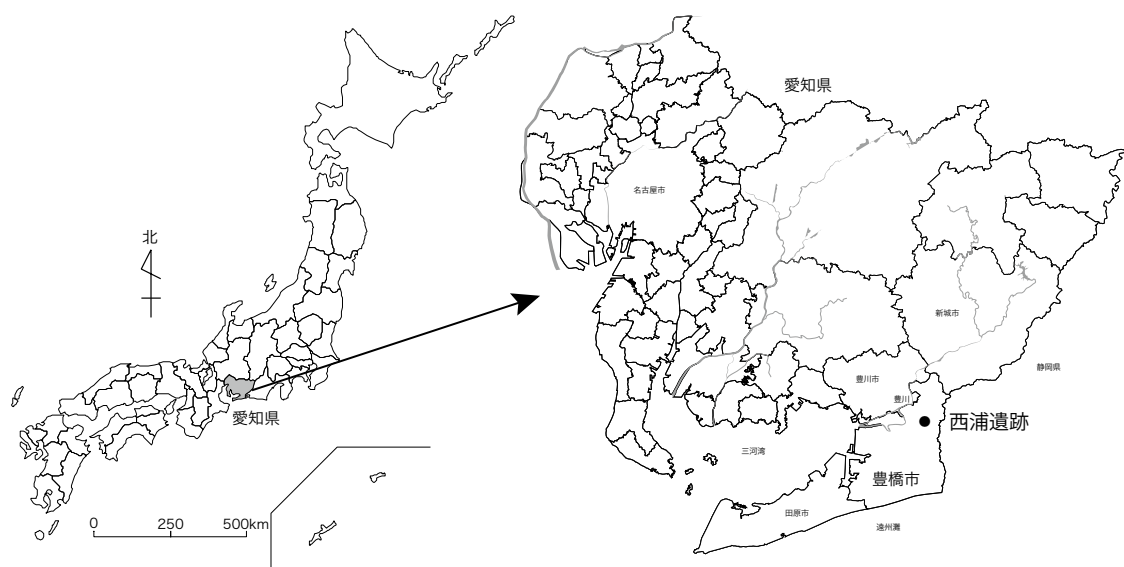
^{にしうれ}
「西浦遺跡

標高三五六mの石巻山の南麓には三遠国境を水源とする三輪川が西へ流れていて、この水を利用する水田が開けている。この水田で米作りする人々の部落金田もこの南麓にある。この金田部落の西端にある石巻小学校裏の洪積台地の端部が西浦遺跡である。昭和四〇年、同地区の農地構造改善工事が実施された際、筆者（編者註：木下克己）が見つけたものである。

遺跡は標高三〇mの日当りのよい地形で、付近には畑と住家とが多く、北は一〇mほど

の落差をなす崖によって、三輪川の沖積地となり、水田が川沿いに広がっている。農地構造改善工事に際して新設道路が畑から掘り下げられ、左右側溝は四〇cmほどさらに掘り込まれた。筆者が踏査したのはこの時点であった。掘り上げた土と掘り凹められた土層の中にいくつかの土器片が見られた。

採集した土器は小破片が多く、粗製土器と精製土器とがあり、両者とも胎土中に石英の細粒を含んでいるが、雲母は肉眼で見える大きさのものが少ない。器肌は黒褐色のものは少なく、黄褐色、茶褐色のものが多く、丹塗りのものも三片ほど見られる。文様のあるのは少量であるが、その中に一破片だけ多彩な施文が見られ、黒褐色の器肌も原因して古そうな感じを持つ。すなわち、篋描きの斜格文の下には櫛状施文具によって平行する短い直線を連続して横にめぐらし、さらにその下へ空間を置かず、同じ器具によって簾状文的に、櫛目列点文を垂下させてい



第1図 遺跡位置図(1)

西浦遺跡



第2図 遺跡位置図(2) (s=1:25000)

国土地理院 1/2.5 万地形図「豊橋」を改変した。

調査の概要



第3図 周辺の遺跡分布図 (s=1:20000)

西浦遺跡

た。この櫛目列点文は長床式によく見る構図であり、文様全体から弥生時代中期後葉の長床式乙類といえよう。このほか、細かい櫛目の横線文とか、波文らしいものも見られたが、これらは弥生時代後期の寄道式土器か欠山式土器に属するものが多い。

なお、須恵器、土師器の破片もあるが、それらは古墳時代から中世までのものであろう。

石器には石鏃二個、石匙的石器一個があり、石質は安山岩の石鏃一個以外はチャートである。

機会を得て調査すれば、住居址の発見も期待できる、この地区としては最も充実した遺跡である。」木下克己『愛知県八名郡の先史遺跡』昭和51年12月31日発行より抜粋

ここに記述された発見の契機となった新設道路は、三輪川に架かる上荒木橋から南へ台地に上る市道のことと伝え聞く（岡本恒治氏からご教示いただいたが、もし誤りがあればそれは筆者の責である）。この木下の成果を受け、1990年刊行の『愛知県遺跡分布地図（Ⅲ）東三河地区』では「散布

地」として西浦遺跡が記載された。しかし、この時点では遺跡範囲について明示されなかった。遺跡の範囲を具体的に明らかにしたのは、豊橋市教育委員会による詳細な遺跡分布調査であった。その成果を受けて2004年刊行された『豊橋市遺跡地図』では、西浦遺跡は東西で1km近くにも拡がる^{にしろ}ことが示された。今回の発掘調査区はその広大な遺跡の中では西端に近い部分である。

愛知県建設部は、東三河地区の主要道路網の整備を図るため、県道東三河環状線の道路改良工事を計画した。この計画路線には多くの遺跡の範囲にかかっており、以前には麻生田大橋遺跡などの発掘調査が行われ、大きな成果が得られた。西浦遺跡の一部も道路工事予定地に含まれていたため、愛知県教育委員会生涯学習課文化財保護室は道路建設予定地内に遺跡の有無確認調査を行い、予定地に遺跡が展開することが確認された。発掘調査は、愛知県建設部から委託を受け、平成18年7月から財団法人愛知県教育・スポーツ振興財団愛知県埋蔵文化財センターが実施した。調査面積は6700 m²である。

第2節 調査の方法と経過

発掘調査は愛知県埋蔵文化財センターが株式会社パスコの支援を受け実施した。調査担当者は宮腰健司・鈴木正貴・岡久雅浩である。調査区は便宜上、南側から順にA区からE区と5区（7小区）に分けて実施し、概ねAa区→Ab区・Ba区・Bb区→C区・D区→E区の順に行った。現地作業は平成18年7月6日から開始し、まずは除草作業から着手した。

調査方法は、はじめにバックホウにより褐灰色細粒砂などの班土からなる表土を除去し、遺構面となる黒褐色極細粒砂（黒ボク）の上面まで掘削した。多くの遺構はこの黒褐色極細粒砂の上面から掘り込まれていることから、全ての調査区においてこの面で遺構検出を試みた。ただし、遺構覆土も基本的には黒褐色極細粒砂などの班土で構成

されているために、実際の遺構検出が難しい場合が多い。結果的には遺構の平面形態が確実でないものがいくつか存在している。このような調査手法には問題があることは承知していたが、灰黄褐色シルトなどの地山まで掘削して遺構検出を行う方法は、例えば竪穴建物跡の覆土の精査を放棄してしまう場合があり、別の問題点も指摘される。本書に掲載された遺構を取り扱うに際しては、遺構検出の際に問題点を含んでいることを十分に留意されたい。

なお、遺構の重複が激しい本遺跡では、重複した遺構を2～3回に分けて掘削せざるを得ない場合が多い。この結果、いずれも黒褐色極細粒砂の上面から掘削された遺構と認識しているにも関わらず、1面遺構、2面遺構、3面遺構と便宜上の

調査の概要

区分けをして整理した。この区分は、重複している新しい遺構から掘削するので、概ね1面が新しく3面が古くなるはずである。ただし、層位的な裏付けを持たない遺構面であるから、各面での遺構の同時期性を保証するものではないのはいうまでもない。

さて、調査区内は国土交通省告示によって定められた平面直角座標第Ⅶ系に準拠した5mグリッドを設定し、遺物は原則このグリッドごとに取り上げている。部分的に包含層を人力で掘削しながら遺構検出を行い、土坑類は半裁掘削、溝や堅穴建物跡などは土層観察用ベルトを残して掘削し、必要な記録を採取した後に全掘作業を行った。遺構の実測は電子平板による測量を実施し、成果品は全てデジタルデータで作成した。写真は6×7リバーサルフィルムとデジタルカメラによる撮影を調査補助員大杉が行った。

各調査区の調査状況をここで概説しておく。Aa区は南半部で戦国時代以降の水田跡を検出した。水田遺構を第1面とし杭列などの遺構を調査した。水田床面で検出される遺構を第2面とし杭列下位に展開する遺構をこの際に調査した。Ab区では調査区中央で盛土状の堆積が確認され、この上下で2面に区分した。結果、盛土状堆積物は近代以降のものと思われ、近世以前の遺構としては第2面でしか検出されていない。Ba区では概ね切り合い関係が新しい柱穴群を第1面、古い堅穴建物跡群を第2面として調査した。Bb区は狭い上に遺構の重複がそれほど多くなかったので1面調査で終了できた。C区では、Ba区と同様に、概ね切り合い関係が新しい柱穴群を第1面、古い堅穴建物跡群を第2面として調査した。

第3節 地理的・歴史的環境

遺跡が所在する豊橋市は愛知県東端部に所在し、東部を愛知県と静岡県との県境をなす弓張山地を有し、南は遠州灘、西は三河湾、北西部は豊川や豊川放水路が流れている。弓張山地から舌状に

ただし、溝などの一部の遺構で第1面と第2面の理解に齟齬が生じた部分が存在する。D区では全体が耕作土などの採土ため大きく攪乱されており、黒褐色極細粒砂が残存する東端部のみBa区と同様に2面調査を行った。E区は遺構の密度が最も稠密で黒褐色極細粒砂の堆積が厚い状況であった。その反面、特に南西部では重機による攪乱（抜根作業によるものか？）が存在し、遺構の残存状況は不良である。結果、南西部で1面調査、東部中央で3面調査、それ以外の大半が2面調査という変則的なものとなっている。E区全体の測図は第2面で実施した。

平成19年1月20日には現地説明会を開催し、検出された遺構と出土した遺物について説明した。約90人の参加者があった。また、出土した遺物は現地で遺物洗浄までの作業を終え、洗浄が終了した時点で27リットル入りコンテナで49箱に及んだ。発掘調査は平成19年3月19日に現地作業は終了した。

整理・報告書作成作業は平成21年度に主に鈴木が実施した。遺物は整理補助員の協力を得て接合・選別作業を実施し、報告書に掲載する遺物の実測については一部を国際文化財株式会社に委託し、残りを宮腰と鈴木が行った。遺物実測図のトレースは多くの部分を国際文化財株式会社に、遺物の写真撮影は写真工房遊に、大型植物遺体と樹種同定分析をパレオ・ラボ株式会社に、報告書編集作業（遺構図作成を含む）は加藤建設株式会社にそれぞれ作業を委託し行った。

平成22年度に報告書印刷作業を行い、印刷はサンメッセ株式会社に委託した。

張り出すいくつかの尾根の間には扇状地が形成されており、そこに豊川をはじめとする大小河川が流れている。西浦遺跡は、石巻山南麓を東西に流れる三輪川によって浸食された崖面に近接する扇

西浦遺跡

端部に相当し、標高は約 30 m を測る。

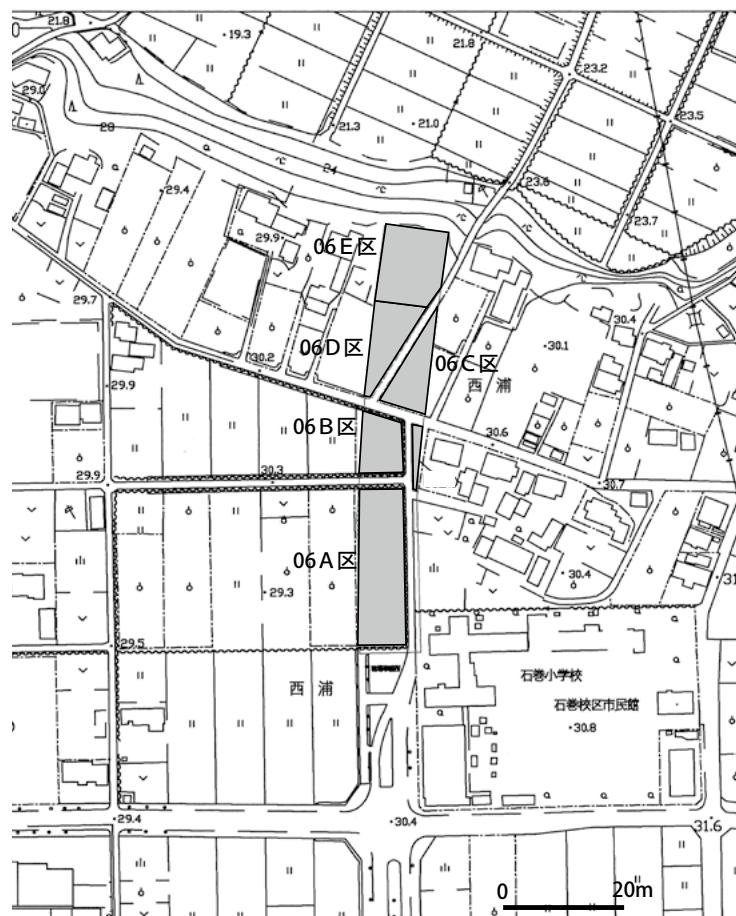
西浦遺跡の南部に所在する石灰岩を産出する牛川鉱山では、中部洪積世後半と推測される人骨などが出土し、牛川原人として知られる。石灰岩で構成される山腹には鍾乳洞がいくつか存在し、西浦遺跡の北東部にある嵩山の蛇穴遺跡からは、縄文早期の押型文土器などが出土した。以降、石巻地区には縄文時代から中世までの遺跡が多数展開しており、古墳を除くとこれらの遺跡の大半は段丘崖の上部に所在している。

石巻地区は三河国八名郡に属し、古くから多くの遺跡が存在していることが知られていた。特に高井・神ヶ谷・神郷地区で多くの遺跡が拡がり、三輪川を挟んで南に位置する金田地区ではあまり遺跡は確認されていない。西浦遺跡はその金田地

区の主要な遺跡となる可能性が高い。

石巻山は古代山岳信仰の場であり、八名郡唯一の式内社である石巻神社が鎮座する。西浦遺跡は北東方向にすぐ石巻山を見上げる位置になる。三輪川の対岸にある臨済宗南龍山玉泉寺は嘉慶元年（1387）以前に創立されたと伝えられ、嵩山正宗寺の末寺という。

西浦遺跡の周辺は近世には^{かなだ}金田村と称され、近世を通じて吉田藩領であった。明治 11 年に神郷村と合併して三輪村となる。その後複雑な統廃合を繰り返し、現在豊橋市石巻町となっている。江戸時代初期には三輪川上流部で三ツ口池が構築された。これにより、扇状地の湿地がやや乾燥して行ったと見られ、徐々に崖奥への開発が進んで行ったようである。（鈴木正貴）



第 4 図 調査区位置図 (s=1:1250)

第2章 遺 構

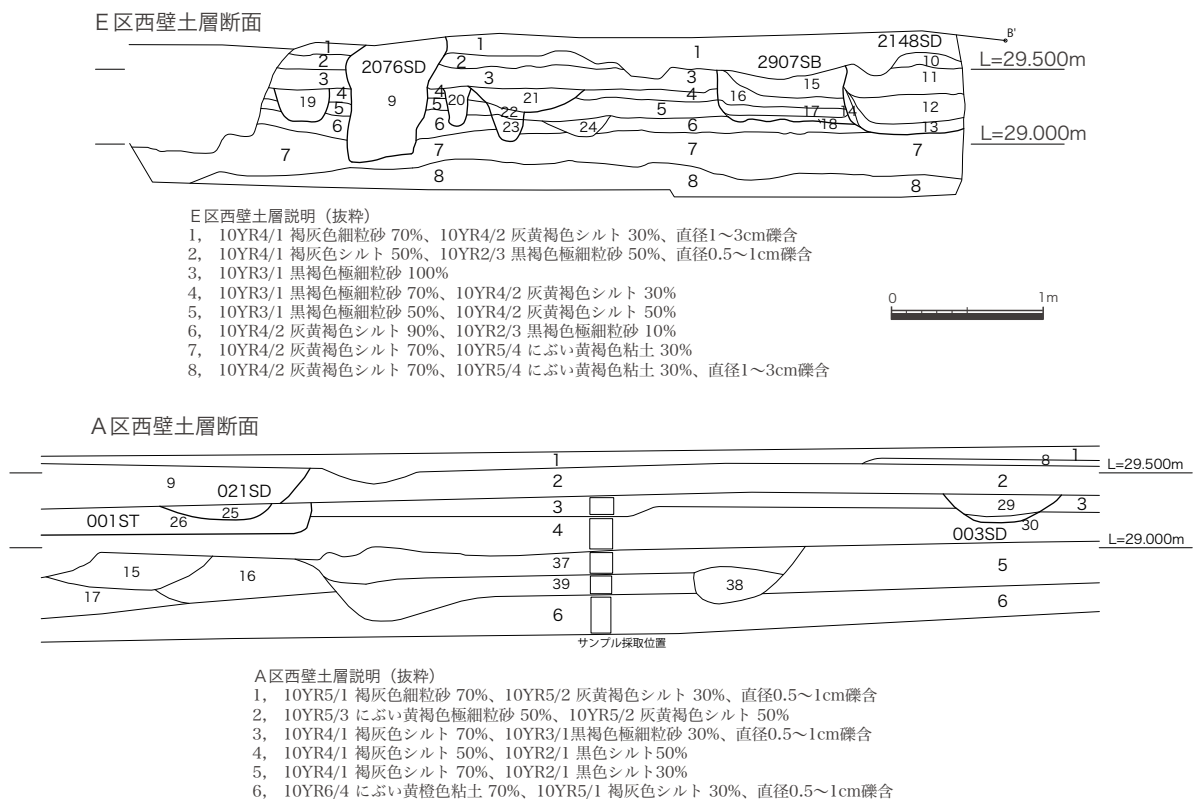
第1節 基本層序と遺構の概要

西浦遺跡は西に伸びる舌状台地の北端に所在し、北側は三輪川によって開析されている。今回の調査区は南北に長く、台地端部からやや内奥に向けて設定された。台地端部における基本的な層序は、E区南部の西壁土層断面図（第5図上）でみると、上位から第1層：褐灰色細粒砂と灰黄褐色シルトの班土、第2層：褐灰色シルトと黒褐色極細粒砂の班土、第3層：黒褐色極細粒砂、第4層、第5層：黒褐色極細粒砂と灰黄褐色シルトの班土、第6層：灰黄褐色シルトと黒褐色極細粒砂の班土、第7層、第8層：礫混じりの灰黄褐色シルトとにぶい黄褐色粘土の順に堆積していた。

このうち、第1層と第2層は表土で近現代の

盛土層をなし、この上面から近現代の遺構が確認される。第3層は旧表土と思われる黒褐色土（黒ボク）で、この上面で多くの遺構が検出された。概ね弥生時代から江戸時代までの基本的な遺構面と考えられる。第4層～第6層は旧表土と地山の斑土となっており、第4層の上面で遺構が検出される場合がある。第7層以下は礫を多量に含む粘土層で、本遺跡での基盤層を形成する。B区からE区では概ね上記のような堆積が展開するが、多少の異なる部分も認められる。

一方、台地端からやや内奥に入る部分における基本的な層序は、A区南部の西壁土層断面図（第5図下）でみると、第1層：褐灰色細粒砂と灰黄褐色シルトの班土、第2層：にぶい黄褐色極細



第5図 A区・E区基本土層断面図 (s=1:50)

西浦遺跡

粒砂と灰黄褐色シルトの班土、第3層：褐灰色シルトと黒褐色極細粒砂の班土、第4層：灰黄褐色シルトと黒色シルトの班土、第5層：灰黄褐色シルトと黒色シルトの班土、第6層：にぶい黄橙色粘土と褐灰色シルトの班土の順に堆積している。

このうち、第1層と第2層は表土で、E区と比べ粘質が強い。第3層は旧表土と思われる堆積で、この上面で多くの遺構が検出された。概ね江戸時代の基本的な遺構面と考えられる。第4層～第7層以下は礫を多量に含む粘土層で、本遺跡での基盤層を形成する。

今回の調査で検出された遺構は全部で約3,000基存在する。これらの遺構は上記で説明したように概ね旧表土から掘削されたものが多いと思われる。しかし、さまざまな時期の遺構がほぼ同じ面で検出されるために、特に、北部の調査区では遺構が極めて稠密に重なる事態が生じている。実際の調査では、第3層上位で整地土が確認できる地点ではその上位面を第1面、下位面を第2面とした。また、整地が確認されない多くの地点では、第3層上面のうち遺構検出の際に切り合い関係が新しいものを第1面、古いものを第2面として掘り分けて行った。結果として第4層上面が第2面に相当する場合が多い。ただし、調査精度に問題があるためか、厳密に検出された遺構と遺構面が対応できていないのが現状である。報告に際しては、本来は遺構面ごとに記述を進めるべきであろうが、現状ではそれはあまり意味がないと思われる。

約4000基の遺構には、竪穴建物跡、掘立柱建物跡、溝、土坑、井戸など多種多様なものが存在する。これらは、その覆土から出土した遺物や他の遺構との重複関係などにより、大きく縄文時代・弥生時代から古墳時代・古代・中世・近世の5時期に区分でき、さらに下記のように細分が可

能である。しかし、出土数量が少ない遺物などから遺構の時期を推定できても、確定することは難しい状況である。ここでは遺構の種類ごとに記述を進めていくこととし、時期別の遺構の様相については、第5章に改めて整理することとしたい。

A 期：縄文時代か

B 期：弥生時代から古墳時代まで

B1 期： 弥生時代中期。概ね古井式期から山中式期前半まで

B2 期： 弥生時代後期から古墳時代初期。概ね山中式期後半から廻間Ⅰ式期前半まで

B3 期： 古墳時代前期。概ね廻間Ⅰ式期後半から廻間Ⅱ式期まで

B4 期： 古墳時代中期。概ね廻間Ⅲ式期以降

C 期：飛鳥時代から平安時代まで

C1 期： 飛鳥時代。概ね7世紀前葉から中葉を主体とする時期

C2 期： 白鳳時代。概ね7世紀中葉から後葉を主体とする時期

C3 期： 平安時代。概ね10世紀を主体とする時期

D 期：鎌倉時代から江戸時代前期まで

D1 期： 鎌倉時代。概ね12世紀～13世紀を主体とする時期

D2 期： 室町時代から戦国時代まで。概ね15世紀～16世紀を主体とする時期

D3 期： 江戸時代前期まで。概ね17世紀前半を主体とする時期

E 期：江戸時代中期以降

E1 期： 江戸時代中期。概ね18世紀末から19世紀前葉を主体とする時期

E2 期： 江戸時代後期。概ね19世紀を主体とする時期

遺 構

第 2 節 竪穴建物跡

西浦遺跡の今回の発掘調査では、竪穴建物跡は、その可能性があるものまで含めると、全部で 113 基が確認された。これらは遺構の重複が激しく全体の形状が不明なものも多く含まれているが、ほぼ全て概ね一辺が 3～7 m の規模を持つ方形の平面プランを持つ浅い竪穴が掘削され、竪穴内に柱穴、火処遺構、周溝、土坑などの遺構が付随している。多くの場合、掘形ににぶい黄褐色シルトなどの班土で整地した床面（貼床）を持っており、その上位には旧表土と同様な黒褐色極細粒砂などの班土（覆土）が埋積している。したがって、平面での遺構検出は難しい場合があり、実際の調査では、覆土に中近世の遺物が混入したり、平面プランを誤ることもあった。時期はほぼ全部が弥生時代中期から平安時代までに属するものと思われる。

検出された竪穴建物跡は形状と付属施設から 4 類に分類できる。

竪穴建物跡 A 類：隅丸長方形または隅丸正方形の平面プランを持ち、床面に地床炉を持つもの。

竪穴建物跡 B 類：隅丸長方形または隅丸正方形の平面プランを持ち、壁にカマドを持つもの。

竪穴建物跡 C 類：隅丸長方形または隅丸正方形の平面プランを持ち、火処遺構が確認されないもの。

竪穴建物跡 D 類：小判形の平面プランを持ち、床面に地床炉を持つもの。

では、個別に遺構を紹介していく。

036SB Aa 区北西部に位置する竪穴建物跡 C 類で、調査区外に拡がっている。硬化した床面が確認され、整列しないが柱穴が存在する。しかし、状況からみて建物跡か否かは疑わしい。須恵器杯身が出土しており、時期は C 期と推測される。

170SB (第 6 図) Ba 区北西部に位置する竪穴建物跡 C 類で、128SD・171SD・296SD などに切られる。北西隅のみが検出され、黒褐色極細粒砂と灰黄褐色シルトの班土を整地して床面にして

いる。周溝と火処遺構は検出されなかったが、支柱穴は 353SK・356SK・359SK・500SK が該当するかもしれない。出土遺物は僅少であるが、時期は C 期と推測される。

210SB・228SB Ab 区北西部に位置する竪穴建物跡 C 類で、形状は歪である。硬化した床面が確認されたのみで、建物跡か否かは疑わしい。

245SB Ab 区中央部に位置する竪穴建物跡 C 類で、北半部はうまく検出できなかった。硬化した床面が確認されたのみで、建物跡か否かは疑わしい。

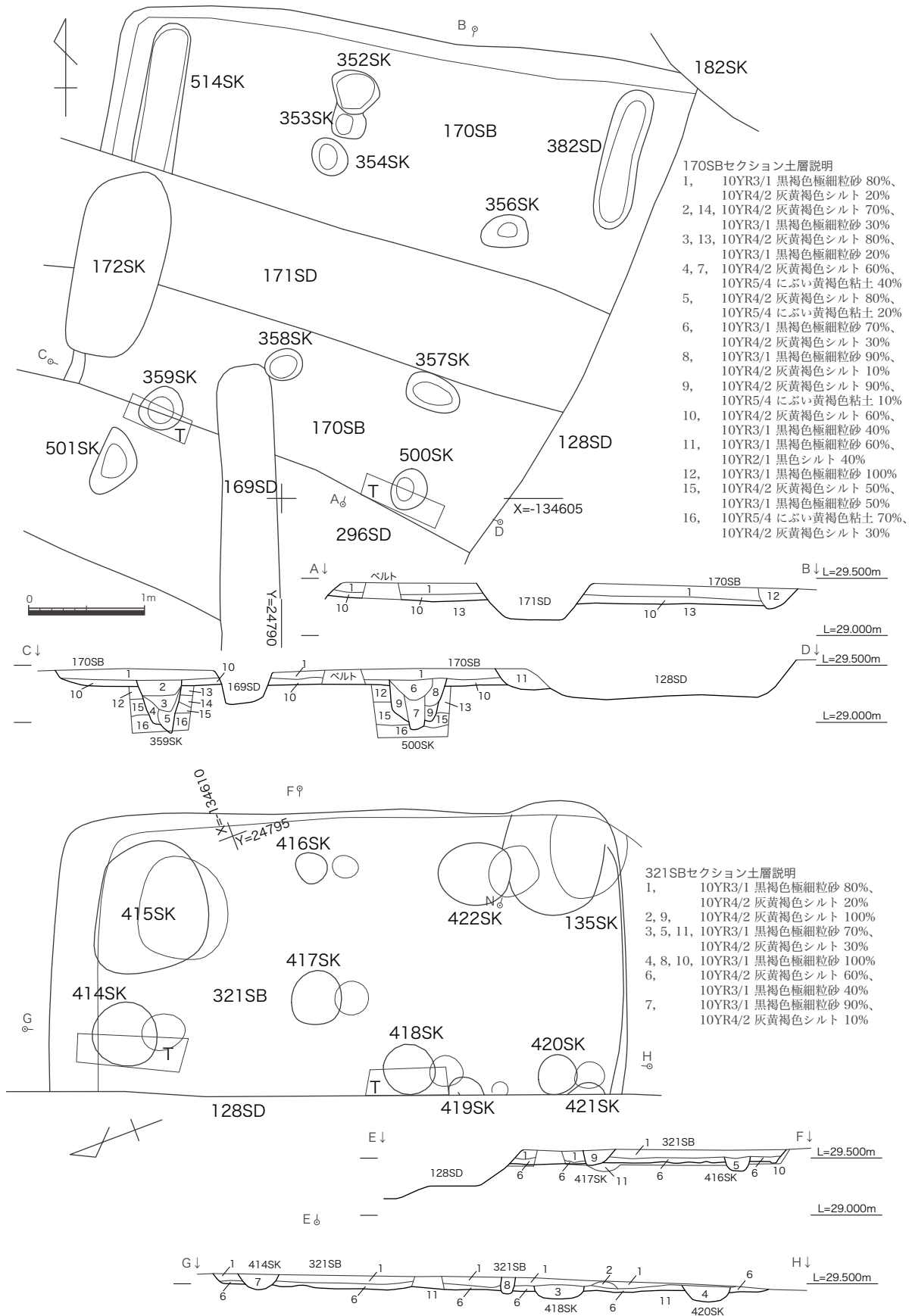
307SB Ba 区北西端に所在する竪穴建物跡で、**308SB** に切られる形で検出され、大部分は調査区外へ拡がっている。調査した範囲が狭いため、支柱穴、周溝、火処遺構などは判別できない。

308SB Ba 区北西端に所在する竪穴建物跡で、北半は調査区外へ拡がる。**307SB** を切り、**309SB** に切られる形で検出された。このプランが正しいとすれば、長辺は 6.60 m 以上を測る大型建物となる。支柱穴、周溝、火処遺構などは検出されず、時期は C 期と推測される。

309SB (第 7 図) Ba 区北西端部で **308SB** を切る形で検出された竪穴建物跡 C 類である。**290SD** で一部破壊されるが、概ね残存状況は良好である。平面形は 5.63 m × 5.17 m を測る隅丸方形であり、幅 50 cm 前後のいわゆる幅広周溝が外周部を巡るが、北東辺を除く 3 辺では中央部で溝が途切れていた。黒褐色極細粒砂と灰黄褐色シルトの班土を整地して床面にしている。支柱穴は 346SK・350SK・351SK・406SK が該当し、火処遺構は検出されなかった。出土遺物は僅少で時期は特定し難いが、C3 期と推測される。

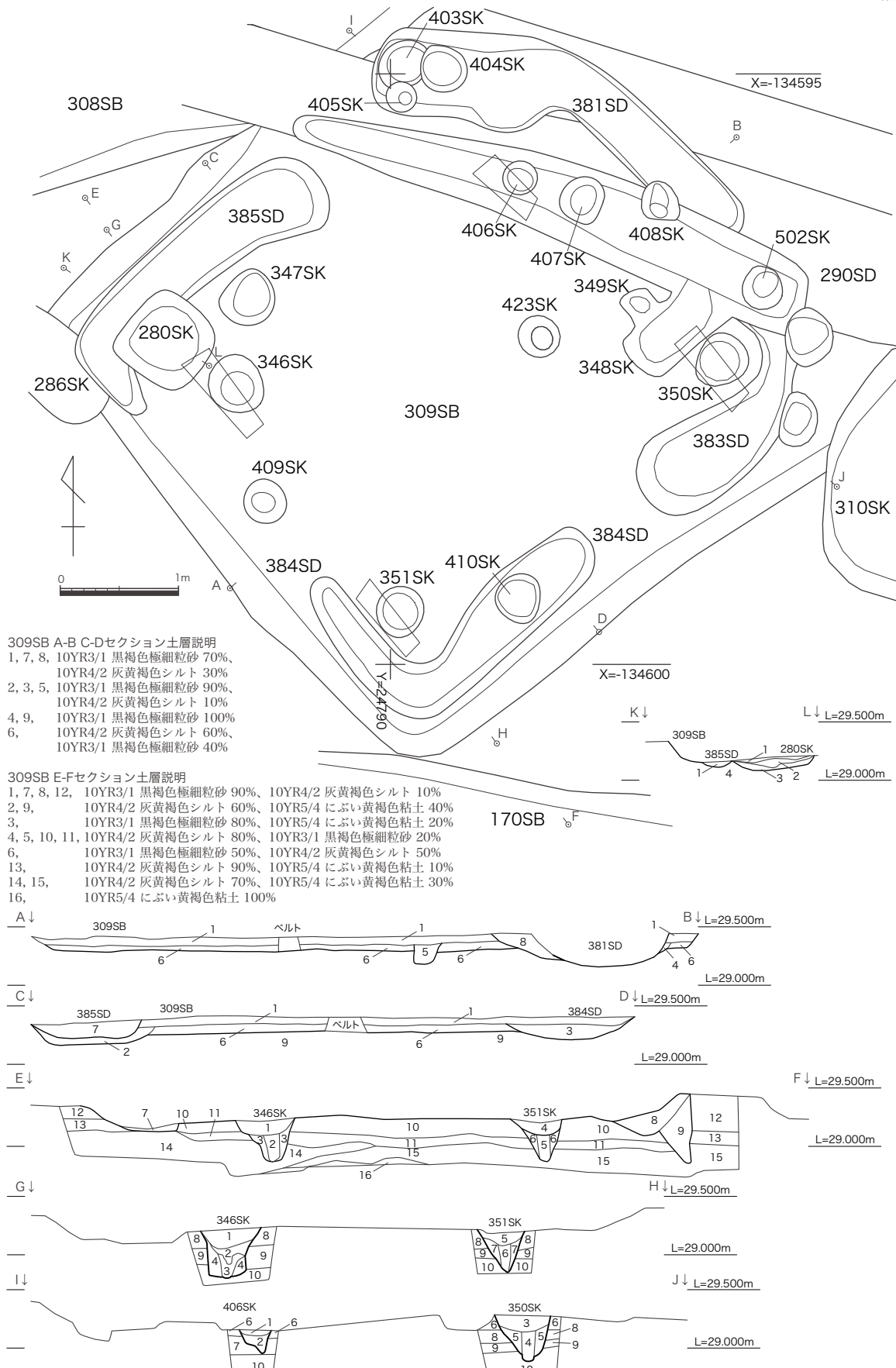
315SB Ba 区北半中央で確認された竪穴建物跡で、L 字に折れる **128SD** により大きく破壊され、南東部のみ残存している。黒褐色極細粒砂と灰黄褐色シルトの班土を貼床とし、周溝と火処遺構は検出されていない。出土遺物は僅少で時期は特定

西浦遺跡



第 6 図 竪穴建物跡 170SB, 321SB 遺構図 (s=1:50)

遺 構



西浦遺跡

し難いが、C 期と推測される。

320SB Ba 区北半東部で検出された竪穴建物跡で、北半が 128SD に切られる。周溝と火処遺構は検出されていない。時期は不詳。

321SB (第 6 図) Ba 区中央部に存在する竪穴建物跡 C 類で、128SD により西半部が大きく滅失している。南北方向の規模は 5.00 m を測り、黒褐色極細粒砂と灰黄褐色シルトの班土を貼床としている。周溝と火処遺構は検出されず、支柱穴も江戸時代の土坑により不詳となっている。出土遺物は僅少で時期は特定し難いが、C 期と推測される。

323SB Ba 区東部中央にある竪穴建物跡 C 類で、322SD により北部が残存しない。東西方向の規模は 4.97 m を測り、黒褐色極細粒砂と灰黄褐色シルトの班土を貼床としている。周溝と火処遺構は確認されていない。柱穴は多数存在しており建替えが行われた可能性もある。出土遺物は僅少で時期は特定し難いが、C 期と推測される。

325SB Ba 区南東部に所在する竪穴建物跡 C 類で、平面形は 4.00 m × 2.95 m を測る隅丸方形である。灰黄褐色シルトの班土を貼床とし、支柱穴は 372SK・376SK が該当する。時期は不明。

538SB (第 8 図) C 区南端部にある竪穴建物跡 C 類で、南側が調査区外に拡がる。440SD により部分的に形状が不明となる。535SB・539SB を切る形で検出された。当初 949SB よりも新しいと認識して調査を進めたが、最終的に 949SB の方が新しいと判断した。平面形は 3.56 m × 2.40 m 以上の隅丸方形を呈する小規模なもので、灰黄褐色シルトと黒褐色極細粒砂の班土を貼床とする。周溝は北西隅のみ確認され、火処遺構は検出されなかった。901SK・905SK・948SK が支柱穴と思われる。出土遺物は少なく時期は特定し難いが、C 期と推測される。

539SB (第 9 図) C 区南部中央で確認された竪穴建物跡 C 類で、東側が 518SD などにより破壊されている。579SB を切り、538SB に切られる形で検出された。平面形は 3.54 m 以上 × 3.67

m の隅丸方形を呈する小規模なものである。外周には周溝が概ね全体に巡り、溝内には小ピット列が連続して並ぶ。深さ 4 cm と極めて浅い残存状況にも関わらず、538SB に切られる部分でも平面プランが特定されたのは、この周溝の存在による。火処遺構は検出されなかった。598SK・599SK・903SK などが支柱穴と思われるが、配置は整然としていない。出土遺物は少なく時期は特定し難いが、C 期と思われる。

542SB (第 10 図) C 区南東端部にある竪穴建物跡 C 類で、南端部が調査区外に拡がり、東端部は攪乱により壊されていた。床面は灰黄褐色シルトと黒褐色極細粒砂の班土で整地され、部分的に周溝は確認されたが、火処遺構は検出されなかった。914SK・555SK などが支柱穴と思われる。覆土から灰釉陶器や山茶碗が出土した。混入の可能性などを考慮すると時期は特定し難いが、C3 期と推測される。

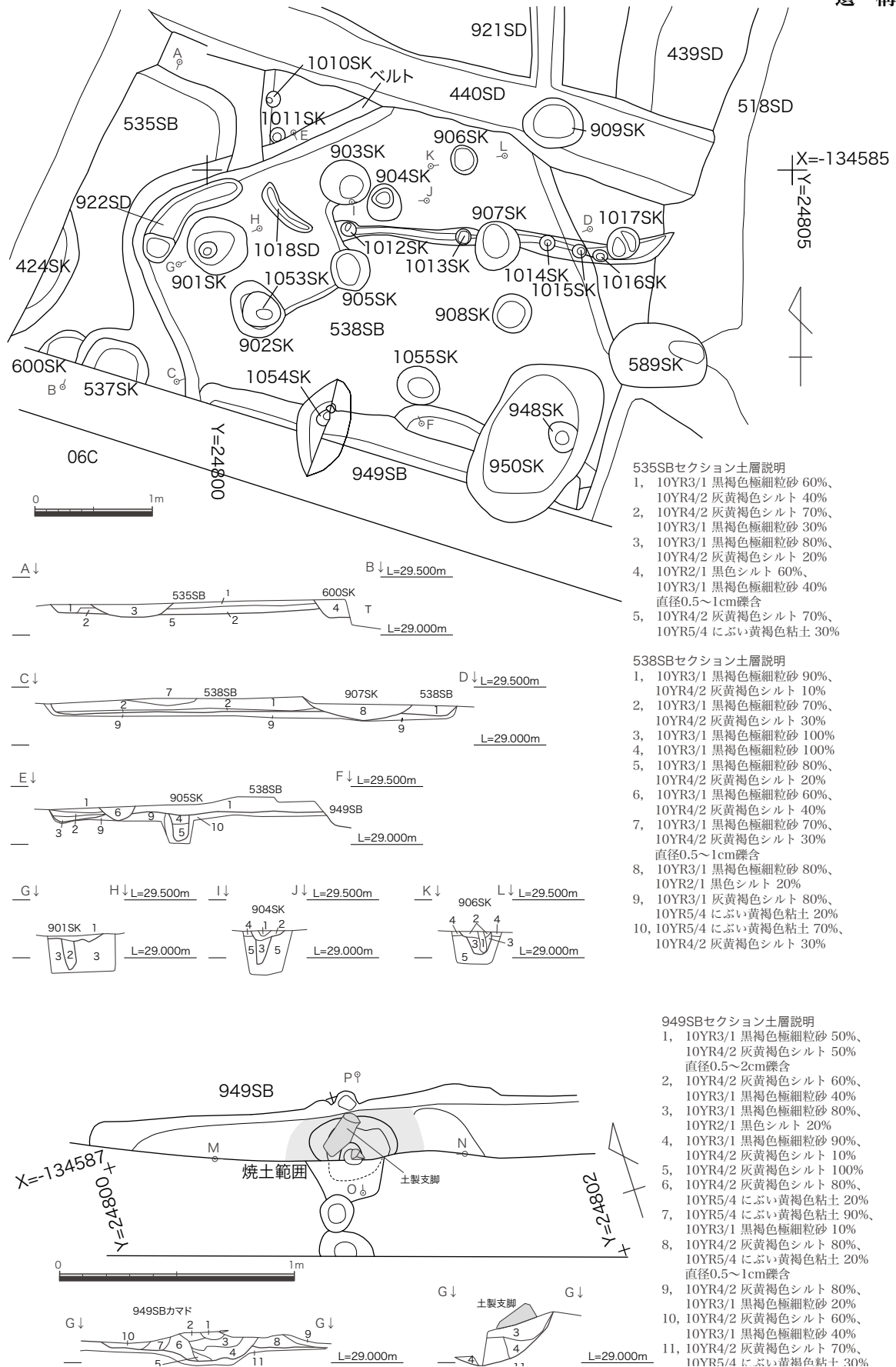
543SB C 区東半南部で北辺と東辺の一部が検出された遺構である。平坦な整地土の存在から竪穴建物跡を推定したが、プランは他の遺構との重複が激しく特定が難しい。したがって、詳細な構造や時期は不明のままである。

544SB C 区東半南部で南隅部のみが確認された竪穴建物跡である。遺構の重複が激しく全形は不明で、545SB にも切られる形で検出されたが、この点は確実ではない。980SK が支柱穴となるかもしれない。周溝および火処遺構は検出されなかった。灰釉陶器や土師器清郷型甕の存在から時期は C3 期と推定される。

545SB (第 11 図) C 区東半部南寄りに所在する竪穴建物跡で、遺構の重複が激しく南隅部のみが検出された。おそらく 546SB に切られるものと推測される。支柱穴と思われる 1009SK が存在するのみで、周溝および火処遺構は検出されなかった。時期は C1 期か。

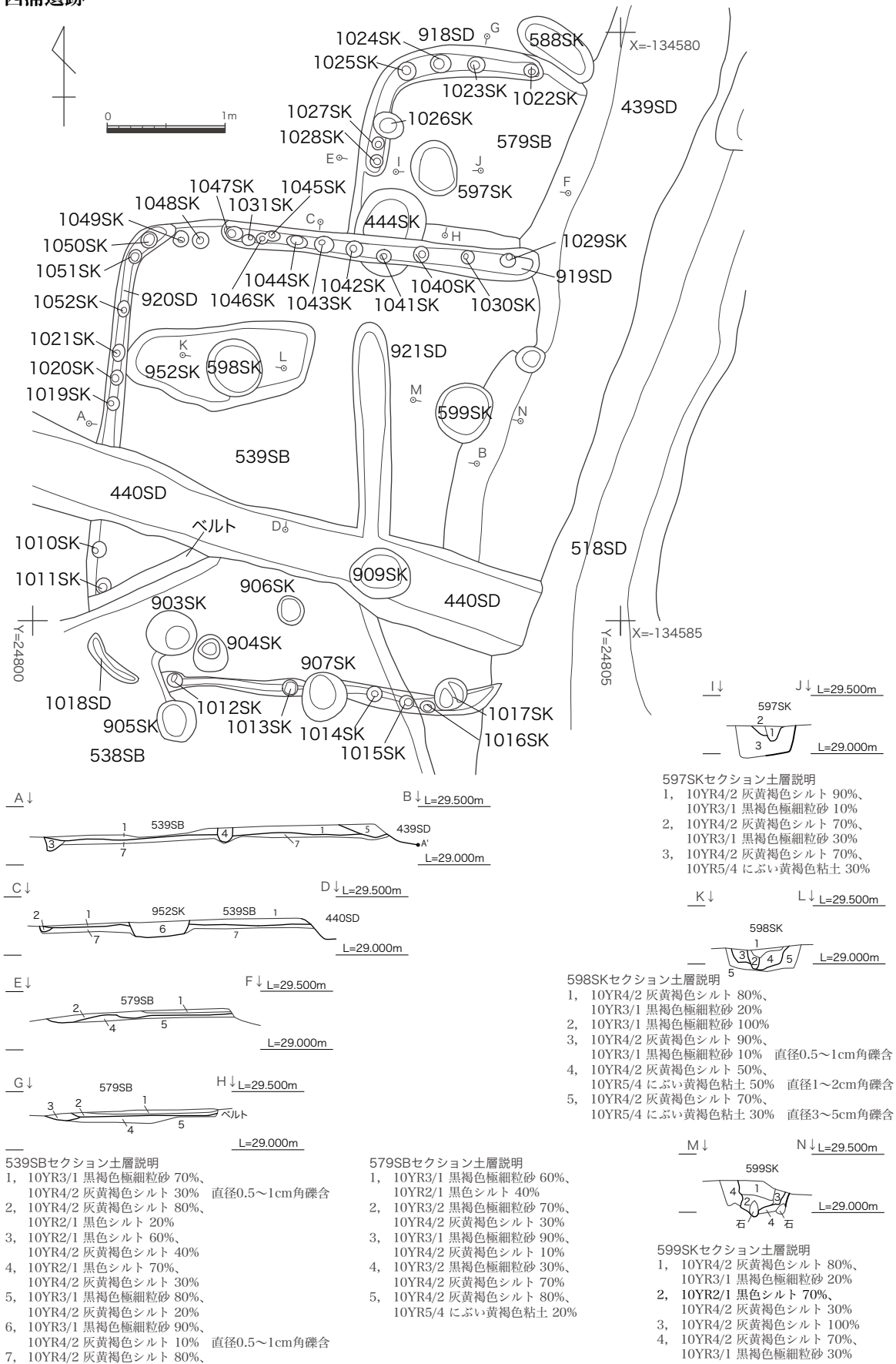
546SB (第 11 図) C 区東半部中央に存在する竪穴建物跡 C 類である。438SD や土坑などにより破壊され、北辺のみ検出された。547SB を切り、

遺構



第 8 図 竪穴建物跡 538SB, 949SB 遺構図 (s=1:50)

西浦遺跡



第9図 竪穴建物跡 539SB, 579SB 遺構図 (s=1:50)

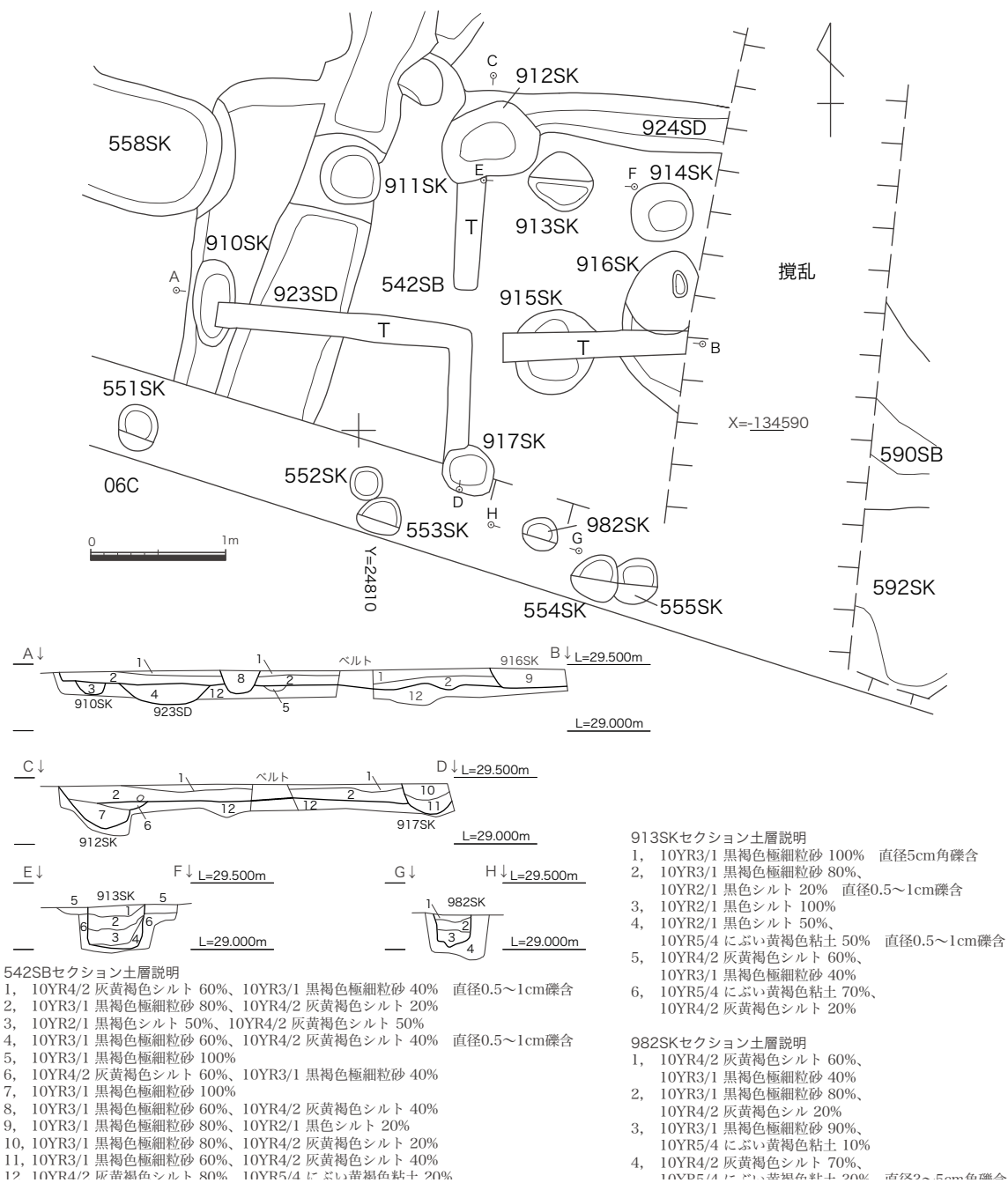
遺 構

おそらく 545SB よりも新しいと思われる。南辺は 463SK 付近に候補が考えられたが、確定には至っていない。床面では灰黄褐色シルトと黒褐色極細粒砂の貼床が確認され、支柱穴と思われる 973SK・974SK が存在するが、周溝および火処遺構は確認できない。出土遺物は少なく時期は特定し難いが、C2 期と思われる。

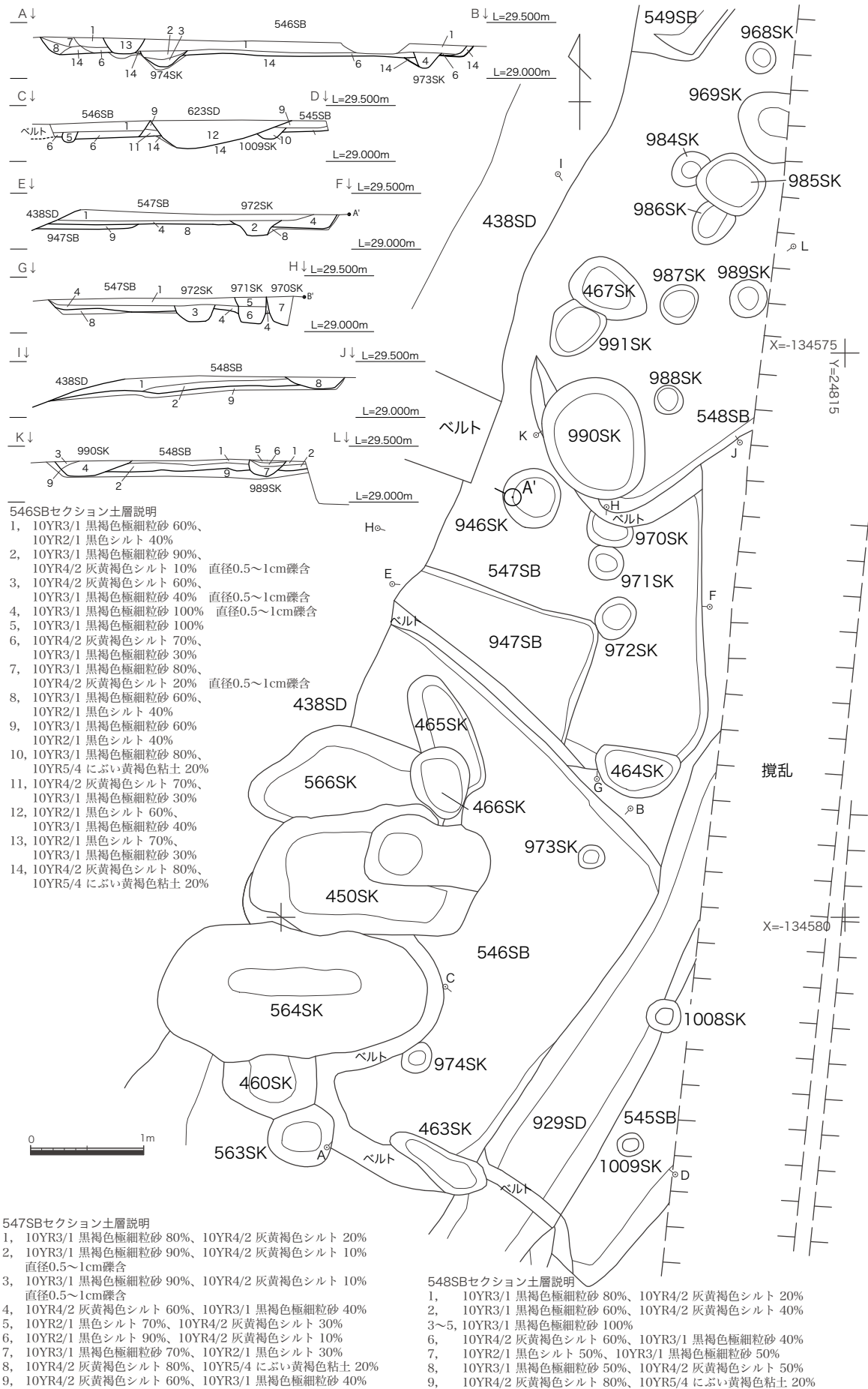
547SB (第 11 図) C 区東半部中央で南東隅の

みが検出された竪穴建物跡 C 類である。546SB・548SB など多くの遺構に切られる。下位で 947SB の北東端部が確認された。支柱穴と思われる 972SK などが存在するが、周溝および火処遺構は検出されていない。出土遺物は少なく時期は特定し難いが、C1 期と思われる。

548SB (第 11 図) C 区東半部北寄りで平面プランとしては南隅のみが検出された竪穴建物跡



第 10 図 竪穴建物跡 542SB 遺構図 (s=1:50)



第 11 図 竪穴建物跡 546SB, 547SB, 548SB 遺構図 (s=1:50)

遺 構

C 類である。547SB を切り、549SB に切られる。床面では灰黄褐色シルトと黒褐色極細粒砂の貼床が確認され、支柱穴と思われる 968SK・988SK などが存在するが、周溝および火処遺構は確認できない。出土遺物は少なく時期は特定し難いが、C2 期と思われる。

549SB (第 11 図) C 区東半部北寄りで南隅部のみが確認された竪穴建物跡 C 類である。438SD や攪乱に切られ、全形は不明。548SB を切っている。出土遺物は少なく時期は特定し難いが、C 期と思われる。

568SB (第 12 図) C 区北半部中央寄りに位置する竪穴建物跡 B 類で、北西隅が 533SD に切られる。993SB を切る形で検出され、平面形は 4.24 m × 4.04 m の隅丸方形となる。北辺中央部から東端までの範囲で、炭化物と焼土を多量に含む遺構があり、カマドの存在が予想された。明瞭な構造を識別できないまま 569SK など複数の土坑群として検出し調査を行ったが、最終的には倒木痕などによりカマドは激しく攪乱されたものと推定しておきたい。中央部に所在する 955SK も隣接する地山の盛り上がりと合わせて倒木痕と理解されよう。周溝は全く認められず、954SK・956SK・957SK・994SK が支柱穴と思われる。958SK はカマド脇に設置された土坑といえよう。出土遺物は少ないが、カマドの存在からみて、時期は C2 期と思われる。

571SB C 区北部に存在する 3.82 m 以上 × 3.85 m の規模を持つ竪穴建物跡 C 類である。北西側は調査区外に拡がり不詳となっている。959SB に切られ 586SB を切る形で検出され、床面では灰黄褐色シルトと黒褐色極細粒砂の班土により整地されていた。942SK・944SK・961SK が支柱穴と思われる。周溝や火処遺構は全く認められず、出土遺物は少ない。時期は C2 期と思われる。

579SB (第 9 図) C 区南部中央に所在する竪穴建物跡 C 類で、東側が 439SD などにより破壊されている。539SB に切られる形で検出され、結果的には北西隅部のみが確認された。539SB と

同様に、周溝が概ね全体に巡り、溝内には小ピット列が連続して並ぶ。539SB 内で検出された溝が、本建物跡に伴う可能性もあるが、小ピット列が認められないので、別のものと判断しておく。597SK・909SK が支柱穴と思われる。出土遺物は少なく時期は不明。C1 期か。

584SB (第 13 図) C 区中央部で確認された竪穴建物跡 C 類である、西側が 533SD に切られ破壊されている。581SB と重複する可能性があるが、前後関係は不明である。平面形は西側にやや開く台形を呈するが、現状で南北方向は 3.84 m の規模を持つ。周溝は存在せず、933SK・936SK・953SK が支柱穴となる。出土遺物は少ないが、時期は C 期と思われる。

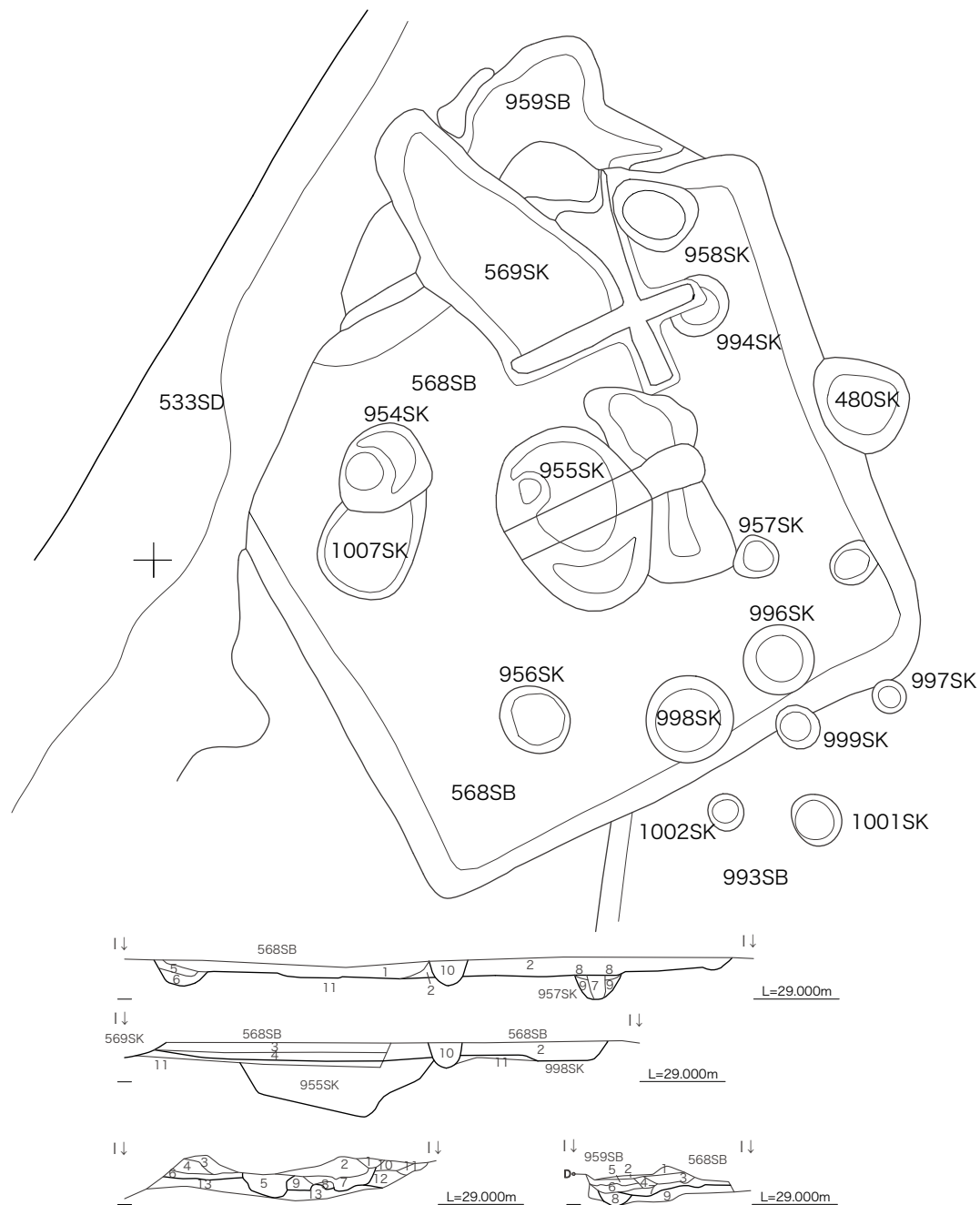
586SB C 区北部に存在する竪穴建物跡で、571SB や 587SD に切られ残存状況は不良である。北隅と南東辺の一部が確認され、一辺が 3.27 m であることが分かる。周溝は存在せず、火処遺構や支柱穴の状況は不明である。出土遺物は少ないが、時期は C 期と思われる。

756SB D 区南部で東隅部のみが検出された竪穴建物跡である。隅角部にピットが 2 基存在するが、支柱穴か否かは疑わしい。覆土はほとんど残存しなかったが、床面直上に遺物片が少量散乱していた。須恵器蓋が存在することから C1 期に位置づけられる。

758SB D 区中央部南寄りで北辺のみが検出された竪穴建物跡である。平面プランを特定することが難しく、建物跡か否かは疑わしい。時期も不明。

759SB・849SB・888SB (第 14 図) D 区中央部で検出された竪穴建物跡群である。土層断面観察から複数の竪穴建物跡がほぼ重なり合うように重複していた。759SB は最上位に存在するもので、南辺のみプランが特定され、東側で南に少し振れる方位を持つ。西部は攪乱によって遺存しない。この 759SB の直下で 888SB が検出された。調査では平面プランの検出はうまくできていないが、南辺で 759SB の立ち上がりと異なるために、

西浦遺跡



A-A' B-B'(568SB)土層説明

- 1, 10YR3/1 黒褐色極細粒砂80%、10YR4/2 灰黄褐色シルト 20%
- 2, 10YR3/1 黒褐色極細粒砂60%、10YR4/2 灰黄褐色シルト 40%
- 3, 10YR3/1 黒褐色極細粒砂70%、10YR2/1 黒色シルト 30%
- 4, 10YR2/1 黒色シルト50%、10YR3/1 黒褐色極細粒砂 50%
- 5, 10YR3/1 黒褐色極細粒砂 100%
- 6, 10YR3/1 黒褐色極細粒砂 60%、10YR4/3 にぶい黄褐色シルト 40%
- 7, 10YR4/3 にぶい黄褐色シルト 80%、10YR3/1 黒褐色極細粒砂 20%
- 8, 10YR4/3 にぶい黄褐色シルト 60%、10YR3/1 黒褐色極細粒砂 40%
- 9, 10YR4/2 灰黄褐色シルト 50%、10YR5/4 にぶい黄褐色粘土 50%
- 10, 10YR3/1 黒褐色極細粒砂 100%
- 11, 10YR4/2 灰黄褐色シルト 70%、10YR5/4 にぶい黄褐色粘土 30%
直径0.5~1cm礫含

C-C' D-D'(959SB) 土層説明

- 1, 10YR2/1 黒色シルト 100% 焼土含
- 2, 10YR4/3 にぶい黄褐色シルト 80%、10YR3/1 黒褐色極細粒砂 20% 焼土・炭化物含
- 3, 10YR3/1 黒褐色極細粒砂60%、10YR4/3 にぶい黄褐色シルト 40% 焼土・炭化物含
- 4, 10YR3/1 黒褐色極細粒砂 100% 直径0.5~1cm礫含
- 5, 10YR3/1 黒褐色極細粒砂60%、10YR4/2 灰黄褐色シルト 40%
- 6, 10YR2/1 黒色シルト 60%、10YR3/1 黒褐色極細粒砂 40%
- 7, 10YR2/1 黒色シルト 70%、10YR3/1 黒褐色極細粒砂 30%
- 8, 10YR4/3 にぶい黄褐色シルト 100%
- 9, 10YR4/2 灰黄褐色シルト 90%、10YR3/1 黒褐色極細粒砂 10%
- 10, 10YR2/1 黒色シルト 60%、10YR3/2 黒褐色極細粒砂 40% 直径0.5~1cm礫含
- 11, 10YR3/2 黒褐色極細粒砂 100%
- 12, 10YR3/1 黒褐色極細粒砂80%、10YR4/2 灰黄褐色シルト 20%

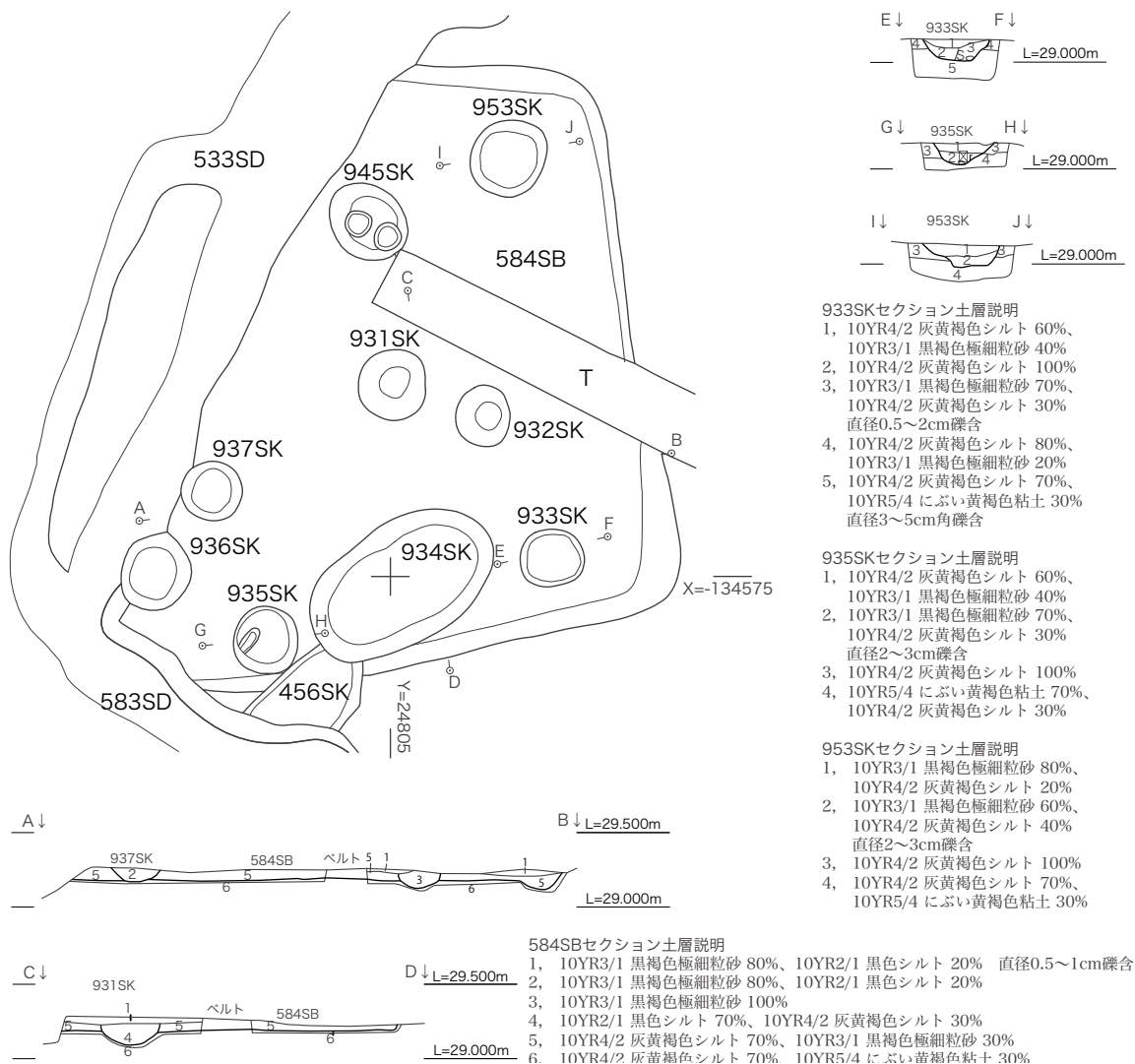
第 12 図 竪穴建物跡 568SB 遺構図 (s=1:50)

遺 構

調査終了時点では別遺構と認定した。ただし、調査当初に認識した 888SB は 759SB の貼床部であるという見解は依然としてその可能性を残している。両者とも埋土は黒色シルトを主体とした堆積で、内部施設の検出は困難であった。須恵器や土師器などの遺物が比較的多量に出土しており、その出土レベルは 759SB と 888SB の境界部に集中していた。この出土遺物から時期は C2 期と考えられる。さらに最下部では 849SB が検出された。西側に広がる攪乱はこの 849SB を破壊するには至らず、ほぼ全体の平面プランが判明した。4.03 m × 3.60 m の規模を持つ隅丸方形の平面プランを持ち、北辺の一部と南辺に周溝を有す。灰黄褐色シルトと黒褐色極細粒砂の班土による貼床が敷かれ、床面北東部では焼土が直径約 0.90 m の範囲で広がっていた。これが地床炉と推測される。また、860SK・867SK～869SK が支柱穴となる。遺物は須恵器杯身などが出土し、時期は C1 期と思われる。

760SB D 区中央部東端で北東辺が検出された竪穴建物跡である。他の 3 辺は遺構の重複が激しく把握できなかった。

761SB D 区北東部に所在する竪穴建物跡である。灰黄褐色シルトと黒褐色極細粒砂の班土による貼床が確認されるものの、遺構の重複が激しく良好な形で平面プランを把握できなかった。出土



第 13 図 竪穴建物跡 584SB 遺構図 (s=1:50)

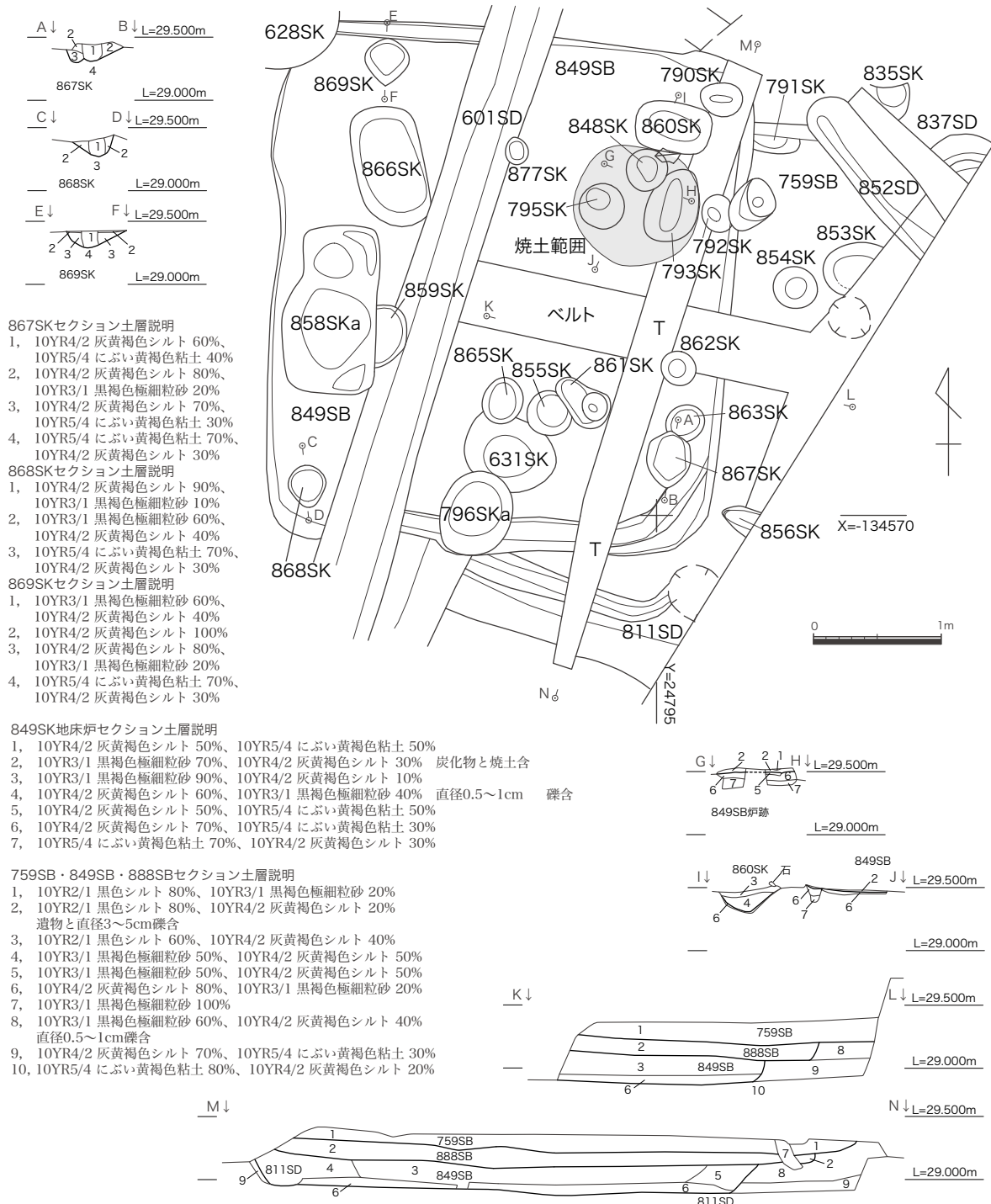
西浦遺跡

遺物から時期は C3 期と思われる。

762SB D 区北東部に所在する竪穴建物跡である。遺構の重複が激しく良好な形で平面プランを把握できなかった。

764SB D 区北西端部で南隅部のみ検出された

竪穴建物跡である。狭い周溝が巡り、支柱穴 1 基 (850SK) が確認される。覆土はほとんど残存しなかったが、床面直上に遺物片が少量散乱していた。須恵器蓋が存在することから C1 期に位置づけられる。



第 14 図 竪穴建物跡 759SB, 849SB, 888SB 遺構図 (s=1:50)

遺 構

947SB（第 11 図） C 区東半部中央で北東隅のみが検出された竪穴建物跡 C 類である。547SB の掘形から検出されたが、546SB の部分では遺存していなかった。主柱穴など内部構造物は検出されていないため、建物跡か否かはやや疑問が残る。

949SB（第 8 図） C 区南端で北端部が検出された竪穴建物跡 B 類である。東西方向は 3.50 m 前後の規模を持つと推定されるが、大部分は調査区外に展開し形状は不明である。538SB を切る形で検出された。遺構検出の段階で北辺中央部に焼土が分布しており、これがカマド跡と考えられる。カマドは、地山を深さ 10 cm 前後の浅い土坑を作り、その両脇に灰黄褐色シルトとにぶい黄褐色粘土の班土による袖が設けられ、これを基部としていた。浅い土坑中には焼土が堆積し床面が焼けている部分も認められた。浅い土坑の壁面に近い部分に深さ 10 cm の小ピットが存在し、そこで支脚が据えられたものと推測される。土坑上位には黒褐色極細粒砂などの班土が堆積し、遺構検出面に近い高さで横倒しになった土製支脚が出土した。カマド以外の付属施設は全く検出されなかった。出土遺物は少ないがカマドや土製支脚の存在から、C2 期と位置づけられる。

959SB（第 12 図） C 区北半部中央寄りに位置する竪穴建物跡 B 類で、南側の大部分が 568SB などに切られ全形は不明である。北東辺の中央と思われる位置に炭化物と焼土を多量に含む部分があり、これがカマドの痕跡と考えられた。ただし、明瞭な構造を識別できなかったため相当に破損が進んでいたと考えられる。土師器甕などが出土していることから、C1 期の遺構と思われる。

992SB C 区北端で西辺のみが検出された竪穴建物跡である。貼床と思われる平坦な整地面が検出されたのみで、内部構造は不明である。建物跡か否かはやや疑問が残る。

993SB C 区中央部で西辺のみが検出された竪穴建物跡である。貼床とピットが検出されたが、他の内部構造は不明である。建物跡か否かはやや

疑問が残る。土師器杯などが出土したことからみて C2 期と位置づけられる。

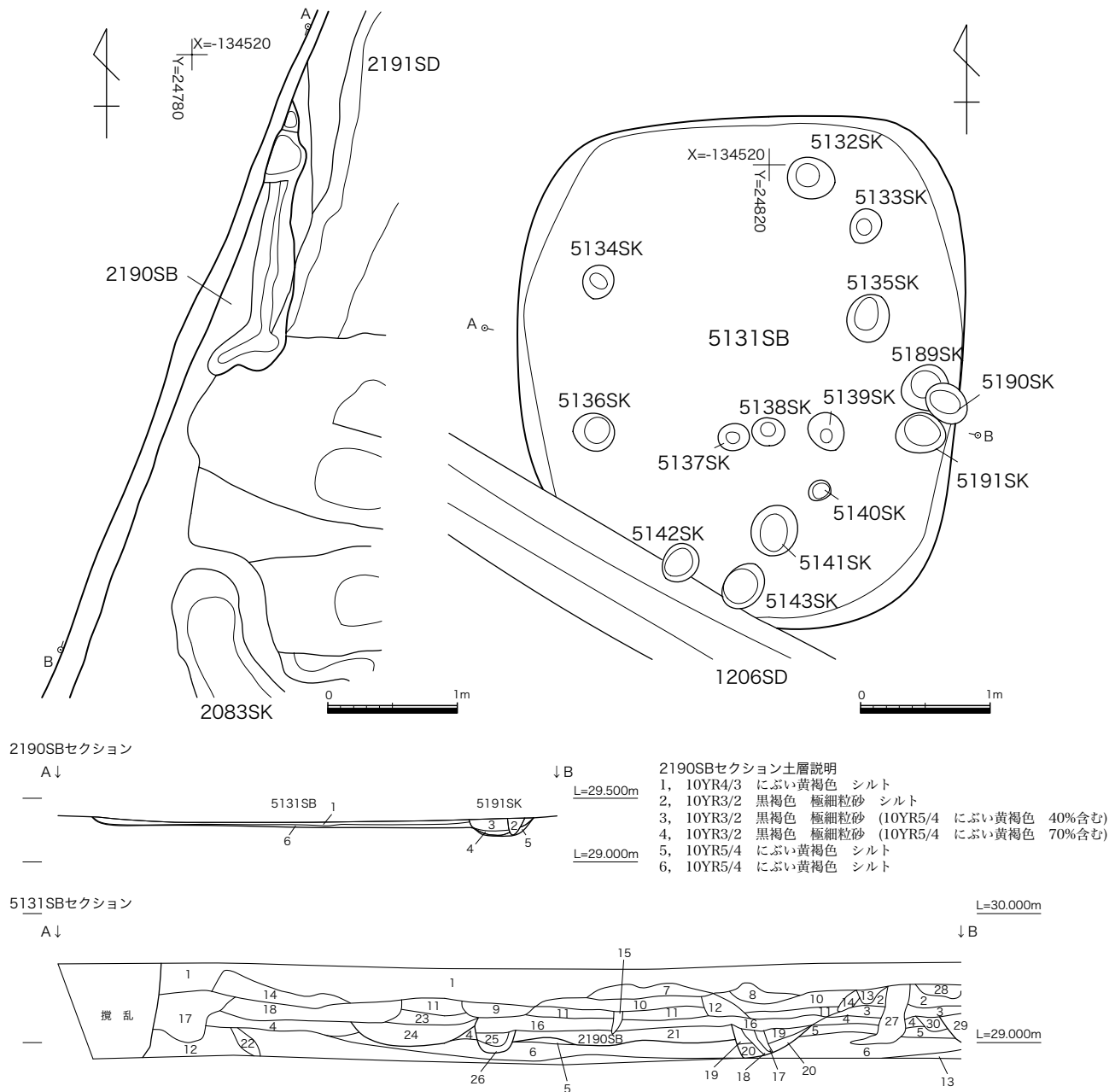
2190SB（第 15 図） E 区西端部に所在し 2191SD に切られる。南東隅のみが検出され、大部分は調査区外に拡がり形状は特定できない。西壁土層断面でも複数の土坑に切られ規模を特定することは難しいが、2.60 m 以上残存し深さは 14 cm を測る。周溝は検出されたが、主柱穴は確認できない。黒褐色極細粒砂と灰黄褐色シルトの班土を整地して床面にしている。湖西窯系須恵器壺が 1 点出土しており、時期は C1 期と考えられる。

2205SB（第 16 図） E 区北部中央に位置する竪穴建物跡 B 類で、2206SB と 2384SB を切る形で検出された。南辺が溝 2078SD に切られ不明となるが、4.50 m × 4.30 m 以上の規模を持つ。周溝は西辺北半に 2709SD のみが確認された。深さは 11 cm を測る。中央に不定形の落ち込みが存在するが、これらは 2384SB に伴う施設と思われる。これらを埋めてさらに灰黄褐色シルトなどの班土を整地して 2205SB の床面にしている。2715SK・2721SK・2760SK が主柱穴になる可能性がある。北辺中央にカマド跡が認められるが、その構造は不明である。弥生土器が出土しているもの、状況からみて C 期と推察される。

2206SB（第 16 図） E 区北部中央で検出された竪穴建物跡 C 類で、2205SB に切られる。南辺と西辺が不明であり、3.82 m 以上 × 2.08 m 以上の規模を持つ。周溝は確認されず、火処遺構も不明。2758SK・2759SK が主柱穴となるかもしれない。遺構の重複関係からみて、2205SB 出土弥生土器が、この遺構に伴うものと推定すると B2 期と想像される。

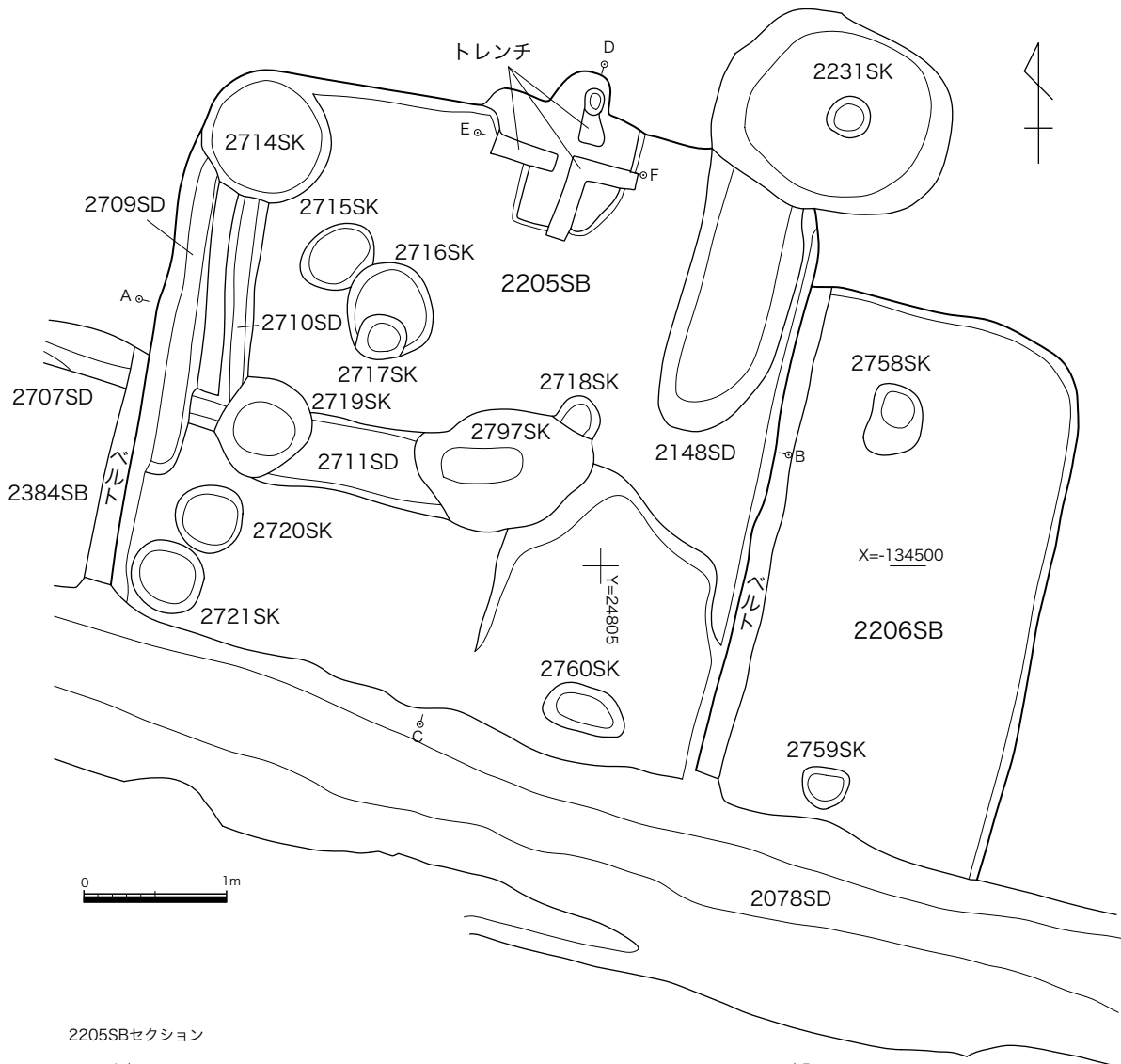
2209SB（第 17 図） E 区北部中央で検出された竪穴建物跡 C 類で、2210SB に切られる。南辺と東辺が不明であり、3.83 m 以上 × 1.50 m 以上の規模を持つ。周溝・火処遺構・主柱穴などの内部施設が全く確認されておらず、建物跡とは言い難い状況である。出土遺物もほとんどなく時期も不明である。C1 期か。

西浦遺跡

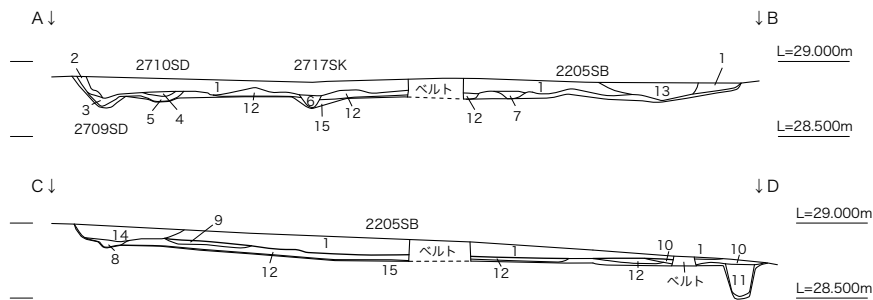


第 15 図 竪穴建物跡 2190SB, 5131SB 遺構図 (s=1:50)

遺 構

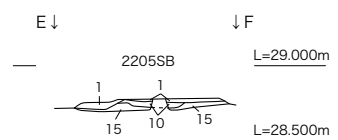


2205SBセクション



2205SBセクション土層説明

- 1, 10YR1.3/1 黒褐色極細粒砂 80%、10YR4/2 灰黄褐色シルト 20% 直径0.5~1cm礫含
- 2, 10YR3/1 黒褐色極細粒砂 100%
- 3, 10YR3/1 黒褐色極細粒砂 70%、10YR2/1 黒色シルト 30%
- 4, 10YR3/1 黒褐色極細粒砂 50%、10YR4/2 灰黄褐色シルト 50%
- 5, 10YR4/2 灰黄褐色シルト 70%、10YR3/1 黒褐色極細粒砂 30% 焼土含
- 6, 10YR3/1 黒褐色極細粒砂 60%、10YR4/2 灰黄褐色シルト 40%
- 7, 10YR3/1 黒褐色極細粒砂 100%
- 8, 10YR3/1 黒褐色極細粒砂 70%、10YR2/1 黒色シルト 30%
- 9, 10YR4/2 灰黄褐色シルト 70%、10YR3/1 黒褐色極細粒砂 30%
- 10, 10YR4/2 灰黄褐色シルト 80%、5YR5/6 明赤褐色粘土 20% 焼土含
- 11, 10YR2/1 黒色シルト 70%、10YR3/1 黒褐色極細粒砂 30%
- 12, 10YR4/2 灰黄褐色シルト 70%、10YR3/1 黒褐色極細粒砂 30% 直径0.5~1cm礫含
- 13, 10YR3/1 黒褐色極細粒砂 60%、10YR2/1 黒色シルト 40%
- 14, 10YR3/1 黒褐色極細粒砂 50%、10YR4/2 灰黄褐色シルト 50% 直径3~5cm角礫含
- 15, 10YR4/2 灰黄褐色シルト 70%、10YR5/4 にぶい黄褐色粘土 30% 直径0.5~1cm礫含



第 16 図 竪穴建物跡 2205SB, 2206SB 遺構図 (s=1:50)

遺 構

2210SB（第 17 図） E 区北部中央にある竪穴建物跡 B 類で、4.45 m × 4.30 m の規模を持つ。2209SB を切る形で検出され、南半部では複数の土坑で攪乱されていた。周溝および支柱穴は確認されていないが、北辺中央にカマド跡が認められる。カマド跡はにぶい黄褐色シルトの班土を少し盛り高め、表面に焼土塊が散布していた。柱穴がほとんど無いことから建物跡ではないとも言い得るが、この火処遺構と床面整地土の存在から建物跡と判断したい。須恵器杯蓋、杯身、土師器、勾玉などが出土しており、C1 期の遺構と推察される。

2260SB E 区中央部やや西寄りに所在する竪穴建物跡 C 類で、近代以降の抜根痕？ 2112SK や 2113SK などによって攪乱され、残存状況は不良である。それでも 4.16 m × 3.82 m 以上の規模を持つことが分かる。2801SB を切る形で検出され、周溝は確認されていない。一方、支柱穴は特定し難く、火処遺構は不明である。C1 期の遺構か。

2261SB（第 18・19 図） E 区中央部やや西寄りにある竪穴建物跡 C 類で、規模は 5.77 m 以上 × 5.25 m とやや大きい。2264SB・2801SB を切る形で検出され、2261SB の床面を掘り下げると下位から 2741SB が確認された。西半部では複数の土坑で攪乱されていた。周溝および火処遺構は確認されていないが、支柱穴は 4 基または 6 基存在したと思われる。2461SK・2463SK・2467SK・2465SK などが該当するだろう。黒褐色極細粒砂と灰黄褐色シルトの班土で床面を整地している。土師器などが出土しており、B2 期前後の遺構と位置づけられる。

2262SB（第 20・21 図） E 区西部中央に位置する竪穴建物跡 C 類で、2380SB や 2678SD などに切られ、残存状況は極めて不良である。黒褐色極細粒砂と灰黄褐色シルトの班土で整地した床面が確認されたのみで、周溝や火処遺構は確認されていない。B 期の遺構か。

2263SB（第 22 図） E 区西部中央で検出された竪穴建物跡 C 類で、多くの攪乱で壊され、残

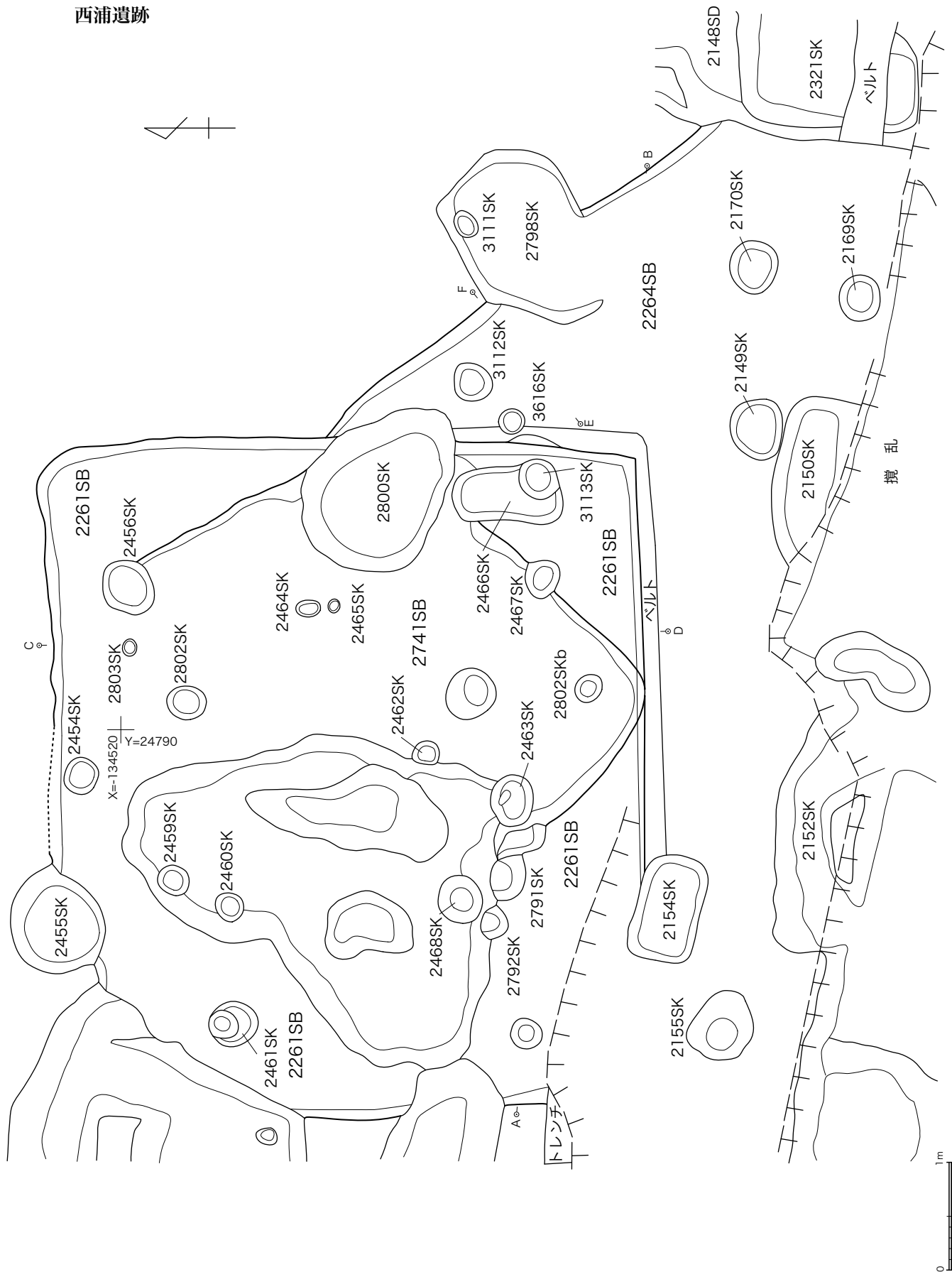
存状況は不良である。中央部の覆土はほとんど残存せず、外周部のみ黒褐色極細粒砂と灰黄褐色シルトの班土で整地した床面が見られた。周溝は北東辺から北西辺を巡るものと、南端部で折れるもののが確認されるが、方向がややずれている。2 つの竪穴建物跡を誤って認識している可能性は指摘されよう。火処遺構や明瞭な支柱穴は確認されていない。時期は不明である。

2264SB（第 18・19 図） E 区中央部やや西寄りに所在する竪穴建物跡で、2261SB や攪乱などによって壊されて北東辺のみが確認される状態で、全形を知ることができない。4.27 m 以上 × 3.77 m 以上の規模を持つことが分かり、支柱穴もいくつか候補が存在する。周溝や火処遺構は確認されていない。B 期の遺構か。

2379SB（第 23 図） E 区西部中央にある竪穴建物跡 A 類で、規模は 5.59 m × 4.75 m を測り、深さは 23 cm とやや深い。大きく 2078SD と 2382SD に切られ、3320SB を切っている。ほぼ確認された周囲全体には幅約 30 cm の周溝が巡り、黒褐色極細粒砂とにぶい黄褐色シルトの班土で床面が整地されていた。中央やや東寄りに長辺が約 80 cm の焼土が 1ヶ所で確認され、これは地床炉と思われる。支柱穴は 2773SK・2781SK などが該当するだろう。土師器甕などが出土しており、B2 期の遺構と考えられる。

2380SB（第 20・21 図） E 区西部中央で検出された竪穴建物跡 B 類で、規模は 4.85 m × 4.78 m を測る。2262SB・2670SK・2673SD に切られ、2801SB を切る。南半部では幅約 20 cm の周溝が巡るが、北半部では確認されない。北辺東寄り部分で焼土の広がり確認され、袖状に伸びるシルトの盛土も存在したため、一見これがカマド跡と思われた。ただし、下部に建物構築前に攪乱された風倒木痕と思われる大型土坑 3651SK などが存在したため、結果的に構造がうまく判別できなかった。黒褐色極細粒砂などの班土で床面が整地され、支柱穴は 2923SK・2919SK が該当するだろう。須恵器杯身と土師器甕などが出土してお

西浦遺跡



第 18 図 竪穴建物跡 2261SB, 2264SB, 2741SB 遺構図 (1) (s=1:50)

遺 構

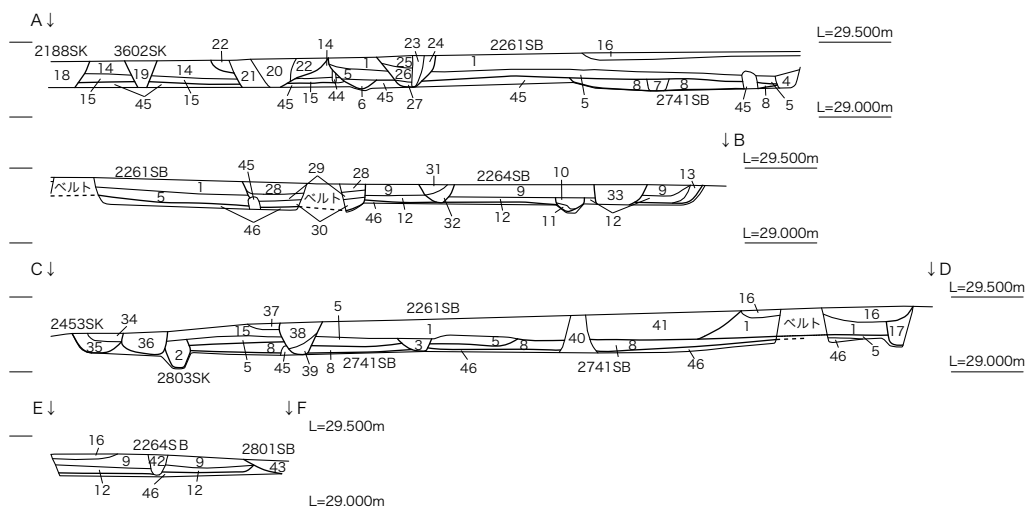
り、C1 期の遺構と位置づけられる。

2384SB (第 24 図) E 区北西部にある竪穴建物跡 A 類で、中央を大きく 2078SD に切られる。北東部は 2205SB にも切られるが、その床面で掘形が確認された。南半部では 2712SD の存在もあり、掘形を特定することができなかった。したがって 3331SB との重複関係も認められるが、前後の特定は難しい。東辺南端部のラインを重視すれば、東西方向の規模が 5.72 m を測る隅丸長方形プランとなり、良好な部分で深さは 12 cm である。西半部ではほぼ全体には幅 30~40 cm の周溝が巡り、黒褐色極細粒砂とにぶい黄褐色シルトの班土で床面が整地されていた。中央やや西

寄りに床面が焼けた浅い土坑 2843SK・2844SK が確認され、地床炉と思われる。支柱穴は 2708SK・2720SK などが該当するが、柱穴がこれだけだとすれば東辺のプランと上手く合致しないことになり、プランの確定にはやや疑問が残る。土師器甕などが出土しており、B2 期の遺構と位置づけられる。

2390SB (第 25 図) E 区南東部に所在する竪穴建物跡 C 類で、中央部を大きく 2810SD に切られ、北辺のプランも不明瞭となっている。当初第 1 面で隅丸方形の平面プランが検出されたが、最終的にはそれは誤認と判断された。黒褐色極細粒砂と灰黄褐色シルトの班土が貼床と思われ、主

2261・2264・2741SB セクション



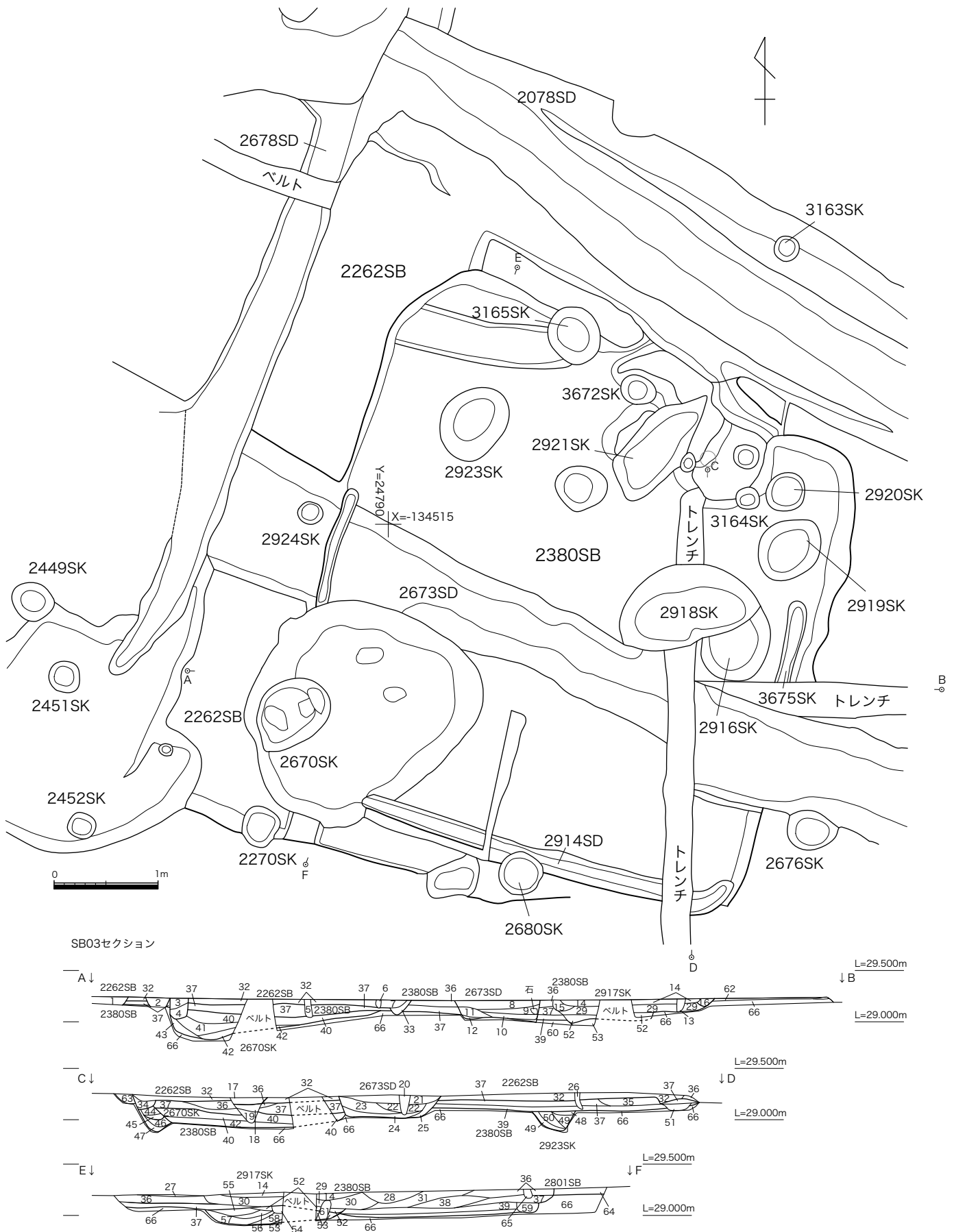
2261・2264・2741SB セクション土層説明

- 1, 10YR3/1 黒褐色極細粒砂 80%、10YR4/2 灰黄褐色シルト 20%
- 2, 10YR2/1 黒色シルト 60%、10YR4/2 灰黄褐色シルト 40%
- 3, 10YR3/1 黒褐色極細粒砂 80%、5YR5/6 明赤褐色粘土 20%
- 4, 10YR3/1 黒褐色極細粒砂 100%
- 5, 10YR3/1 黒褐色極細粒砂 60%、10YR4/2 灰黄褐色シルト 40%
- 6, 10YR4/2 灰黄褐色シルト 60%、10YR3/1 黒褐色極細粒砂 40%
- 7, 10YR3/1 黒褐色極細粒砂 70%、10YR4/2 灰黄褐色シルト 30%
- 8, 10YR4/2 灰黄褐色シルト 60%、10YR3/1 黒褐色極細粒砂 40%
- 9, 10YR3/1 黒褐色極細粒砂 60%、10YR4/2 灰黄褐色シルト 40%
- 10, 10YR3/1 黒褐色極細粒砂 80%、10YR4/2 灰黄褐色シルト 20%
- 11, 10YR3/1 黒褐色極細粒砂 70%、10YR5/4 にぶい黄褐色粘土 30%
- 12, 10YR4/2 灰黄褐色シルト 70%、10YR3/1 黒褐色極細粒砂 30%
- 13, 10YR4/2 灰黄褐色シルト 80%、10YR3/1 黒褐色極細粒砂 20%
- 14, 10YR3/1 黒褐色極細粒砂 60%、10YR4/2 灰黄褐色シルト 40%
- 15, 10YR4/2 灰黄褐色シルト 70%、10YR3/1 黒褐色極細粒砂 30%
- 16, 10YR3/1 黒褐色極細粒砂 60%、10YR2/1 黒色シルト 40%
- 17, 10YR3/1 黒褐色極細粒砂 60%、10YR2/1 黒色シルト 40%
- 18, 10YR3/1 黒褐色極細粒砂 60%、10YR2/1 黒色シルト 40%
- 19, 10YR3/1 黒褐色極細粒砂 100%
- 20, 10YR3/1 黒褐色極細粒砂 80%、10YR2/1 黒色シルト 20%
- 21, 10YR3/1 黒褐色極細粒砂 60%、10YR2/1 黒色シルト 40%
- 22, 10YR4/2 灰黄褐色シルト 60%、10YR3/1 黒褐色極細粒砂 40%
- 23, 10YR4/2 灰黄褐色シルト 60%、10YR3/1 黒褐色極細粒砂 40%

- 24, 10YR3/1 黒褐色極細粒砂 60%、10YR4/2 灰黄褐色シルト 40%
- 25, 10YR3/1 黒褐色極細粒砂 60%、10YR4/2 灰黄褐色シルト 40%
- 26, 10YR3/1 黒褐色極細粒砂 100%
- 27, 10YR4/2 灰黄褐色シルト 80%、10YR3/1 黒褐色極細粒砂 20%
- 28, 10YR3/1 黒褐色極細粒砂 100%
- 29, 10YR3/1 黒褐色極細粒砂 50%、10YR2/1 黒色シルト 50%
- 30, 10YR4/2 灰黄褐色シルト 80%、10YR3/1 黒褐色極細粒砂 20%
- 31, 10YR3/1 黒褐色極細粒砂 100%
- 32, 10YR4/2 灰黄褐色シルト 70%、10YR3/1 黒褐色極細粒砂 30%
- 33, 10YR4/2 灰黄褐色シルト 60%、10YR3/1 黒褐色極細粒砂 40%
- 34, 10YR3/1 黒褐色極細粒砂 60%、10YR4/2 灰黄褐色シルト 40%
- 35, 10YR3/1 黒褐色極細粒砂 60%、10YR5/4 にぶい黄褐色粘土 40%
- 36, 10YR4/2 灰黄褐色シルト 60%、10YR3/1 黒褐色極細粒砂 40%
- 37, 10YR3/1 黒褐色極細粒砂 60%、10YR2/1 黒色シルト 40%
- 38, 10YR2/1 黒色シルト 70%、10YR3/1 黒褐色極細粒砂 30%
- 39, 10YR3/1 黒褐色極細粒砂 60%、10YR4/2 灰黄褐色シルト 40%
- 40, 10YR4/3 にぶい黄褐色細粒砂 100%
- 41, 10YR3/1 黒褐色極細粒砂 80%、10YR2/1 黒色シルト 20%
- 42, 10YR2/1 黒色シルト 80%、10YR5/4 にぶい黄褐色粘土 20%
- 43, 10YR3/1 黒褐色極細粒砂 80%、10YR4/2 灰黄褐色シルト 20%
- 44, 10YR2/1 黒色シルト 100%
- 45, 10YR4/3 にぶい黄褐色細粒砂 100%
- 46, 10YR4/2 灰黄褐色シルト 70%、10YR5/4 にぶい黄褐色粘土 30%

第 19 図 竪穴建物跡 2261SB, 2264SB, 2741SB 遺構図 (2) (s=1:50)

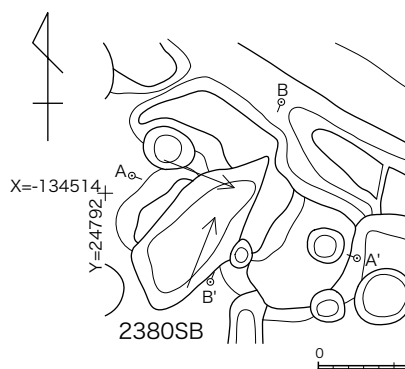
西浦遺跡



遺 構

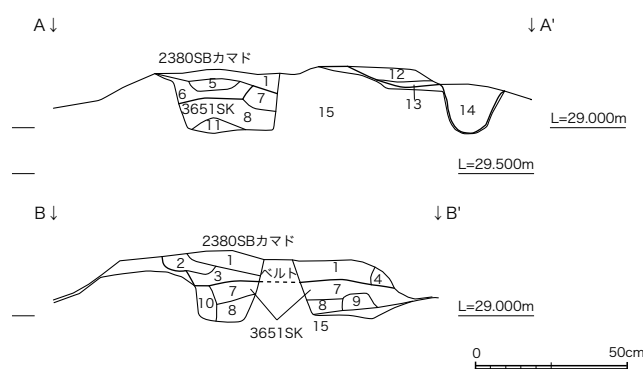
2380SBカマドセクション

L=29.500m

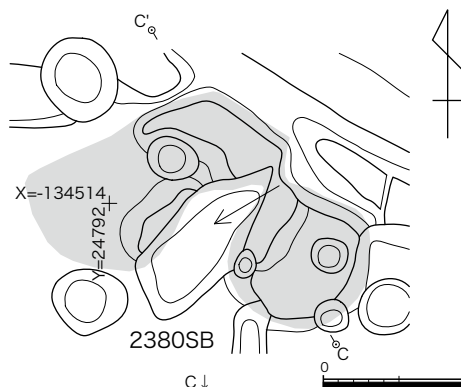


2380SBカマドABセクション土層説明

- 1, 7.5YR5/4 にぶい褐色シルト 90%、5YR5/6 明赤褐色粘土 10% 焼土・炭化物
- 2, 7.5YR5/4 にぶい褐色シルト 100%
- 3, 10YR2/1 黒色シルト 100%
- 4, 7.5YR5/4 にぶい褐色シルト 100% 直径0.5~1cm礫含
- 5, 7.5YR5/4 にぶい褐色シルト 90%、10YR2/1 黒色シルト 10% 焼土含
- 6, 7.5YR5/4 にぶい褐色シルト 90%、10YR2/1 黒色シルト 10% 焼土含
- 7, 10YR3/1 黒褐色極細粒砂 80%、7.5YR5/4 にぶい褐色シルト 20%



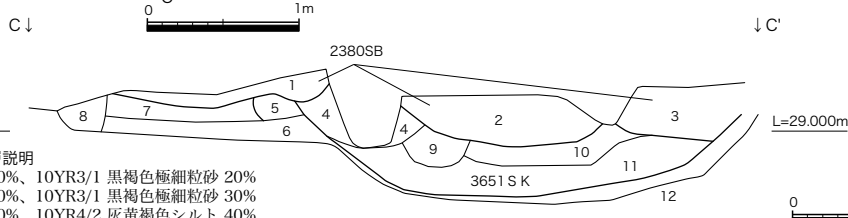
- 8, 10YR3/1 黒褐色極細粒砂 70%、10YR2/1 黒色シルト 30%
- 9, 10YR3/1 黒褐色極細粒砂 60%、10YR2/1 黒色シルト 40%
- 10, 10YR3/1 黒褐色極細粒砂 60%、10YR4/2 灰黄褐色シルト 40%
- 11, 10YR3/1 黒褐色極細粒砂 100%
- 12, 7.5YR5/4 にぶい褐色シルト 70%、10YR3/1 黒褐色極細粒砂 30% 焼土・炭化物
- 13, 10YR3/1 黒褐色極細粒砂 60%、10YR4/2 灰黄褐色シルト 40%
- 14, 10YR3/1 黒褐色極細粒砂 80%、10YR2/1 黒色シルト 20%
- 15, 10YR3/1 黒褐色極細粒砂 60%、10YR4/2 灰黄褐色シルト 40%



2380SBカマドCセクション土層説明

- 1, 10YR4/2 灰黄褐色シルト 70%、10YR5/4 にぶい黄褐色粘土 30% 直径0.5~1cm礫含
- 2, 10YR5/4 にぶい黄褐色粘土 60%、10YR4/2 灰黄褐色シルト 40% 直径0.5~1cm礫含
- 3, 10YR3/1 黒褐色極細粒砂 100% 直径0.5~1cm礫含
- 4, 10YR3/1 黒褐色極細粒砂 60%、10YR4/2 灰黄褐色シルト 40%
- 5, 10YR3/1 黒褐色極細粒砂 100%
- 6, 10YR4/2 灰黄褐色シルト 70%、10YR5/4 にぶい黄褐色粘土 30%
- 7, 10YR5/4 にぶい黄褐色粘土 60%、10YR4/2 灰黄褐色シルト 40% 直径0.5~1cm礫含
- 8, 10YR2/1 黒色シルト 100%
- 9, 10YR2/1 黒色シルト 100%
- 10, 10YR3/1 黒褐色極細粒砂 70%、10YR2/1 黒色シルト 30%
- 11, 10YR3/1 黒褐色極細粒砂 60%、10YR4/2 灰黄褐色シルト 40%
- 12, 10YR4/2 灰黄褐色シルト 70%、10YR5/4 にぶい黄褐色粘土 30% 直径0.5~1cm礫含

L=29.500m



2262・2380SBセクション土層説明

- 1, 10YR4/2 灰黄褐色シルト 80%、10YR3/1 黒褐色極細粒砂 20%
- 2, 10YR4/2 灰黄褐色シルト 70%、10YR3/1 黒褐色極細粒砂 30%
- 3, 10YR3/1 黒褐色極細粒砂 60%、10YR4/2 灰黄褐色シルト 40%
- 4, 10YR3/1 黒褐色極細粒砂 80%、10YR4/2 灰黄褐色シルト 20%
- 5, 10YR3/1 黒褐色極細粒砂 100%
- 6, 10YR4/3 にぶい黄褐色細粒砂 100%
- 7, 10YR3/1 黒褐色極細粒砂 80%、10YR2/1 黒色シルト 20%
- 8, 10YR4/2 灰黄褐色シルト 60%、10YR3/1 黒褐色極細粒砂 40%
- 9, 10YR3/1 黒褐色極細粒砂 60%、10YR4/2 灰黄褐色シルト 40%
- 10, 10YR3/1 黒褐色極細粒砂 50%、10YR4/2 灰黄褐色シルト 50%
- 11, 10YR3/1 黒褐色極細粒砂 100%
- 12, 10YR4/2 灰黄褐色シルト 60%、10YR5/4 にぶい黄褐色粘土 40%
- 13, 10YR4/3 にぶい黄褐色細粒砂 100%
- 14, 10YR3/1 黒褐色極細粒砂 80%、10YR2/1 黒色シルト 20%
- 15, 10YR3/1 黒褐色極細粒砂 60%、10YR4/2 灰黄褐色シルト 40%
- 16, 10YR3/1 黒褐色極細粒砂 60%、10YR2/1 黒色シルト 40%
- 17, 10YR4/2 灰黄褐色シルト 70%、10YR3/1 黒褐色極細粒砂 30%
- 18, 10YR3/1 黒褐色極細粒砂 100%
- 19, 10YR3/1 黒褐色極細粒砂 80%、10YR2/1 黒色シルト 20%
- 20, 10YR4/3 にぶい黄褐色細粒砂 100%
- 21, 10YR4/2 灰黄褐色シルト 60%、10YR3/1 黒褐色極細粒砂 40%
- 22, 10YR3/1 黒褐色極細粒砂 80%、10YR4/2 灰黄褐色シルト 20%
- 23, 10YR3/1 黒褐色極細粒砂 60%、10YR4/2 灰黄褐色シルト 40%
- 24, 10YR4/2 灰黄褐色シルト 60%、10YR3/1 黒褐色極細粒砂 40%
- 25, 10YR3/1 黒褐色極細粒砂 100%
- 26, 10YR3/1 黒褐色極細粒砂 100%
- 27, 10YR4/2 灰黄褐色シルト 60%、10YR3/1 黒褐色極細粒砂 40%
- 28, 10YR3/1 黒褐色極細粒砂 60%、10YR4/2 灰黄褐色シルト 40%
- 29, 10YR3/1 黒褐色極細粒砂 80%、10YR4/2 灰黄褐色シルト 20%
- 30, 10YR3/1 黒褐色極細粒砂 80%、10YR2/1 黒色シルト 20%
- 31, 10YR4/2 灰黄褐色シルト 60%、10YR3/1 黒褐色極細粒砂 40%
- 32, 10YR3/1 黒褐色極細粒砂 60%、10YR4/2 灰黄褐色シルト 40%
- 33, 10YR3/1 黒褐色極細粒砂 50%、10YR2/1 黒色シルト 50%
- 34, 10YR3/1 黒褐色極細粒砂 60%、10YR2/1 黒色シルト 40%
- 35, 10YR3/1 黒褐色極細粒砂 80%、10YR4/2 灰黄褐色シルト 20%

- 36, 10YR3/1 黒褐色極細粒砂 80%、10YR2/1 黒色シルト 20%
- 37, 10YR3/1 黒褐色極細粒砂 60%、10YR2/1 黒色シルト 40%
- 38, 10YR3/1 黒褐色極細粒砂 80%、10YR4/2 灰黄褐色シルト 20%
- 39, 10YR4/2 灰黄褐色シルト 70%、10YR3/1 黒褐色極細粒砂 30%
- 40, 10YR3/1 黒褐色極細粒砂 80%、10YR2/1 黒色シルト 20%
- 41, 10YR3/1 黒褐色極細粒砂 60%、10YR2/1 黒色シルト 40%
- 42, 10YR2/1 黒色シルト 70%、10YR3/1 黒褐色極細粒砂 30% 直径15~25cm垂門礫含
- 43, 10YR3/1 黒褐色極細粒砂 80%、10YR4/2 灰黄褐色シルト 20%
- 44, 10YR2/1 黒色シルト 80%、10YR3/1 黒褐色極細粒砂 20%
- 45, 10YR2/1 黒色シルト 100%
- 46, 10YR3/1 黒褐色極細粒砂 80%、10YR4/2 灰黄褐色シルト 20%
- 47, 10YR2/1 黒色シルト 80%、10YR5/4 にぶい黄褐色粘土 20%
- 48, 10YR4/2 灰黄褐色シルト 70%、10YR3/1 黒褐色極細粒砂 30%
- 49, 10YR2/1 黒色シルト 80%、10YR4/2 灰黄褐色シルト 20%
- 50, 10YR4/2 灰黄褐色シルト 70%、10YR3/1 黒褐色極細粒砂 30%
- 51, 10YR2/1 黒色シルト 100%
- 52, 10YR3/1 黒褐色極細粒砂 60%、10YR4/2 灰黄褐色シルト 40%
- 53, 10YR4/2 灰黄褐色シルト 60%、10YR5/4 にぶい黄褐色粘土 40%
- 54, 10YR2/1 黒色シルト 100%
- 55, 10YR2/1 黒色シルト 80%、10YR3/1 黒褐色極細粒砂 20%
- 56, 10YR3/1 黒褐色極細粒砂 100%
- 57, 10YR3/1 黒褐色極細粒砂 60%、10YR4/2 灰黄褐色シルト 40%
- 58, 10YR3/1 黒褐色極細粒砂 70%、10YR5/4 にぶい黄褐色粘土 30%
- 59, 10YR2/1 黒色シルト 60%、10YR5/4 にぶい黄褐色粘土 40%
- 60, 10YR4/2 灰黄褐色シルト 70%、10YR3/1 黒褐色極細粒砂 30%
- 61, 10YR4/3 にぶい黄褐色細粒砂 100%
- 62, 10YR4/2 灰黄褐色シルト 100%
- 63, 10YR3/1 黒褐色極細粒砂 80%、10YR4/2 灰黄褐色シルト 20%
- 64, 10YR3/1 黒褐色極細粒砂 60%、10YR2/1 黒色シルト 40%
- 65, 10YR4/3 にぶい黄褐色細粒砂 100%
- 66, 10YR4/2 灰黄褐色シルト 70%、10YR5/4 にぶい黄褐色粘土 30%

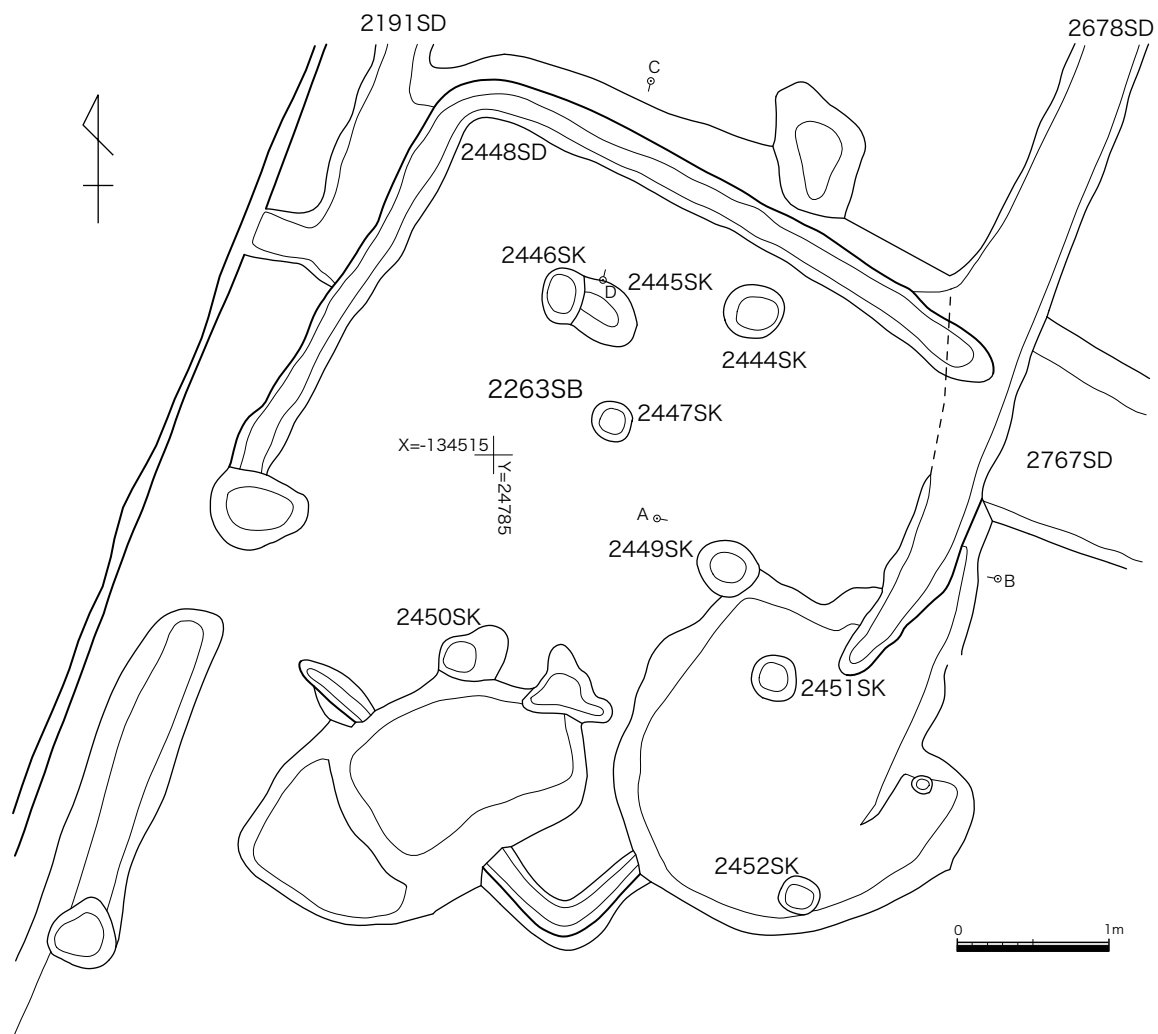
第 21 図 竪穴建物跡 2262SB, 2380SB 遺構図 (2) (s=1:50, 1:25)

西浦遺跡

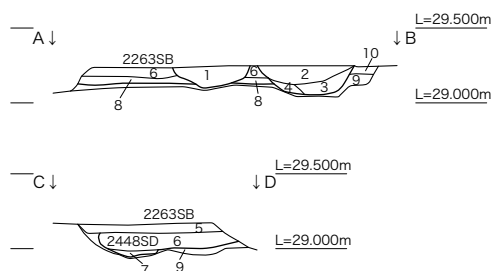
柱穴は 3457SK や 3495 SK などが考えられ、周溝や火処遺構は確認されていない。出土遺物からみて B2 期の遺構と思われる。

2412SB E 区南東部で検出された遺構であるが、床面らしき部分を確認したのみで、平面プランを明瞭に判別できていないものである。

2417SB (第 26 図) E 区北西部で検出された竪穴建物跡 A 類である。北端部は台地際を走る溝 2647SD に、南端部は 2419SB に切られる。中央に 2416SD が走り、東辺で 2418SB を切る。東西幅は 6.31 m を測り、その両辺には周溝が確認されないが、火処遺構は地床炉が 2ヶ所存在する。



2263SBセクション

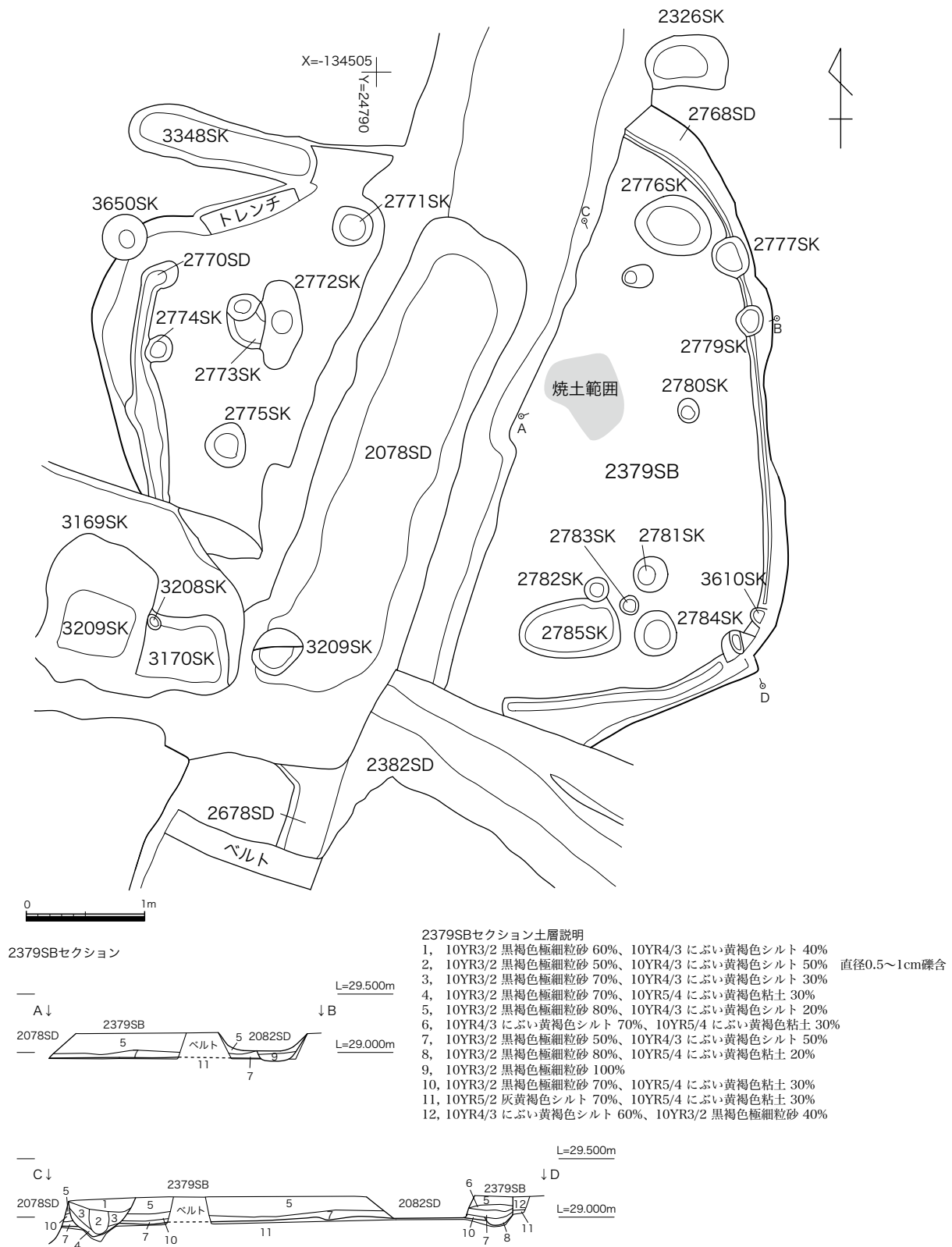


2263SBセクション土層説明

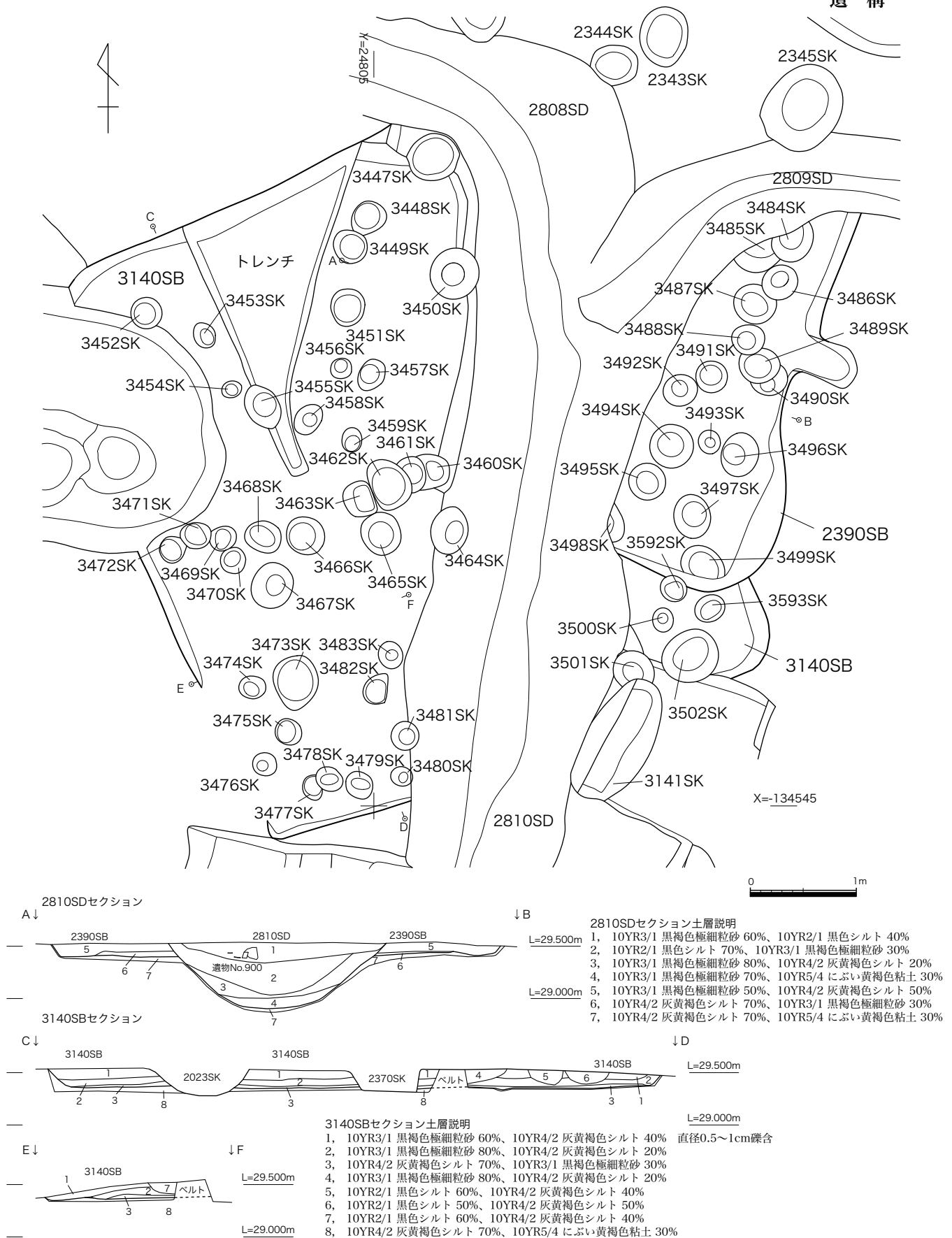
- 1, 10YR3/1 黒褐色極細粒砂 60%、10YR4/2 灰黄褐色シルト 40%
- 2, 10YR3/1 黒褐色極細粒砂 60%、10YR4/2 灰黄褐色シルト 40%
- 3, 10YR3/1 黒褐色極細粒砂 100%
- 4, 10YR3/1 黒褐色極細粒砂 70%、10YR5/4 にぶい黄褐色粘土 30%
- 5, 10YR3/1 黒褐色極細粒砂 50%、10YR4/2 灰黄褐色シルト 50%
- 6, 10YR3/1 黒褐色極細粒砂 80%、10YR4/2 灰黄褐色シルト 20%
- 7, 10YR5/4 にぶい黄褐色粘土 60%、10YR4/2 灰黄褐色シルト 40%
- 8, 10YR4/2 灰黄褐色シルト 70%、10YR3/1 黒褐色極細粒砂 30%
- 9, 10YR4/2 灰黄褐色シルト 70%、10YR5/4 にぶい黄褐色粘土 30%
- 10, 10YR3/1 黒褐色極細粒砂 80%、10YR4/2 灰黄褐色シルト 20%

第 22 図 竪穴建物跡 2263SB 遺構図 (s=1:50)

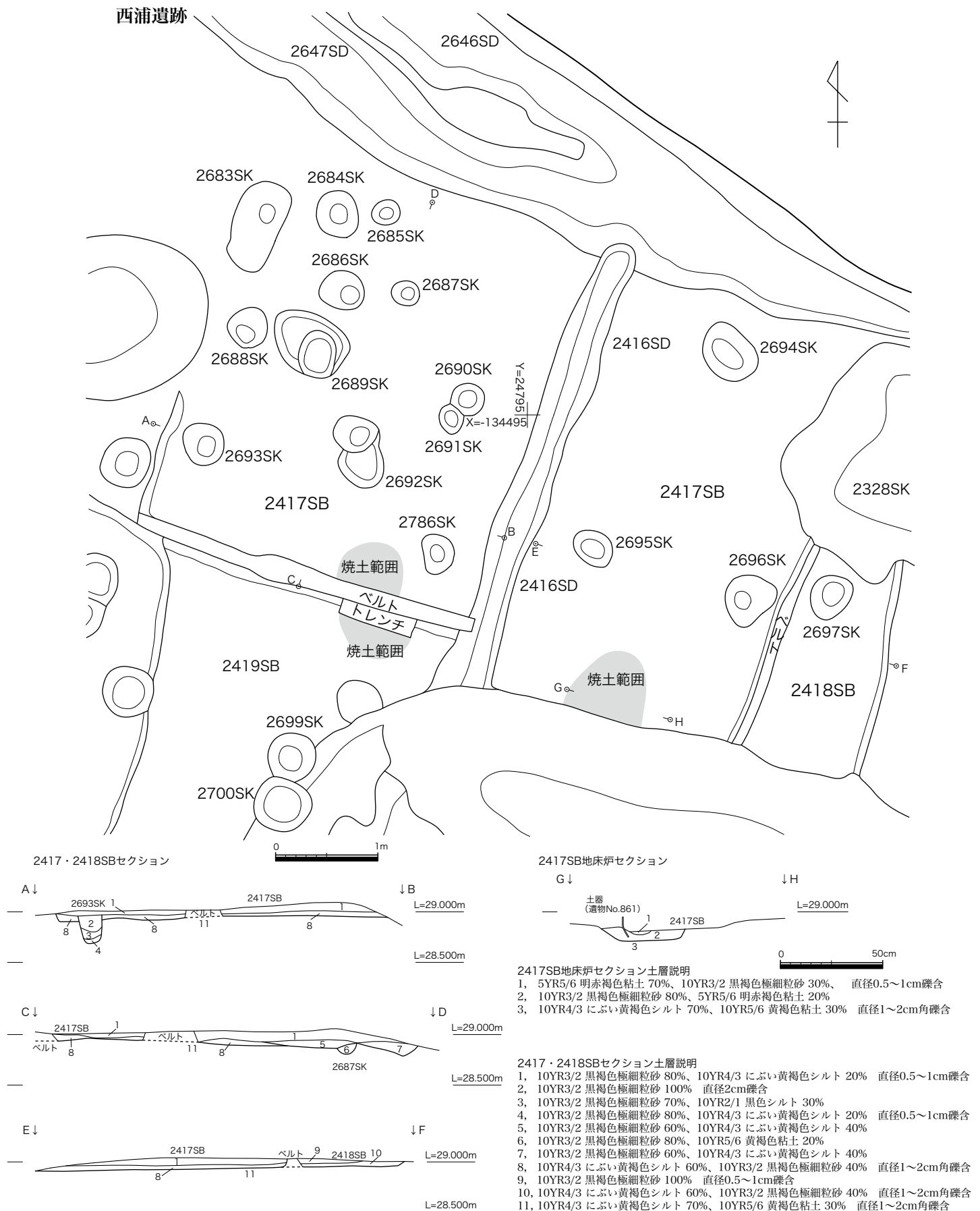
遺 構



遺構



第 25 図 竪穴建物跡 3140SB, 2390SB 遺構図 (s=1:50)



第 26 図 竪穴建物跡 2417SB, 2418SB 遺構図 (s=1:50, 1:25)

遺 構

そのうち東側の炉では西部に土器片が焼土中に刺さった状態で出土している。柱穴は多数認められるが、適切な配置にはなっていない。このため検出した平面プランに誤りがある可能性が残る。出土遺物からみて B2 期の遺構と位置づけられる。

2418SB (第 26 図) E 区北西部に位置する竪穴建物跡である。北端部は台地際を走る溝 2647SD に、西部は 2417SB に切られる。貼床状の整地層は確認されたが、周溝・火処遺構・支柱穴は認められていない。遺構の重複関係からみて B2 期以前の遺構と考えられる。

2419SB (第 41 図) E 区西部北寄りで確認された竪穴建物跡である。東部は 2377SD に切られ、北部は 2417SB を切る。南辺のプランはやや曖昧で確定的ではない。貼床状の整地層の下位からは 2755SB が検出された。北辺で地床炉が存在するが、これは 2417SB に伴うものと推定される。したがって、周溝・火処遺構は現状では確認できない。出土遺物からみて B3 期と推定される。

2420SB (第 27 図) E 区西部中央にある、4.86×4.70 m の規模を持つ方形竪穴建物跡 A 類で、深さは 12 cm を測る。北部は 2377SD に切られ、2422SB を切る。黒褐色極細粒砂と灰黄褐色シルトの班土からなる貼床が確認された。平面では認識できないが、土層断面上では東辺と西辺で周溝の存在が見られる。土坑 2934SK を含め地床炉は 2ヶ所存在する。西側の地床炉は地面全体が赤変し中央に小土坑が開いていて、周辺に土器が散乱していた。支柱穴は 2938SK や 3604SK などが考えられる。出土遺物からみて B4 期といえよう。

2422SB (第 28 図) E 区西部中央に所在する方形竪穴建物跡 A 類で、4.50 m×4.36 m の規模を持ち深さは 4 cm と浅い。2420SB と 2722SD に切られる。覆土はほとんど残存せず、すぐに黒褐色極細粒砂と灰黄褐色シルトの班土が露出した。外周を巡る周溝は認められないが、内部に屈曲する周溝状の溝が存在し、建替えがあったことが予測される。西部に地床炉が 2 基存在し表面

がよく赤変していた。西側の地床炉には小土坑が掘削され、地床炉を中心に床面には土器が散乱していた。支柱穴は 2925SK・2926SK・2929SK・3613SK が該当する。出土遺物からみて B2～3 期と推測される。

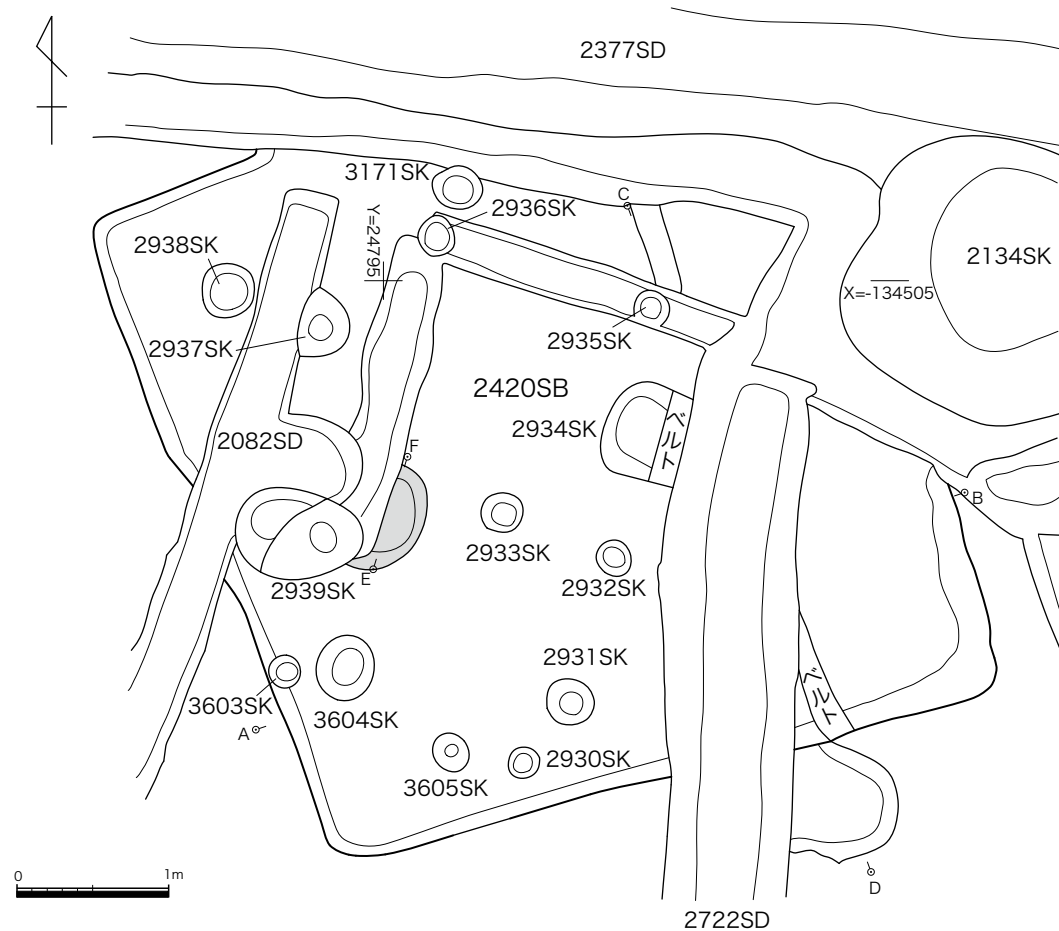
2434SB E 区北西部で検出された竪穴建物跡で、2148SD と 2377SD に切られて全形は不明である。南西隅と北東隅を検出したが、同一建物跡かについては疑わしい。周溝と地床炉は確認されず、支柱穴の同定も難しい。時期は不明。

2440SB (第 29 図) E 区北部中央にある竪穴建物跡 C 類で、深さは 10 cm を測る。検出当初は東辺のみが認識されたが、最終的には 3521SD・3217SD または 3218SD の存在から、これらを周溝とする東西に長い隅丸長方形プランであることが推測された。隅角部には周溝は確認されていない。東側で 3665SB を、南西部で 3086SB を切る。黒褐色極細粒砂と灰黄褐色シルトの班土からなる薄い貼床が確認され、支柱穴は 3511SK や 3519SK などが考えられる。3217SD に接して地床炉が 2ヶ所存在するが、この遺構に伴うものか否かは断定できない。出土遺物からみて B2 期前後と思われる。

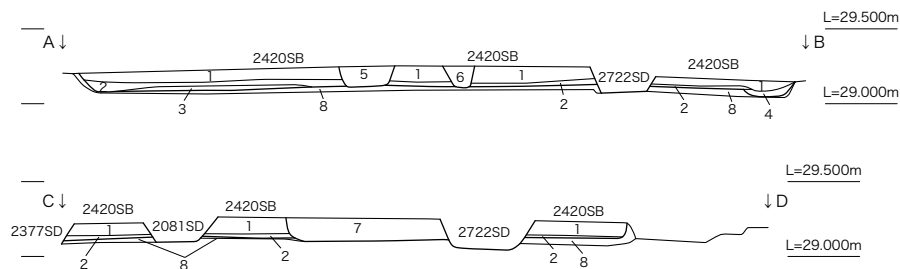
2469SB (第 30 図) E 区北部西端で検出された竪穴建物跡で、2377SD により大きく滅失していた。一部は 2275SK に切られるものの、北辺のみが平面でプランを確定できた。南辺は西壁の土層観察で位置を特定できるが、平面プランとしては特定できていない。西側は調査区外、東側は 2377SD により不明となっている。黒褐色極細粒砂と灰黄褐色シルトの班土による貼床が確認されるが、周溝と地床炉は確認されない。2419SB および 3320SB より上位で検出されたことと出土遺物からみて、B3 期の遺構と考えられる。

2475SB (第 31 図) E 区北東端で検出された竪穴建物跡 A 類で、北半は地形の傾斜により失われていた。平面プランは東西方向が 4.38 m の規模を持つ隅丸方形で、黒褐色極細粒砂とにぶい黄褐色シルトの班土による貼床が認められるが、

西浦遺跡



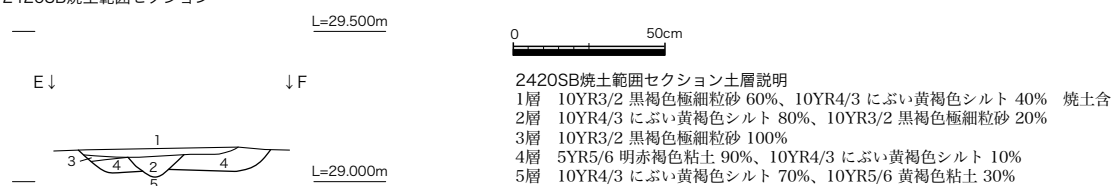
2420SBセクション



2420SBセクション土層説明

- 1層 10YR3/2 黒褐色極細粒砂 80%、10YR4/3 にぶい黄褐色シルト 20% 直径0.5～1cm礫含
- 2層 10YR3/2 黒褐色極細粒砂 60%、10YR4/3 にぶい黄褐色シルト 40%
- 3層 10YR4/3 にぶい黄褐色シルト 70%、10YR3/2 黒褐色極細粒砂 30%
- 4層 10YR3/2 黒褐色極細粒砂 100%
- 5層 10YR3/2 黒褐色極細粒砂 100%
- 6層 10YR4/3 にぶい黄褐色シルト 70%、10YR3/2 黒褐色極細粒砂 30% 直径0.5～1cm礫含
- 7層 10YR3/2 黒褐色極細粒砂 60%、10YR4/3 にぶい黄褐色シルト 40% 直径0.5～1cm礫含
- 8層 10YR4/3 にぶい黄褐色シルト 70%、10YR5/6 黄褐色粘土 30%

2420SB焼土範囲セクション

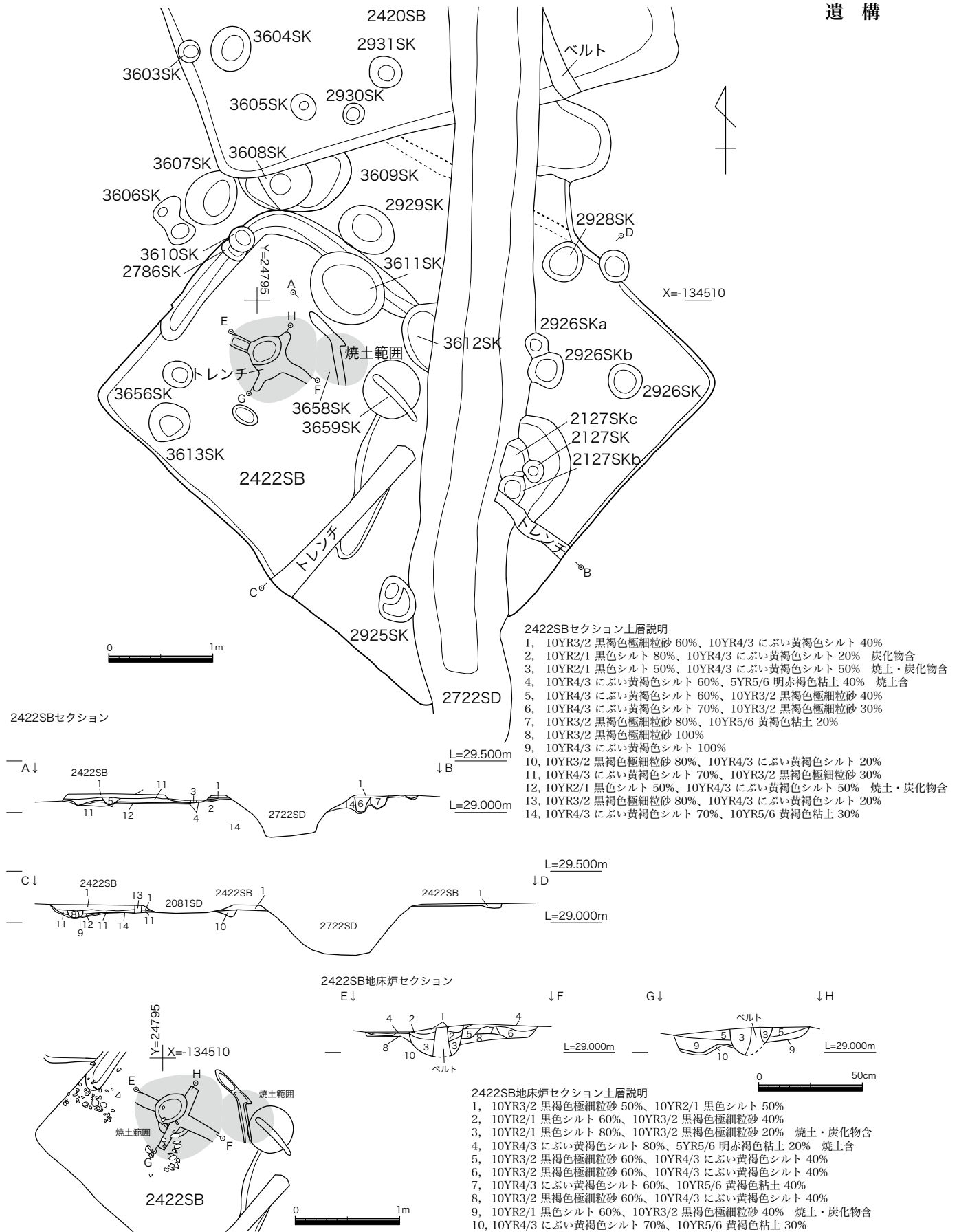


2420SB焼土範囲セクション土層説明

- 1層 10YR3/2 黒褐色極細粒砂 60%、10YR4/3 にぶい黄褐色シルト 40% 焼土含
- 2層 10YR4/3 にぶい黄褐色シルト 80%、10YR3/2 黒褐色極細粒砂 20%
- 3層 10YR3/2 黒褐色極細粒砂 100%
- 4層 5YR5/6 明赤褐色粘土 90%、10YR4/3 にぶい黄褐色シルト 10%
- 5層 10YR4/3 にぶい黄褐色シルト 70%、10YR5/6 黄褐色粘土 30%

第 27 図 竪穴建物跡 2420SB 遺構図 (s=1:50, 1:25)

遺構



第 28 図 竪穴建物跡 2422SB 遺構図 (s=1:50, 1:25)

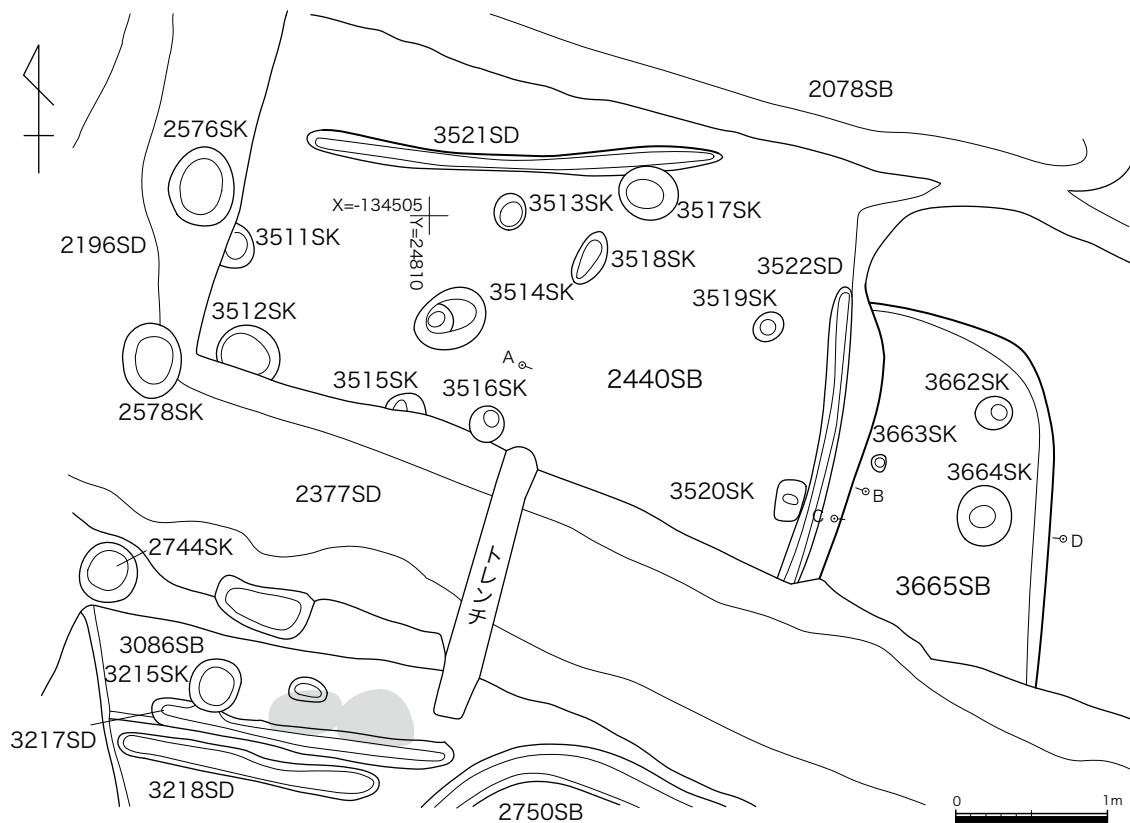
西浦遺跡

周溝は確認されない。地床炉はやや西寄りの位置に所在し、だるま形に焼土が分布していた。出土遺物からみて、B2 期の遺構と考えられる。

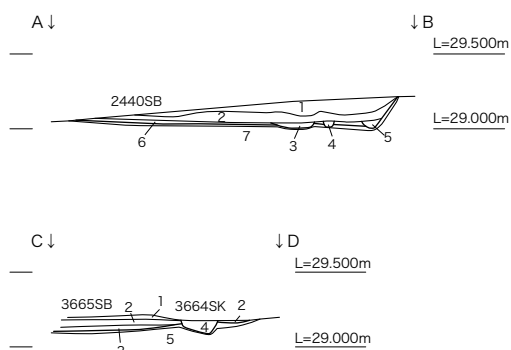
2476SB (第 31 図) E 区北東端で検出された竪穴建物跡で、東側は調査区外に拡がり、北部は地形の傾斜により遺存しない。黒褐色極細粒砂とにぶい黄褐色シルトの班土による整地土が存在するが、周溝は確認されない。地床炉は東壁の土層観察で存在が特定される。出土遺物からみて、

B2 期の遺構と考えられる。

2477SB (第 32 図) E 区北部東端で確認された竪穴建物跡 C 類で、東側は調査区外に拡がり不明である。平面プランは 4.27 m 以上 × 3.81 m の規模を持つ隅丸長方形で、深さは 25 cm と深い。2904SB と 2745SB を切り、黒褐色極細粒砂とにぶい黄褐色シルトの班土による貼床が認められる。中央に攪乱があつて地床炉の存否は不明だが、周溝は確認されない。中心に近い部分で支柱



2440・3665SB セクション



2440SB セクション土層説明

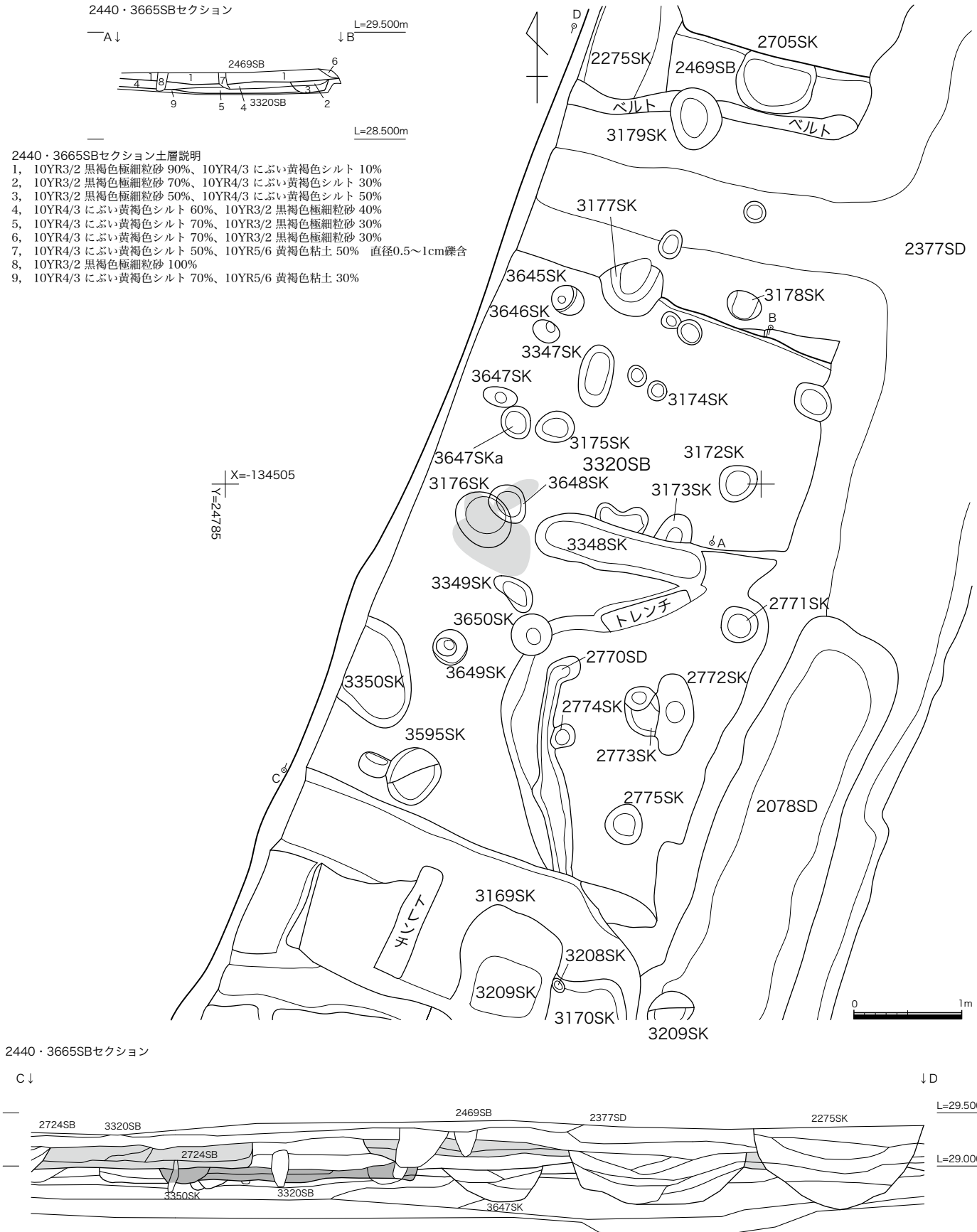
- 1, 10YR3/2 黒褐色極細粒砂 80%、10YR4/3 にぶい黄褐色シルト 20% 直径0.5~1cm礫含
- 2, 10YR3/2 黒褐色極細粒砂 60%、10YR4/3 にぶい黄褐色シルト 40% 直径0.5~1cm礫含
- 3, 10YR4/3 にぶい黄褐色シルト 60%、10YR5/6 黄褐色粘土 40%
- 4, 10YR3/2 黒褐色極細粒砂 100%
- 5, 10YR3/2 黒褐色極細粒砂 80%、10YR5/6 黄褐色粘土 20%
- 6, 10YR4/3 にぶい黄褐色シルト 70%、10YR3/2 黒褐色極細粒砂 30%
- 7, 10YR4/3 にぶい黄褐色シルト 70%、10YR5/6 黄褐色粘土 30% 直径0.5~1cm礫含

3665SB セクション土層説明

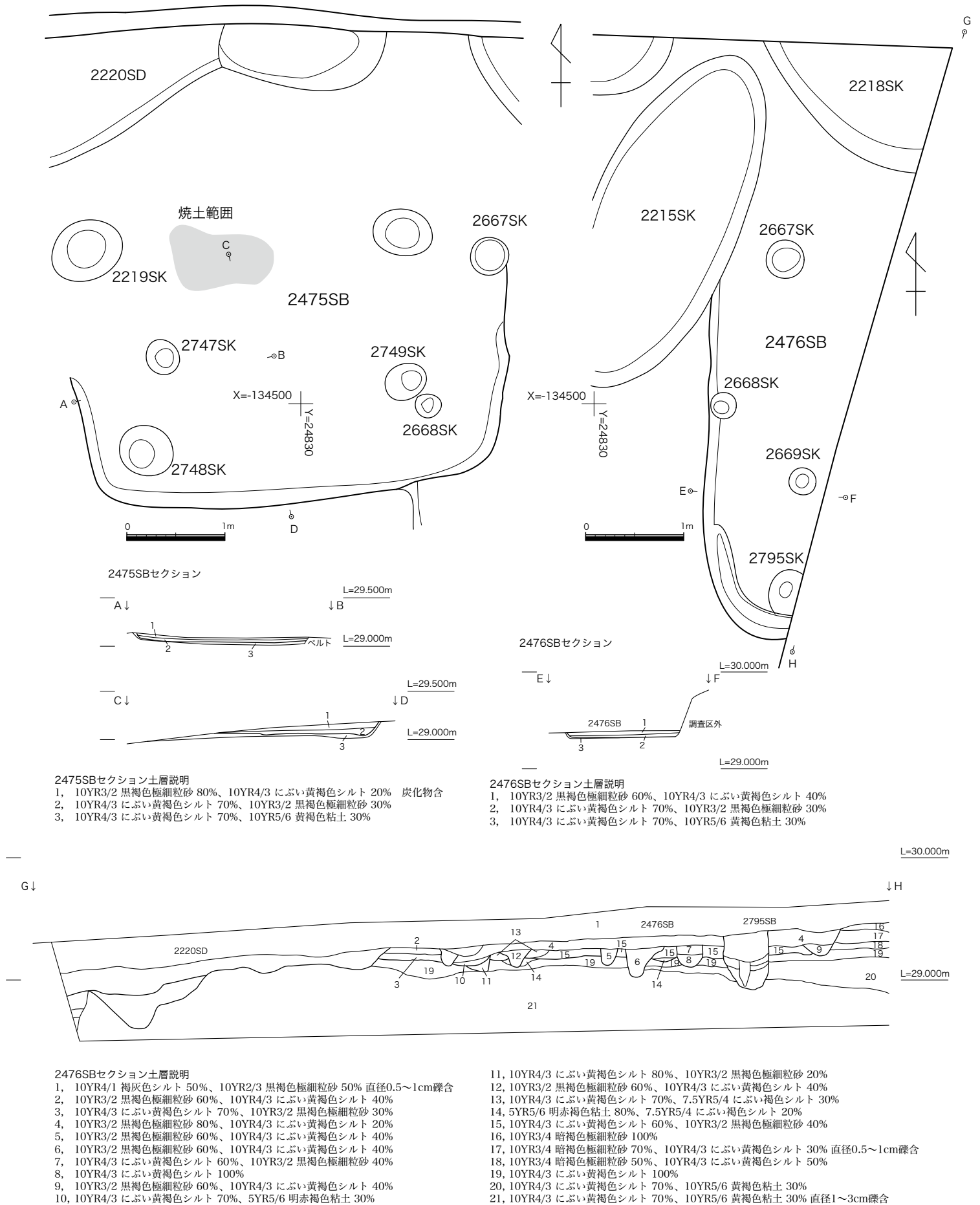
- 1, 10YR3/1 黒褐色極細粒砂 100% 直径0.5~1cm礫含
- 2, 10YR3/1 黒褐色極細粒砂 80%、10YR4/2 灰黄褐色シルト 20%
- 3, 10YR4/2 灰黄褐色シルト 70%、10YR3/1 黒褐色極細粒砂 30%
- 4, 10YR2/1 黒色シルト 70%、10YR3/1 黒褐色極細粒砂 30% 直径0.5~1cm礫含
- 5, 10YR4/2 灰黄褐色シルト 70%、10YR5/4 にぶい黄褐色粘土 30%

第 29 図 竪穴建物跡 2440SB, 3665SB 遺構図 (s=1:50)

遺構

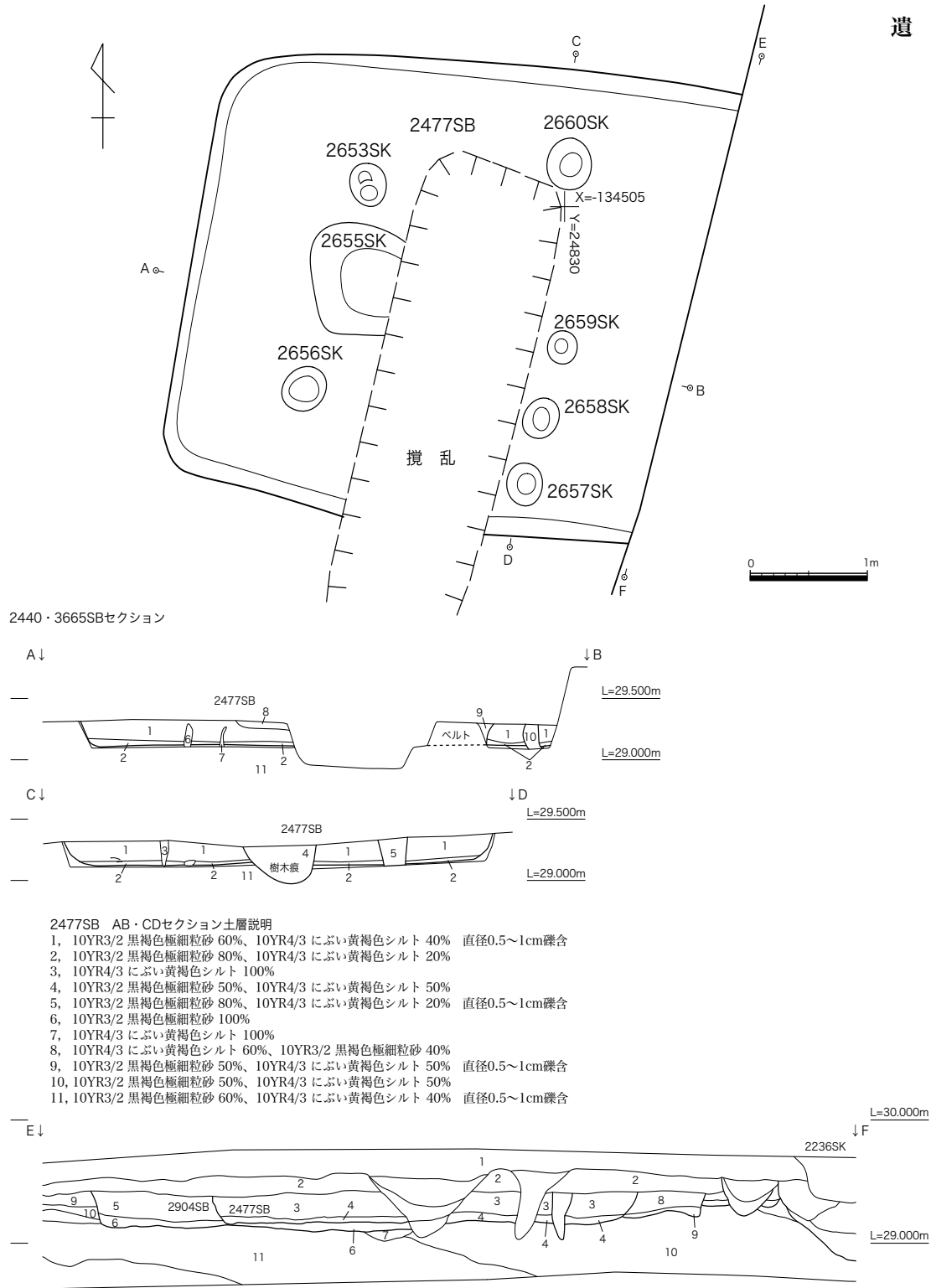


第 30 図 竪穴建物跡 2469SB, 3320SB 遺構図 (s=1:50)



第 31 図 竪穴建物跡 2475SB, 2476SB 遺構図 (s=1:50)

遺 構



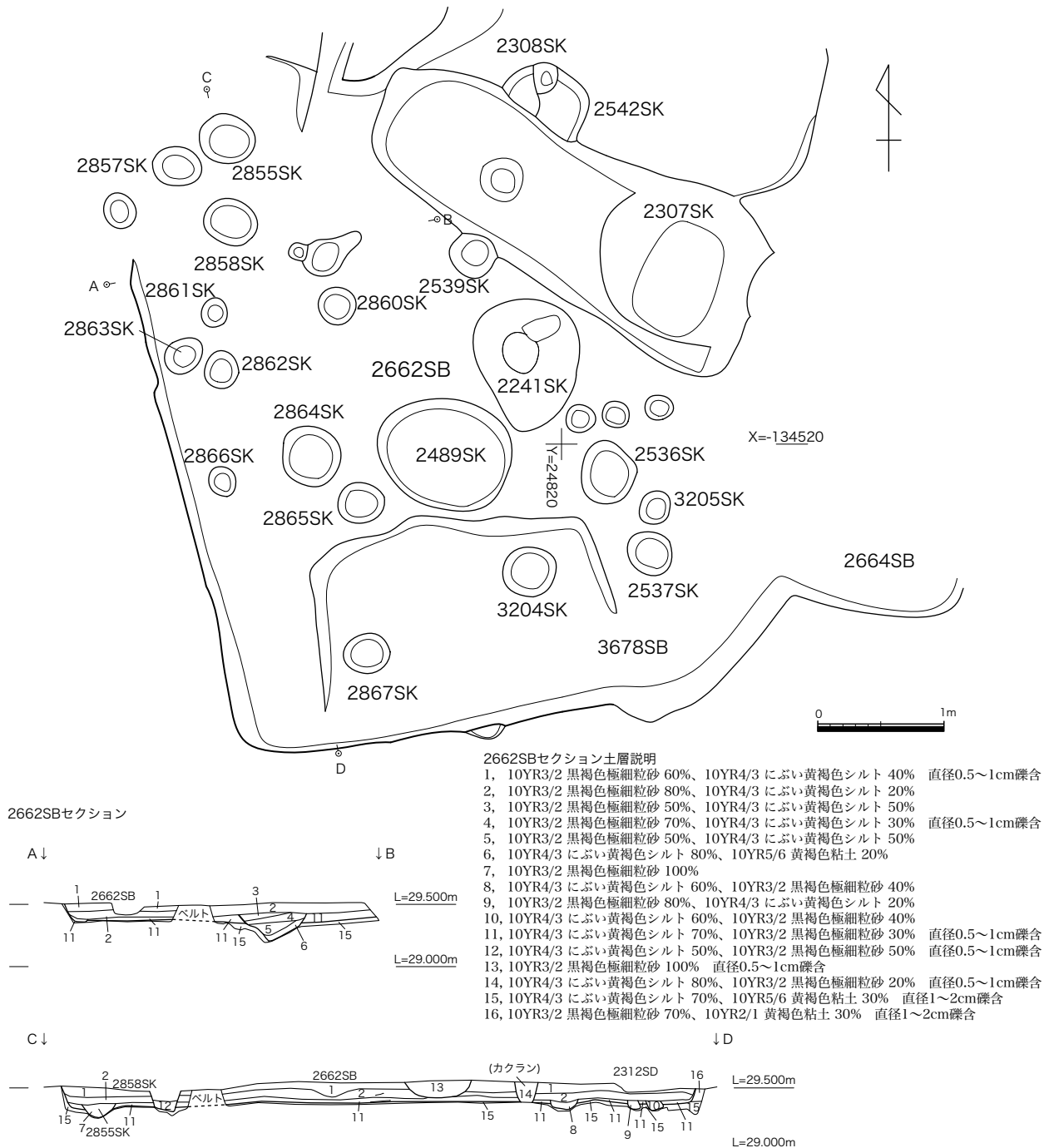
第 32 図 竪穴建物跡 2477SB 遺構図 (s=1:50)

西浦遺跡

穴（2653SK・2656SK など）が存在する。須恵器や土師器が出土しており、C1 期の遺構に属する。

2662SB（第 33 図） E 区東部中央に位置する竪穴建物跡 C 類で、東部は攪乱が激しく状況をうまく把握できていない。このため 2664SB と重複するはずだが新旧関係を明らかにできなかつ

た。また、北辺の位置も平面では捉えきれなかった。土層断面の検討を加え、平面プランは約 5.30 m × 3.10 m 以上の規模を持つ隅丸方形と推定された。床面には黒褐色極細粒砂とにぶい黄褐色シルトの班土による整地層が認められるが、周溝や地床炉は確認されていない。支柱穴となるピット群が多数存在するが、特定するには至らない。出



第 33 図 竪穴建物跡 2662SB 遺構図 (s=1:50)

遺 構

土遺物から、B3 期に位置づけられる。

2663SB (第 34 図) E 区東端部中央で検出された竪穴建物跡 C 類である。2238SD など小規模な遺構に切られるのみで概ね全形を知ることができ、平面プランは 5.63 m × 4.93 m の規模を持つ隅丸方形である。床面には黒褐色極細粒砂と灰黄褐色シルトの班土による整地層(貼床)が認められるが、周溝や地床炉は確認されていない。主柱穴は北半部で不明瞭となるが、3128SK・3131SK・3135SK が該当するだろう。出土遺物から、B3 期に位置づけられる。

2664SB (第 35 図) E 区東部中央で確認された竪穴建物跡で、南東隅部のみが明瞭に検出され、2665SB を切っている。床面には黒褐色極細粒砂と灰黄褐色シルトの班土による整地層が認められるが、周溝や地床炉は確認されていない。出土遺物から、B3 か 4 期に属する。

2665SB (第 35 図) E 区東部中央に位置する竪穴建物跡で、2664SB などによって切られたため南西辺部のみが確認されなかった。平面プランは 4.04 m × 2.15 m 以上の規模を持つ隅丸方形である。床面には黒褐色極細粒砂と灰黄褐色シルトの班土による整地層が認められるが、周溝や地床炉は確認されていない。出土遺物からみて B1 期に属すると思われた。

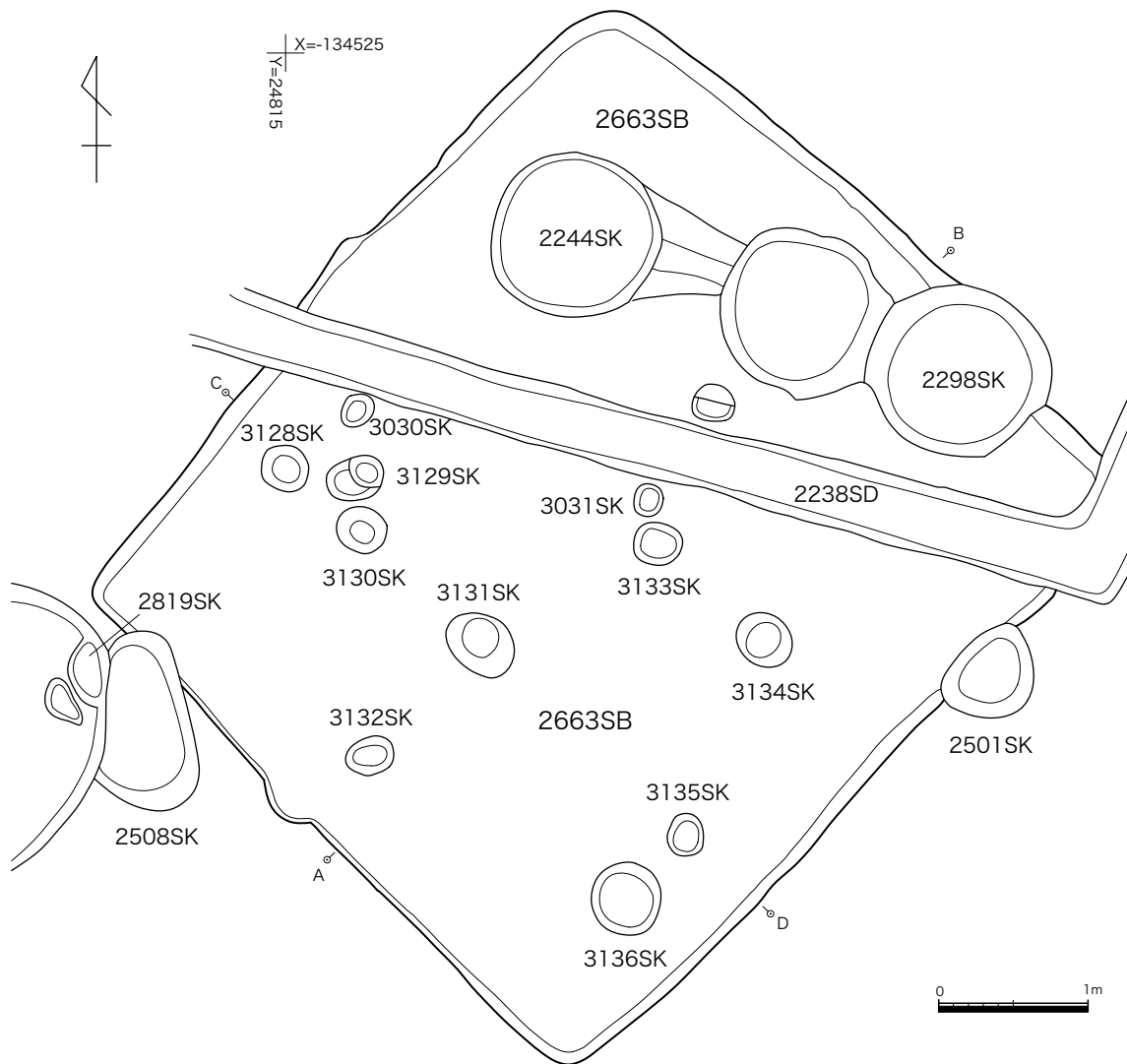
2724SB (第 36 図) E 区中央部西端で検出された竪穴建物跡 A 類で、西側は調査区外に拡がり、東側は 2078SD に切られていた。平面プランは南隅部を確認することができたが、北辺は誤って掘削し過ぎてしまい西壁の土層観察で位置を把握するに留まった。下位で 3320SB が検出されている。床面には黒褐色極細粒砂と灰黄褐色シルトの班土による薄い整地層が認められるが、周溝や地床炉は確認されていない。出土遺物からみて、B3 期に位置づけられる。

2741SB (第 18・19 図) E 区中央部やや西寄りに所在する竪穴建物跡 C 類で、2261SB の床面から検出された。2261SB により上部が破壊されたため、北半部は浅くなり平面プランは不明な

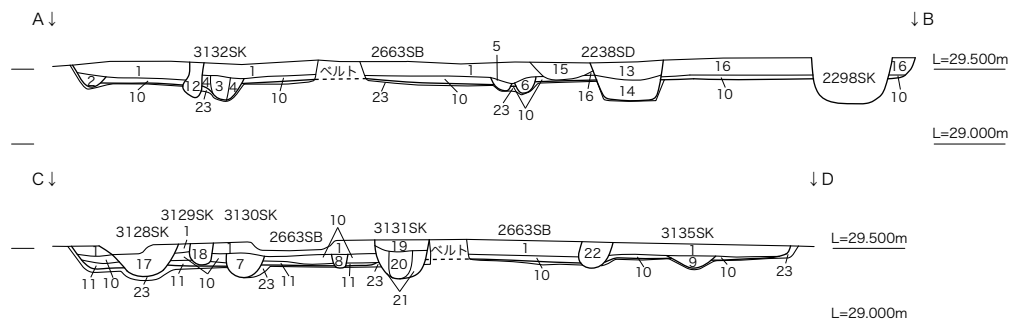
部分があるが、一辺が 3.90 m の歪な方形となっている。黒褐色極細粒砂と灰黄褐色シルトの班土が床面か覆土かは特定し難い。主柱穴は 2802SK や 2802SKb などが考えられ、周溝や火処遺構は確認されていない。出土遺物からみて B3 期の遺構と思われる。

2745SB (第 37・38 図) E 区北東部で検出された竪穴建物跡 B 類である。上位は 2477SB に切られるが、深さは検出面から 30 cm 以上を測るほど深く、床面での平面プランはほぼ全体に遺存していた。平面形は 7.04 m × 6.62 m の規模を持つ隅丸方形で、隅角部がわずかに丸くなる。にぶい黄褐色シルトと黒褐色極細粒砂の班土を貼床として整地し、南辺と西辺には周溝、北辺中央部にカマドが存在する。カマドは既に上部が大きく破壊されていたが、焼土がブロック状に集中する範囲として検出された。壁面中央は舌状に掘り込まれ煙道部にしたものと思われ、にぶい黄褐色シルトと黄褐色粘土で作られた袖の下部が残存していた。両袖に挟まれた中央の落ち込みには焼土と炭化物が多く含まれていた。カマド左袖(東側)は壁面に沿って高さ約 10 cm のテラス状に整地土が伸びており、その上位には土師器鉢が 2 点伏せた状態で並んで置かれていた。北東隅部床面に貯蔵穴の可能性のある深さ 40 cm の土坑 2951SK があり、その壁側すなわち東壁北端部には土師器甕と土師器甕が伏せた状態で並んで置かれていた。北側にある土師器甕と壁面の間には土製支脚が横倒しの状態で、南側にある土師器甕の内部には須恵器杯身が 1 点存在していた。このように 2745SB の北東部の土器出土状況は当時の土器の収蔵状況を示すものかもしれない。南辺中央部には周溝に接続する形で平面が半円形の土坑 2970SK が存在する。出入口に伴う施設かもしれない。主柱穴は 2953SK・2964SK・2969SK・3034SK が該当するだろう。2948SK には土師器甕片が埋納されていた。この他に石製舌が床面直上で出土している。出土遺物などからみて C1 期の遺構と推定される。

西浦遺跡



2663SBセクション

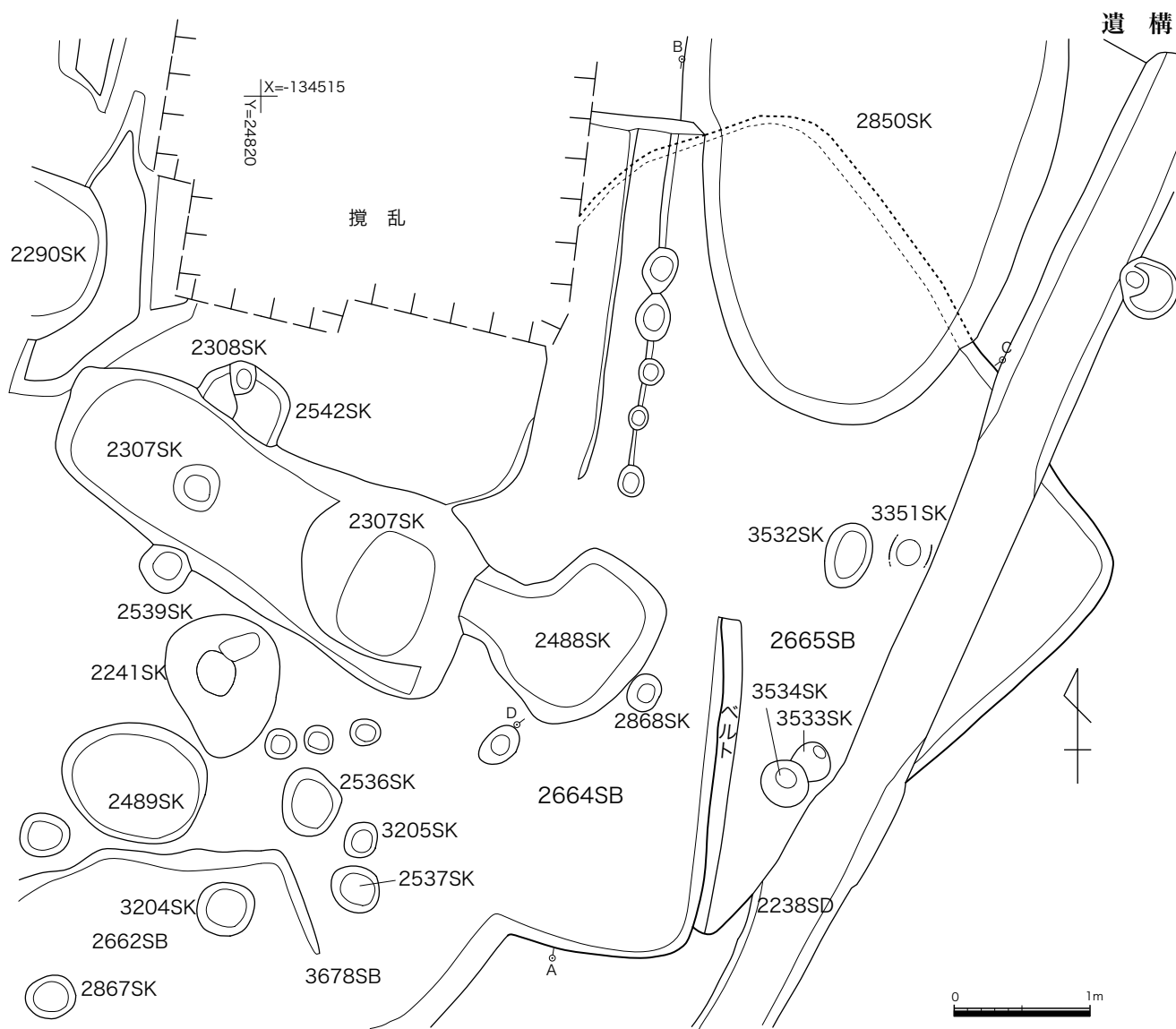


3665SBセクション土層説明

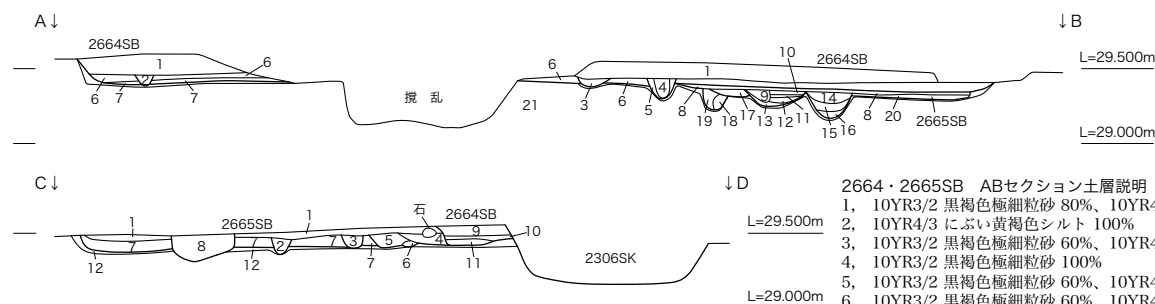
- 1, 10YR3/1 黒褐色極細粒砂 80%、10YR4/2 灰黄褐色シルト 20% 直径0.5~1cm礫含
- 2, 10YR3/1 黒褐色極細粒砂 100%
- 3, 10YR3/1 黒褐色極細粒砂 60%、10YR4/2 灰黄褐色シルト 40%
- 4, 10YR4/2 灰黄褐色シルト 80%、10YR3/1 黒褐色極細粒砂 20%
- 5, 10YR3/1 黒褐色極細粒砂 60%、10YR4/2 灰黄褐色シルト 40%
- 6, 10YR4/2 灰黄褐色シルト 80%、10YR3/1 黒褐色極細粒砂 20%
- 7, 10YR3/1 黒褐色極細粒砂 70%、10YR5/4 にぶい黄褐色粘土 30%
- 8, 10YR4/2 灰黄褐色シルト 80%、10YR3/1 黒褐色極細粒砂 20%
- 9, 10YR4/2 灰黄褐色シルト 50%、10YR3/1 黒褐色極細粒砂 50%
- 10, 10YR4/2 灰黄褐色シルト 70%、10YR3/1 黒褐色極細粒砂 30%
- 11, 10YR4/2 灰黄褐色シルト 100%

- 12, 10YR4/2 灰黄褐色シルト 60%、10YR3/1 黒褐色極細粒砂 40%
- 13, 10YR3/2 黒褐色極細粒砂 50%、10YR4/3 にぶい黄褐色シルト 50% 直径0.5~1cm礫含
- 14, 10YR3/2 黒褐色極細粒砂 100%
- 15, 10YR3/1 黒褐色極細粒砂 100%
- 16, 10YR3/1 黒褐色極細粒砂 60%、10YR4/2 灰黄褐色シルト 40% 直径0.5~1cm礫含
- 17, 10YR3/1 黒褐色極細粒砂 90%、10YR4/2 灰黄褐色シルト 10% 直径0.5~1cm礫含
- 18, 10YR4/2 灰黄褐色シルト 60%、10YR3/1 黒褐色極細粒砂 40% 直径0.5~1cm礫含
- 19, 10YR3/1 黒褐色極細粒砂 100%
- 20, 10YR2/1 黒色シルト 50%、10YR3/1 黒褐色極細粒砂 50%
- 21, 10YR3/1 黒褐色極細粒砂 70%、10YR4/2 灰黄褐色シルト 30%
- 22, 10YR3/1 黒褐色極細粒砂 60%、10YR4/2 灰黄褐色シルト 40% 直径0.5~1cm礫含
- 23, 10YR4/2 灰黄褐色シルト 70%、10YR5/4 にぶい黄褐色粘土 30%

第 34 図 竪穴建物跡 2663SB 遺構図 (s=1:50)



2664・2665SBセクション



2664・2665SB CDセクション土層説明

- 1, 10YR3/2 黒褐色極細粒砂 80%、10YR4/3 にぶい黄褐色シルト 20%
- 2, 10YR3/2 黒褐色極細粒砂 70%、10YR4/3 にぶい黄褐色シルト 30%
- 3, 10YR3/2 黒褐色極細粒砂 70%、10YR4/3 にぶい黄褐色シルト 30%
- 4, 10YR3/2 黒褐色極細粒砂 60%、10YR2/1 黒色シルト 40%
- 5, 10YR3/2 黒褐色極細粒砂 70%、10YR4/3 にぶい黄褐色シルト 30%
- 6, 10YR3/2 黒褐色極細粒砂 100%
- 7, 10YR4/3 にぶい黄褐色シルト 50%、10YR3/2 黒褐色極細粒砂 50%
- 8, 10YR3/2 黒褐色極細粒砂 60%、10YR4/3 にぶい黄褐色シルト 40%
- 9, 10YR3/2 黒褐色極細粒砂 80%、10YR4/3 にぶい黄褐色シルト 20%
- 10, 10YR3/2 黒褐色極細粒砂 60%、10YR4/3 にぶい黄褐色シルト 40%
- 11, 10YR4/3 にぶい黄褐色シルト 50%、10YR3/2 黒褐色極細粒砂 50%
- 12, 10YR4/3 にぶい黄褐色シルト 70%、10YR5/6 黄褐色粘土 30%

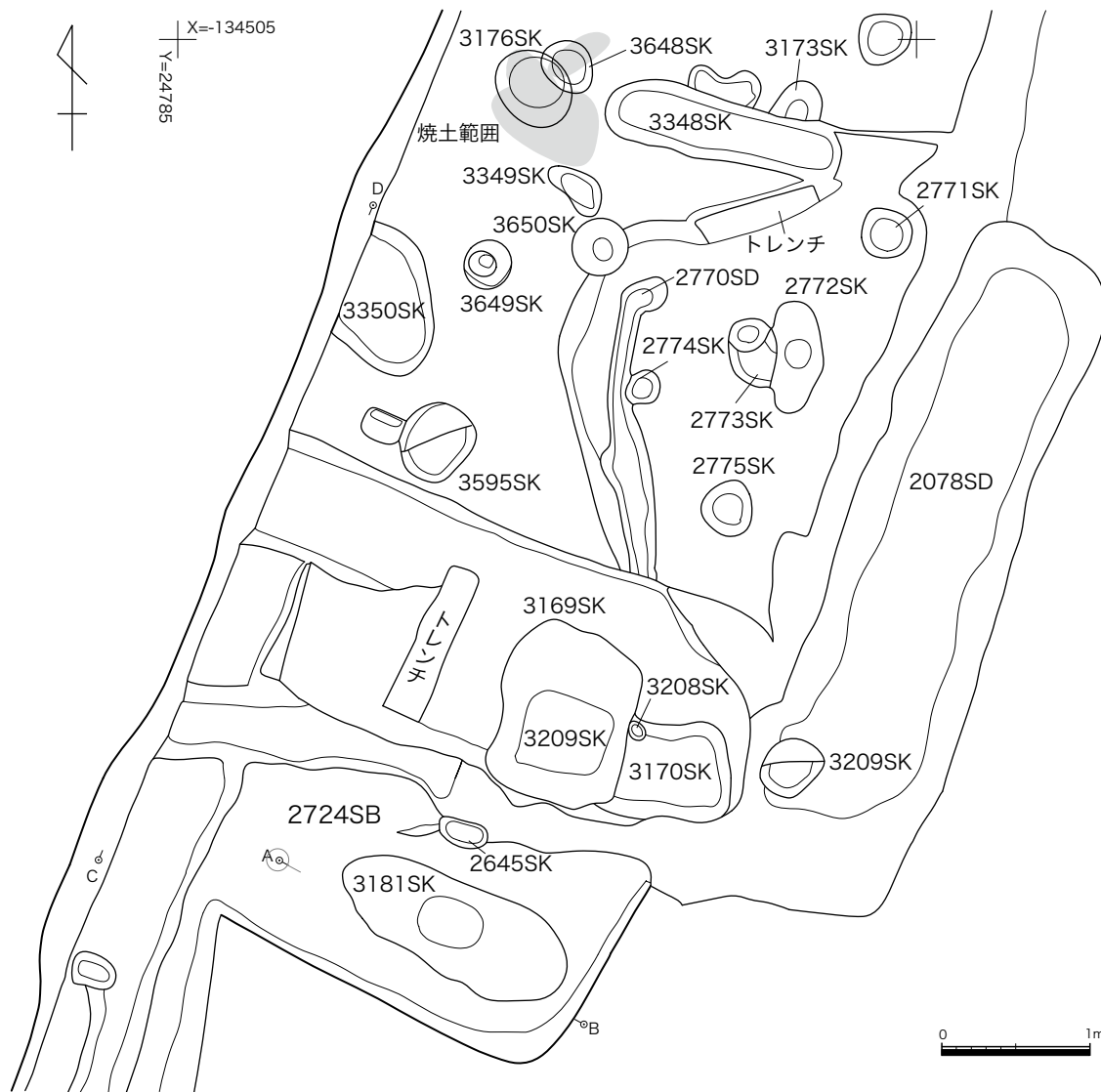
直径0.5~1cm礫含

2664・2665SB ABセクション土層説明

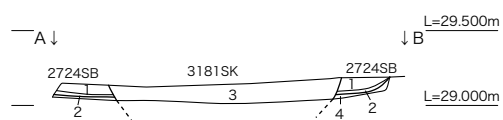
- 1, 10YR3/2 黒褐色極細粒砂 80%、10YR4/3 にぶい黄褐色シルト 20%
- 2, 10YR4/3 にぶい黄褐色シルト 100%
- 3, 10YR3/2 黒褐色極細粒砂 60%、10YR4/3 にぶい黄褐色シルト 40%
- 4, 10YR3/2 黒褐色極細粒砂 100%
- 5, 10YR3/2 黒褐色極細粒砂 60%、10YR4/3 にぶい黄褐色シルト 40%
- 6, 10YR3/2 黒褐色極細粒砂 60%、10YR4/3 にぶい黄褐色シルト 40%
- 7, 10YR4/3 にぶい黄褐色シルト 70%、10YR3/2 黒褐色極細粒砂 30%
- 8, 10YR3/2 黒褐色極細粒砂 80%、10YR4/3 にぶい黄褐色シルト 20%
- 9, 10YR3/2 黒褐色極細粒砂 100%
- 10, 10YR4/3 にぶい黄褐色シルト 100%
- 11, 10YR4/3 にぶい黄褐色シルト 60%、10YR5/6 黄褐色粘土 40%
- 12, 10YR4/3 にぶい黄褐色シルト 100%
- 13, 10YR4/3 にぶい黄褐色シルト 60%、10YR5/6 黄褐色粘土 40%
- 14, 10YR4/3 にぶい黄褐色シルト 100%
- 15, 10YR4/3 にぶい黄褐色シルト 60%、10YR5/6 黄褐色粘土 40%
- 16, 10YR4/3 にぶい黄褐色シルト 100%
- 17, 10YR4/3 にぶい黄褐色シルト 70%、10YR3/2 黒褐色極細粒砂 30%
- 18, 10YR3/2 黒褐色極細粒砂 60%、10YR4/3 にぶい黄褐色シルト 40%
- 19, 10YR4/3 にぶい黄褐色シルト 60%、10YR5/6 黄褐色粘土 40%
- 20, 10YR4/3 にぶい黄褐色シルト 50%、10YR3/2 黒褐色極細粒砂 50%
- 21, 10YR4/3 にぶい黄褐色シルト 70%、10YR5/6 黄褐色粘土 30%

第 35 図 竪穴建物跡 2664SB, 2665SB 遺構図 (s=1:50)

西浦遺跡

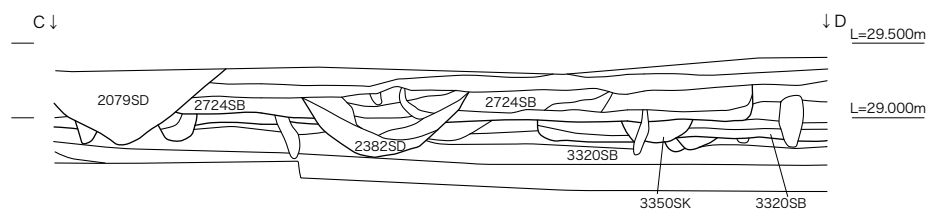


2724SBセクション



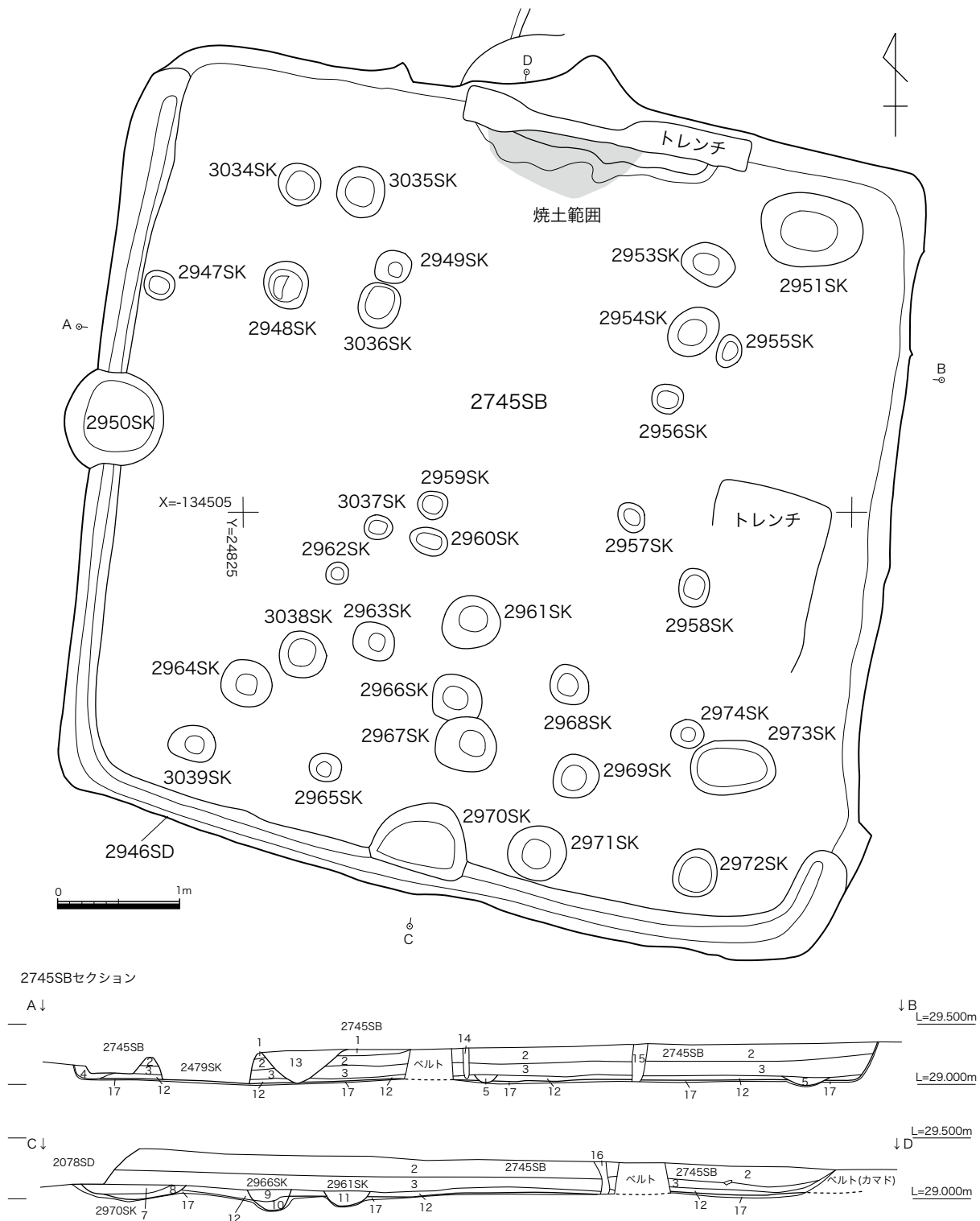
2724SBセクション土層説明

- 1, 10YR3/1 黒褐色極細粒砂 80%、10YR4/2 灰黄褐色シルト 20%
- 2, 10YR3/1 黒褐色極細粒砂 50%、10YR4/2 灰黄褐色シルト 50%
- 3, 10YR3/1 黒褐色極細粒砂 60%、10YR4/2 灰黄褐色シルト 40%
- 4, 10YR4/2 灰黄褐色シルト 70%、10YR5/4 にぶい黄褐色粘土 30%



第 36 図 竪穴建物跡 2724SB 遺構図 (s=1:50)

遺 構



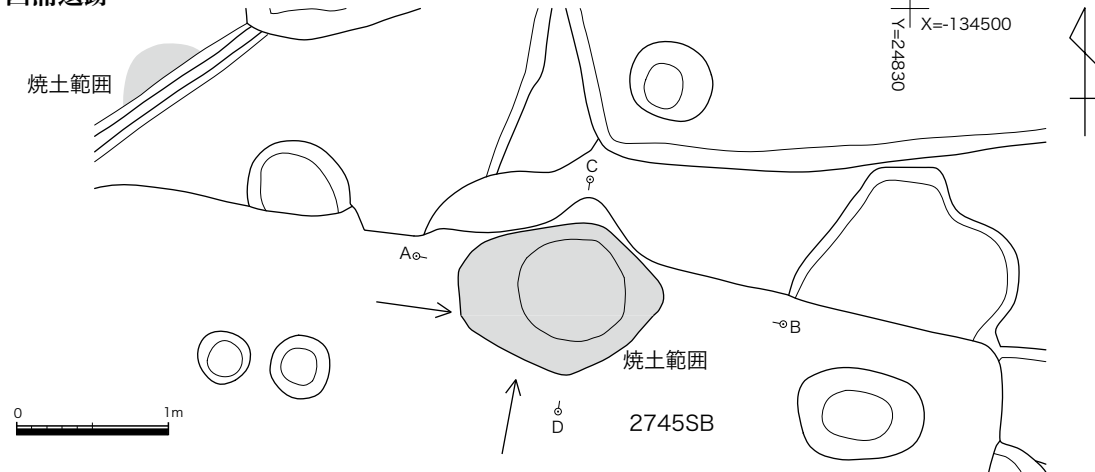
2745SBセクション土層説明

- 1, 10YR3/2 黒褐色極細粒砂 50%、10YR4/3 にぶい黄褐色シルト 50%
- 2, 10YR3/2 黒褐色極細粒砂 80%、10YR4/3 にぶい黄褐色シルト 20% 直径0.5~1cm礫含
- 3, 10YR3/2 黒褐色極細粒砂 60%、10YR4/3 にぶい黄褐色シルト 40%
- 4, 10YR3/2 黒褐色極細粒砂 80%、10YR4/3 にぶい黄褐色シルト 20% 直径0.5~1cm礫含
- 5, 10YR3/2 黒褐色極細粒砂 60%、10YR4/3 にぶい黄褐色シルト 40%
- 6, 10YR3/2 黒褐色極細粒砂 60%、10YR4/3 にぶい黄褐色シルト 40%
- 7, 10YR3/2 黒褐色極細粒砂 100%
- 8, 10YR3/2 黒褐色極細粒砂 60%、10YR4/3 にぶい黄褐色シルト 40%

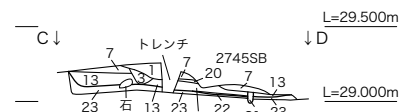
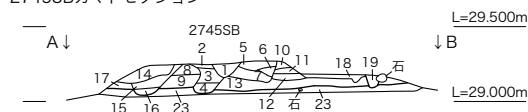
- 9, 10YR4/3 にぶい黄褐色シルト 60%、10YR3/2 黒褐色極細粒砂 40%
- 10, 10YR3/2 黒褐色極細粒砂 100%
- 11, 10YR4/3 にぶい黄褐色シルト 60%、10YR3/2 黒褐色極細粒砂 40%
- 12, 10YR4/3 にぶい黄褐色シルト 70%、10YR3/2 黒褐色極細粒砂 30%
- 13, 10YR4/3 にぶい黄褐色シルト 60%、10YR3/2 黒褐色極細粒砂 40% 直径0.5~1cm礫含
- 14, 10YR2/1 黒色シルト 100%
- 15, 10YR4/3 にぶい黄褐色シルト 100%
- 16, 10YR4/3 にぶい黄褐色シルト 100%
- 17, 10YR4/3 にぶい黄褐色シルト 70%、10YR5/6 黄褐色粘土 30% 直径1~2cm礫含

第 37 図 竪穴建物跡 2745SB 遺構図 (1) (s=1:50)

西浦遺跡



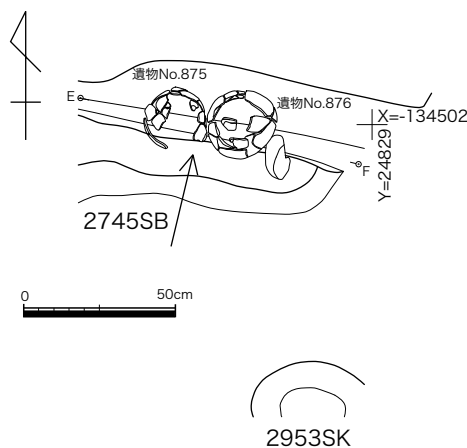
2745SBカマドセクション



2745SBカマドセクション土層説明

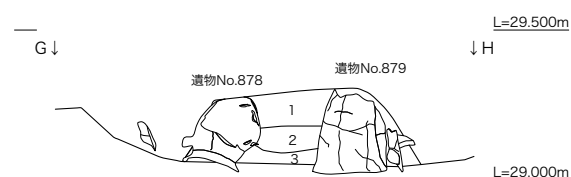
- 1, 10YR3/2 黒褐色極細粒砂 50%、10YR4/3 にぶい黄褐色シルト 50%
- 2, 10YR4/3 にぶい黄褐色シルト 80%、10YR3/2 黒褐色極細粒砂 20%
- 3, 10YR4/3 にぶい黄褐色シルト 60%、10YR3/2 黒褐色極細粒砂 40%
- 4, 10YR3/2 黒褐色極細粒砂 60%、10YR4/3 にぶい黄褐色シルト 40% 焼土・炭化物含
- 5, 10YR3/2 黒褐色極細粒砂 80%、10YR4/3 にぶい黄褐色シルト 20% 直径0.5~1cm礫含
- 6, 10YR3/2 黒褐色極細粒砂 70%、10YR4/3 にぶい黄褐色シルト 30%
- 7, 7.5YR5/4 にぶい褐色シルト 80%、5YR5/6 明赤褐色粘土 20% 焼土・炭化物含
- 8, 10YR4/3 にぶい黄褐色シルト 60%、10YR5/6 黄褐色粘土 40%
- 9, 10YR4/3 にぶい黄褐色シルト 70%、10YR3/2 黒褐色極細粒砂 30%
- 10, 10YR4/3 にぶい黄褐色シルト 60%、10YR5/6 黄褐色粘土 40%
- 11, 10YR4/3 にぶい黄褐色シルト 100%
- 12, 10YR5/6 黄褐色粘土 70%、10YR4/3 にぶい黄褐色シルト 30%

- 13, 6.10YR4/3 にぶい黄褐色シルト 50%、10YR5/6 黄褐色粘土 50%
- 14, 10YR3/2 黒褐色極細粒砂 80%、10YR4/3 にぶい黄褐色シルト 20% 直径0.5~1cm礫含
- 15, 10YR4/3 にぶい黄褐色シルト 80%、10YR3/2 黒褐色極細粒砂 20% 直径0.5~1cm礫含
- 16, 10YR3/2 黒褐色極細粒砂 70%、10YR4/3 にぶい黄褐色シルト 30%
- 17, 10YR4/3 にぶい黄褐色シルト 70%、10YR3/2 黒褐色極細粒砂 30%
- 18, 10YR4/3 にぶい黄褐色シルト 100%
- 19, 10YR4/3 にぶい黄褐色シルト 50%、10YR5/6 黄褐色粘土 50%
- 20, 5YR5/6 明赤褐色粘土 70%、7.5YR5/4 にぶい褐色シルト 30% 焼土・炭化物含
- 21, 10YR2/1 黒色シルト 50%、7.5YR5/4 にぶい褐色シルト 50% 炭化物混
- 22, 5YR5/6 明赤褐色粘土 70%、7.5YR5/4 にぶい褐色シルト 30% 焼土・炭化物含
- 23, 10YR4/3 にぶい黄褐色シルト 70%、10YR5/6 黄褐色粘土 30% 直径1~2cm礫含



2745SB GHセクション土層説明

- 1, 10YR3/2 黒褐色極細粒砂 50%、10YR4/3 にぶい黄褐色シルト 50%
- 2, 10YR4/3 にぶい黄褐色シルト 80%、10YR3/2 黒褐色極細粒砂 20%
- 3, 10YR4/3 にぶい黄褐色シルト 60%、10YR3/2 黒褐色極細粒砂 40%
- 4, 10YR3/2 黒褐色極細粒砂 60%、10YR4/3 にぶい黄褐色シルト 40% 焼土・炭化物含



第 38 図 竪穴建物跡 2745SB 遺構図 (2) (s=1:50, 1:25)

遺 構

2750SB（第 39 図） E 区中央部北東寄りに所在する竪穴建物跡 A 類である。2804SB・2852SB・3086SB・3088SB・3180SB を切る形で検出され、平面形は 6.29 m × 5.91 m の規模を持つ隅丸方形で、深さは 30 cm を測る。にぶい黄褐色シルトと黒褐色極細粒砂の班土を貼床とし、周溝が全体に巡っている。床面中央には焼土が 10ヶ所確認され、これらがそれぞれ地床炉であったと思われる。焼土の大半は楕円形に分布する範囲として検出され、中央部に浅い土坑が存在するが多い。これに伴う土器片や石材は確認されなかったが、土坑部が炉の中心と推察される。支柱穴は 3057SK・3064SK・3076SK などが該当すると思われるが、規模が大きい土坑 3056SK・3065SK・3077SK・3083SK も四隅にあり、これも支柱穴の可能性がある。後者は抜き取られたものかも知れない。南辺中央部には周溝に接する形で平面が楕円形の土坑 3079SK があり出入り口に伴う可能性がある。出土遺物などからみて B4 期の遺構と推定される。

2754SB（第 40 図） E 区中央部南東寄りに位置する竪穴建物跡 A 類である。西端部が攪乱により破壊された他は平面プランがよく残存している。2806SB を切る形で検出され、平面形は 6.33 m × 3.31 m の規模を持つ隅丸長方形である。周溝は認められないが、黒褐色極細粒砂と灰黄褐色シルトの班土が床面となり、中央部やや北西寄りの位置に地床炉が確認された。赤変した貼床の中央に小ピットが開き、その内部と周辺に焼土と炭化物が分布する。2754SB に伴わないものも含め柱穴は多数検出されたが、支柱穴を特定することは難しい。出土遺物からみて B2 期と推定される。

2755SB（第 41 図） E 区西部北寄りに所在する竪穴建物跡 D 類である。2419SB の床面で検出され、西側は調査区外に拡がる。平面形は隅角部がやや弧状を描く方形で、南北幅は 4.37 m を測る。黒褐色極細粒砂と灰黄褐色シルトの班土が床面となり、支柱穴は 2788SK や 2838SK が該当するだろう。現状で周溝・火処遺構は認められ

ない。遺構の重複関係からみて B3 期以前と推定される。

2756SB（第 42 図） E 区中央で検出された竪穴建物跡 D 類である。2148SD と 2196SD に切られるが、平面形は 4.92 m × 4.06 m の規模を持つ小判形となる。黒褐色極細粒砂とにぶい黄褐色シルトの班土で整地して床面し、中央部西寄りの位置に赤変した貼床が確認され、地床炉と考えられた。激しく赤変した焼土ブロック上に土師器小形鉢がほぼ正位の状態で出土している。支柱穴は特定し難く、現状で周溝は認められない。出土遺物からみて B3 期と推定される。

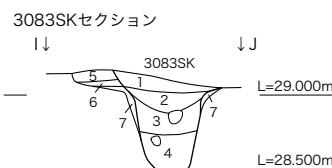
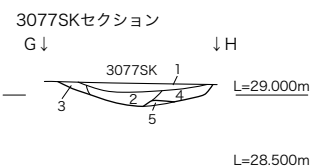
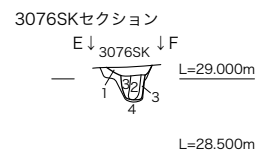
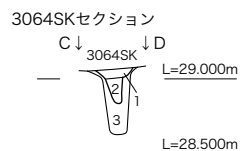
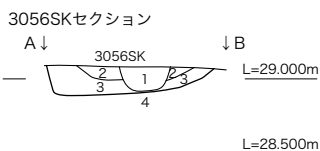
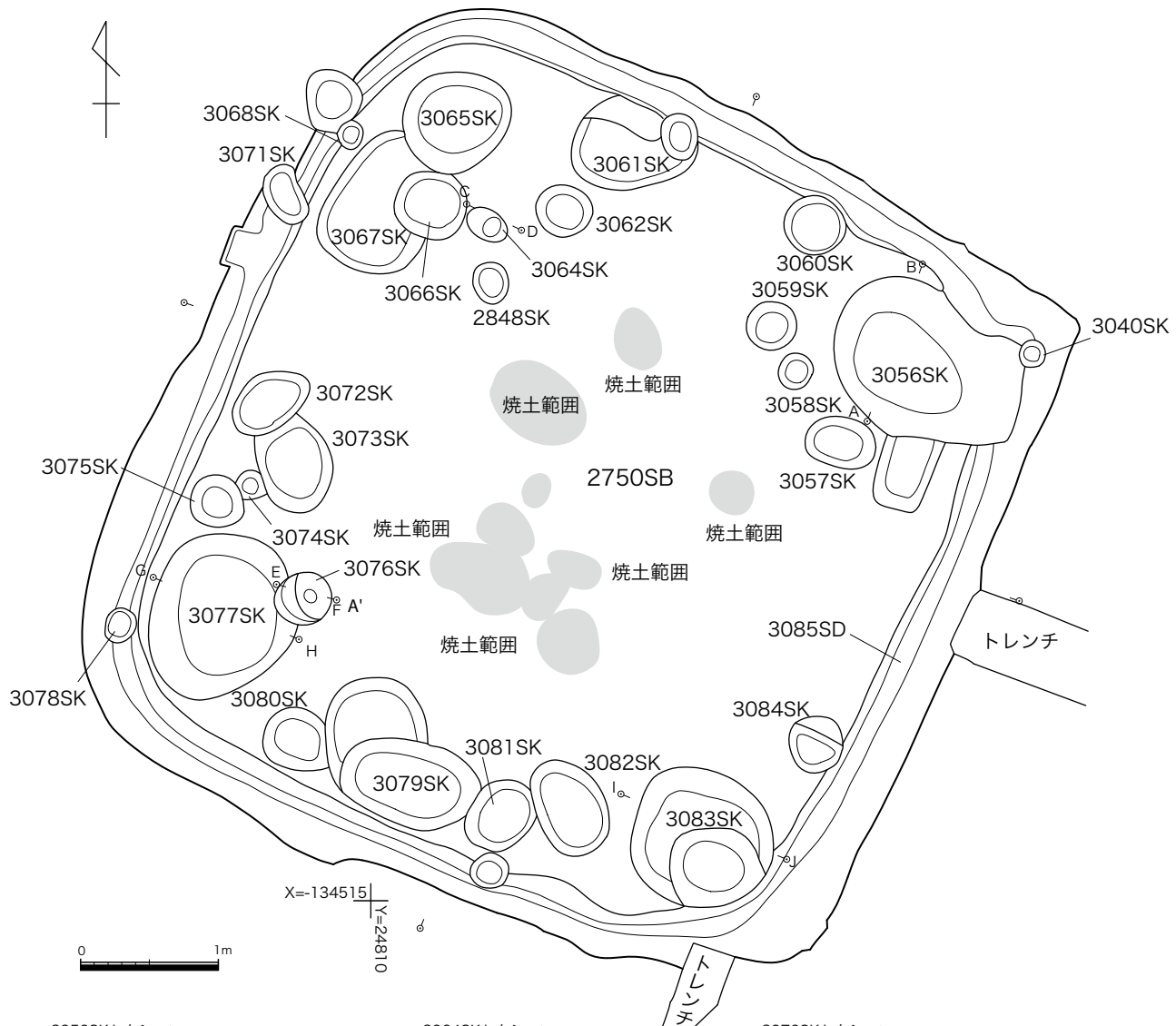
2801SB E 区中央部南西寄りに所在する竪穴建物跡である。2261SB など多くの遺構に切られており、平面プランの確定は困難である。現状で南辺の一部のみが検出された。黒褐色極細粒砂と灰黄褐色シルトの班土が床面となると考えられたが、支柱穴、周溝や火処遺構は確認できていない。建物跡としては疑わしい遺構である。時期も不明。

2804SB（第 43 図） E 区中央部南東寄りに所在する竪穴建物跡 C 類である。2750SB と重複して北辺が不明となっているが、平面形は 4.56 m 以上 × 4.11 m の規模を持つ隅丸方形となる。黒褐色極細粒砂と灰黄褐色シルトの班土により床面が整地されるが、周溝や火処遺構は確認できていない。柱穴は多数検出され支柱穴の特定は難しいが、2983SK・3290SK・3301SK・3332SK を考えておきたい。渥美湖西型小皿が出土したが、これを混入と考えれば、その他の遺物からみて、遺構の時期は C3 期と推測される。

2805SB（第 55 図） E 区中央部で検出された竪穴建物跡 D 類である。3114SB に大きく切られて北東端のみが確認されている。隅角部は弧状となるプランで、周溝や火処遺構は確認されていない。柱穴は多数検出されているが、支柱穴の特定は難しい。出土遺物は B2 期に相当するが、遺構の重複関係からみると B1 期以前に位置づけられる。

2806SB（第 44 図） E 区中央部南東寄りに所

西浦遺跡



3077SKセクション土層説明
 1, 10YR3/2 黒褐色極細粒砂 50%、10YR5/4 にぶい黄褐色粘土 50% 直径0.5~1cm礫含
 2, 10YR4/3 にぶい黄褐色シルト 70%、10YR5/6 黄褐色粘土 30%
 3, 10YR3/2 黒褐色極細粒砂 60%、10YR4/3 にぶい黄褐色シルト 40%
 4, 10YR2/1 黒色シルト 50%、10YR4/3 にぶい黄褐色シルト 50%
 5, 10YR4/3 にぶい黄褐色シルト 70%、10YR5/6 黄褐色粘土 30%

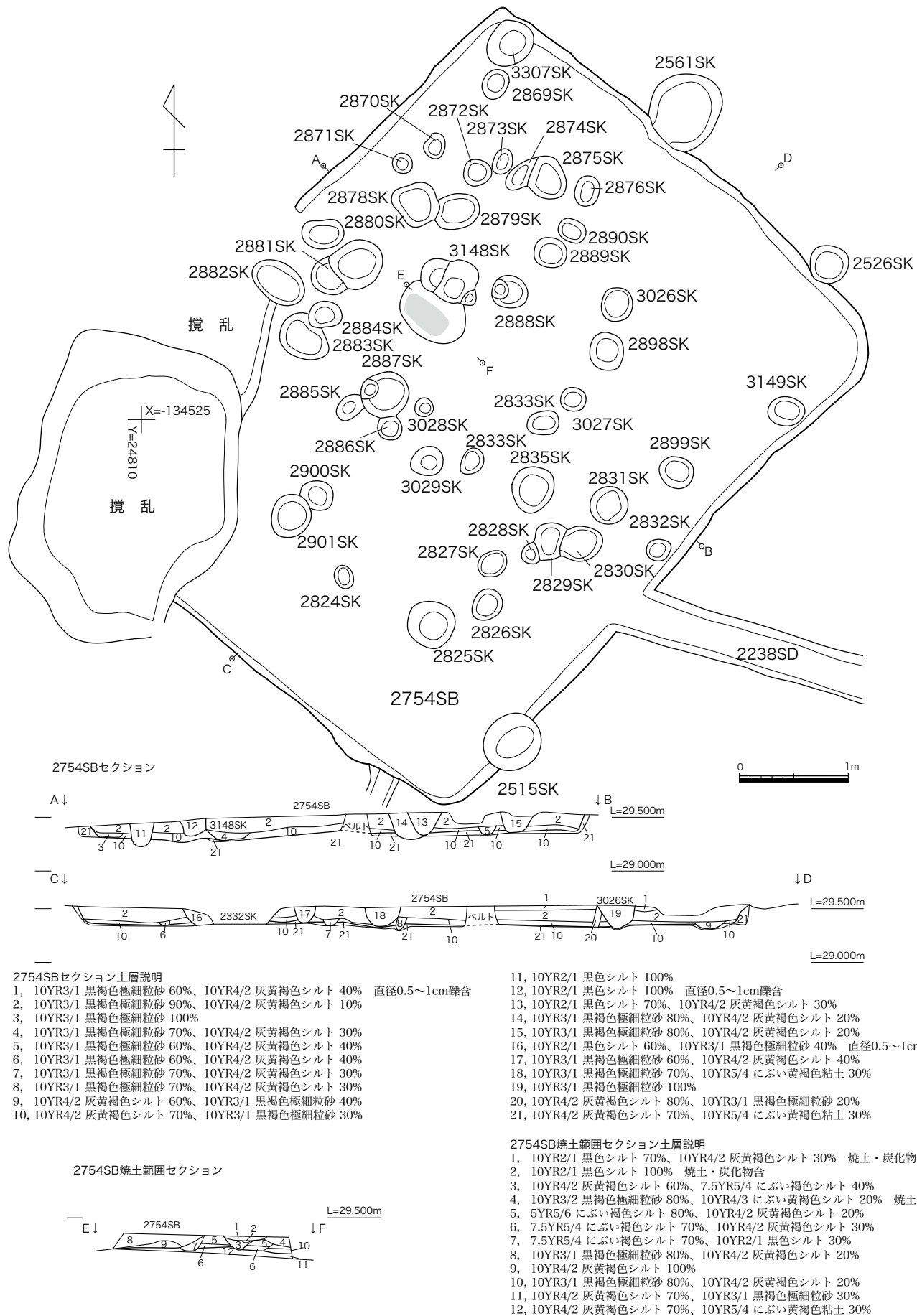
3083SKセクション土層説明
 1, 10YR4/3 にぶい黄褐色シルト 100%
 2, 10YR3/2 黒褐色極細粒砂 60%、10YR4/3 にぶい黄褐色シルト 40%
 3, 10YR3/2 黒褐色極細粒砂 80%、10YR4/3 にぶい黄褐色シルト 20%
 4, 10YR3/2 黒褐色極細粒砂 50%、10YR5/6 黄褐色粘土 50%
 5, 10YR3/2 黒褐色極細粒砂 80%、10YR4/3 にぶい黄褐色シルト 20%
 6, 10YR4/3 にぶい黄褐色シルト 70%、10YR5/6 黄褐色粘土 30%
 7, 10YR5/6 黄褐色粘土 70%、10YR4/3 にぶい黄褐色シルト 30%

3056SKセクション土層説明
 1, 10YR3/2 黒褐色極細粒砂 90%、10YR5/6 黄褐色粘土 10%
 2, 10YR3/2 黒褐色極細粒砂 70%、10YR4/3 にぶい黄褐色シルト 30%
 3, 10YR3/2 黒褐色極細粒砂 60%、10YR5/6 黄褐色粘土 40%
 4, 10YR4/3 にぶい黄褐色シルト 70%、10YR5/6 黄褐色粘土 30%

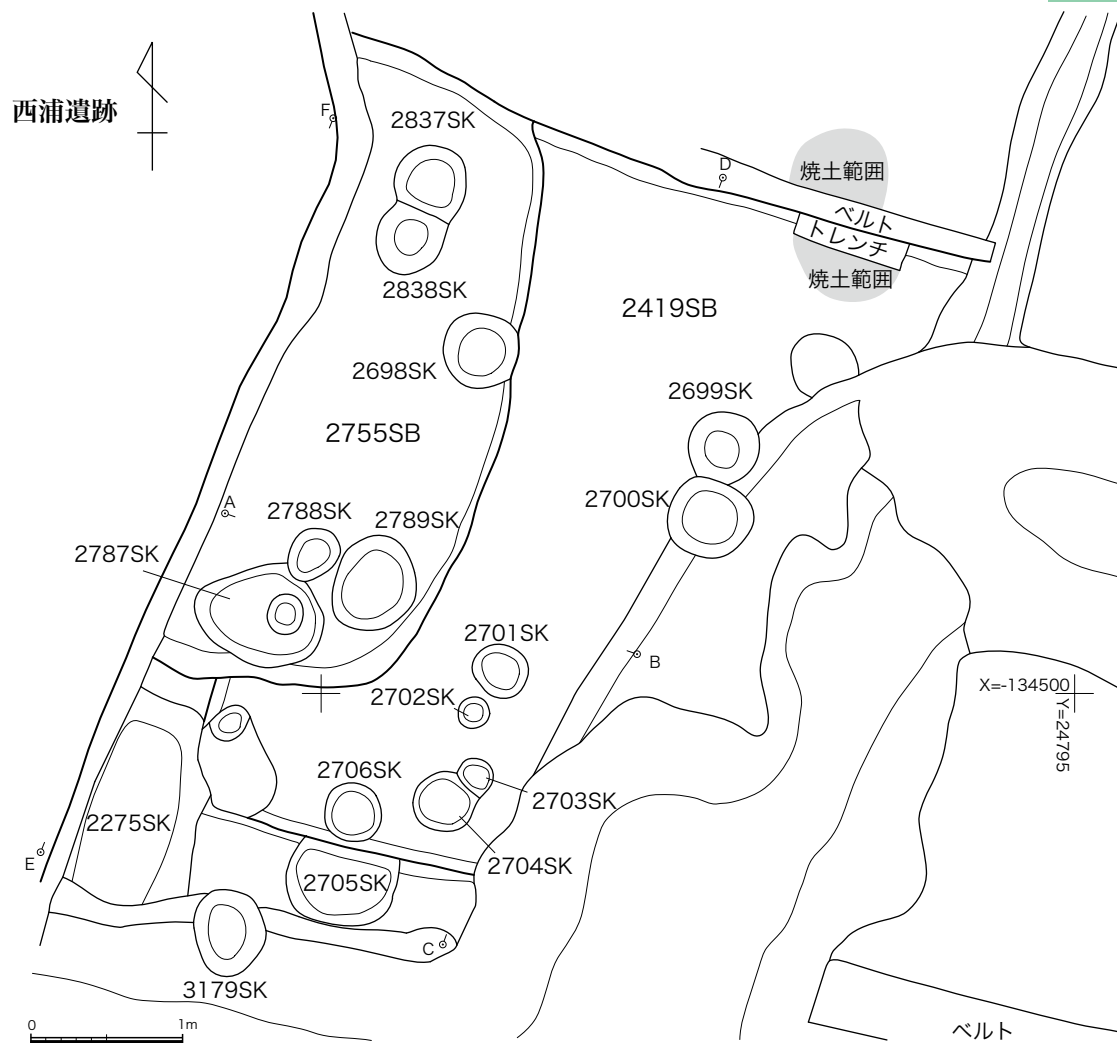
3064SKセクション土層説明
 1, 10YR3/2 黒褐色極細粒砂 60%、10YR4/3 にぶい黄褐色シルト 40%
 2, 10YR2/1 黒色シルト 80%、10YR5/6 黄褐色粘土 20%
 3, 10YR4/3 にぶい黄褐色シルト 70%、10YR5/6 黄褐色粘土 30%

3076SKセクション土層説明
 1, 10YR3/2 黒褐色極細粒砂 80%、10YR4/3 にぶい黄褐色シルト 20% 炭化物含
 2, 10YR3/2 黒褐色極細粒砂 100%
 3, 10YR3/2 黒褐色極細粒砂 60%、10YR4/3 にぶい黄褐色シルト 40%
 4, 10YR4/3 にぶい黄褐色シルト 70%、10YR5/6 黄褐色粘土 30%

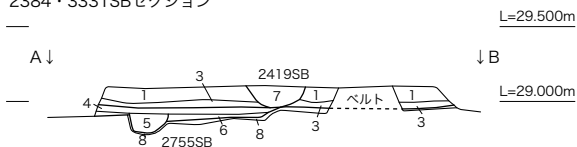
第 39 図 竪穴建物跡 2750SB 遺構図 (s=1:50)



第 40 図 竪穴建物跡 2754SB 遺構図 (s=1:50)

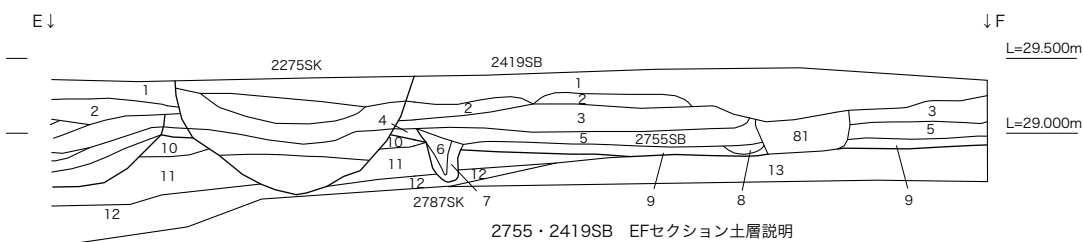
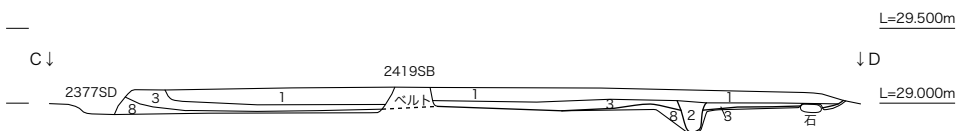


2384・3331SBセクション



2755・2419SB AB・CDセクション土層説明

- 1, 10YR3/2 黒褐色極細粒砂 80%、10YR4/3 にぶい黄褐色シルト 20% 直径0.5~1cm礫含
- 2, 10YR3/2 黒褐色極細粒砂 100%
- 3, 10YR3/2 黒褐色極細粒砂 60%、10YR4/3 にぶい黄褐色シルト 40% 直径0.5~1cm礫含
- 4, 10YR3/2 黒褐色極細粒砂 80%、10YR4/3 にぶい黄褐色シルト 20%
- 5, 10YR3/2 黒褐色極細粒砂 100%
- 6, 10YR3/2 黒褐色極細粒砂 60%、10YR4/3 にぶい黄褐色シルト 40% 直径0.5~1cm礫含
- 7, 10YR3/2 黒褐色極細粒砂 60%、10YR2/1 黒色シルト 40%
- 8, 10YR4/3 にぶい黄褐色シルト 70%、10YR5/6 黄褐色粘土 30% 直径1~2cm角礫含

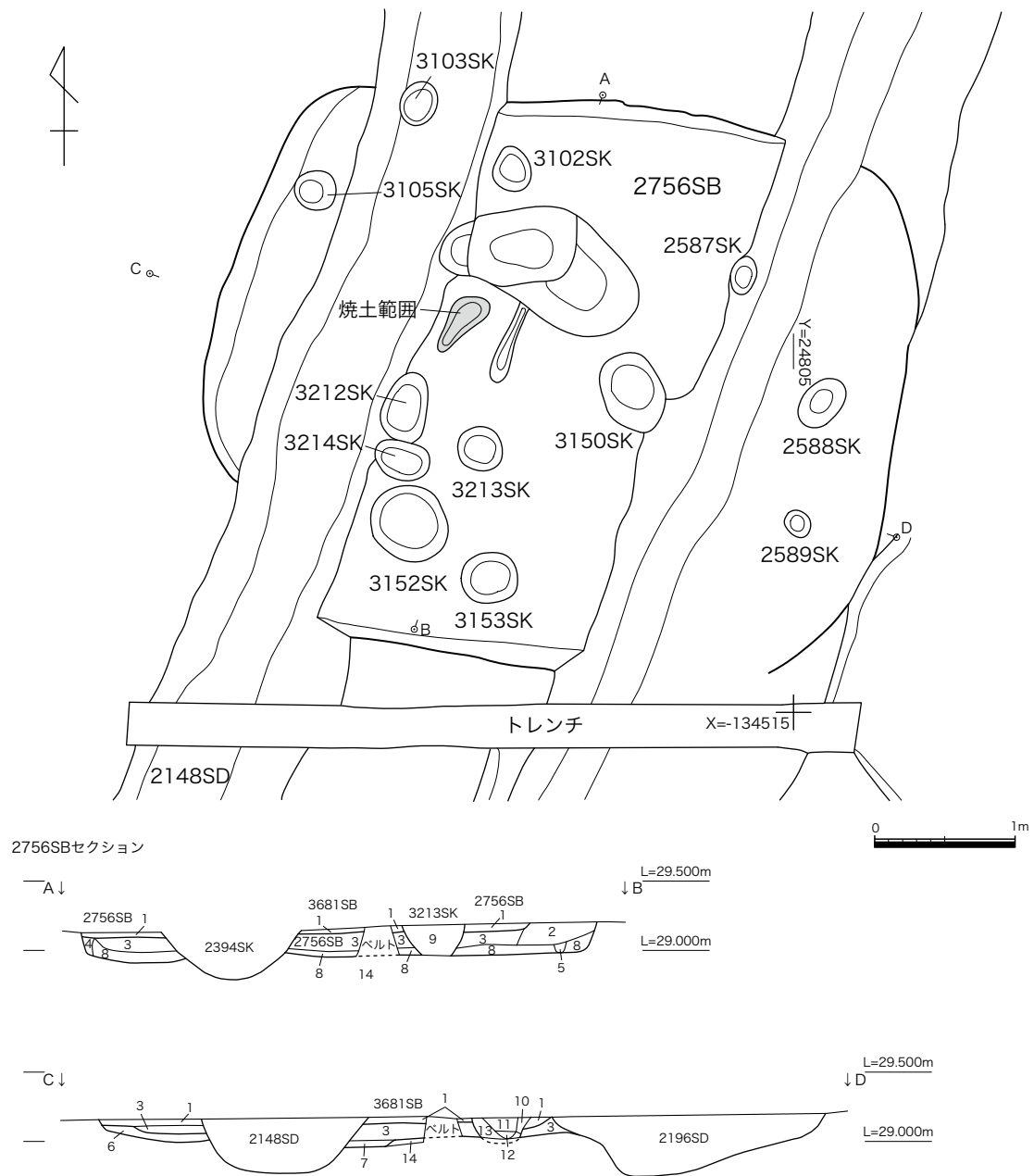


2755・2419SB EFセクション土層説明

- 1, 10YR4/1 褐灰色細粒砂 70%、10YR4/2 灰黄褐色シルト 30% 直径1~3cm礫含
- 2, 10YR4/1 褐灰色シルト 50%、10YR2/3 黒褐色極細粒砂 50% 直径0.5~1cm礫含
- 3, 10YR2/3 黒褐色極細粒砂 100%
- 4, 10YR4/2 灰黄褐色シルト 70%、10YR3/1 黒褐色極細粒砂 30%
- 5, 10YR3/1 黒褐色極細粒砂 80%、10YR4/2 灰黄褐色シルト 20% 直径0.5~1cm礫含
- 6, 10YR3/1 黒褐色極細粒砂 100%
- 7, 10YR3/1 黒褐色極細粒砂 60%、10YR4/2 灰黄褐色シルト 40%
- 8, 5YR5/6 明赤褐色粘土 80%、7.5YR5/4 にぶい褐色シルト 20%
- 9, 10YR4/2 灰黄褐色シルト 70%、10YR3/1 黒褐色極細粒砂 30%
- 10, 10YR4/2 灰黄褐色シルト 90%、10YR3/1 黒褐色極細粒砂 10%
- 11, 10YR5/4 にぶい黄褐色粘土 70%、10YR5/6 黄褐色粘土 30%
- 12, 10YR5/1 褐灰色シルト 70%、10YR5/4 にぶい黄褐色粘土 30%
- 13, 10YR5/1 褐灰色シルト 70%、10YR5/4 にぶい黄褐色粘土 30% 直径1~3cm礫含

第 41 図 竪穴建物跡 2755SB, 2419SB 遺構図 (s=1:50)

遺構

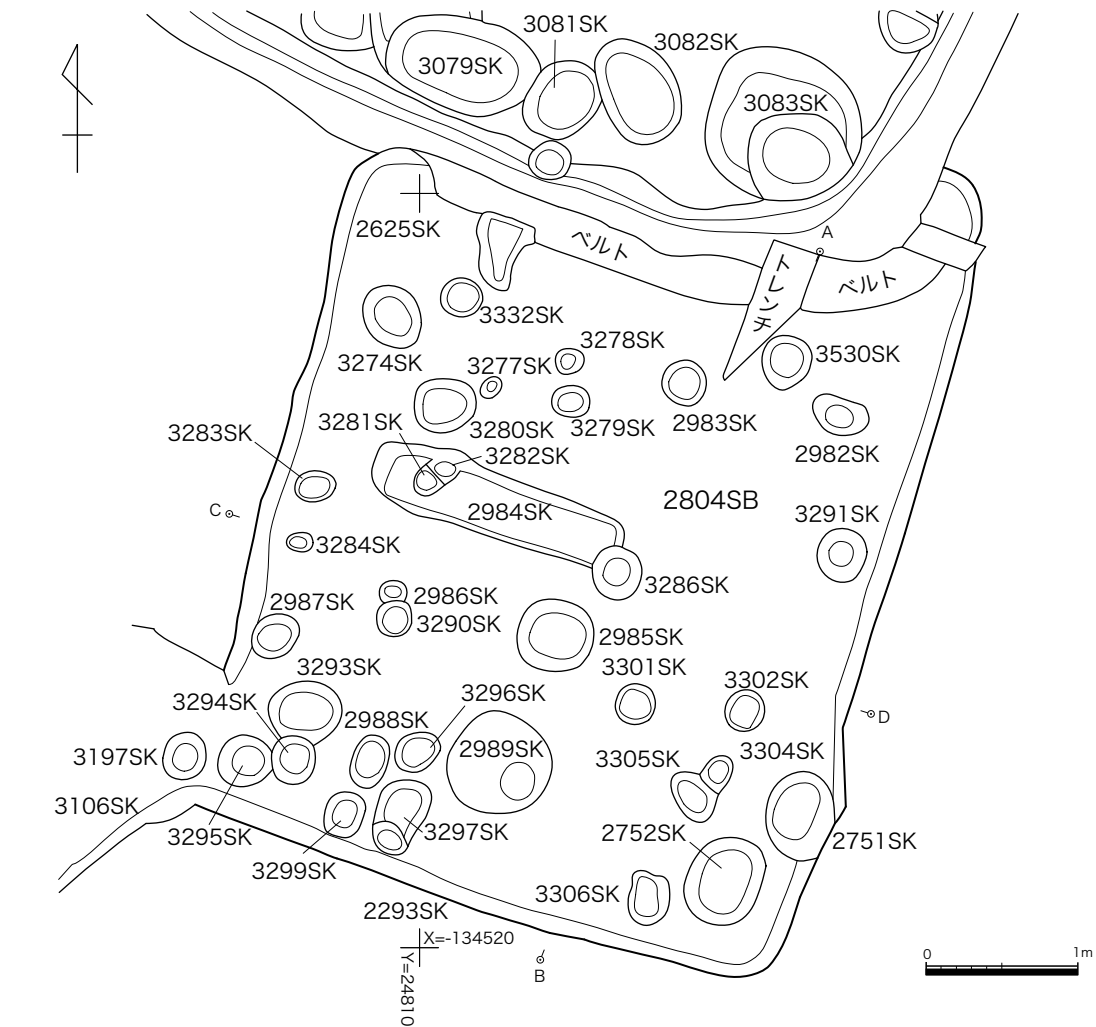


2756SBセクション土層説明

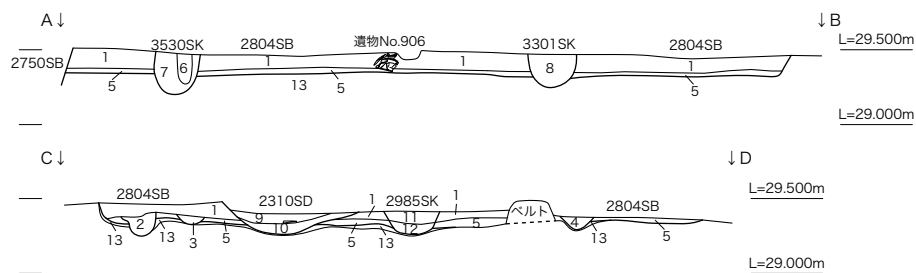
- 1, 10YR3/2 黒褐色極細粒砂 60%、10YR4/3 にぶい黄褐色シルト 40%
- 2, 10YR3/2 黒褐色極細粒砂 100%
- 3, 10YR3/2 黒褐色極細粒砂 80%、10YR4/3 にぶい黄褐色シルト 20% 直径0.5~1cm礫含
- 4, 10YR3/2 黒褐色極細粒砂 100%
- 5, 10YR4/3 にぶい黄褐色シルト 60%、10YR5/6 黄褐色粘土 40%
- 6, 10YR4/3 にぶい黄褐色シルト 50%、10YR3/2 黒褐色極細粒砂 50%
- 7, 10YR3/2 黒褐色極細粒砂 60%、10YR4/3 にぶい黄褐色シルト 40%
- 8, 10YR4/3 にぶい黄褐色シルト 70%、10YR3/2 黒褐色極細粒砂 30%
- 9, 10YR4/3 にぶい黄褐色シルト 100%
- 10, 10YR4/3 にぶい黄褐色シルト 60%、10YR3/2 黒褐色極細粒砂 40%
- 11, 10YR3/2 黒褐色極細粒砂 50%、10YR4/3 にぶい黄褐色シルト 50%
- 12, 10YR3/2 黒褐色極細粒砂 70%、10YR4/3 にぶい黄褐色シルト 30%
- 13, 10YR4/3 にぶい黄褐色シルト 70%、10YR5/6 黄褐色粘土 30%
- 14, 10YR5/6 黄褐色粘土 70%、10YR4/3 にぶい黄褐色シルト 20%

第 42 図 竪穴建物跡 2756SB 遺構図 (s=1:50)

西浦遺跡



2804SBセクション



2804SBセクション土層説明

- 1, 10YR3/1 黒褐色極細粒砂 80%、10YR4/2 灰黄褐色シルト 20%
- 2, 10YR4/2 灰黄褐色シルト 100%
- 3, 10YR3/1 黒褐色極細粒砂 60%、10YR4/2 灰黄褐色シルト 40%
- 4, 10YR3/1 黒褐色極細粒砂 100%
- 5, 10YR4/2 灰黄褐色シルト 70%、10YR3/1 黒褐色極細粒砂 30%
- 6, 10YR2/1 黒色シルト 100%
- 7, 10YR2/1 黒色シルト 80%、10YR4/2 灰黄褐色シルト 20%
- 8, 10YR3/1 黒褐色極細粒砂 100%
- 9, 10YR2/1 黒色シルト 50%、10YR4/2 灰黄褐色シルト 50% 直径0.5~1cm礫含
- 10, 10YR2/1 黒色シルト 70%、10YR4/2 灰黄褐色シルト 30%
- 11, 10YR3/1 黒褐色極細粒砂 60%、10YR4/2 灰黄褐色シルト 40% 直径0.5~1cm礫含
- 12, 10YR4/2 灰黄褐色シルト 80%、10YR5/4 にぶい黄褐色粘土 20%
- 13, 10YR4/2 灰黄褐色シルト 70%、10YR5/4 にぶい黄褐色粘土 30% 直径0.5~1cm礫含

第 43 図 竪穴建物跡 2804SB 遺構図 (s=1:50)

西浦遺跡

在する竪穴建物跡である。2754SB・2375SK に切られ南隅部のみ確認され、全形を知り得ない。2807SB を切る。黒褐色極細粒砂と灰黄褐色シルトの班土により床面が整地されるが、周溝や火処遺構は確認できていない。柱穴は多数検出され主柱穴の特定は難しい。出土遺物からみて、B2 期(前期)と推定される。

2807SB (第 45 図) E 区東端部中央で確認された竪穴建物跡である。2663SB・2806SB などに切られ南端部のみ検出された。東西幅は 4.74 m を測る隅丸方形の平面プランで、現状ではやや平行四辺形状に歪になっている。周溝や火処遺構は確認されず、主柱穴の特定も難しい。遺構の重複関係からみて、B1～2 期と推定される。

2851SB (第 46 図) E 区北東部中央寄りに所在する竪穴建物跡 C 類である。南端と北端がそれぞれ 2078SD と 2377SD に切られ不明となっているが、東西幅は 5.44 m の規模を持つ。黒褐色極細粒砂と灰黄褐色シルトの班土により床面が整地されるが、周溝や火処遺構は確認できていない。主柱穴は 3042SK・3046SK・3050SK を考えておきたい。出土遺物からみて、時期は B3 期に属する。

2852SB E 区北東部中央付近に位置する竪穴建物跡で、2377SD と 2750SB に大きく切られ、全形は不明となっている。黒褐色極細粒砂とにぶい黄褐色シルトの班土により床面が整地されるが、周溝や火処遺構は確認できていない。残存する部分が少なく周囲への遺構の広がりもよく把握できないことから、疑わしい建物跡の一つである。出土遺物からみると、時期は B2 期に属する。

2853SB (第 47 図) E 区東部中央付近で検出された 4.85 m × 4.16 m の規模を持つ竪穴建物跡である。2976SD と 2662SB に切られ、深さは 22 cm を測る。黒褐色極細粒砂と灰黄褐色シルトの班土の貼床あり、やや北寄りの部分には地床炉が存在する。地床炉は焼土が楕円形に拡がり南端部で土器片が出土している。周溝は確認できていないが、主柱穴は 2861SK・2979SK・3330SK

を考えておく。出土遺物からみると、時期は B3 期に属する。

2854SB (第 48 図) E 区東端部中央に存在する 5.12 m × 4.93 m の規模を持つ竪穴建物跡 A 類である。隅角部はあまり丸みを持たない。2238SD と 2662SB・2664SB・2665SB に切られている。黒褐色極細粒砂と灰黄褐色シルトの班土の貼床あり、やや南東寄りの部分には地床炉が存在する。地床炉は楕円形に拡がる焼土が 2 個重複する形状で検出され、中央に浅い凹部が存在する。周溝は確認されず、主柱穴も特定することが難しい状況である。重複関係からみて B2 期に属するだろう。

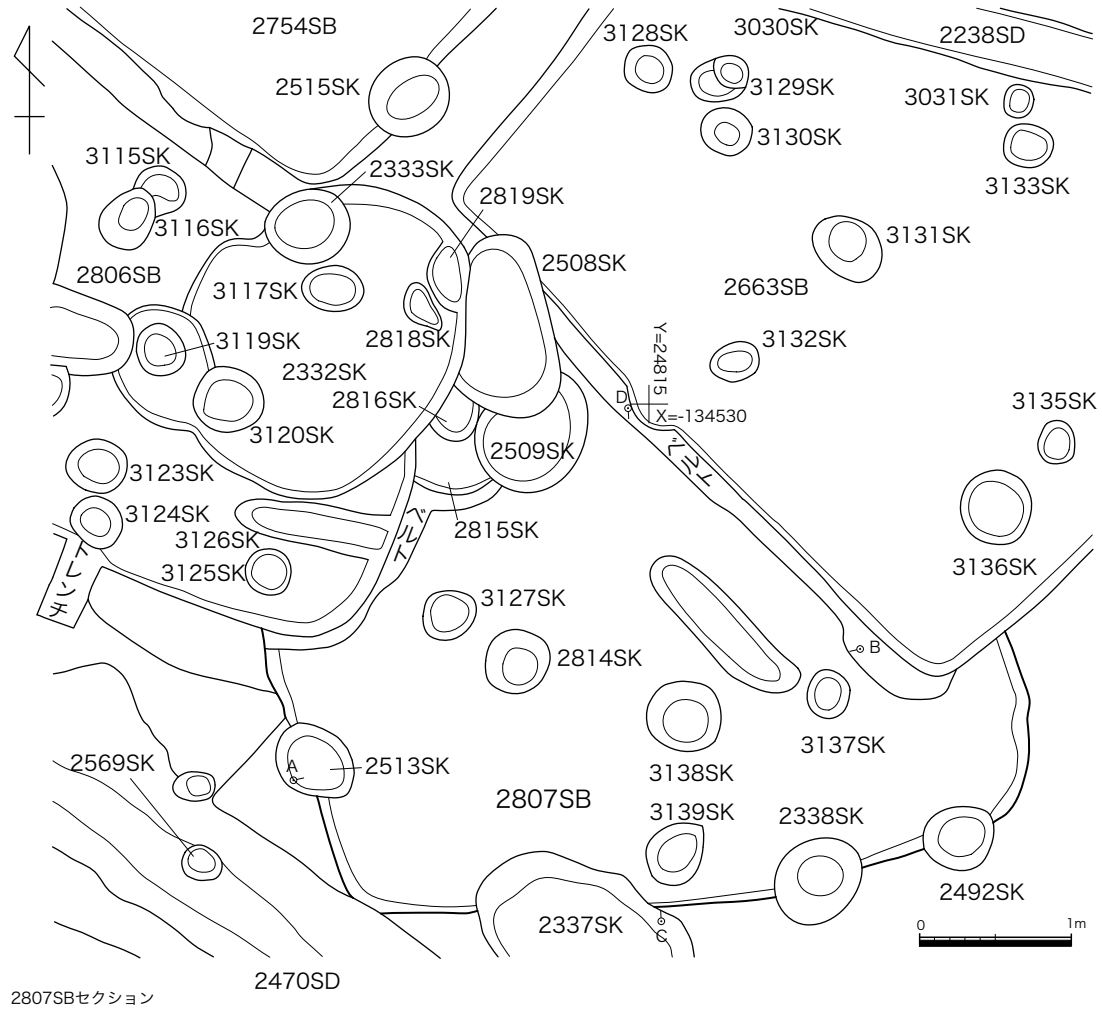
2902SB (第 49 図) E 区北端部東寄りに所在する竪穴建物跡で、2903SB を切る。この地点の地山は北に向かい緩やかに傾斜しており、その影響で北部は遺存していない。検出の段階で黒褐色極細粒砂とにぶい黄褐色シルトの班土の貼床面が露出した。2212SK 付近に地床炉が存在する。なお、南東辺中央付近に存在する焼土は 2903SB に属する地床炉と考えておきたい。周溝と主柱穴は検出できなかった。時期は不明だが、B2 期以降だろう。

2903SB (第 49 図) E 区北端部東寄りに所在する竪穴建物跡である。南北に細長い平面プランが想定されるが、2745SB・2902SB に切られて詳細は不明である。また、北へ緩やかに傾斜する地形で北部も遺存していない。西端部に近い部分に地床炉が存在する。周溝と主柱穴は検出できなかった。出土遺物からみて B2 期に属する。

2904SB E 区東端部北寄りで確認された竪穴建物跡で、西側は 2745SB に切られ、東側は調査区外へ拡がる。南北幅は 5.43 m を測るが、全形は不明である。中央部に地床炉が存在するが、周溝と主柱穴は検出できなかった。遺構の切り合いからみて、B 期に属すると思われるが、詳細は不明である。

2906SB (第 50 図) E 区南西部にある竪穴建物跡で、3146SD に大きく切られて詳細は不明で

遺 構



2807SBセクション土層説明

- 1, 10YR3/1 黒褐色極細粒砂 80%、10YR4/2 灰黄褐色シルト 20% 直径0.5~1cm礫含
- 2, 10YR4/2 灰黄褐色シルト 60%、10YR3/1 黒褐色極細粒砂 40%
- 3, 10YR2/1 黒色シルト 70%、10YR3/1 黒褐色極細粒砂 30% 直径0.5~1cm礫含
- 4, 10YR4/2 灰黄褐色シルト 50%、10YR3/1 黒褐色極細粒砂 50%
- 5, 10YR4/2 灰黄褐色シルト 100%
- 6, 10YR2/1 黒色シルト 70%、10YR3/1 黒褐色極細粒砂 30% 直径0.5~1cm礫含
- 7, 10YR3/1 黒褐色極細粒砂 60%、10YR4/2 灰黄褐色シルト 40% 直径0.5~1cm礫含
- 8, 10YR3/1 黒褐色極細粒砂 100%
- 9, 10YR4/2 灰黄褐色シルト 70%、10YR5/4 にぶい黄褐色粘土 30%

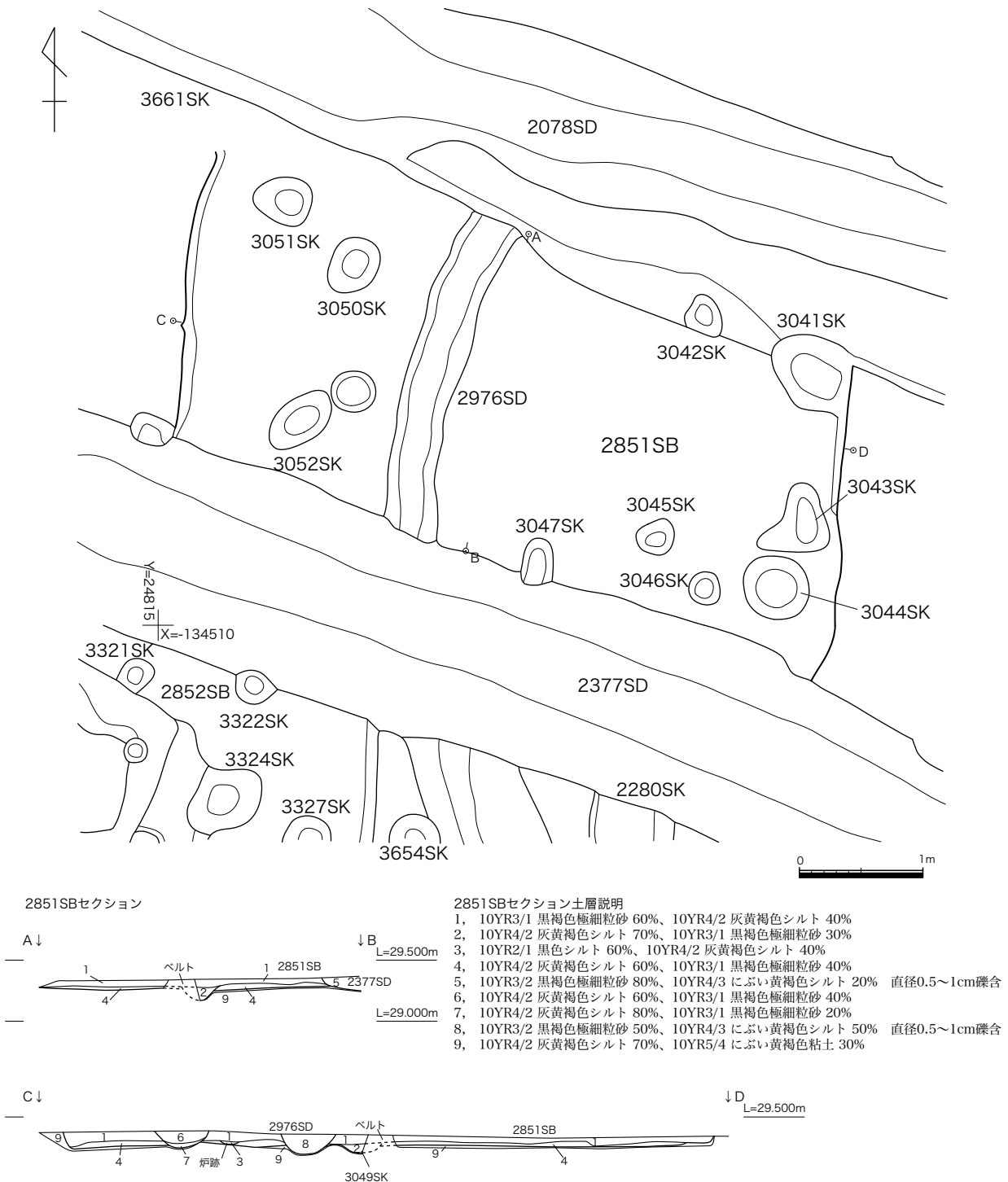
第 45 図 竪穴建物跡 2807SB 遺構図 (s=1:50)

西浦遺跡

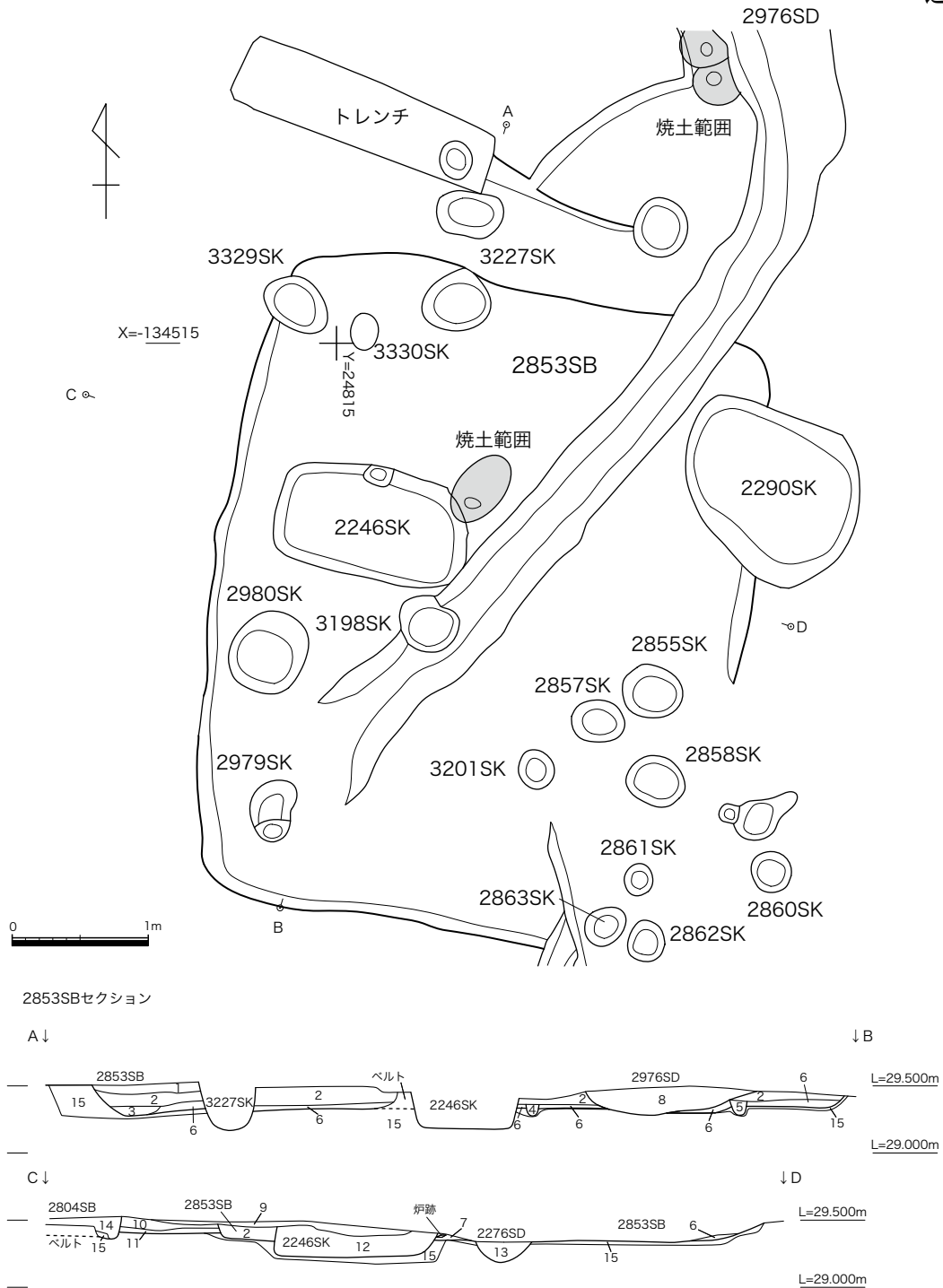
ある。北西辺中央付近、南西辺南部付近、東隅部が遺存しているに過ぎない。周溝は存在しないと見られるが、火処遺構と主柱穴は不明なままである。出土遺物はB3期に属する。

2907SB（第51図） E区南西部で検出された

竪穴建物跡で、2148SDに大きく切られ、南西隅は調査区外に拡がる。南辺は西壁土層断面の観察である程度は特定できた。平面形は4.60m×4.58mの隅丸方形を呈すると見られ、黒褐色極細粒砂と灰黄褐色シルトの班土を貼床とする。周



遺 構

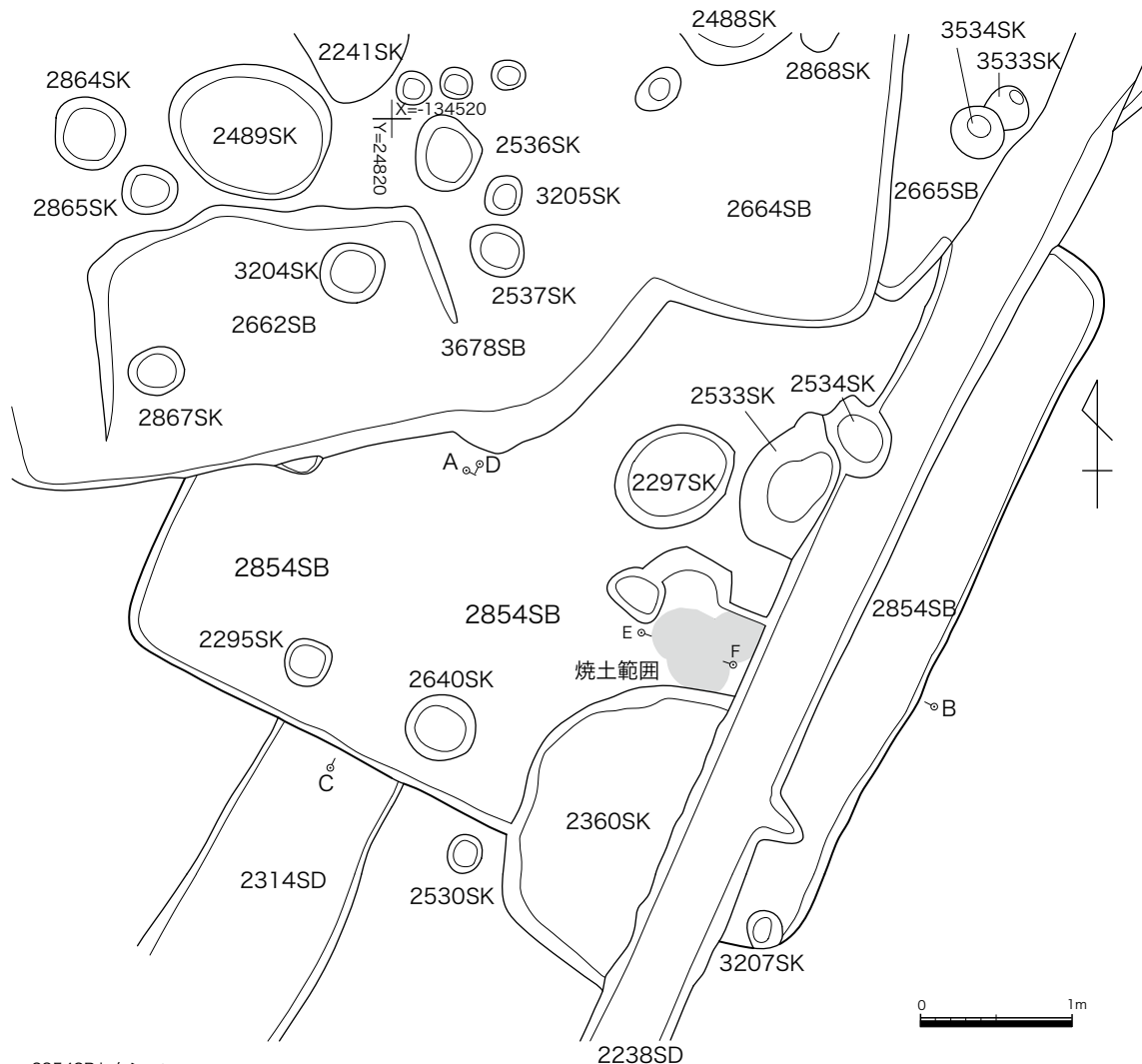


2853SBセクション土層説明

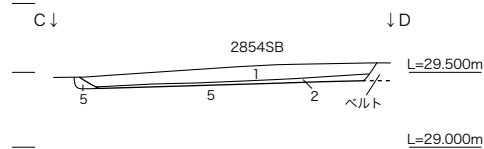
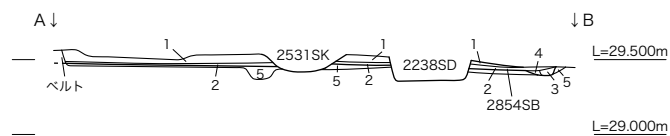
- 1, 10YR3/1 黒褐色極細粒砂 70%、10YR2/1 黒色シルト 30%
- 2, 10YR3/1 黒褐色極細粒砂 80%、10YR4/2 灰黄褐色シルト 20% 直径0.5~1cm礫含
- 3, 10YR3/1 黒褐色極細粒砂 90%、10YR4/2 灰黄褐色シルト 10%
- 4, 10YR3/1 黒褐色極細粒砂 60%、10YR4/2 灰黄褐色シルト 40%
- 5, 10YR2/1 黒色シルト 100%
- 6, 10YR4/2 灰黄褐色シルト 60%、10YR3/1 黒褐色極細粒砂 40% 直径0.5~1cm礫含
- 7, 10YR4/2 灰黄褐色シルト 60%、10YR3/1 黒褐色極細粒砂 40% 焼土含
- 8, 10YR2/1 黒色シルト 60%、10YR3/2 黒褐色極細粒砂 40%
- 9, 10YR3/1 黒褐色極細粒砂 80%、10YR2/1 黒色シルト 20%
- 10, 10YR3/1 黒褐色極細粒砂 60%、10YR4/2 灰黄褐色シルト 40%
- 11, 10YR4/2 灰黄褐色シルト 70%、10YR3/1 黒褐色極細粒砂 30%
- 12, 10YR3/2 黒褐色極細粒砂 60%、10YR4/3 にぶい黄褐色シルト 40% 直径0.5~1cm礫含
- 13, 10YR2/1 黒色シルト 60%、10YR3/1 黒褐色極細粒砂 40%
- 14, 10YR3/1 黒褐色極細粒砂 80%、10YR4/2 灰黄褐色シルト 20%
- 15, 10YR4/2 灰黄褐色シルト 70%、10YR5/4 にぶい黄褐色粘土 30% 直径0.5~1cm礫含

第 47 図 竪穴建物跡 2853SB 遺構図 (s=1:50)

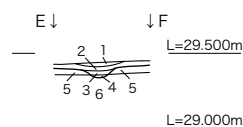
西浦遺跡



2854SBセクション



2854SB地床炉セクション



2854SB地床炉セクション土層説明

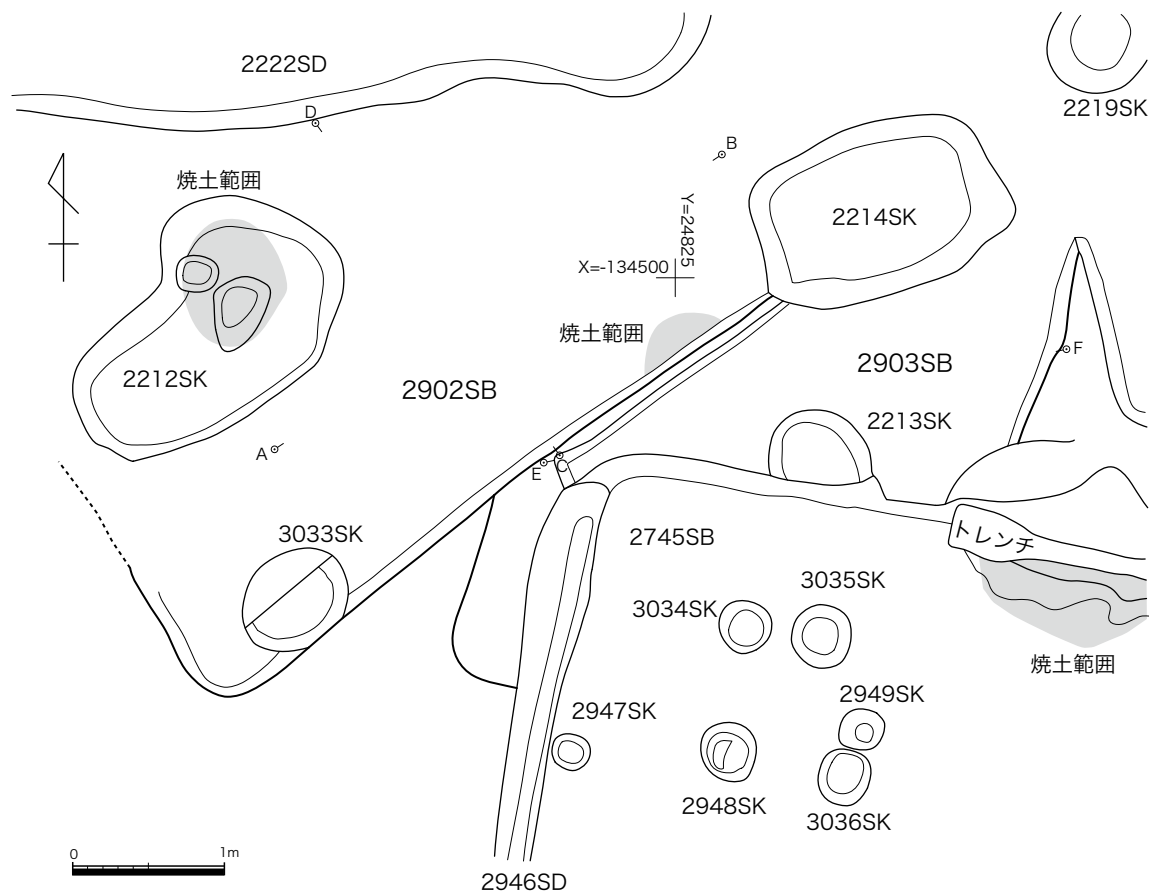
- 1, 10YR3/1 黒褐色極細粒砂 80%、10YR2/1 黒色シルト 20%
- 2, 10YR3/1 黒褐色極細粒砂 70%、5YR5/6 明赤褐色粘土 30% 焼土含
- 3, 10YR2/1 黒色シルト 50%、5YR5/6 明赤褐色粘土 50%
- 4, 10YR2/1 黒色シルト 80%、10YR4/2 灰黄褐色シルト 20% 焼土含
- 5, 10YR3/1 黒褐色極細粒砂 80%、10YR4/2 灰黄褐色シルト 20%
- 6, 10YR4/2 灰黄褐色シルト 70%、10YR5/4 にぶい黄褐色粘土 30%

2854SBセクション土層説明

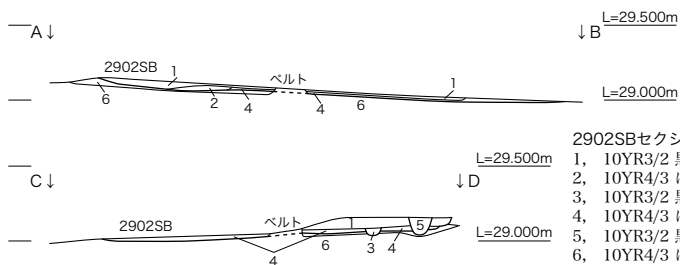
- 1, 10YR3/1 黒褐色極細粒砂 60%、10YR4/2 灰黄褐色シルト 40%
- 2, 10YR3/1 黒褐色極細粒砂 80%、10YR4/2 灰黄褐色シルト 20%
- 3, 10YR2/1 黒色シルト 100%
- 4, 10YR4/2 灰黄褐色シルト 100%
- 5, 10YR4/2 灰黄褐色シルト 70%、10YR5/4 にぶい黄褐色粘土 30%

第 48 図 竪穴建物跡 2854SB 遺構図 (s=1:50)

遺 構



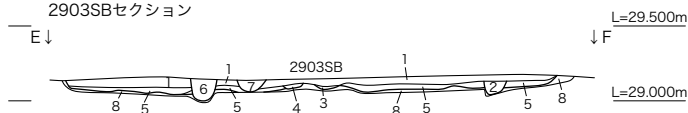
2902SBセクション



2902SBセクション土層説明

- 1, 10YR3/2 黒褐色極細粒砂 60%、10YR4/3 にぶい黄褐色シルト 40% 直径0.5~1cm礫含
- 2, 10YR4/3 にぶい黄褐色シルト 70%、7.5YR5/4 にぶい褐色シルト 30% 焼土含
- 3, 10YR3/2 黒褐色極細粒砂 100%
- 4, 10YR4/3 にぶい黄褐色シルト 70%、10YR3/2 黒褐色極細粒砂 30%
- 5, 10YR3/2 黒褐色極細粒砂 80%、10YR4/3 にぶい黄褐色シルト 20%
- 6, 10YR4/3 にぶい黄褐色シルト 70%、10YR5/6 黄褐色粘土 30% 直径1~2cm礫含

2903SBセクション

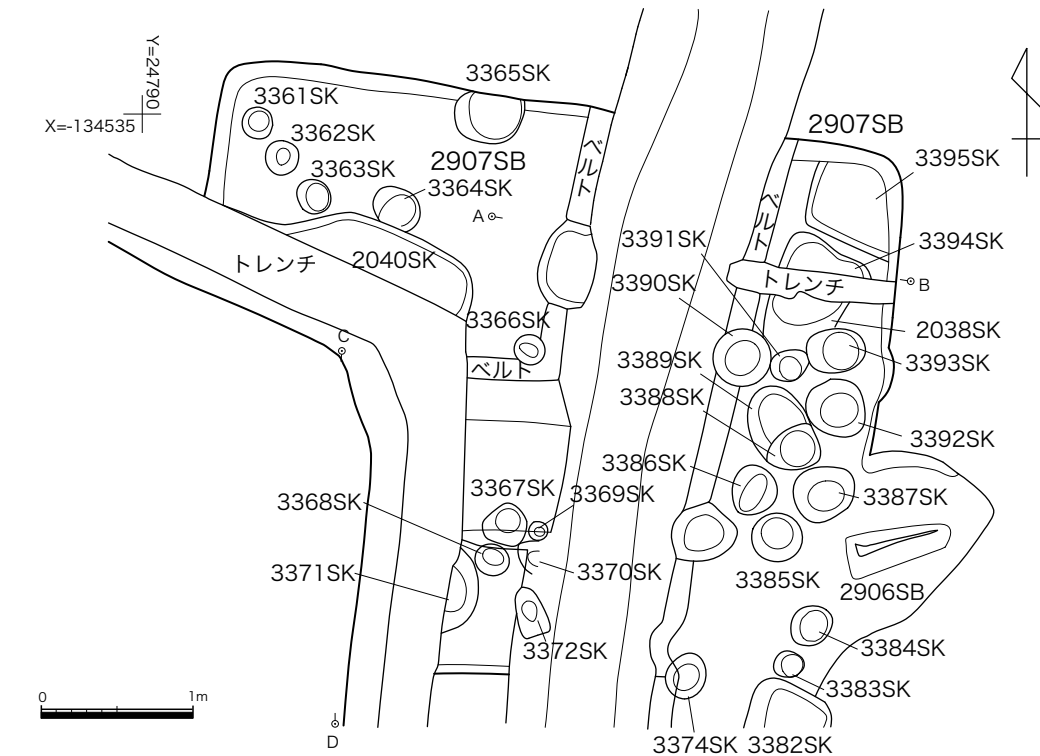


2903SBセクション土層説明

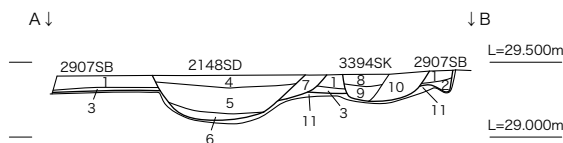
- 1, 10YR3/2 黒褐色極細粒砂 60%、10YR4/3 にぶい黄褐色シルト 40% 直径0.5~1cm礫含
- 2, 10YR3/2 黒褐色極細粒砂 100%
- 3, 10YR2/1 黒色シルト 100%
- 4, 10YR4/3 にぶい黄褐色シルト 70%、7.5YR5/4 にぶい褐色シルト 30% 焼土含
- 5, 10YR4/3 にぶい黄褐色シルト 70%、10YR3/2 黒褐色極細粒砂 30%
- 6, 10YR3/2 黒褐色極細粒砂 80%、10YR4/3 にぶい黄褐色シルト 20% 直径0.5~1cm礫含
- 7, 10YR3/2 黒褐色極細粒砂 100%
- 8, 10YR4/3 にぶい黄褐色シルト 70%、10YR5/6 黄褐色粘土 30% 直径1~2cm礫含

第 49 図 竪穴建物跡 2902SB, 2903SB 遺構図 (s=1:50)

遺 構

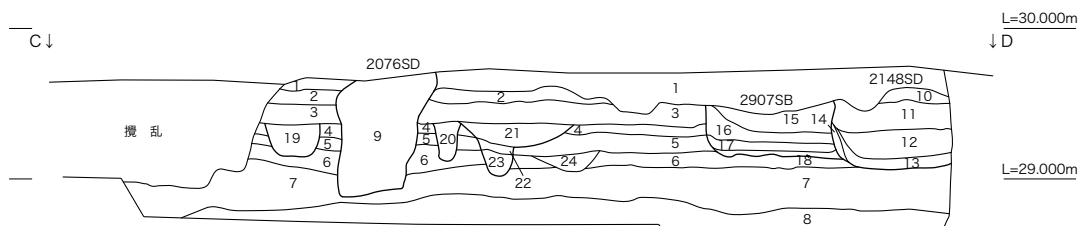


2907SBセクション



2907SB ABセクション土層説明

- 1, 10YR3/1 黒褐色極細粒砂 60%、10YR4/2 灰黄褐色シルト 40% 直径0.5~1cm礫含
- 2, 10YR3/1 黒褐色極細粒砂 100%
- 3, 10YR4/2 灰黄褐色シルト 70%、10YR3/1 黒褐色極細粒砂 30%
- 4, 10YR3/1 黒褐色極細粒砂 50%、10YR4/2 灰黄褐色シルト 50% 直径0.5~1cm礫含
- 5, 10YR2/1 黒色シルト 60%、10YR3/1 黒褐色極細粒砂 40% 直径0.5~1cm礫含
- 6, 10YR3/1 黒褐色極細粒砂 80%、10YR4/2 灰黄褐色シルト 20%
- 7, 10YR3/1 黒褐色極細粒砂 60%、10YR4/2 灰黄褐色シルト 40%
- 8, 10YR3/1 黒褐色極細粒砂 80%、10YR4/2 灰黄褐色シルト 20%
- 9, 10YR3/1 黒褐色極細粒砂 60%、10YR4/2 灰黄褐色シルト 40%
- 10, 10YR3/1 黒褐色極細粒砂 100%
- 11, 10YR4/2 灰黄褐色シルト 70%、10YR5/4 にぶい黄褐色粘土 30% 直径0.5~1cm礫含



2907SB CDセクション土層説明

- | | |
|---|---|
| 1, 10YR4/1 褐灰色細粒砂 70%、10YR4/2 灰黄褐色シルト 30% 直径1~3cm礫含 | 13, 10YR3/1 黒褐色極細粒砂 80%、10YR2/1 黒褐色シルト 20% |
| 2, 10YR4/1 褐灰色シルト 50%、10YR2/3 黒褐色極細粒砂 50% 直径0.5~1cm礫含 | 14, 10YR3/1 黒褐色極細粒砂 100% |
| 3, 10YR2/3 黒褐色極細粒砂 100% | 15, 10YR3/1 黒褐色極細粒砂 80%、10YR2/1 黒褐色シルト 20% |
| 4, 10YR2/3 黒褐色極細粒砂 70%、10YR4/2 灰黄褐色シルト 30% | 16, 10YR3/1 黒褐色極細粒砂 60%、10YR2/1 黒褐色シルト 40% |
| 5, 10YR2/3 黒褐色極細粒砂 50%、10YR4/2 灰黄褐色シルト 50% | 17, 10YR3/1 黒褐色極細粒砂 80%、10YR4/2 灰黄褐色シルト 20% |
| 6, 10YR4/2 灰黄褐色シルト 90%、10YR3/1 黒褐色極細粒砂 10% | 18, 10YR4/2 灰黄褐色シルト 70%、10YR3/1 黒褐色極細粒砂 30% |
| 7, 10YR5/2 灰黄褐色シルト 70%、10YR5/4 にぶい黄褐色粘土 30% | 19, 10YR3/1 黒褐色極細粒砂 80%、10YR2/1 黒褐色シルト 20% |
| 8, 10YR5/2 灰黄褐色シルト 70%、10YR5/4 にぶい黄褐色粘土 30% 直径1~3cm礫含 | 20, 10YR3/1 黒褐色極細粒砂 100% |
| 9, 10YR2/2 黒褐色極細粒砂 100% 直径1~3cm礫含 | 21, 10YR3/1 黒褐色極細粒砂 80%、10YR2/1 黒褐色シルト 20% |
| 10, 10YR4/1 褐灰色シルト 50%、10YR3/1 黒褐色極細粒砂 50% | 22, 10YR3/1 黒褐色極細粒砂 80%、10YR4/2 灰黄褐色シルト 20% |
| 11, 10YR2/1 黒褐色シルト 80%、10YR3/1 黒褐色極細粒砂 20% | 23, 10YR4/2 灰黄褐色シルト 70%、10YR3/1 黒褐色極細粒砂 30% |
| 12, 10YR2/1 黒褐色シルト 50%、10YR3/1 黒褐色極細粒砂 50% | 24, 10YR4/2 灰黄褐色シルト 70%、10YR3/1 黒褐色極細粒砂 30% |

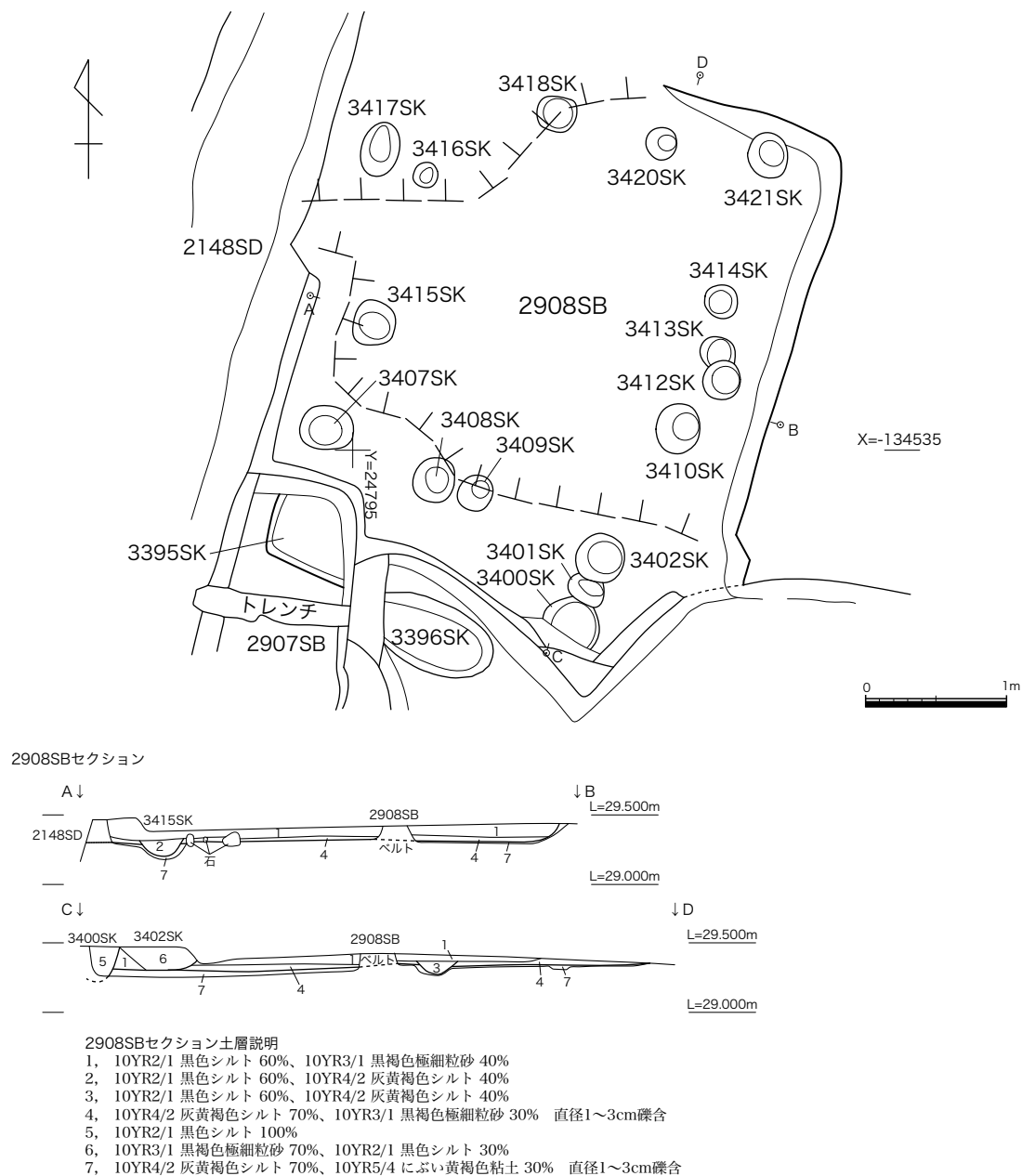
第 51 図 竪穴建物跡 2907SB 遺構図 (s=1:50)

西浦遺跡

れ、黒褐色極細粒砂と灰黄褐色シルトの班土を貼床とする。周溝と火処遺構は検出されていないが、支柱穴については3407SK・3416SKなどが該当するだろう。3666SBを切り、2907SBに切られる状況、および出土遺物からみて、B2期に属する。3086SB（第53図）E区北部中央寄りで検出された竪穴建物跡である。3146SDなど多くの遺構などで滅失し、上位に2440SBが存在しているため、全形は分かりにくい。西辺で2440SB

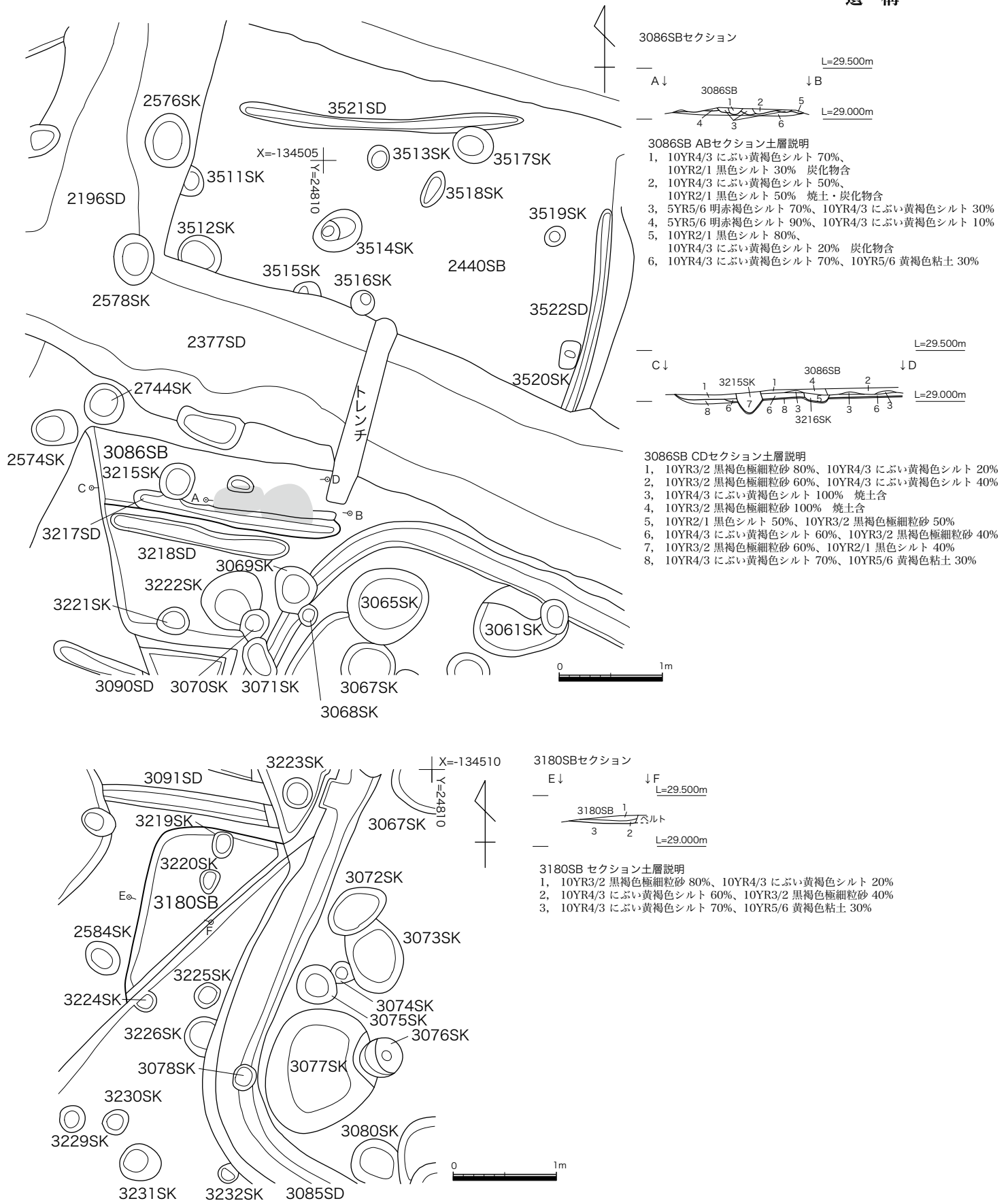
とは異なる方位を持つことから2440SBとは別遺構とした。黒褐色極細粒砂とにぶい黄褐色シルトの班土を貼床とする。周溝は検出されていないが、火処遺構と支柱穴の有無については不詳である。出土遺物からみて、B2期に属する。

3087SB E区北部中央寄りで東隅部のみ検出された遺構である。2196SDに大きく壊され、全形は把握しにくい。西半部が2196SDの西側で検出されるべきと思われたが、実際には全く認識で



第 52 図 竪穴建物跡 2908SB 遺構図 (s=1:50)

遺構



第 53 図 竪穴建物跡 3086SB, 3180SB 遺構図 (s=1:50)

西浦遺跡

きなかった。

3088SB（第54図） E区中央部に位置する竪穴建物跡C類である。2750SB・2804SBに切られ、3089SB・3180SBを切る。平面形は5.14 m以上×4.14 m以上の隅丸長方形となり、黒褐色極細粒砂と灰黄褐色シルトの班土を整地し床面とする。周溝と火処遺構は検出されず、柱穴が多く主柱穴の特定には至っていない。出土遺物からみて、B1～3期に属する。

3089SB（第54図） E区中央部で確認された竪穴建物跡C類である。3088SBに切られ、北東部が不明であるが、4.02 m以上×2.50 m以上の隅丸長方形となる。黒褐色極細粒砂と灰黄褐色シルトの班土を整地し床面とする。周溝と火処遺構は検出されず、柱穴が多く主柱穴の特定には至っていない。切り合い関係からみて、B1期に属する。

3114SB（第55図） E区中央部に所在する竪穴建物跡D類で、極一部が攪乱などにより壊される程度であった。2805SBを切るが、当初はこの部分が3114SBのテラス部分と考えていた。その部分を除いて考慮すると、平面形は7.80 m×5.33 mの小判形を呈する。黒褐色極細粒砂と灰黄褐色シルトの班土による貼床は薄く、部分的に残存していない。南西部を除くほぼ全体に周溝が確認され、中央部やや西寄りの部分に焼土が拡がっており、これが地床炉と推測される。地床炉は貼床の整地がやや高く盛り上がっており、その上面が赤変し炭化物を含んでいた。ピットが多数存在し主柱穴は特定しづらいが、候補として3004SK・3021SK・3023SK・3330SKなどを挙げることができる。出土遺物からみてB1期の遺構と位置づけられる。

3140SB（第25図） E区南部に所在する竪穴建物跡C類で、中央部を大きく2810SDに壊され、2390SBにも切られる。一方、3317SBを切っており、平面形は5.83 m×3.18 m以上の方形である。黒褐色極細粒砂と灰黄褐色シルトの班土が床面となり、ピットが多数存在し主柱穴は特定し

難い。周溝や火処遺構は確認されていない。切り合い関係などからみてB2期前後の遺構と思われる。

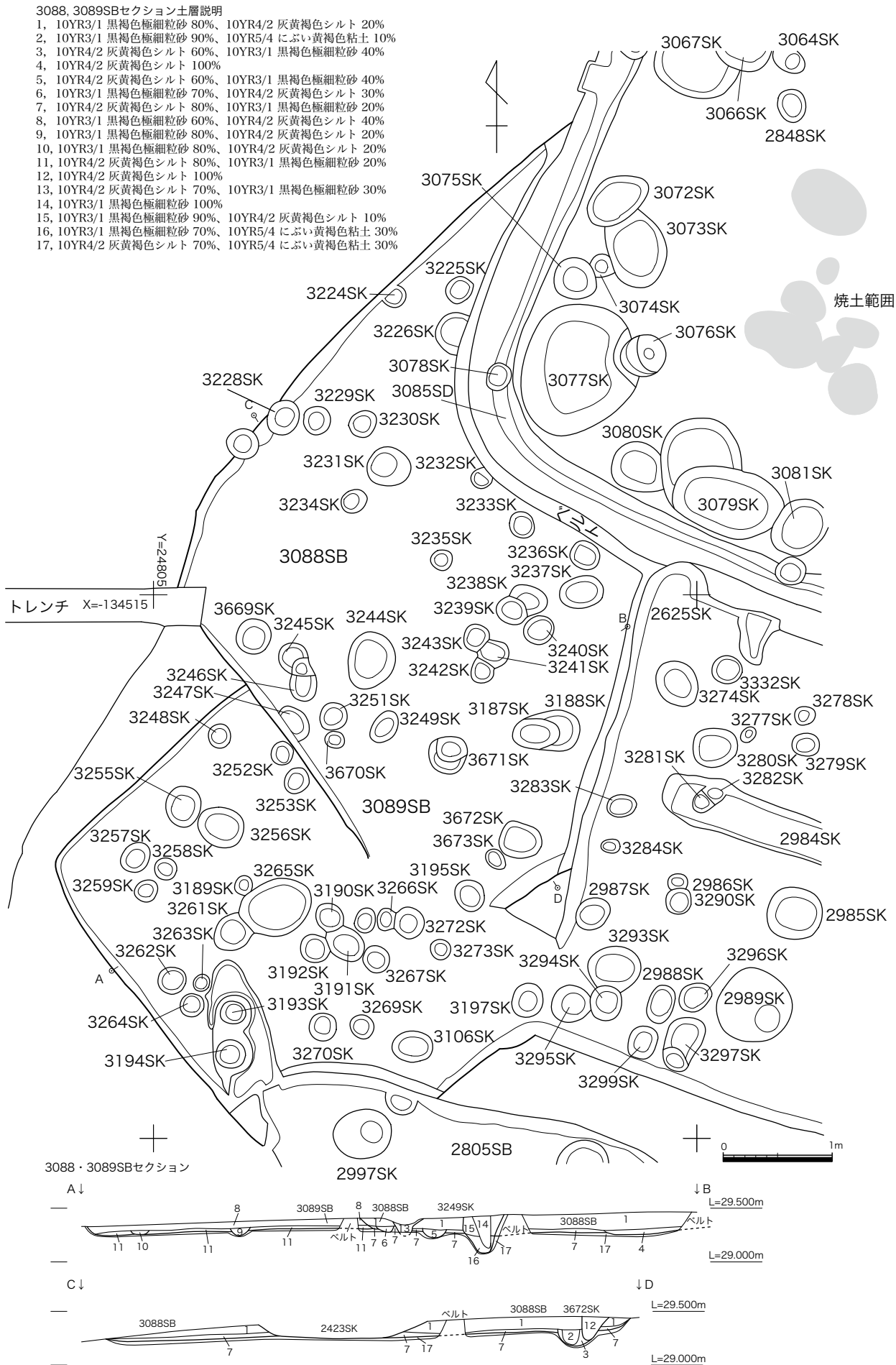
3180SB（第53図） E区中央部北寄りに位置する竪穴建物跡で、北西隅のみを検出した。3088SBに切られる。黒褐色極細粒砂とにぶい黄褐色シルトの班土を整地し床面とする。周溝や火処遺構は確認されていない。切り合い関係などからみてB3期の遺構と思われる。

3309SB（第56図） E区南西部にある竪穴建物跡で、東端部のみを検出した。大半は調査区外に拡がり、全形は不明。配置からみて3311SBと重複していたと思われるが、前後関係は不明である。

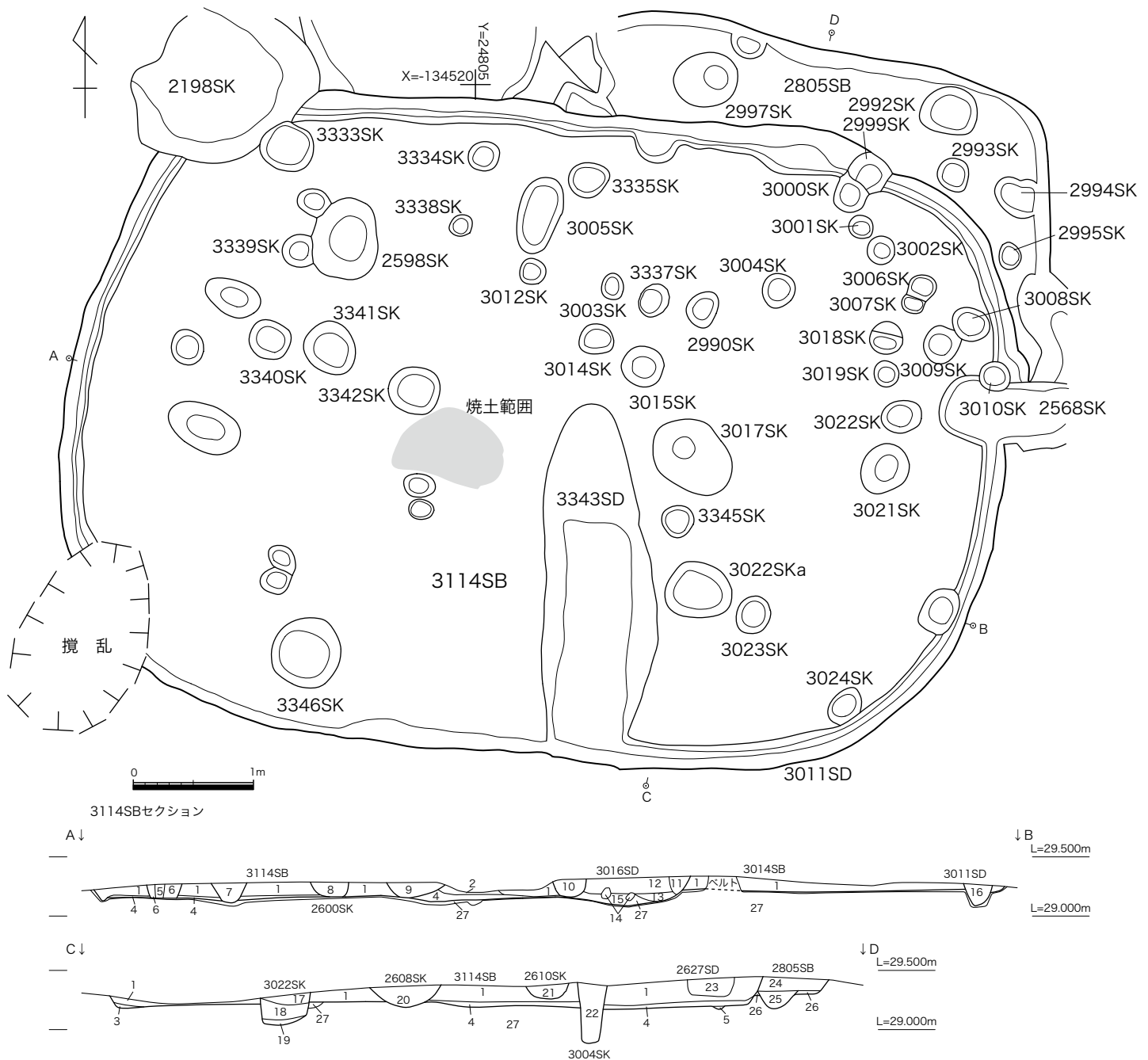
3311SB（第56図） E区南西部にある竪穴建物跡で、東隅部と北西辺のみを検出した。このプランが正しいとすれば、北西—南東間の規模は3.30 mを測る。黒褐色極細粒砂と灰黄褐色シルトの班土を整地して床面としているが、周溝や火処遺構は確認されていない。2907SBに切られていることなどから、時期はB期と推定される。

3315SB（第57図） E区南部中央寄りに所在する竪穴建物跡D類で、北辺部が一部不明となっている。平面形は4.39 m×3.31 mの隅丸台形状の歪なプランとなっている。深さは29 cmを測る。黒褐色極細粒砂と灰黄褐色シルトの班土を整地して床面としているが、周溝は東辺のみに設置されていた。火処遺構は中央に大きな攪乱が存在するために確認されていない。主柱穴は3423SK・3424SK・3427SK・3643SKが該当する。出土遺物から、時期はC1期と推定される。

3316SB（第58図） E区南部に位置する竪穴建物跡である。3146SDにより北半部は大きく滅失している。南西部も2906SBと攪乱に切られ全形を掌握しにくい。平面形は4.33 m×3.40 m以上の隅丸方形と思われるが、南東辺が蛇行するなど若干の疑問も残る。深さは14 cmを測る。黒褐色極細粒砂と灰黄褐色シルトの班土を貼床とするが、周溝や火処遺構は確認されていない。主



第 54 図 竪穴建物跡 3088SB, 3089SB 遺構図 (s=1:50)



3114SBセクション土層説明

- 1, 10YR2/1 黒色シルト 70%、10YR3/1 黒褐色極細粒砂 30% 直径0.5~1cm礫含
- 2, 10YR2/1 黒色シルト 60%、5YR5/6 明赤褐色シルト 40% 焼土・炭化物含
- 3, 10YR3/1 黒褐色極細粒砂 100%
- 4, 10YR5/2 灰黄褐色シルト 80%、10YR3/1 黒褐色極細粒砂 20% 直径0.5~1cm礫含
- 5, 10YR2/1 黒色シルト 100%
- 6, 10YR3/1 黒褐色極細粒砂 100% 直径0.5~1cm礫含
- 7, 10YR3/1 黒褐色極細粒砂 80%、10YR2/1 黒色シルト 20% 直径0.5~1cm礫含
- 8, 10YR2/1 黒色シルト 50%、10YR3/2 黒褐色極細粒砂 50% 直径0.5~1cm礫含
- 9, 10YR2/1 黒色シルト 100% 直径0.5~1cm礫含
- 10, 10YR3/1 黒褐色極細粒砂 60%、10YR5/2 灰黄褐色シルト 40% 直径0.5~1cm礫含
- 11, 10YR2/1 黒色シルト 100%
- 12, 10YR3/1 黒褐色極細粒砂 100%
- 13, 10YR2/1 黒色シルト 100%

- 14, 10YR5/2 灰黄褐色シルト 100%
- 15, 10YR5/2 灰黄褐色シルト 60%、10YR3/1 黒褐色極細粒砂 40% 直径0.5~1cm礫含
- 16, 10YR2/1 黒色シルト 100%
- 17, 10YR3/1 黒褐色極細粒砂 60%、10YR4/2 灰黄褐色シルト 40%
- 18, 10YR3/1 黒褐色極細粒砂 100% 直径0.5~1cm礫含
- 19, 10YR2/1 黒色シルト 100%
- 20, 10YR3/1 黒褐色極細粒砂 60%、10YR4/2 灰黄褐色シルト 40%
- 21, 10YR3/1 黒褐色極細粒砂 100%
- 22, 10YR2/1 黒色シルト 100%
- 23, 10YR3/1 黒褐色極細粒砂 60%、10YR4/2 灰黄褐色シルト 40%
- 24, 10YR3/1 黒褐色極細粒砂 60%、10YR4/2 灰黄褐色シルト 40%
- 25, 10YR3/1 黒褐色極細粒砂 100%
- 26, 10YR4/2 灰黄褐色シルト 70%、10YR3/1 黒褐色極細粒砂 30%
- 27, 10YR5/2 灰黄褐色シルト 70%、10YR5/4 にぶい黄褐色粘土 30% 直径0.5~1cm礫含

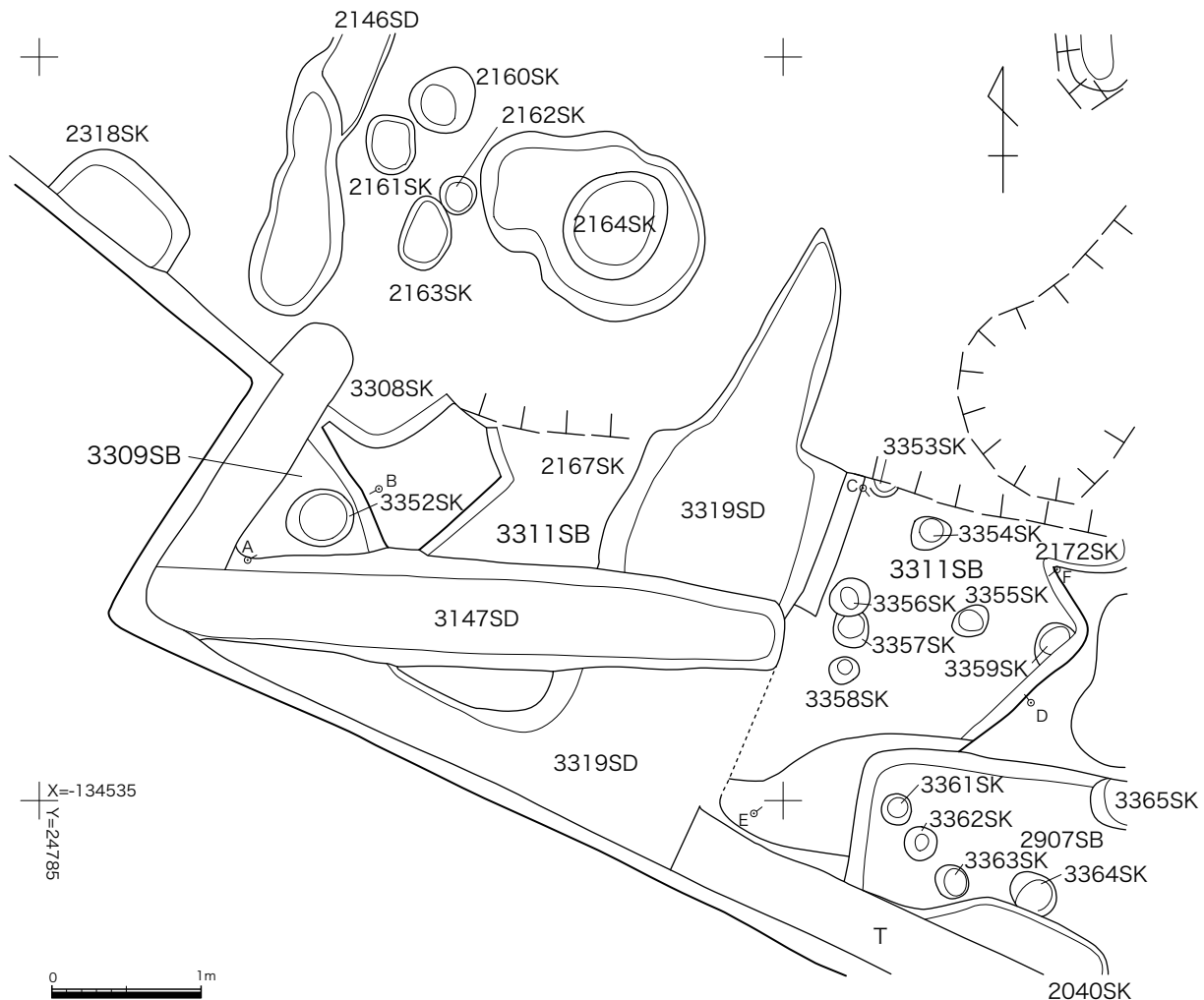
第 55 図 竪穴建物跡 3114SB 遺構図 (s=1:50)

遺 構

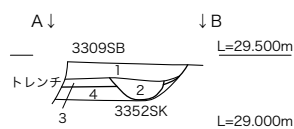
柱穴の特定も難しい。出土遺物から、時期はB2期と推定される。

3317SB（第59図）E区南部で確認された竪穴建物跡である。3146SDと3140SBにより大き

く切られ、全形を掌握しにくい。平面形は4.54m×3.03m以上の隅丸方形と推察される。床面を整地した貼床状の堆積、周溝や火処遺構は確認されていない。主柱穴の特定も現状では難しい。



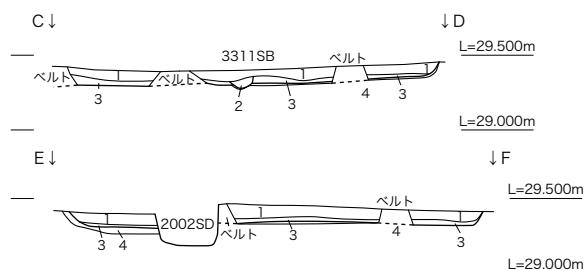
3309SBセクション



3309SBセクション土層説明

- 1, 10YR3/1 黒褐色極細粒砂 80%、10YR4/2 灰黄褐色シルト 20%
- 2, 10YR4/2 灰黄褐色シルト 60%、10YR3/1 黒褐色極細粒砂 40%
- 3, 10YR3/1 黒褐色極細粒砂 60%、10YR4/2 灰黄褐色シルト 40%
- 4, 10YR4/2 灰黄褐色シルト 70%、10YR5/4 にぶい黄褐色粘土 30%

3311SBセクション



3311SBセクション土層説明

- 1, 10YR2/1 黒色シルト 70%、10YR3/1 黒褐色極細粒砂 30% 直径0.5~1cm礫含
- 2, 10YR4/2 灰黄褐色シルト 100%
- 3, 10YR3/1 黒褐色極細粒砂 60%、10YR4/2 灰黄褐色シルト 40%
- 4, 10YR4/2 灰黄褐色シルト 70%、10YR5/4 にぶい黄褐色粘土 30%

第56図 竪穴建物跡 3309SB, 3311SB 遺構図 (s=1:50)

西浦遺跡

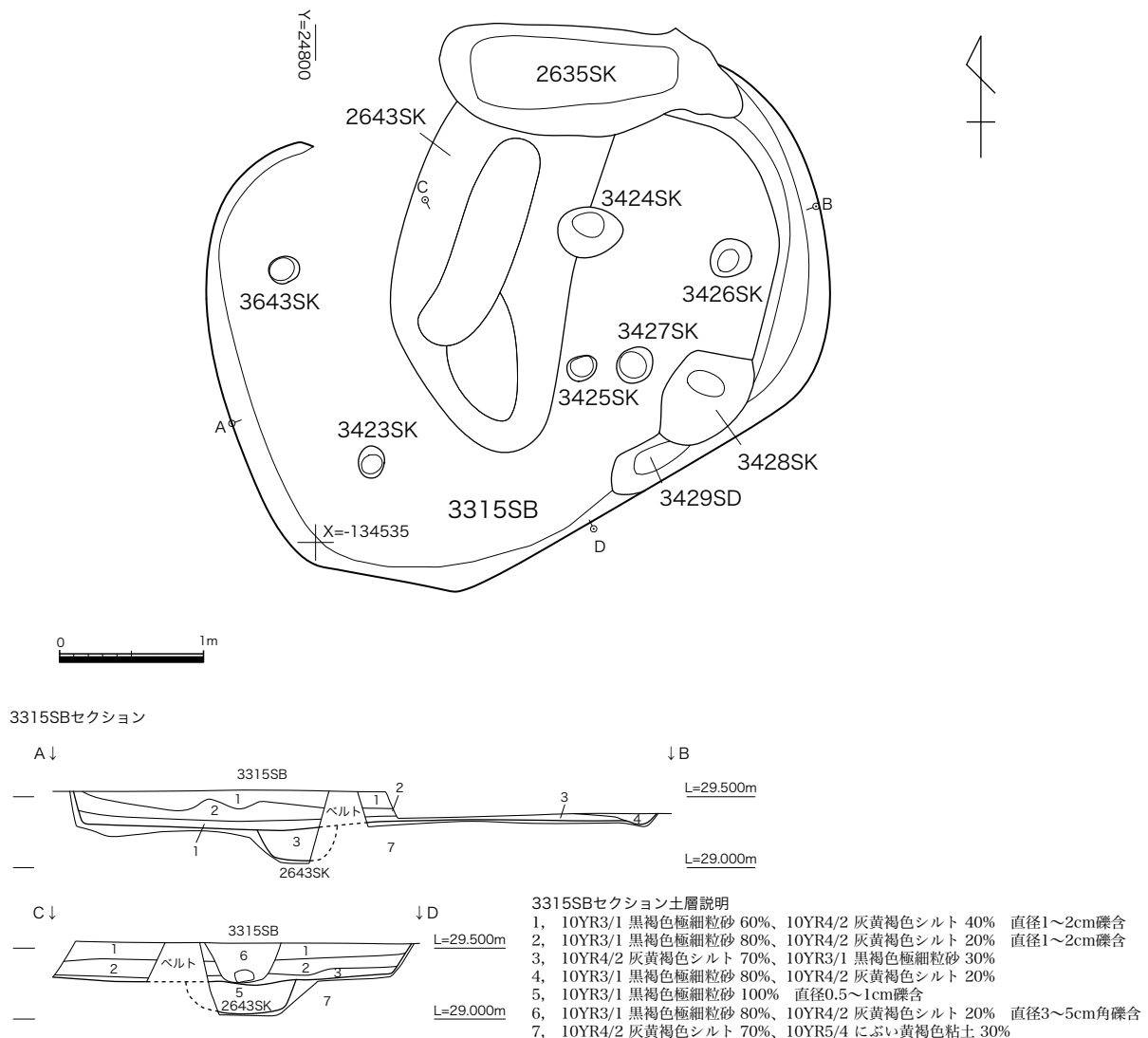
出土遺物は B3 期に属する。

3318SB E 区南部に所在する竪穴建物跡である。南西部が大きく滅失し北東端部のみ残存している。周溝や火処遺構は確認されておらず、一方、床面で検出された柱穴は多量に検出されるものの主柱穴の特定は難しい。弥生時代中期の土器棺 3668SK は、この建物跡内で検出されており、切り合い関係を重視すると、建物跡の存否に若干の疑問が生ずる。時期は不明。

3320SB (第 30 図) E 区北部西端で検出された竪穴建物跡 A 類で、西側は調査区外に拡がり、東側は 2377SD に切られていた。平面プランは

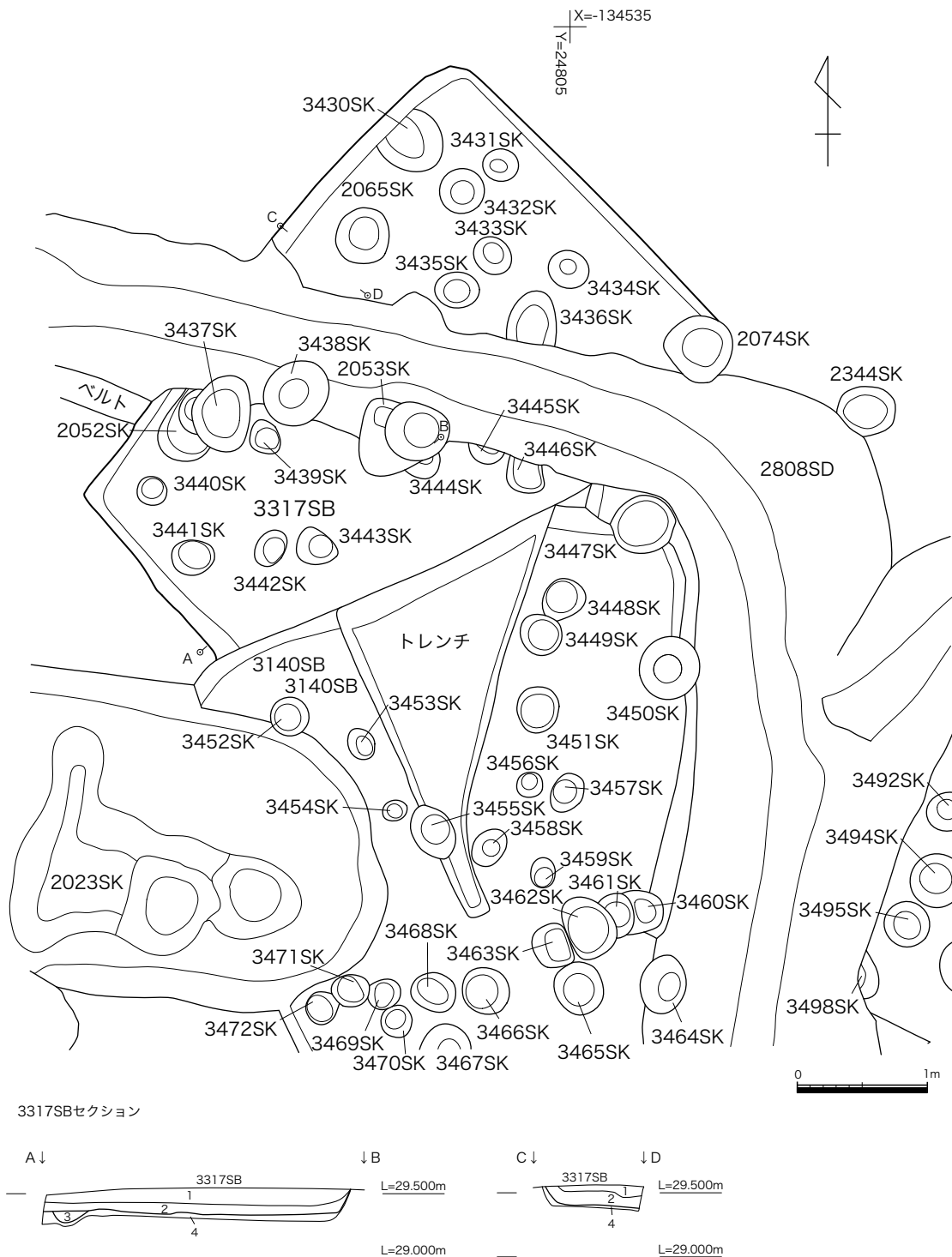
2377SD 南肩付近で北辺のみが確定できた。南辺は誤って掘削し過ぎてしまい西壁の土層観察で位置を確認するに留まる。南寄りの部分では焼土が拡がる範囲が 2ヶ所確認され、これが地床炉となる。周溝は確認されていない。2379SB・2469SB および 2724SB より下位で検出されたことと出土遺物からみて、B2 期以前に位置づけられる。

3331SB (第 24 図) E 区北西部にある竪穴建物跡 A 類で、北辺と南辺を 2078SD と 2377SD に切られ、全体の形状は不明である。東西方向の規模が 6.22 m で、深さは 15 cm を測る。残存する各辺には幅 20～30 cm の周溝が巡り、貼



第 57 図 竪穴建物跡 3315SB 遺構図 (s=1:50)

西浦遺跡



3317SBセクション土層説明

- 1, 10YR3/1 黒褐色極細粒砂 60%、10YR4/2 灰黄褐色シルト 40%
- 2, 10YR2/1 黒色シルト 60%、10YR3/1 黒褐色極細粒砂 40% 直径0.5~1cm礫含
- 3, 10YR3/1 黒褐色極細粒砂 80%、10YR4/2 灰黄褐色シルト 20%
- 4, 10YR4/2 灰黄褐色シルト 70%、10YR5/4 にぶい黄褐色粘土 30%

第 59 図 竪穴建物跡 3317SB 遺構図 (s=1:50)

遺 構

建物跡 C 類で、大きく 2440SB と 2377SD に切られる。隅角部は弧状となるプランで、周溝や火処遺構は確認されていない。切り合い関係などからみて B2 期以前の遺構と思われる。

3666SB E 区南部中央で確認された竪穴建物跡である。3146SD・2908SB・3315SB・3316SB・3317SB により切られ、全形を掌握しにくい。黒褐色極細粒砂と灰黄褐色シルトの班土を整地して床面としているが、支柱穴・周溝や火処遺構は確認されていない。竪穴建物跡としての特定するのは現状ではやや難しい。出土遺物から、時期は B2 期? と推定される。

3681SB E 区北部中央で確認された竪穴建物跡である。2146SD・2196SB・3315SB・3316SB・3317SB により切られ、全形を掌握しにくい。黒

褐色極細粒砂と灰黄褐色シルトの班土を整地して床面とするが、支柱穴・周溝や火処遺構は確認されていない。南辺の一部しかプランが分からず、竪穴建物跡として認定するのは難しい。時期は不明。

5131SB (第 15 図) E 区東部中央の第 3 面で検出された。南西隅が溝に切られ不明となるが、平面形は 4.00 m × 3.46 m のやや台形となる竪穴建物跡 D 類で深さは 14 cm を測る。にぶい黄褐色シルトの班土を整地して床面になっているが、火処遺構は確認できない。竪穴には 10 数基のピットが存在し、柱穴は概ね円形に配列するようである。出土遺物は全く存在しないが、検出状況からみて古いものと思われる。時期は B1 期か。

第 3 節 掘立柱建物跡

柱を土中に埋めて建てる掘立柱建物は床面を下げる竪穴式建物と床面を特に下げない平地式建物に分けることができるが、この節では平地式の掘立柱建物跡を「掘立柱建物跡」として紹介していく。今回の調査では、柱穴となる可能性がある土坑が 1500 基以上確認されており、竪穴建物跡にも関与しない柱穴も膨大な数に及ぶ。これらが柱穴であると認識できるのであれば、全ての柱穴について何らかの掘立柱建物を想定しなければならないだろう。この考え方をもとに、方形に配置される柱穴を可能な限り抽出しようと試み、概ね 3 隅が特定できたものを掘立柱建物跡として推定した結果、72 棟の建物跡を検出できた。ただしこれでも復元されていない柱穴は多数残っており、なお多くの建物跡が存在した可能性が指摘される。時期は遺物が確認されるあらゆる時代に属するものと思われるが、床面の遺物を認識することが絶望的に難しいために時期の特定も困難であると言わざるを得ない。

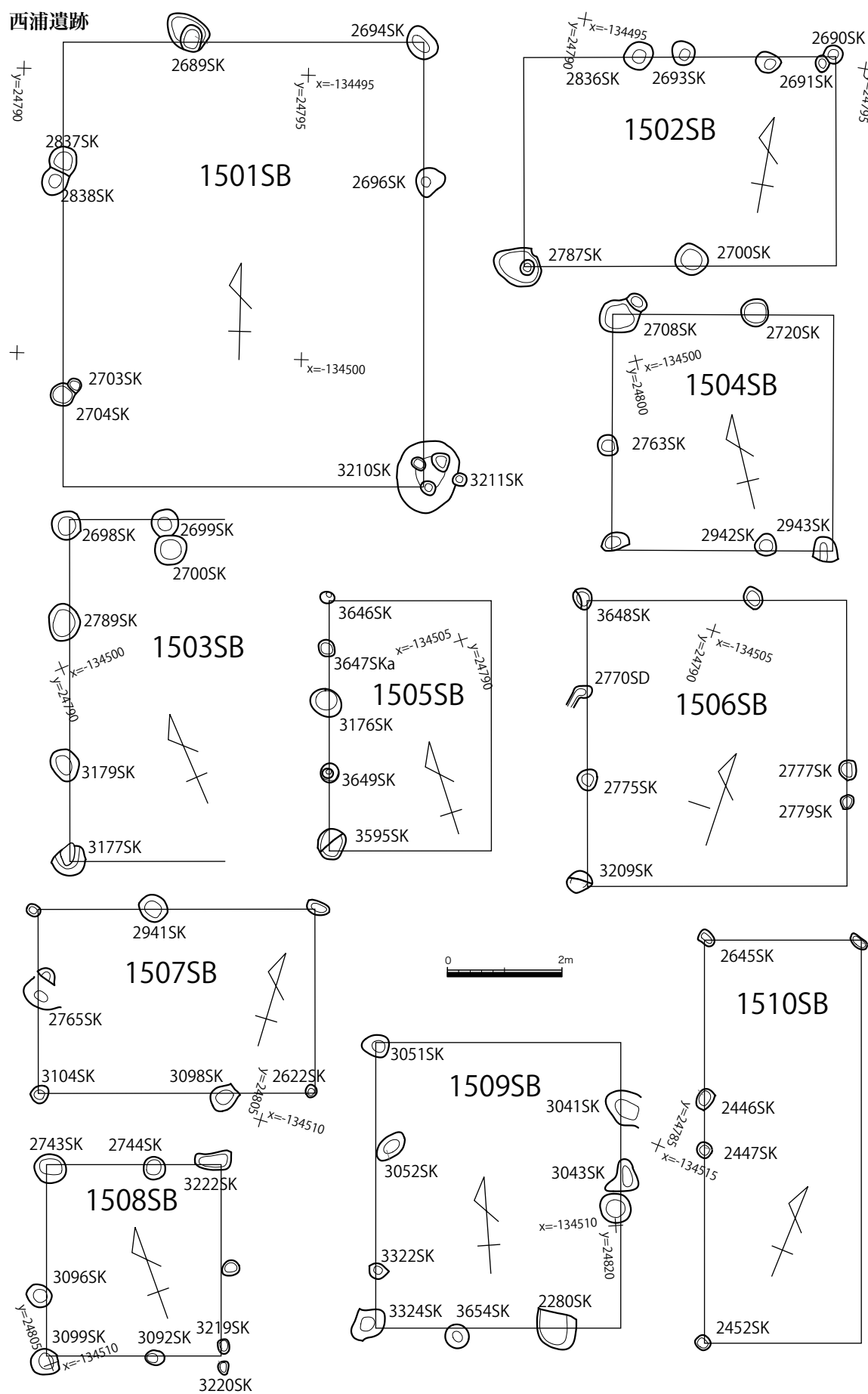
では、個別に遺構を紹介していく。

1501SB (第 60 図) E 区北西端部で確認され

た 2 間 × 3 間の掘立柱建物跡である。梁行 6.30 m、桁行 7.80 m の規模を持ち、ほぼ正方位を向く。北西端と南西端および東辺の一部の柱穴は溝 2078SD・2377SD などに切られ不明である。柱穴は直径が 50 cm 以下の小規模なものが多く、このうち 4 基の柱穴から土師器片が出土したが、時期を特定するには至らなかった。

1502SB (第 60 図) E 区北西端部で検出された 3.60 m × 5.50 m の規模を持つ 1 間 × 2 間の掘立柱建物跡である。北西端は調査区外となり、南東端は溝 2078SD に切られて不明である。北辺の支柱穴を 2693SK とみれば対称的な柱間構造と復元される。3 基の柱穴から土師器小片が出土したが、時期を特定するには至らなかった。C 期か。

1503SB (第 60 図) E 区北西端部に存在する 1 間以上 × 3 間の掘立柱建物跡である。東辺は 2078SD に大きく破壊されており、梁行の規模は測定できない。桁行は約 5.00 m を測る。柱穴は比較的規模が揃った円形土坑である。柱穴から土師器片が出土したが、時期を特定するには至らな



第 60 図 掘立柱建物跡 1501SB~1510SB 遺構図 (s=1:100)

遺 構

かった。C 期または D 期か。

1504SB (第 60 図) E 区北西部に所在する 3.90 m × 4.10 m の規模を持つ 2 間 × 2 間の掘立柱建物跡である。北東端の柱穴のみが検出できなかった。東西方向の柱間は西から順に 2.80 m, 1.10 m となり東側が狭い。1 基の柱穴から土師器片が出土したが、時期は不明である。C 期または D 期か。

1505SB (第 60 図) E 区北西部に存在する 1 間以上 × 4 間の掘立柱建物跡である。東辺が 2078SD に切られているため梁行の規模は不明だが、桁行は約 4.40 m を測る。1 基の柱穴から土師器片が出土したが、時期は特定できない。

1506SB (第 60 図) E 区北西部で確認された 4.50 m × 5.00 m の規模を持つ 2 間 × 3 間の掘立柱建物跡である。北東端は 2078SD に切られて不明だが、南東端の柱穴は検出できなかった。柱穴は直径が約 30 cm と小規模なものが多い。遺物は全く出土せず、時期は不明。

1507SB (第 60 図) E 区北部中央で検出された 3.20 m × 4.80 m の規模を持つ 2 間 × 2 間の掘立柱建物跡である。北辺と南辺では柱間間隔が相違しており、柱穴は総じて小規模である。2 基の柱穴から土師器片が少量出土したが、時期を特定するには至らない。C 期または D 期か。

1508SB (第 60 図) E 区北部中央に存在する 2 間 × 2 間の小形掘立柱建物跡で、3.00 m × 3.30 m の規模を持つ。東西方向の柱間は西から順に 1.80 m, 1.20 m を測り、やや東側が狭い。4 基の柱穴から土師器片が出土したが、時期を特定するには至らない。C 期または D 期か。

1509SB (第 60 図) E 区北東部に所在する 4.00 m × 5.00 m の規模を持つ 3 間 × 3 間の掘立柱建物跡である。北東端と南東端の柱穴は 2078SD・2377SD に切れ不明である。2280SK から棧瓦が出土しており、これを柱穴の一つと仮定すれば E2 期の遺構となるが、2280SK の形状からみて本来 1509SB の柱穴そのものとは感じられない側面がある。他の柱穴から土師器片が出土してお

り、C 期または D 期と想定しておきたい。

1510SB (第 60 図) E 区西部中央で確認された 2.70 m × 7.00 m の規模を持つ 1 間 × 3 間の掘立柱建物跡である。南東端は 2670SK に切られて不明である。柱穴は直径が約 30 cm と小規模なものが多い。1 基の柱穴から土師器片が出土したが、時期は特定できない。

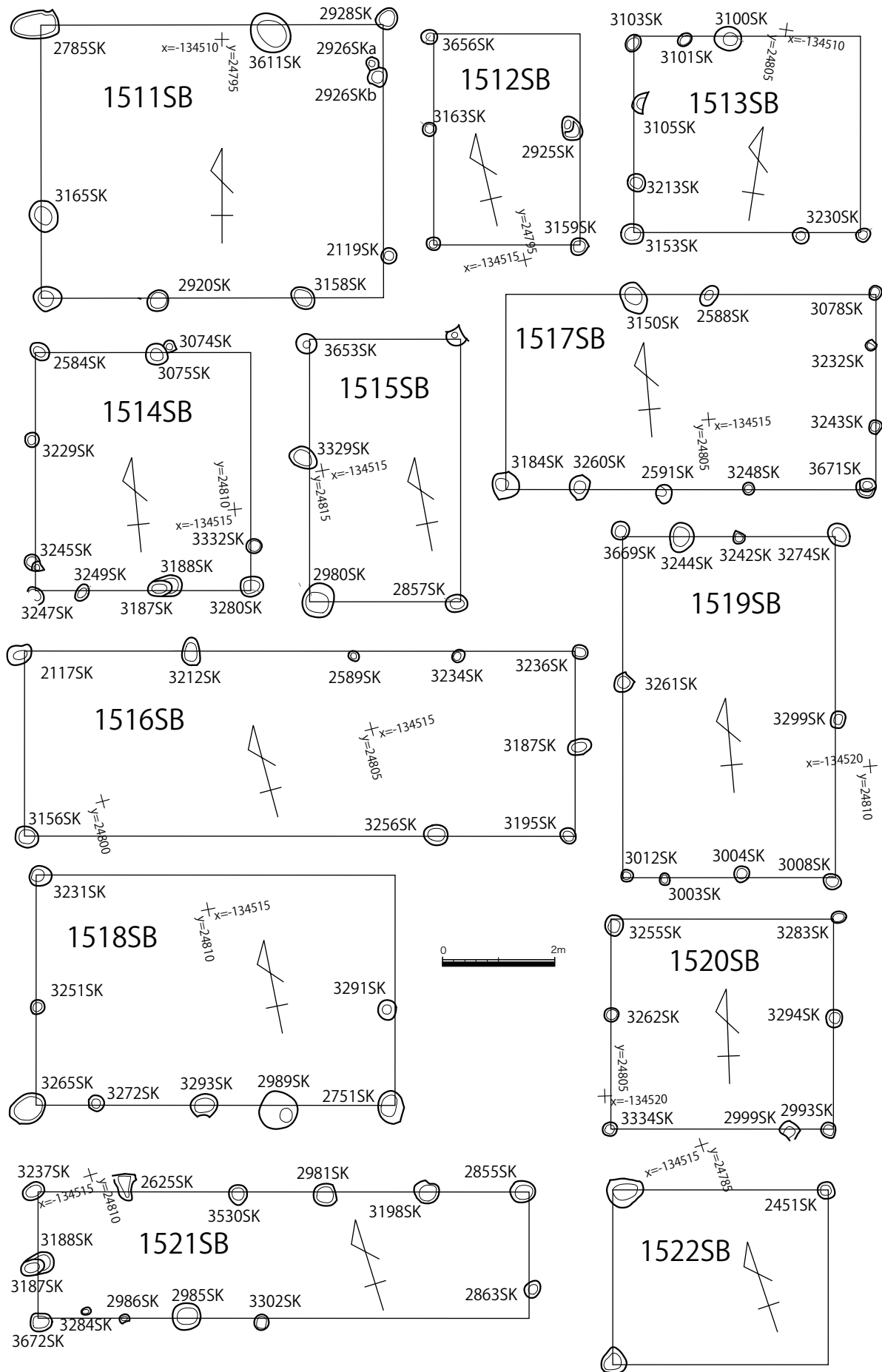
1511SB (第 61 図) E 区西部中央で検出された 4.90 m × 6.10 m の規模を持つ 3 間 × 3 間の掘立柱建物跡である。南東端は 2582SD に破壊され不明となっている。柱穴は、特に南半部のものについて、直径が約 30 cm と小規模なものが多い。4 基の柱穴から土師器片が出土したが、時期を特定するには至らない。C 期または D 期か。

1512SB (第 61 図) E 区西部中央に存在する 1 間 × 2 間の小形掘立柱建物跡で、2.60 m × 3.80 m の規模を持つ。北東端は 2722SD に切られて不明である。南北方向の柱間は北から順に 1.80 m, 2.00 m を測り、やや北側が狭い。2 基の柱穴から土師器片が出土したが、時期を特定するには至らない。C 期または D 期か。

1513SB (第 61 図) E 区中央部で確認された 3.50 m × 3.90 m の規模を持つ 3 間 × 4 間? の掘立柱建物跡である。北東端は 2196SD に破壊され不明となっている。柱穴は直径が約 30 cm と小規模なものが多い。柱穴出土遺物はないが、3103SK との切り合い関係から 2148SD (E 期) より古い。C 期または D 期か。

1514SB (第 61 図) E 区中央部に所在する 3 間 × 3 間の掘立柱建物跡で、3.80 m × 4.20 m の規模を持つ。北東端は 2750SB と重複し上手く検出できなかった。南北方向の柱間は、西辺で北から順に 1.50 m, 2.20 m, 0.50 m となり、南端部は非常に狭い。本遺構を構成する 3332SK から山茶碗 (427) が出土したことから、時期は D1 期と推測される。

1515SB (第 61 図) E 区東部中央で検出された 2.70 m × 4.70 m の規模を持つ 1 間 × 2 間の掘立柱建物跡である。南東端は 2582SD に破壊



第 61 図 掘立柱建物跡 1511SB～1522SB 遺構図 (s=1:100)

遺 構

され不明となっている。柱穴は、特に南半部のものについて、2基の柱穴から土師器片が出土したが、時期を特定するには至らない。

1516SB (第61図) E区中央部に存在する3.30 m × 9.80 m の規模を持つ2間 × 4間の細長い掘立柱建物跡である。南辺の一部の柱穴群は2196SDにより破壊され不明となっている。柱穴は直径が約50 cmの小規模なものが多く、東西方向の柱間は、北辺で西から順に3.00 m, 2.90 m, 1.70 m, 2.20 mとなる。2基の柱穴から土師器片が出土したが、C期またはD期であろうか。

1517SB (第61図) E区中央部で確認された3間 × 4間の掘立柱建物跡で、規模は3.50 m × 6.60 mを測る。北西端は2140SDに切られ不明となっている。南辺と北辺の柱間間隔は相違し、対応しない。2基の柱穴から土師器片が出土したが、時期を特定するには至らない。

1518SB (第61図) E区中央部に所在する4.20 m × 6.30 m の規模を持つ2間 × 4間の細長い掘立柱建物跡である。北辺の柱穴群は2750SBと重複し上手く検出できなかった。柱穴は直径が50 cmを越えるものが多い。柱穴2751SKから常滑窯産陶器赤物製品が出土したことなどから、E期と推測される。

1519SB (第61図) E区中央部で検出された3間 × 2間の掘立柱建物跡で、規模は3.80 m × 6.10 mを測る。南辺の柱穴は直径が約30 cmの小規模なものが多い。柱穴3274SKから渥美湖西型山茶碗が出土したことから、時期はD1期と位置づけられる。

1520SB (第61図) E区中央部で確認された1間 × 2間の掘立柱建物跡で、規模は3.70 m × 4.00 mを持つ。柱穴は全て直径が約30 cmの小規模なものである。主柱穴からは遺物は全く出土していないが、東柱の可能性のある2999SKから渥美湖西型山茶碗と小皿(423・424)が出土していることから、時期はD1期と推定される。

1521SB (第61図) E区中央部に存在する2.30 m × 8.80 m の規模を持つ2間 × 5間の非常に細

長い掘立柱建物跡である。南辺東半部の柱穴群は検出できなかった。東西方向の柱間は、北辺で西から順に1.60 m, 2.00 m, 1.60 m, 1.80 m, 1.80 mとなる。東柱穴3284SKから常滑窯産陶器赤物製品が出土したことなどから、E期と推測される。形状から見て倉庫などのような施設かもしれない。

1522SB (第61図) E区西部中央で検出された3.10 m × 3.80 m の規模を持つ1間 × 1間の掘立柱建物跡である。南東端の柱穴は攪乱により破壊されていた。柱穴からは遺物は全く出土せず、時期は不明。

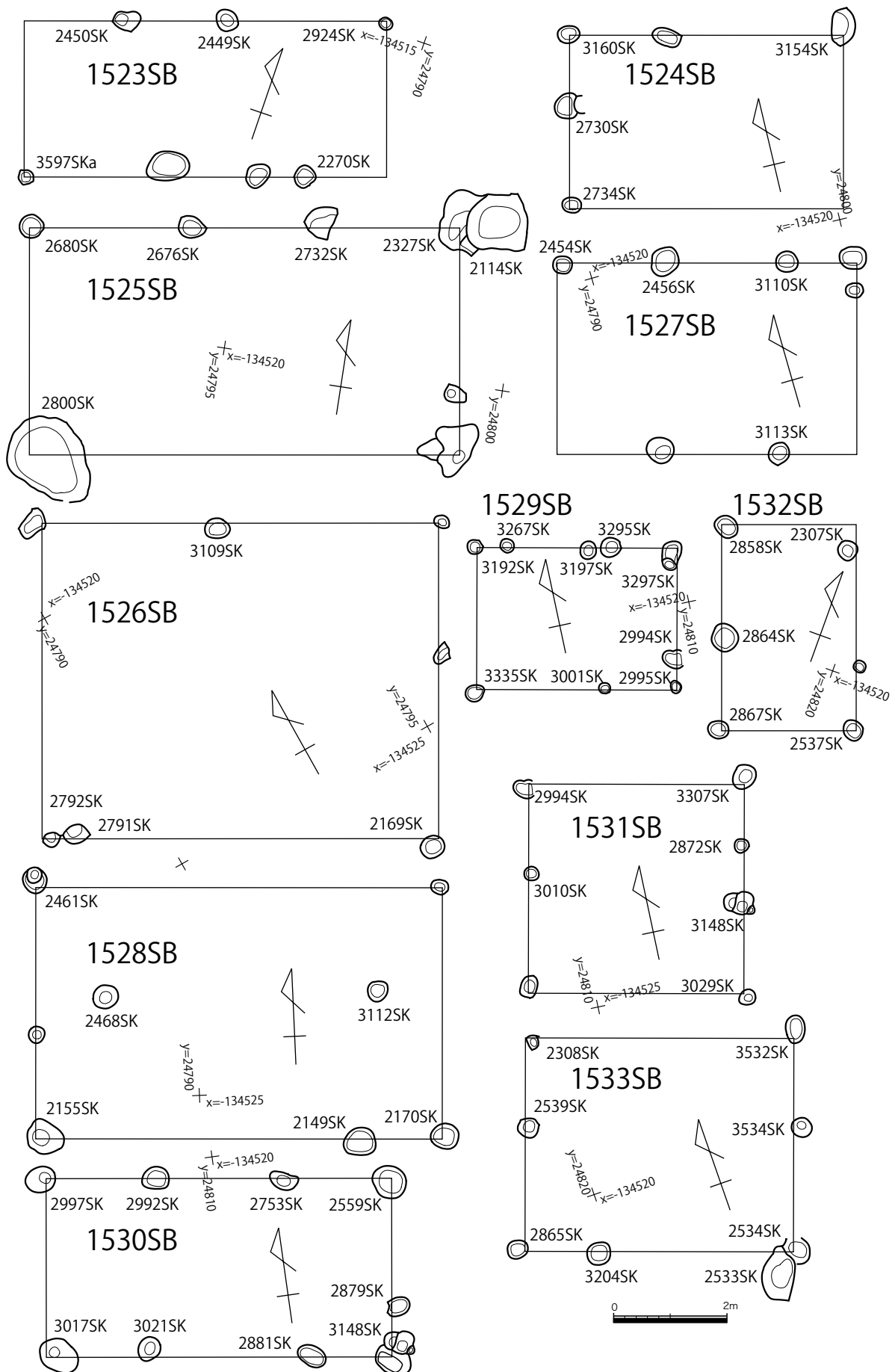
1523SB (第62図) E区西部中央で確認された1間 × 3間の細長い掘立柱建物跡で、規模は2.80 m × 6.40 mを測る。南東端と北西端の柱穴は攪乱により遺存していない。1基の柱穴から土師器片が出土したが、時期を特定するには至らない。C期またはD期か。

1524SB (第62図) E区中央部に所在する2間 × 2間の掘立柱建物跡で、規模は3.10 m × 4.80 mを測る。南東端の柱穴は検出されなかったが、攪乱の存在などから建物の規模はさらに南に拡がる可能性も残される。柱穴からは遺物は全く出土せず、時期は不明。

1525SB (第62図) E区西部中央に存在する4.00 m × 7.60 m の規模を持つ1間 × 3間の掘立柱建物跡である。大半の隅角部の柱穴は規模が大きいが、攪乱により本来の形状は破壊されていたと推測される。柱穴から土師器片が出土したが、時期を特定するには至らない。C期またはD期か。

1526SB (第62図) E区西部中央で確認された5.50 m × 7.00 m の規模を持つ2間 × 2間の掘立柱建物跡である。西辺などでは攪乱により本来柱穴が存在すべき部分が破壊されて不明となっている。柱穴から土師器片が出土したが、時期を特定するには至らない。C期またはD期か。

1527SB (第62図) E区西部中央で検出された1間 × 3間の掘立柱建物跡で、規模は3.40 m × 5.20 mを測る。南東端の柱穴は検出できず、南



第 62 図 掘立柱建物跡 1523SB～1533SB 遺構図 (s=1:100)

遺 構

西端の柱穴は攪乱により遺存していなかった。柱穴は直径が 50 cm 程度を測りやや大きい。1 基の柱穴から土師器片が出土したが、時期を特定するには至らない。C 期または D 期か。

1528SB (第 62 図) E 区西部中央で確認された 2 間? × 2 間? の掘立柱建物跡で、規模は 4.40 m × 7.20 m を測る。2468SK と 3112SK を棟持ち柱と想定すると、本建物跡は寄棟造の可能性が考えられる。2 基の柱穴から土師器片が出土したが、時期を特定するには至らない。C 期または D 期か。

1529SB (第 62 図) E 区中央部に所在する 2.50 m × 3.50 m の規模を持つ 1 間 × 2 間の小形掘立柱建物跡である。ここでは 3192SK・3197SK・3297 SK・2995SK・3001SK・3335S で構成される建物跡としておきたい。柱穴 3001SK から渥美湖西型山茶碗 (425) が出土していることから、時期は D1 期と位置づけられる。

1530SB (第 62 図) E 区中央部に存在する 3.10 m × 6.00 m の規模を持つ 1 間 × 3 間の掘立柱建物跡である。柱穴は直径が 50 cm 程度とやや大きい。4 基の柱穴から土師器片が出土したが、時期を特定するには至らない。D 期または E 期か。

1531SB (第 62 図) E 区中央部で確認された 3 間 × 1 間の掘立柱建物跡で、規模は 3.70 m × 3.80 m を測る。北東端の柱穴 3307SK から常滑窯産陶器赤物製品が出土したことから、時期は E 期と推定される。

1532SB (第 62 図) E 区東部中央で検出された 1 間 × 2 間の小形掘立柱建物跡で、規模は 2.40 m × 3.60 m を測る。北東端部の柱穴は位置がややずれて検出された。建物跡の想定に問題があるかもしれない。2 基の柱穴から土師器片が出土したが、時期を特定するには至らない。

1533SB (第 62 図) E 区東部中央で確認された 3.80 m × 4.80 m の規模を持つ 2 間 × 2 間の掘立柱建物跡である。4 基の柱穴から土師器片が出土したが、時期は特定できない。なお、南東隅の柱穴 2534SK に接する 2533SK は扁平な石材を利用した根石を持ち、その下位で山茶碗が出土

している。2534SK と 2533SK の両者を切る遺構 (土坑) の存在のため、両者の正しい切り合い関係を特定するには至らないが、おそらく D 期と思われる。

1534SB (第 63 図) E 区東部中央で検出された 2 間 × 4 間の掘立柱建物跡で、規模は 6.10 m × 6.10 m を測る。北東端の柱穴は 2244SK に切られ不明となっている。5 基の柱穴から土師器片が出土したが、時期を特定できない。

1535SB (第 63 図) E 区東部中央に存在する 1 間 × 4 間の細長い掘立柱建物跡で、規模は 3.00 m × 6.40 m を測る。北東端の柱穴は 2244SK に切られ不明となっている。3027SK と 2827SK は東柱と考えておきたい。5 基の柱穴から土師器片が出土したが、時期を特定できない。

1536SB (第 63 図) E 区東部中央で確認された 4.00 m × 6.20 m の規模を持つ 1 間 × 4 間の掘立柱建物跡である。南西端の柱穴は検出されなかった。2515SK は 1562SB と重複する。柱穴 2333SK から瀬戸窯産陶器播鉢が出土したことから、E1 期に位置づけられる。

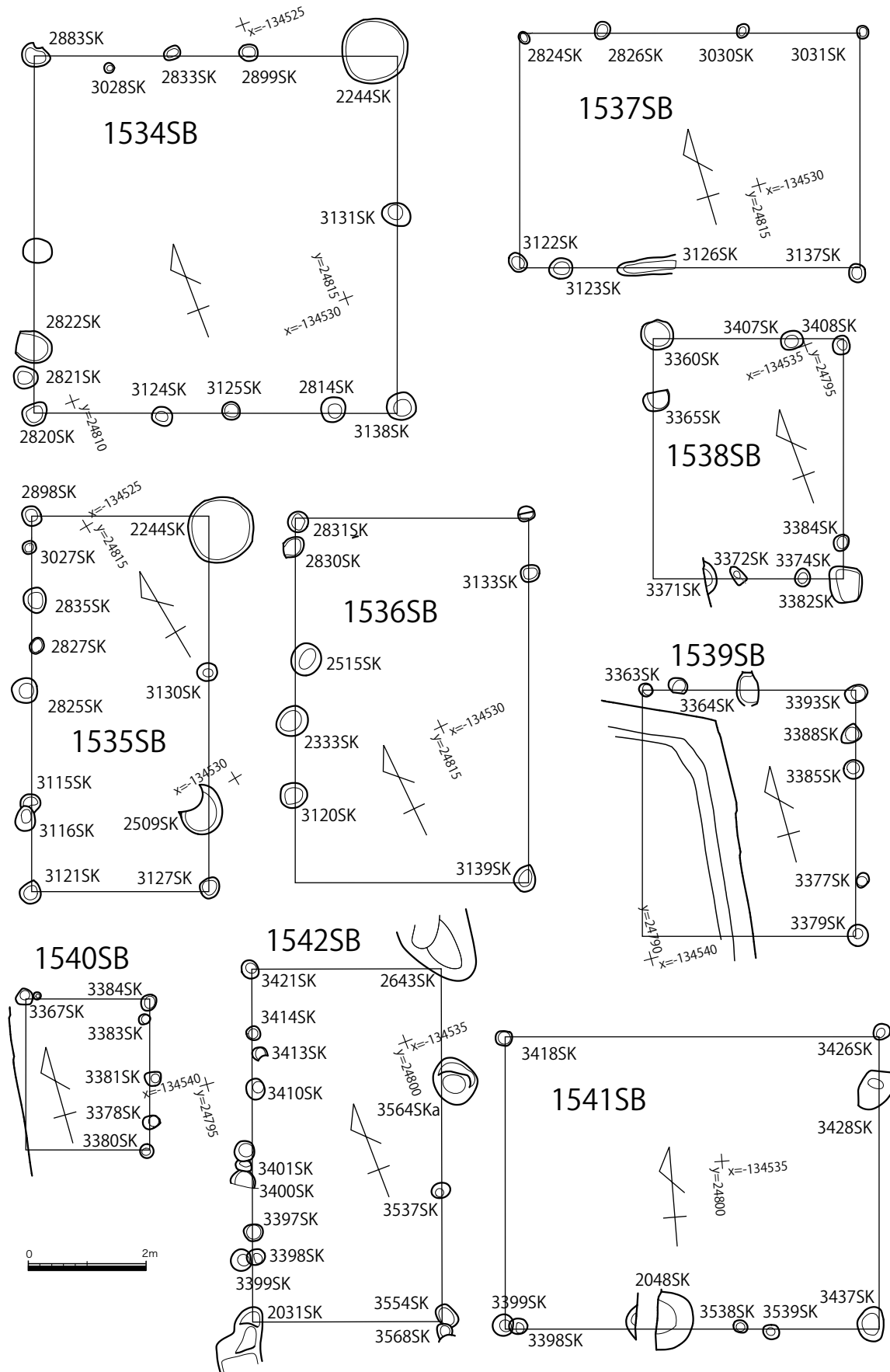
1537SB (第 63 図) E 区東部中央に所在する 1 間 × 3 間の細長い掘立柱建物跡で、規模は 4.00 m × 5.80 m を測る。南辺の柱穴は上手く検出できていない。柱穴は直径が約 30 cm の小規模なものが多く、東西方向の柱間は、北辺で西から順に 1.40 m, 2.40 m, 2.00 m となる。柱穴から遺物は全く出土していないので、時期を特定できない。

1538SB (第 63 図) E 区南部中央で検出された 3.20 m × 4.10 m の規模を持つ 3 間 × 2 間? の掘立柱建物跡で、南西端は調査区外に拡がる。1 基の柱穴から土師器片が出土したが、時期を特定できない。C 期または D 期であろうか。

1539SB (第 63 図) E 区南部中央で確認された 3 間? × 4 間? の細長い掘立柱建物跡で、規模は 3.60 m × 4.20 m を測る。南西端は調査区外に拡がり、状況は不明である。2 基の柱穴から土師器片が出土したが、時期を特定できない。

1540SB (第 63 図) E 区南部に存在する 2.10

西浦遺跡



第 63 図 掘立柱建物跡 1534SB～1542SB 遺構図 (s=1:100)

遺 構

m × 2.50 m の規模を持つ 1 間 × 2 間の掘立柱建物跡である。南西端は調査区外にあって、建物の規模はさらに拡がる可能性がある。2 基の柱穴から土師器片が出土したが、時期は不明である。

1541SB (第 63 図) E 区南部中央で検出された 1 間 × 3 間? の掘立柱建物跡で、規模は 5.00 m × 6.50 m を測る。柱穴は直径が約 30 cm の小規模なものが多い。柱穴 3426SK から須恵器杯 (428) が出土しており、C1 期に属する。

1542SB (第 63 図) E 区南部中央で確認された 3.20 m × 6.00 m の規模を持つ 1 間 × 3 間の掘立柱建物跡である。北東端と南西端の柱穴は 2643 SK と 2031SK によって不明となっている。柱穴から遺物は全く出土していないので、時期を特定できない。

1543SB (第 64 図) E 区南部中央に存在する 6.30 m × 6.70 m の規模を持つ 3 間 × 3 間の掘立柱建物跡である。南東端は 2023SK により不明となっている。柱穴は直径が約 30 cm と小規模なものが多い。いくつかの柱穴から土師器片が出土したが、時期は不明である。C 期または D 期か。

1544SB (第 64 図) E 区南部で検出された 1 間 × 3 間のやや大形の掘立柱建物跡で、5.00 m × 8.10 m の規模を持つ。南東端の柱穴は上手く検出できなかった。北東端の柱穴 2343SK から近代以降の磁器が出土したことから、時期は近代以降と推測される。

1545SB (第 64 図) E 区南部で確認された 6.50 m × 8.80 m の規模を持つ 3 間 × 5 間の大形掘立柱建物跡である。西辺北端部で 1 間 × 2 間の張り出し部を有し、南西端は攪乱により不明となっている。柱穴の数は多く、いくつかは束柱のなると予測される。柱穴 2019SK から棧瓦や土師器皿 (406) が、柱穴 3141SK から腰鍔茶碗や棧瓦が出土しており、遺構の時期は E1 期と推定される。

1546SB (第 64 図) E 区南部に所在する 3.70 m × 6.40 m の規模を持つ 3 間 × 3 間の掘立柱建物跡であり、北西隅の柱穴は攪乱により不明と

なっている。柱穴は直径が約 30 cm の小規模なものが多く、2 基の柱穴から土師器片が出土したが、時期は不明。C 期または D 期であろうか。

1547SB (第 64 図) E 区南部で検出された 2 間 × 5 間? の掘立柱建物跡で、規模は 4.10 m × 7.80 m を測る。柱穴は直径が約 30 cm の小規模なものが多く、南辺と北辺の柱間間隔は相違して対応しない。2 基の柱穴から土師器片が出土したが、時期を特定するには至らない。

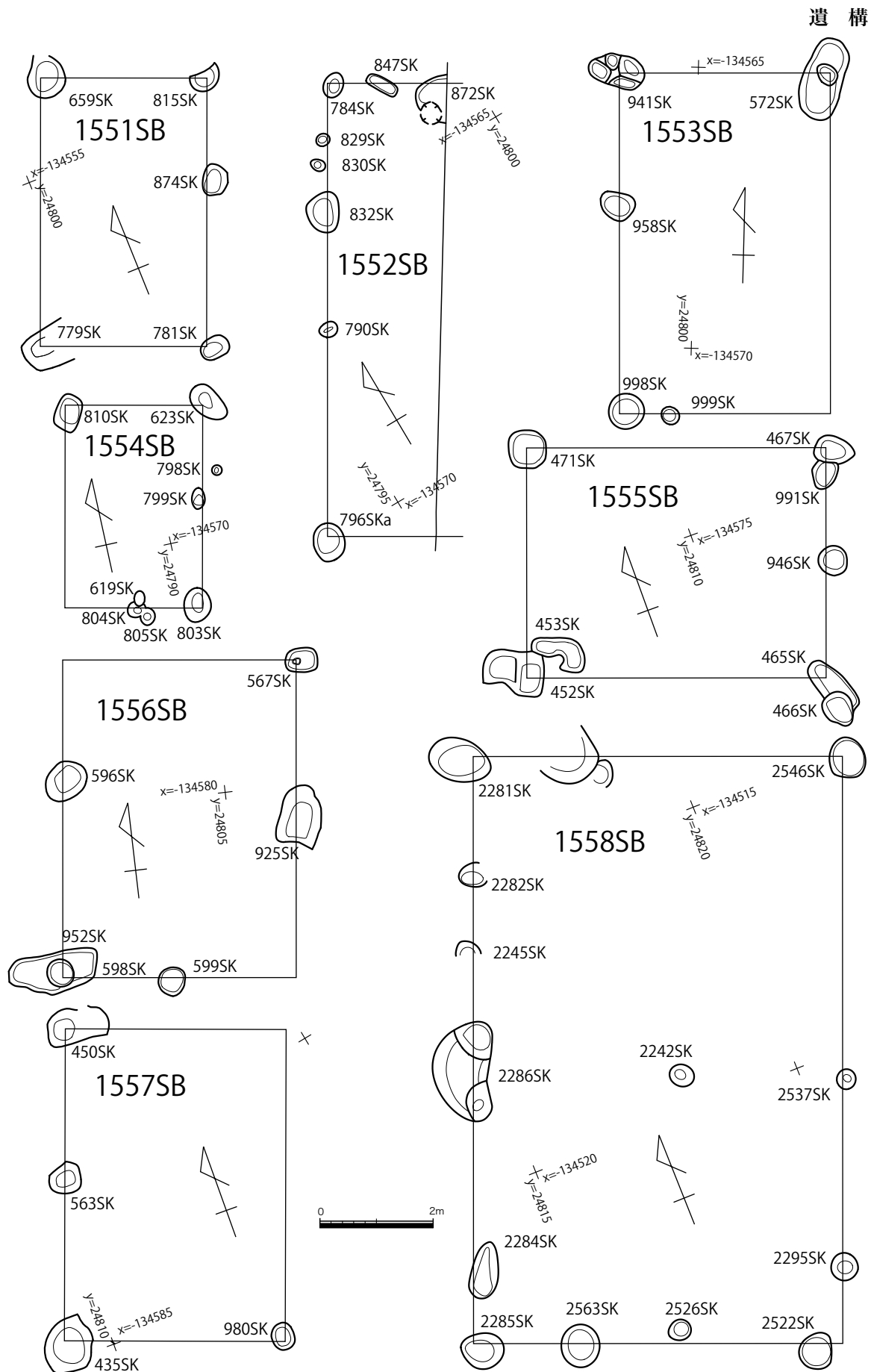
1548SB (第 64 図) E 区南東部に存在する 4.50 m × 6.70 m の規模を持つ 1 間 × 3 間の掘立柱建物跡である。東辺北半の柱穴群は溝と重複しており検出できていない。柱穴から遺物は全く出土していないので、時期を特定できない。

1549SB (第 64 図) E 区南東部で確認された 1 間 × 2 間の小形掘立柱建物跡で、規模は 2.70 m × 3.10 m を測る。北西端の柱穴は不明で、柱穴は直径が約 30 cm の小規模なものが多い。柱穴から遺物は全く出土していないので、時期を特定できない。

1550SB (第 64 図) E 区南東部に所在する 2 間以上 × 5 間の掘立柱建物跡で、南北辺の長さは 8.30 m を測る。東部は調査区外に拡がり、全形は不明である。3503SK を除外してもう少し小規模な建物跡に復元することも可能である。遺物は全く出土していないので、時期を特定できない。

1551SB (第 65 図) D 区北部で確認された 2.90 m × 3.70 m の規模を持つ 1 間 × 2 間の掘立柱建物跡である。西辺中央部の柱穴は検出できなかった。D 区は攪乱が激しいため、さらに規模が大きい可能性が残される。柱穴 659SK から瀬戸窯産陶器腰鍔茶碗が出土したことなどから、E1 期と推測される。

1552SB (第 65 図) D 区中央部で検出された 1 間以上 × 3 間の掘立柱建物跡である。東部は調査区外に拡がり全形は不明である。梁行は 8.00 m を測り、柱間間隔は西辺で北から順に 2.20 m, 2.10 m, 3.70 m となる。柱穴 784SK から土師器鍋片が出土していることから、時期は D 期以降



第 65 図 掘立柱建物跡 1551SB～1558SB 遺構図 (s=1:100)

西浦遺跡

である。

1553SB（第 65 図） C 区北部に存在する 1 間 × 2 間の掘立柱建物跡で、規模は 3.70 m × 6.00 m を測る。南東端の柱穴は 438SD に切られて遺存していない。柱穴は直径が 50 cm 以上を測る大形のものである。遺物は全く出土していないので、時期を特定できない。

1554SB（第 65 図） D 区西端部で確認された 1 間 × 2 間の掘立柱建物跡で、規模は 2.50 m × 3.60 m を測る。南西端の柱穴は調査区外にあって検出できない。柱穴 803SK から土師器皿が出土しており、時期は D3 期と推測される。

1555SB（第 65 図） C 区中央部で検出された 4.00 m × 5.30 m の規模を持つ 2 間 × 1 間？の掘立柱建物跡である。柱穴は平面形がやや方形になるものが目立ち、南西隅の柱穴は複数の土坑が切り合っている。柱穴 452SK から瀬戸窯産陶器広東茶碗が出土しているものの、他の柱穴からは古代の遺物が出土している。時期は C2～3 期を考えておきたい。

1556SB（第 65 図） C 区南部で確認された 4.10 m × 5.60 m の規模を持つ 2 間 × 2 間の掘立柱建物跡である。南東端の柱穴は 518SD に切られて遺存せず、北西端の柱穴は検出できなかった。柱穴の規模はやや大きく平面形は円形である。柱穴 567SK から多くの遺物が出土しており（365～371）、時期は D1 期に比定できる。

1557SB（第 65 図） C 区南東部に存在する 1 間 × 2 間の掘立柱建物跡で、規模は 3.90 m × 5.50 m を測る。北東端の柱穴は攪乱により遺存しない。柱穴の規模はやや大きく、450SK から須恵器平瓶（348）、563SK から土師器甕（360）などが出土しており、時期は C2 期に位置づけられる。

1558SB（第 65 図） E 区東部中央の第 1 面で検出された 3 間 × 5 間の掘立柱建物跡で、規模は 6.50 m × 10.40 m を測る。南東隅の柱穴は位置がずれており、北辺と東辺の柱穴の残存状況は不良である。柱間間隔は西辺で北から順に 2.00 m、

1.50 m、1.50 m、(1.20 m)、3.00 m、1.20 m となる。柱穴 2286SK から瀬戸窯産陶器天目茶碗（732）などが出土しており、時期は D3 期から E1 期と考えられる。

1559SB（第 66 図） E 区中央部の第 1 面に所在する 8.70 m × 19.40 m の規模を持つ 3 間 × 6 間の巨大掘立柱建物跡である。柱穴も大規模であるが、南西端の柱穴は検出できなかった。多くの柱穴から棧瓦など近世から近代にかけての遺物が出土していることから、時期は E2 期以降と位置づけられる。

1560SB（第 66 図） E 区東部で確認された 6.90 m × 7.00 m の規模を持つ 3 間 × 3 間の掘立柱建物跡である。南西端の柱穴は検出できない。多くの柱穴から棧瓦などが出土していることから、時期は E2 期と位置づけられる。

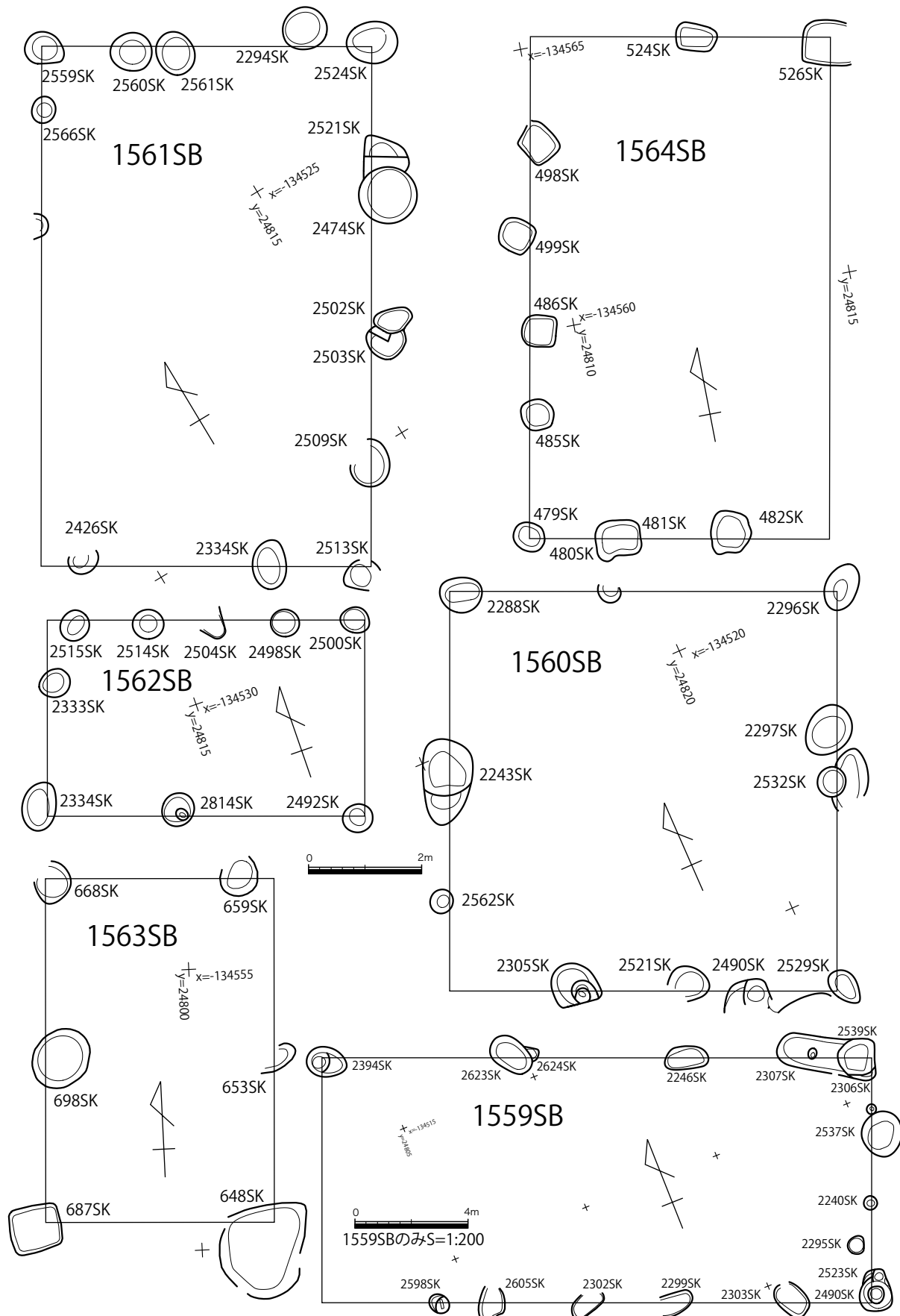
1561SB（第 66 図） E 区東部に存在する 3 間 × 4 間の掘立柱建物跡で、規模は 5.90 m × 9.20 m を測る。西辺の柱穴は攪乱により破壊されて不明である。直径が 1 m に近い大きな円形土坑を柱穴としており、全体に大振りな印象がある。柱穴からは土師器片が相当量出土するが、一部に碁子も含まれており、遺構の時期は新しいと推察される。E2 期であろう。

1562SB（第 66 図） E 区東部で検出された 1 間 × 4 間の掘立柱建物跡で、規模は 3.50 m × 5.60 m を測る。柱穴は直径が約 50 cm 以上を測る円形プランで、南辺はまばらである。北西端の柱穴は位置がややずれて検出された。建物跡の想定に問題があるかもしれない。2 基の柱穴から土師器片が出土したが、時期を特定するには至らない。

1563SB（第 66 図） D 区北部で確認された 4.00 m × 6.10 m の規模を持つ 1 間 × 2 間の掘立柱建物跡である。659SK は 1551SB に伴うものであることから、北東端の柱穴と認定することはできない。柱穴の規模は大きく不定形な形状のものが多く、653SK から土師器鍋片が出土したことから、時期は E 期と思われる。

1564SB（第 66 図） C 区北部に存在する 3 間

遺構



西浦遺跡

×3間?の掘立柱建物跡で、規模は5.30 m × 8.90 mを測る。東辺の柱穴群は438SDに切られ、また北西端の柱穴は調査区外にあり、両者とも不明となっている。西辺の柱穴列は全部で5基並んでいるが、498SKと485SKからは18世紀以降の遺物が出土している。これを活かせば、3間×5間の19世紀の掘立柱建物跡となるが、ここではこれを活かさずに（除外して）考えておきたい。すると、482SKと524SKからは灰釉陶器片が、499SKからは渥美湖西型山茶碗が出土しており、3間×3間の12世紀の掘立柱建物跡と考えることができる。

1565SB（第67図） C区北部で検出された1間×2間の細長い掘立柱建物跡で、規模は3.50 m × 8.60 mを測る。北西端の柱穴は不明となっている。柱穴は一辺が約70 cmの方形に近い形状で、柱穴469SKから灰釉陶器碗（350）が出土した。C3期の遺構と考えられる。

1566SB（第67図） C区中央部で確認された5.4m×4.0m以上の規模を持つ3間×2間以上の掘立柱建物跡である。東辺の柱穴は検出されなかった。520SKから須恵器杯蓋（357）が、472SKから灰釉陶器碗が出土したことから、C3期に位置づけられる。

1567SB（第67図） C区南部に存在する2間×2間?の掘立柱建物跡で、6.00 m × 8.80 mを測る大規模なものである。北西端の柱穴は上手く検出できていない。また、452SKと455SKは1555SBと重複する。柱穴の平面形は崩れた方形を呈する。452SKから19世紀の遺物が出土したのを除くと、柱穴出土遺物は灰釉陶器、須恵器（344）、土師器のみであり、C3期の遺構と考えられる。

1568SB（第67図） C区南部で確認された6.00 m × 10.30 mの規模を持つ2間×3間の掘立柱建物跡である。北西端は441SD、南部は438SDに切られ不明である。454SKから常滑窯

産陶器赤物片が出土した他は、柱穴からは古代に属する遺物のみが出土した。時期はC3期と想定したい。

1569SB（第68図） Ba区東部で検出された2間×3間の掘立柱建物跡で、規模は5.50 m × 10.40 mを測る。北東部の柱穴群が上手く検出できていないこともあり、やや復元に無理がある。136SKから瀬戸窯産陶器片が出土しており、E期に想定される。なお、203SKは常滑窯産陶器甕が埋設された遺構で、柱穴と考えるには相応しくないものである。

1570SB（第68図） Ba区東部で確認された6.30 m × 9.60 mの規模を持つ2間×5間の総柱掘立柱建物跡である。北東端は調査区外にあって、建物の規模はさらに拡がる可能性がある。136SKはここでは除外して考えておきたい。柱穴からは焙烙（685）や砥石（686）などが出土しており、時期はE1期と推測される。

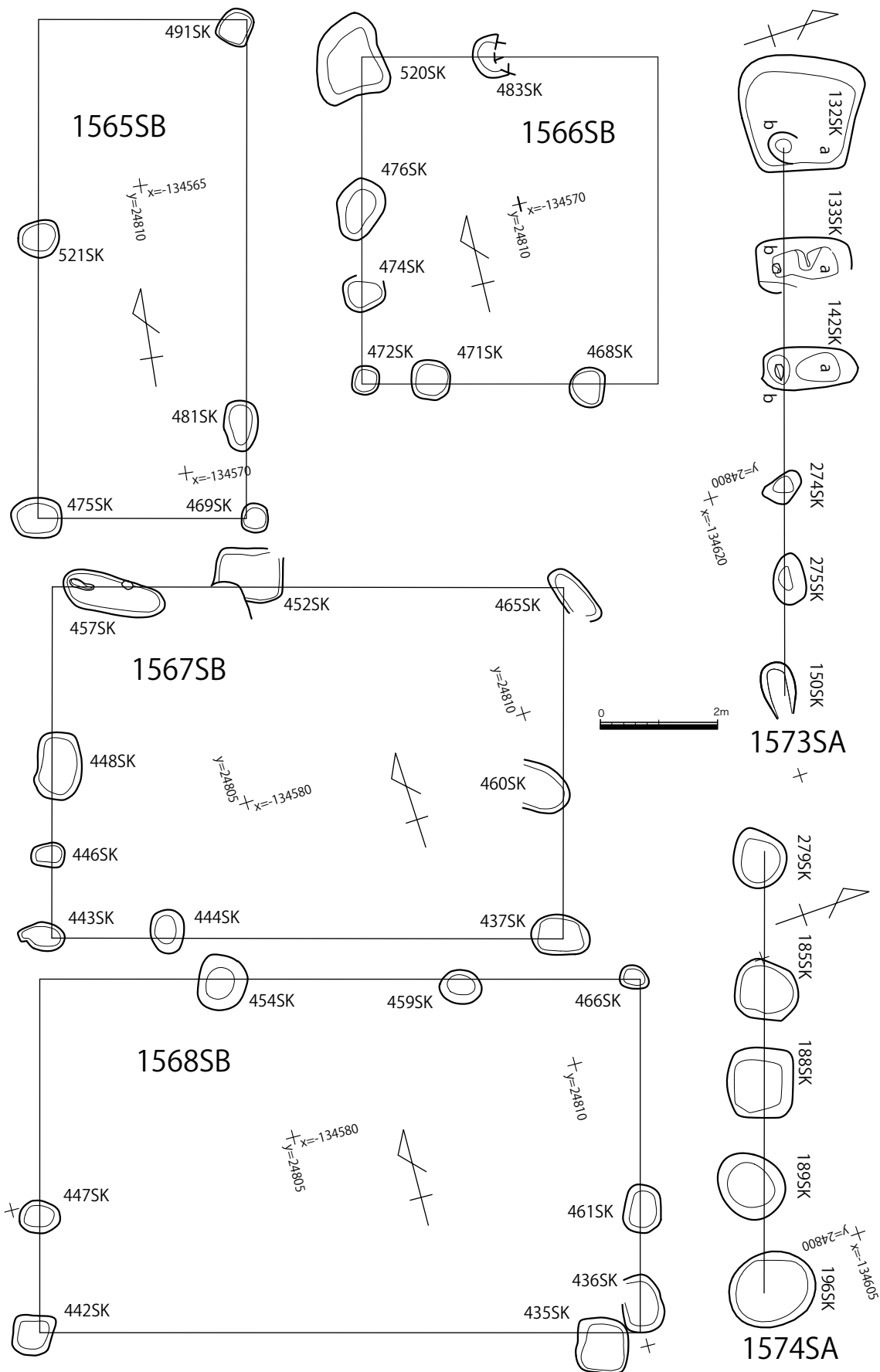
1571SB（第68図） Ba区東部に存在する2間×1間の掘立柱建物跡で、規模は6.20 m × 6.70 mを測る。柱穴は一辺が約100 cmの大規模な崩れた方形のものがある。柱穴140SKから灰釉陶器が出土しており、C3期に属する。

1572SB（第68図） Ba区東部で確認された1間以上×2間の掘立柱建物跡である。東部は調査区外に拡がり、全形は不明である。柱穴278SKから肥前窯産磁器などが出土しているのも、時期はE1期を考えておきたい。

1573SA（第67図） C区中央部で検出された5間分の掘立柱柵列跡で、全長9.50 mを測る。132SK、133SKと142SKは1570SBの柱穴と重複して存在する。時期はE期か。

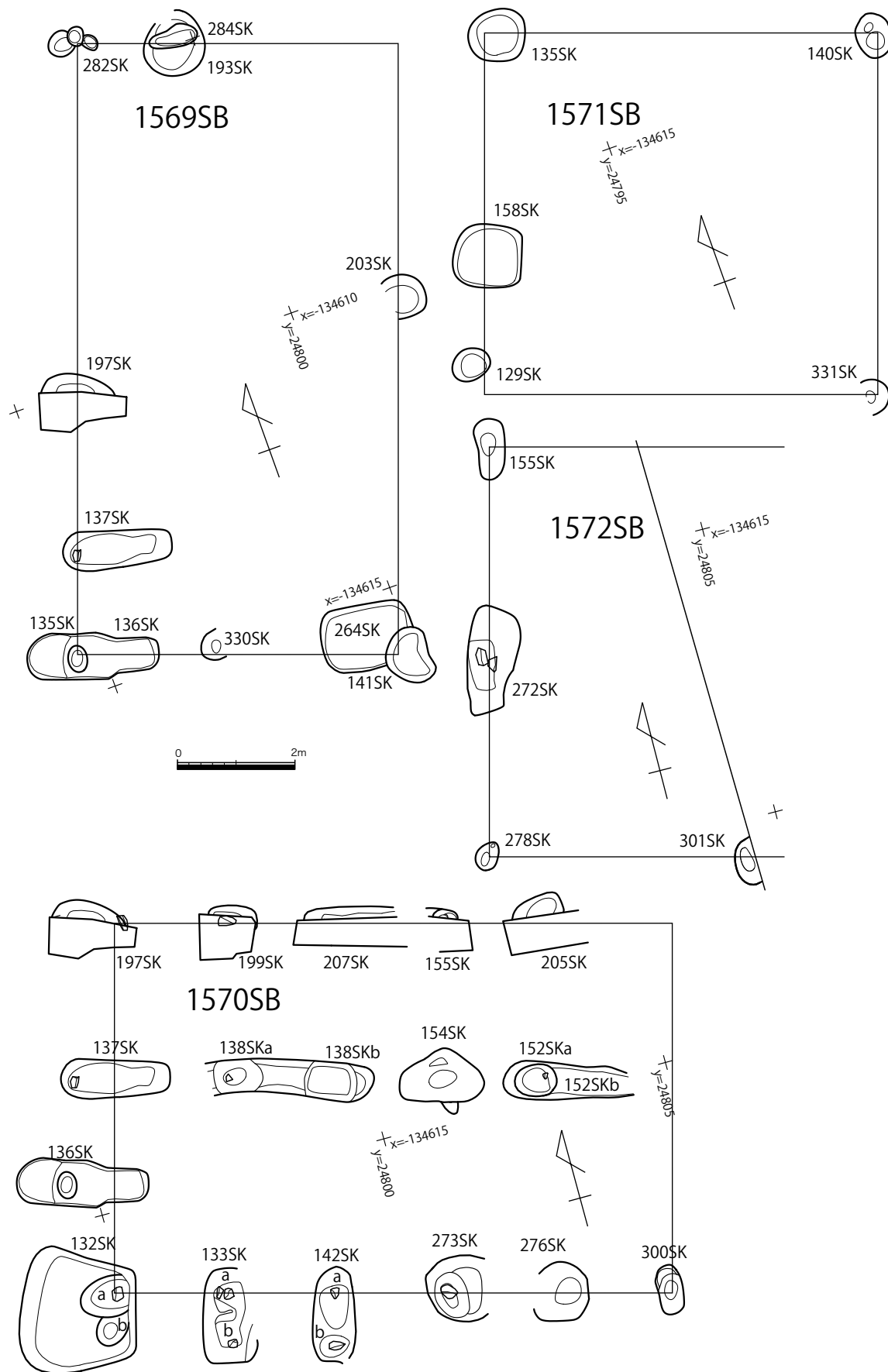
1574SA（第67図） C区中央部に所在する全長7.50 mの規模を持つ4間分の掘立柱柵列跡である。柱穴の平面形は全部隅丸方形となり、279SKから土師器皿（699）が出土した。時期はD3期と想定したい。

遺構



第 67 図 掘立柱建物跡 1565SB～1568SB, 1573SA, 1574SA 遺構図 (s=1:100)

西浦遺跡



第 68 図 掘立柱建物跡 1569SB～1572SB 遺構図 (s=1:100)

遺 構

第4節 墓

墓もしくは墓に関連する遺構には方形周溝墓と土器棺墓の2者がある。個別に解説する。

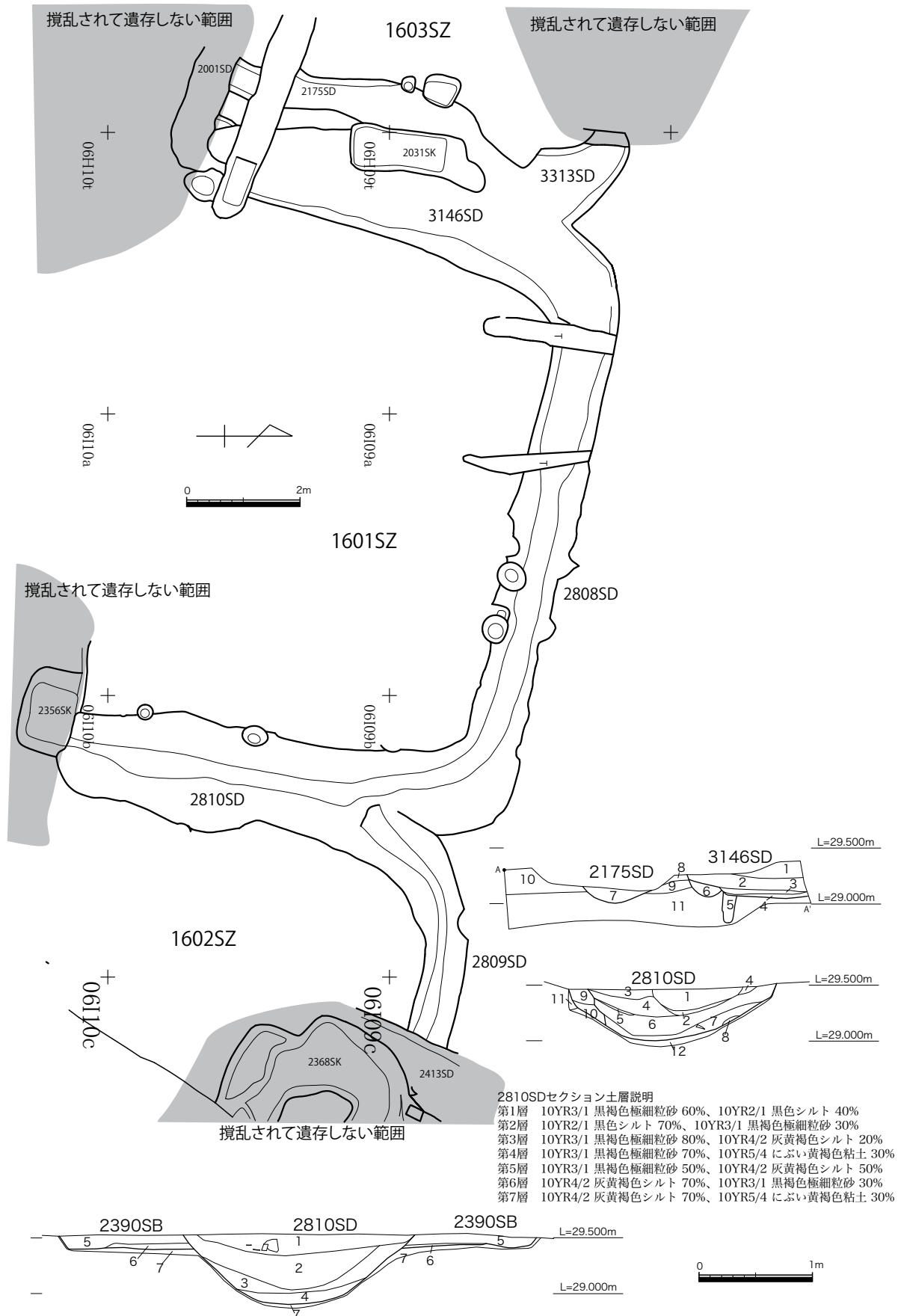
1601SZ (第69図) E区南部で検出された方形周溝墓である。2808SD・2810SD・3146SDを周溝とするが、南溝は攪乱の存在によって確認することはできなかった。ただし、2810SDの南端部で溝が収束するかのように底面が上がっていることから、南東隅に陸橋部を持つか、南溝がもともと存在しなかった可能性も考えられる。北東隅および北西隅では溝底がわずかに上がる形で陸橋部を形成していた。東西の溝心心間距離は11.00mを測り、南北方向は7m以上となる。埋葬遺構(主体部)などの他の施設は、遺構の重複が激しいため不明である。2808SDからはB1期からB3期に属する土器、2810SDからはB1期からB2期に属する土器、3146からはB2期に属する土器がそれぞれ出土している。2810SDはB2期に属する2390SBを切ることなどを考慮すると、1601SZの時期はB3期と考えられる。

1602SZ (第69図) E区南部で確認された方形周溝墓である。2809SD・2810SDを周溝とするが、東部は調査区外にあり、南溝は攪乱の存在によって確認することはできなかった。2809SDと2810SDが交わる北西隅では溝底がわずかに上がっていた。埋葬遺構(主体部)などの他の施設は、不明である。2809SDからはB1期からB3期に属する土器が出土している。1601SZと同様、時期はB3期と考えられる。

1603SZ (第69図) E区南部に存在する方形周溝墓である。3146SD・3313SDを周溝とするが、西部は調査区外にあり、かつ多くの攪乱の存在によって全体像を把握することはできなかった。1601SZと同様、時期はB3期と推定される。

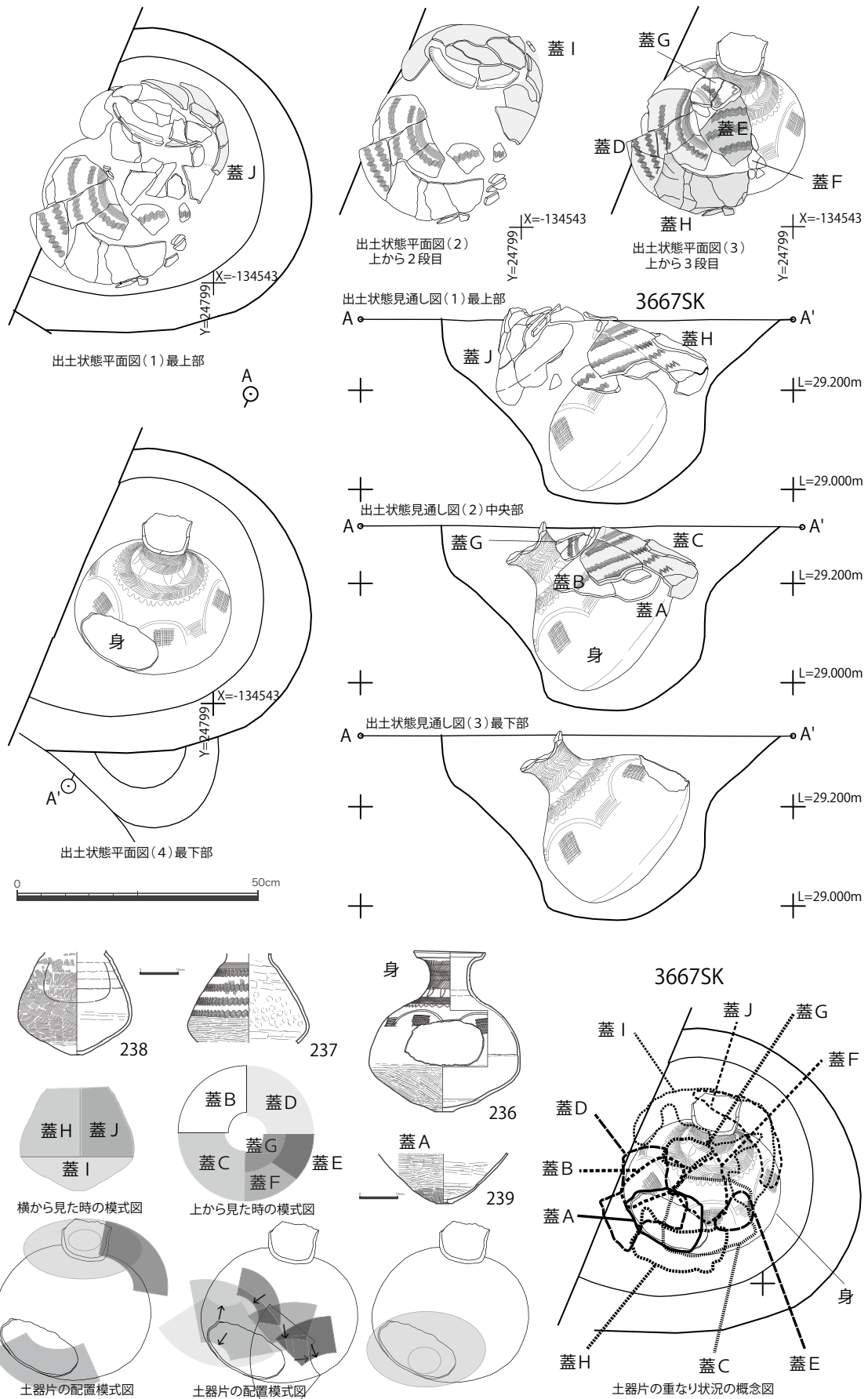
3667SK (第70図) E区南部で確認された土器棺墓である。長径0.64m、短径0.50m以上の楕円形の平面プランを持ち、横断面は2段に掘り込まれた形の土坑に、**受口状口縁太頸壺 (236)** が設置されていた。土坑は西端部が攪乱により破壊されており、3318SBと重複するが前後関係は特定できなかった。受口状口縁太頸壺は胴部が焼成後穿孔され、かつ口縁部が一部欠損したもので、胴部穿孔部分を斜め上方に向けるようにやや寝させた状態で置かれていた。設置された土器の下部は、土器が固定されるように粘土が充填されていた。太頸壺(236)の胴部穿孔部と口縁部には土器片によって何重にも重ねられて塞がれていた。胴部穿孔部は最初に**壺 239**の底部全体の破片(蓋A)を用いて全体が塞がれ、次いで**太頸壺 237**の胴部を割った土器片を重ねていた。太頸壺237の胴部はまずおおよそ4分割されており、そのうち3破片(蓋B・蓋C・蓋D)が順に重ねられ、残りの1破片をさらに3分割してその土器片(蓋E・蓋F・蓋G)も置かれた。土器片の配置と向き(矢印方向が土器の口縁部の方向)を図に示した。最後に**壺 238**の下半部を底部片1点と胴部半分の破片2点に分割し、胴部片(蓋H)を太頸壺(236)の胴部穿孔部の最上位に、底部片(蓋I)と胴部片(蓋J)を太頸壺(236)の口縁部に重ねた。太頸壺(236)内は土壌で充填されていたが、骨片や顕著な遺物は存在せず、**土壌水洗を行った結果**、頸部以外の部分から炭化種実が得られ、サンショウ属とサナエタデ・オオイヌタデ、タデ属、ササゲ属、ニガクサ属、オナモミ属、イネ果実・種子、コムギがわずかに得られた。土器の年代観から時期はB1期である。

西浦遺跡



第 69 図 方形周溝墓 1601SZ～1603SZ (平面図 s=1:100, 断面図 s=1:50)

遺 構



第 70 図 土器棺墓 3667SK 遺構図 (s=1:12.5)

西浦遺跡

第5節 井戸

井戸は全部で6基確認された。全て江戸時代に属する素掘り井戸であった。本遺跡では、湧水層までの地山の大部分は礫混じりのシルトや粘土であり、あまり井壁が崩落しない土壌であるため、井戸に井壁保護の構造物を持たないと考えられる。調査に際しては、安全確保のために、下部は重機により断ち割る形で掘削しており、詳細な構造は把握できていない部分があることをあらかじめ断っておきたい。

304SK (第71図) Ab区北東部で確認された素掘り井戸である。長径1.74 m、短径1.57 mを測るほぼ円形の平面プランを持ち、深さは遺構検出面から約4.00 mである。標高25.5 m付近まで掘削されており、調査時点では標高25.7 m付近で湧水が認められた。横断面形は箱形で、地山の17層でわずかに崩れた痕跡を見せる程度であった。内部は大部分が黒色シルトなどの班土で一気に埋め立てられているが、最上部のみは約10 cmの厚さで順に灰黄褐色シルトなどが堆積しており、やや堅く締まった状態となっていた。内部から棧瓦や陶磁器片などが多数出土しており、時期はE2期に位置づけられる。

305SK (第71図) Ab区北東部で検出された素掘り井戸である。304SKに隣接して検出された。長径0.90 m、短径0.89 mを測る円形の平面プランを持ち、深さは遺構検出面から1.65 mである。標高25.7 m付近まで掘削されており、調査時点では湧水が認められなかった。横断面形は箱形で、黒色シルトと黒褐色極細粒砂の班土で一気に埋め立てられていた。出土遺物は認められない。井戸を構築しようとして途中で放棄されたものと想像される。時期はE1期ではなかろうか。

426SK (第71図) C区南端部に所在する素掘り井戸である。南半が調査区外に拡がっており全形は不明であるが、およそ直径2 mの円形平面プランを持ち、深さは遺構検出面から2.65 m

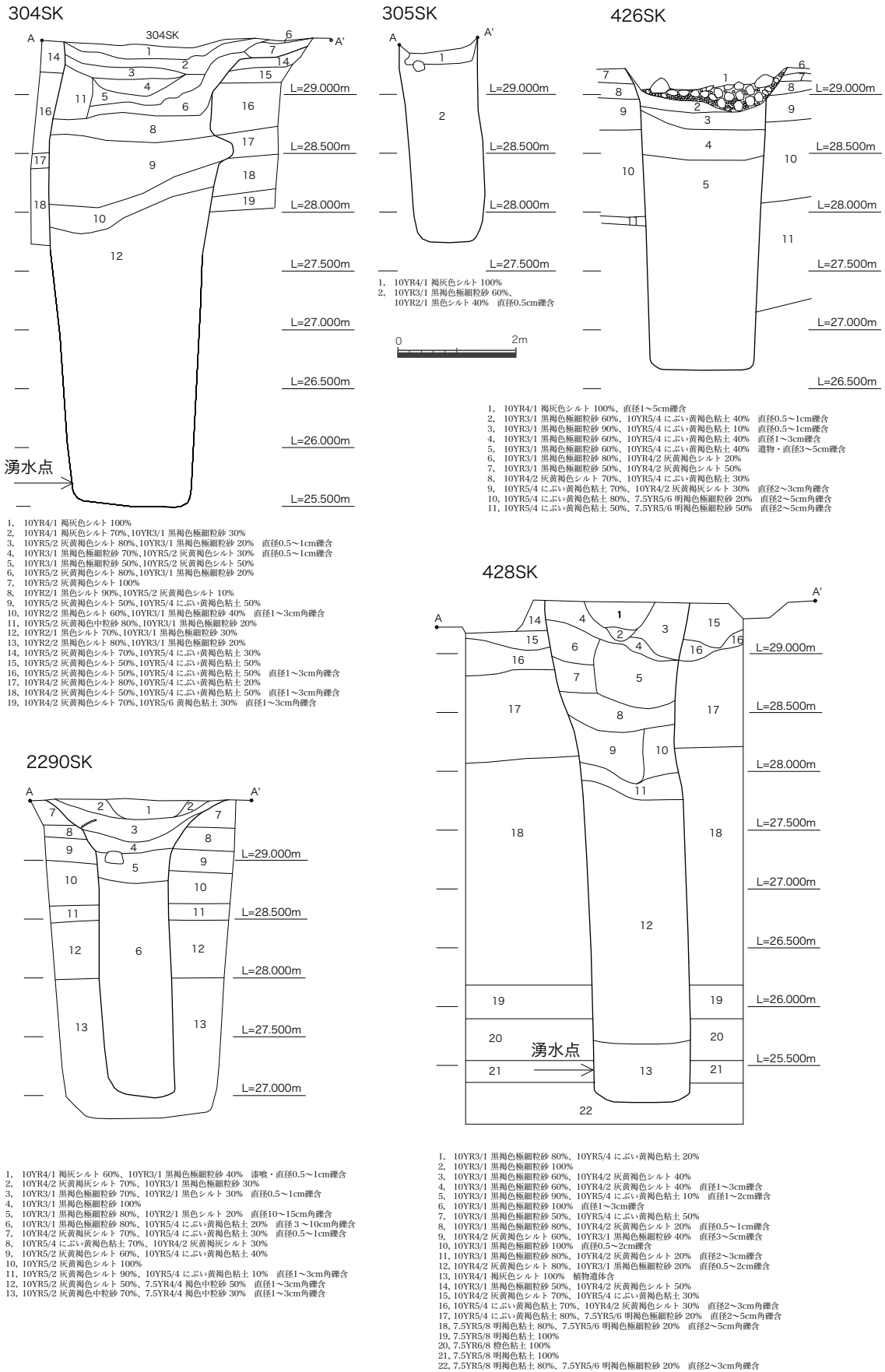
を測る。標高26.7 m付近まで掘削されており、調査時点では井戸底付近で湧水が認められた。横断面形は箱形で、内部は大部分が黒色シルトなどの班土で一気に埋め立てられていた。最上部は厚さ約20 cmの礫層で覆われていた。地盤沈下を防ぐ意図があったと推定される。内部から棧瓦や陶磁器片など(546~594)が多数出土しており、時期はE1期に位置づけられる。

428SK (第71図) C区南東部に存在する素掘り井戸である。長径1.45 m、短径1.14 mを測るほぼ円形の平面プランを持ち、深さは遺構検出面から4.33 mである。標高25.2 m付近まで掘削されており、調査時点では標高25.4 m付近で湧水が認められた。横断面形は箱形であるが、上位でわずかに屈曲していた。内部は大部分が黒色シルトなどの班土で一気に埋め立てられているが、最上部で特に堅く締めるなどの工夫はあまり認められなかった。内部から棧瓦(707)や陶磁器片などがわずかに出土しており、時期はE2期に位置づけられる。木製品として結物底板(708)も存在した。

2290SK (第71図) E区中央部で検出された素掘り井戸である。長径1.59 m、短径1.07 mを測るほぼ円形の平面プランを持ち、標高27.0 m付近まで掘削されていた。調査時点では井戸底付近でわずかに湧水が認められた。横断面形は箱形で、上位が擂鉢状に拡がっている。内部は大部分が黒色シルトなどの班土で一気に埋め立てられているが、最上部のみは約10 cmの厚さで順に灰黄褐色シルトなどが堆積しており、やや堅く締まった状態となっていた。内部から棧瓦や陶磁器片などが出土しており、時期はE2期に位置づけられる。

3668SK (写真図版16) E区南東端部で検出された素掘り井戸であるが、深さなどの詳細は不明。出土遺物から時期はE2期に位置づけられる。

遺 構



第 71 図 井戸 304SK, 305SK, 426SK, 428SK, 2290SK 遺構図 (s=1:100)

西浦遺跡

第6節 溝

溝は大小さまざまなものが認められ、ほぼ全て素掘り溝であった。既に方形周溝墓や竪穴建物跡の周溝などで一部を紹介しているが、これ以外の主要な遺構を紹介したい。

002SD（第72図） Aa区南部で確認された幅1.07 m、深さ0.19 mを測る東西方向の溝である。**001ST**と003SDに平行して走る。出土遺物からみてD3期に位置づけられる。

003SD・004SD（第72図） Aa区1面の中央部で確認された東西方向の溝で、東半部は重複している。003SDは幅0.83 m、深さ0.18 m、004SDは幅1.04 m、深さ0.47 mを測る。004SDが埋没した後に003SDは掘削された。024SDは003SDと004SDの埋没後の凹部を認識したもののだろう。003SDからは瀬戸美濃窯産陶器擂鉢(663)などが、004SDからは東端部付近の礫群で土師器皿など(659～662)が出土していることを考え合わせると、003SDはD3期、004SDはD2期に位置づけられる。003SDは002SDとセットで道路を形成した可能性が考えられる。

005SD～008SD・023SD（第76図） Aa区1面の中央部で確認された南東—北西方向の溝群である。005SDは幅0.48 m、深さ0.03 mと非常に浅く、乱杭列022SAが伴う。杭列は径約10 cmの**丸太材の先端を尖らせた杭**（**755・756**）が使用され全部で164本が確認された。006SD～008SDは幅0.30～1.14 m、深さ0.20 m前後の規模を持ち、005SDと平行して走る。006SDの覆土には砂利が充填されその上面は硬化しており、杭6本が用いられた杭列093SAが伴う。023SDは幅1.46 mと広くクランクしていて、北肩に杭列054SAが伴う。先端を尖らせた杭が使用され全部で56本が確認された。これらの溝群と杭列群は同時に存在した可能性は低く、長期間にわたって地境を示した遺構群と考えられる。出土遺物などからみてE2期に位置づけられる。

044SD（第72図） Aa区2面北東部で確認さ

れた緩やかに屈曲する溝で、幅0.83 m、深さ0.20 mを測る。008SDの下位で検出され、096SDに切られている。出土した土師器内耳鍋(666)からみてD2期に位置づけられる。

050SD（257SD）（第72図） Aa区からAb区にかけて確認された幅0.92 m、深さ0.11 mを測る溝である。北東—南西方向に走り、北部では044SDと、南部では055SDと概ね平行する。途中で溝が途切れ陸橋部を持ち、南端部は001STにより不明である。003SDに切られ山茶碗が出土したことからみて、時期はD1期と想定される。

052SD（第72図） Aa区2面の西部でほぼ南北方向に走る形で検出された幅0.77 m、深さ0.10 mを測る溝である。095SDと096SDに切られることからD1期に属する可能性がある。

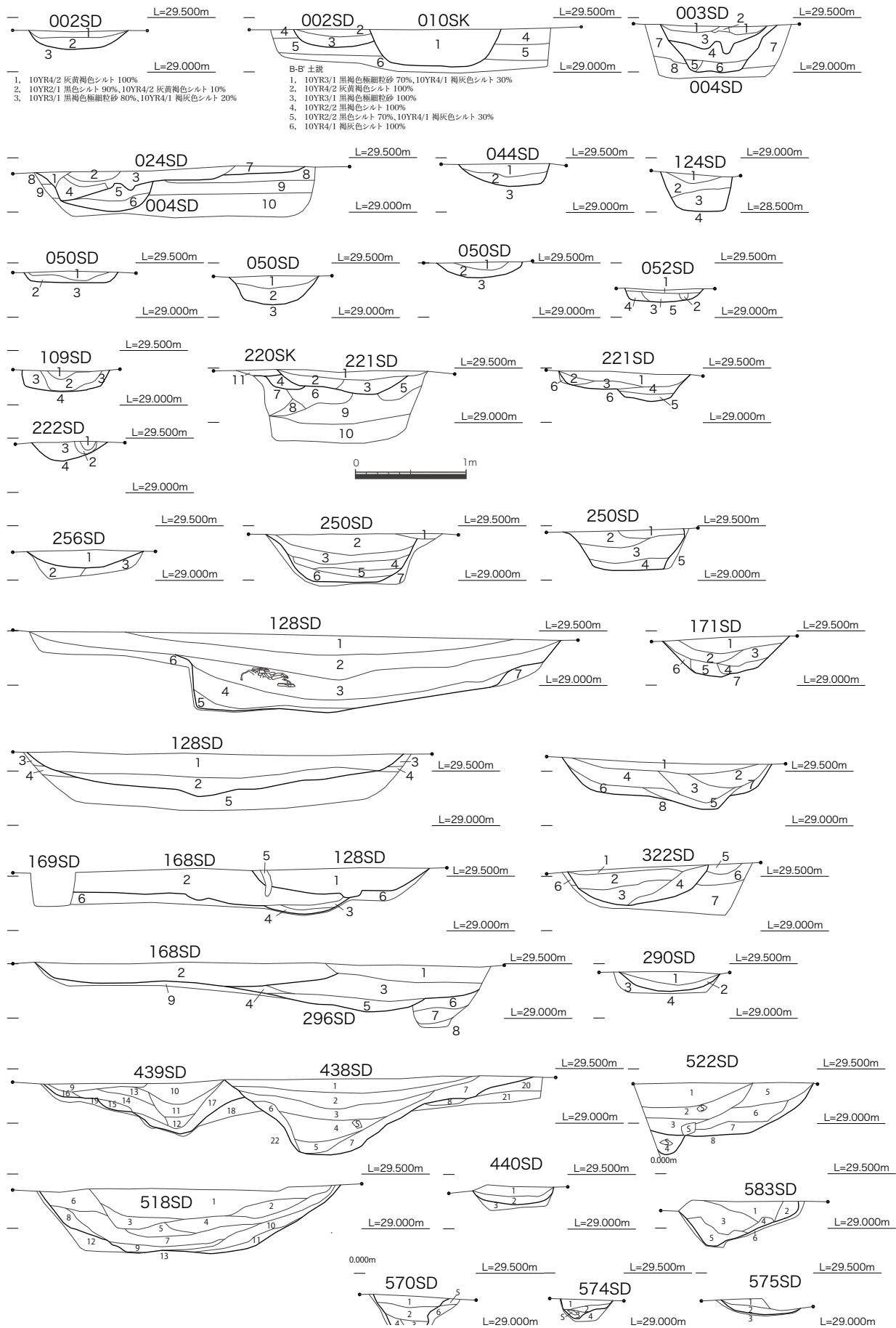
055SD Aa区南部の001ST床面で検出された幅2.36 m、深さ0.12 mを測る溝である。050SDと平行して走る。出土遺物(667～673)からみてD3期に位置づけられる。

095SD・096SD Aa区2面の中央部で確認された南東—北西方向の溝群である。両者は概ね平行するが北部で接近している。095SDは幅0.91 m、深さ0.27 mの箱堀状の横断面となり005SDと006SDに切られる。一方、096SDは幅1.24 m、深さ0.14 mと船底状の横断面で、044SDを切り008SDに切られる。095SDから出土した土師器皿(681)を参考にするとD3期に位置づけられよう。

109SD（第72図） Aa区2面で検出された小規模な溝で、050SDを切り096SDなどに切られる。出土遺物からみてE2期に属する。

124SD（第72図） Aa区2面で確認された横断面が方形となる溝であるが、南部の行方が不明となっている。出土遺物からみるとD2期に属する。

128SD（第72図） Ba区1面で検出された幅2.46 m、深さ0.70 mを測る溝である。Ba区の



第 72 図 溝遺構図 (1) (s=1:50)

西浦遺跡

南西隅部から北北東方向に伸び、Ba 区北東部で東南東方向に屈曲する。しかし、隣接する Ab 区と Bb 区では対応する溝状遺構を明瞭に確認することができなかった。また、南部については方位を共通にする 221SD との関連が想定されるが、規模が大きく相違している。北溝は西溝に比べ幅も深さも大規模となり、屈曲部で石材や陶磁器類が廃棄されていた。西溝は東西方向の溝 168SD などと交わり、171SD は 128SD と同時期に存在し分岐していた可能性が高い。出土遺物（462～493）からみて E3 期に位置づけられる。

139SD・156SD・169SD Ba 区 1 面で検出された幅 0.50 m 前後、深さ 0.30 m 前後を測る断面箱形の溝群である。3 条ともほぼ正しく南北方向に掘削され、全ての遺構を切る形で検出されたことから、現在の地割が形成された段階の溝と思われる。139SD からは 18 世紀に属する遺物が出土したが、時期は E2 期以降と推測される。126SD も同様の溝の可能性がある。

168SD・171SD・296SD（第 72 図） Ba 区 1 面にて概ね 128SD に直交する形で検出された溝群である。東端部は 128SD に切られ収束し、西部は調査区外へ拡がる。168SD が幅 2.85 m、深さ 0.14 m、171SD が幅 1.17 m、深さ 0.17 m、296SD が幅 1.75 m、深さ 0.40 m を測る。遺構の重複関係は古い順に 296SD → 168SD → 128SD となる。168SD は山茶碗や中国製青白磁片が出土しており D1 期、171SD は肥前染付碗（685）などが出土しており E1 期、296SD は近世陶磁器などを含むが須恵器（339）などを重視すると C 期に位置づけられる。

190SD・507SD（第 72 図） Ba 区 1 面で検出された幅 1.95 m、深さ 0.40 m を測る溝である。西端部は 128SD に交差する直前で収束し、東端部は 507SD につながり調査区外に拡がる。西側の延長部では、128SD と連結する溝 296SD が存在し、一対になっていた可能性が考えられる。焙烙や棧瓦などが出土しているが、1570SB に切られるので、時期は D3 期と推測される。

221SD・250SD（第 72 図） Ab 区 2 面の中央部で確認された南東—北西方向の溝群である。両者は平行して走り、概ね溝心間距離は 8.50 m を測る。221SD は幅 1.35 m、深さ 0.27 m の船底状の横断面、250SD は幅 1.53 m、深さ 0.44 m と箱堀状の横断面を呈する。221SD から出土した白磁小杯（681）を参考にすると E1 期に位置づけられよう。222SD はこの両溝の間を結ぶ形で検出されており、一連の遺構と思われる。

323SD（第 72 図） Ba 区 2 面で検出された溝である。323SD に切られており、335SD と関連するものかも知れない、C2 期前後か。

332SD Ba 区 2 面で検出された幅 1.41 m、深さ 0.31 m を測る溝である。概ね 128SD と同じ北北東方向に伸び、Ba 区中央部で東南東方向に屈曲し、東端部でやや浅くなる。位置からみて、おそらく Bb 区 508SD につながるだろう。323SB を切ることとわずかに出土した遺物から、時期は C3 期と推測される。

438SD（第 72 図） C 区 1 面で検出された幅 2.70 m、深さ 0.71 m を測る溝である。128SD とほぼ同じ北北東方向に伸び、両端は調査区外へ拡がっている。北端部は東側に屈曲する雰囲気も見られたが攪乱のために確認できていない。溝肩の斜面は東側よりも西側が急峻である。腰鎗茶碗（599）や棧瓦が出土したことから埋没時期は E2 期と推測される。ただ、出土遺物には内耳鍋類など（602～609）が多いことから、D2 期に掘削されたか、D2 期の遺構を破壊して構築された可能性が考えられる。

439SD（第 72 図） C 区 1 面で検出された幅 1.75 m、深さ 0.33 m を測る溝で、概ね 438SD と並走する。ただし、調査区中央部で収束し北側には展開しない。南端部は遺構群に切られ不明である。土層断面上は 438SD に切られるが、上層は 438SD と併存していた可能性が高い。出土遺物から E2 期と推測される。

440SD（第 72 図） C 区 1 面南部で確認された幅 0.70 m、深さ 0.18 m を測る溝である。438

遺 構

SD や 441SD と直交する配置だが、これらの溝に切られている。出土遺物と検出状況から E1 期と推測される。

441SD・533SD C 区 1 面西端で検出された溝で、幅 2.00 m、深さ 0.20 m の規模を持ち、両端は調査区外に拡がっている。北部では溝の中心に近い位置で石列 1060SX を検出した。石列 1060SX は西側に面を揃えており、石列を東肩にした溝 533SD が想定される。ただし、対となる西側の石列は確認されなかった。このように 441SD はいくつかの段階に分けられるが、埋没時期は出土遺物から E2 期と推測される程度しか判明していない。

518SD・587SD C 区中央に所在する南北方向の溝である。518SD は 1 面、587SD は 2 面で検出されていること、および両者の間に 517SK と 925SK があることから、確定できないが両者は同一の溝と思われる。518SD は幅 0.87 m、深さ 0.41 m を測り、南部は東に緩やかに屈曲して最終的には 438SD に合流する。587SD は幅 1.21 m、深さ 0.41 m を測り、北端部は 438SD から斜めに分岐する形となっている。時期は出土遺物と検出状況から E2 期と比定される。

522SD(第 72 図) C 区北端に存在する深さ 0.44 m の溝で、北東—南西方向に走る。遺構の大部分は調査区外にあるが、わずかに折れて 441SD につながるものと推測される。出土遺物から E2 期と思われる。

570SD・574SD・585SD(第 72 図) C 区 2 面西端で検出された幅 0.80 m 前後の溝群である。長さは 4 m 前後と短く、横断面は U 字形となる。弥生時代から古墳時代の土器片のみが少量出土することから、方形周溝墓の可能性も考えられたが、確定には至っていない。

583SD(第 72 図) C 区に所在する幅 1.13 m、深さ 0.18 m を測る溝である。2 面で確認されたが、441SD と 587SD を結ぶような形で検出された。溝の形状も凹凸がやや激しい。出土遺物(627～631) からみて E2 期と推測される。

601SD(第 73 図) D 区に 1 面で確認された幅 1.13 m、深さ 0.36 m を測る溝である。北北東から南南西に走るもので、南端部は東に屈曲し、北端部は調査区外に展開するが E 区では存在を確認できなかった。出土遺物(719～720) からみて E1 期と推測される。

603SD D 区に 1 面で確認された幅 0.70 m、深さ 0.25 m を測る東西溝である。601SD の屈曲部のさらに南に所在し、601SD との関連が注目される。E 期。

763SD(第 73 図) D 区に 2 面で検出された幅 0.91 m、深さ 0.15 m を測る溝である。L 字状に屈曲するが、全体の形状は不明。出土遺物(728) からみて E2 期と推測される。

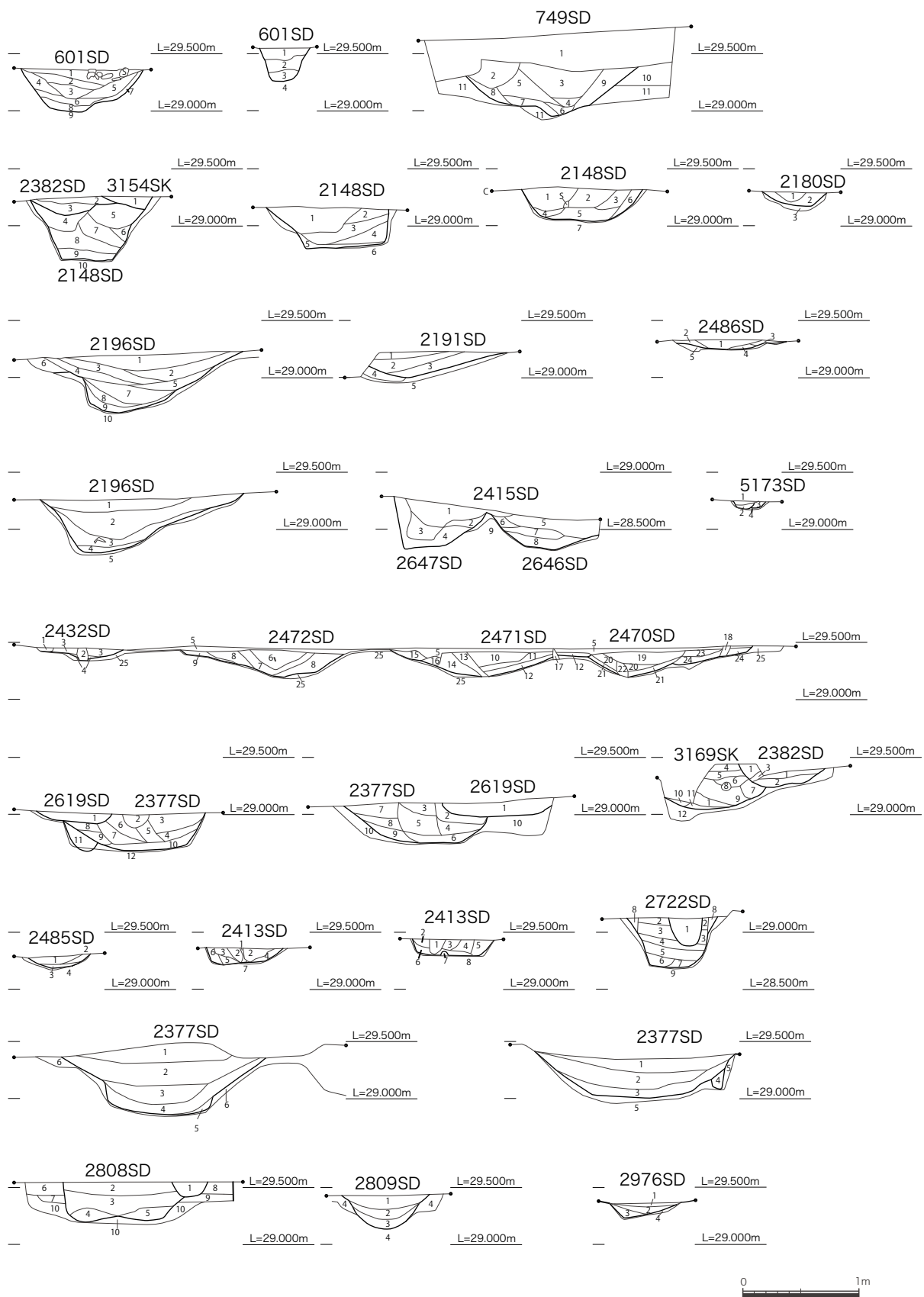
2078SD E 区に 1 面で検出された大溝で、現代まで使用されたと思われる。

2148SD(第 73 図) E 区に 1 面で検出された幅 0.85 m、深さ 0.47 m を測る溝である。北北東から南南西に走るもので、E 区全体を縦断しており、総延長 53 m を越える。北半部で屈曲した 2382SD と重複する部分があり、2148SD の方が下位に存在する。北端部付近の 2377SD と 2078SD 付近で溝は途切れているので、2377SD とは同時に存在していた可能性がある。攪乱や遺構の重複が激しく、出土遺物には近世に属するものが少なからず含まれるが、土師器(392)や灰釉陶器(391)も一定量認められる。時期は C3 期に比定したい。

2180SD・2147SD(第 73 図) E 区に 1 面で検出された溝で、概ね 2148SD に直交する方向に走る。2147SD は幅 0.42 m、深さ 0.46 m を測り土器片のみが出土した。2180SD は幅 0.57 m、深さ 0.17 m を測り、焙烙(730)などが出土した。ここでは E2 期の遺構と考えておきたい。

2191SD(第 73 図) E 区西端部に 1 面で検出された幅 1.22 m 以上、深さ 0.22 m を測る溝である。概ね 2148SD と平行する形で検出された。出土遺物には棧瓦が含まれるが、山茶碗も存在しており、D1 期と位置づけたい。

西浦遺跡



第 73 図 溝遺構図 (2) (s=1:50)

遺 構

2196SD (第 73 図) E 区に 1 面で検出された幅 1.35 m、深さ 0.46 m を測る溝である。2148 SD の東側でほぼ並走する形で伸び、北端は調査区縁辺部(台地端部近く)で東に緩やかに屈曲している。溝は途中で中断するが 2223SD などがある延長部と思われる。南端は調査区南部中央で東に屈曲し 2470SD につながっている。一部で溝肩部分にピット(2573SK など)が並ぶ部分があり、橋状の遺構が想定される。渥美湖西型山茶碗(393)などが出土しており、D1 期と位置づけられる。

2238SD E 区に 1 面で検出された箱堀状の溝で、近代以降と思われる。

2377SD (第 73 図) E 区に 1 面で検出された幅 1.86 m、深さ 0.43 m を測る溝である。西北西から東南東に向けて E 区全体を横断しており、総延長 42 m を越える。横断面は逆台形を呈しており、上部は人工的に埋め立てられていた。鉄鍬が 1 点出土した。須恵器や土師器などの出土遺物(267~278)からみて C1 期に属する。

2382SD(第 73 図) E 区西半で検出された幅 1.20 m、深さ 0.13 m を測る溝である。西北西から東南東に向けて走り、2148SD と交差する位置で屈曲し 2148SD と重複する。重複したその先がどこで収束したかは不明である。渥美湖西型山茶碗(398)などが出土しており、D1 期と位置づけられる。

2413SD (第 73 図) E 区南端から北北東に伸びる溝で、2470SD と重複する位置で折れて収束する。南部の行方は不明だが、763SD につながるかもしれない。幅 1.24 m、深さ 0.17 m を測り、近代陶磁器まで出土する溝である。E2 期以降と比定する。

2415SD・2646SD・2647SD (第 73 図) E 区北端部に概ね台地縁辺部に並走するように設けら

れたやや彎曲する溝群である。2464SD と 2467 SD の上位に 2415SD が存在し、繰り返し掘削されたことが分かる。2220SD・2222SD・2223SD などと同様の遺構と思われる。2415 SD から須恵器(390)が出土しており、C1 期に位置づけられる。

2432SD・2470SD・2471SD・2472SD(第 73 図) E 区東部で 1 面遺構として検出された溝群である。概ね幅 0.80~0.90 m、深さ 0.11~0.25 m を測る溝で、2472SD は幅が 1.49 m となってやや広い。2196SD の南端から東南東に伸びて調査区外に拡がる。蛇行しながら走り、2471SD は 2470SD から分岐している。溝単体は浅いが、溝群の位置の地形全体がやや下がっている状態となっており、その周囲では土坑などの遺構はあまり存在していない。渥美湖西型山茶碗(399)などが出土しており、D1 期と位置づけられる。

2485SD・2486SD (第 73 図) E 区中央で検出された短い溝である。2485SD は 2196SD の、2486SD は 2472SD の延長部に相当するか。

2673SD E 区に 1 面で検出された幅 0.13 m、深さ 0.10 m を測る溝である。2382SD とほぼ並走する方向であり、2148SD と切り合ってその東側は不明である。渥美湖西型山茶碗(402~404)などが出土しており、D1 期と位置づけられる。

2722SD (第 73 図) E 区に 2 面で検出された幅 0.86 m、深さ 0.37 m を測る南北溝で、総延長は 8.54 m に及ぶ。断面は箱堀状であるが、これと対応する溝が存在せず、遺構の評価は難しい。出土土器(169~171)から B3 期に属する。

2976SD (第 73 図) E 区に 1 面で検出された幅 0.45 m、深さ 0.10 m を測る溝である。竪穴建物跡の周溝と思われるが、対応する遺構を検出できなかった。

西浦遺跡

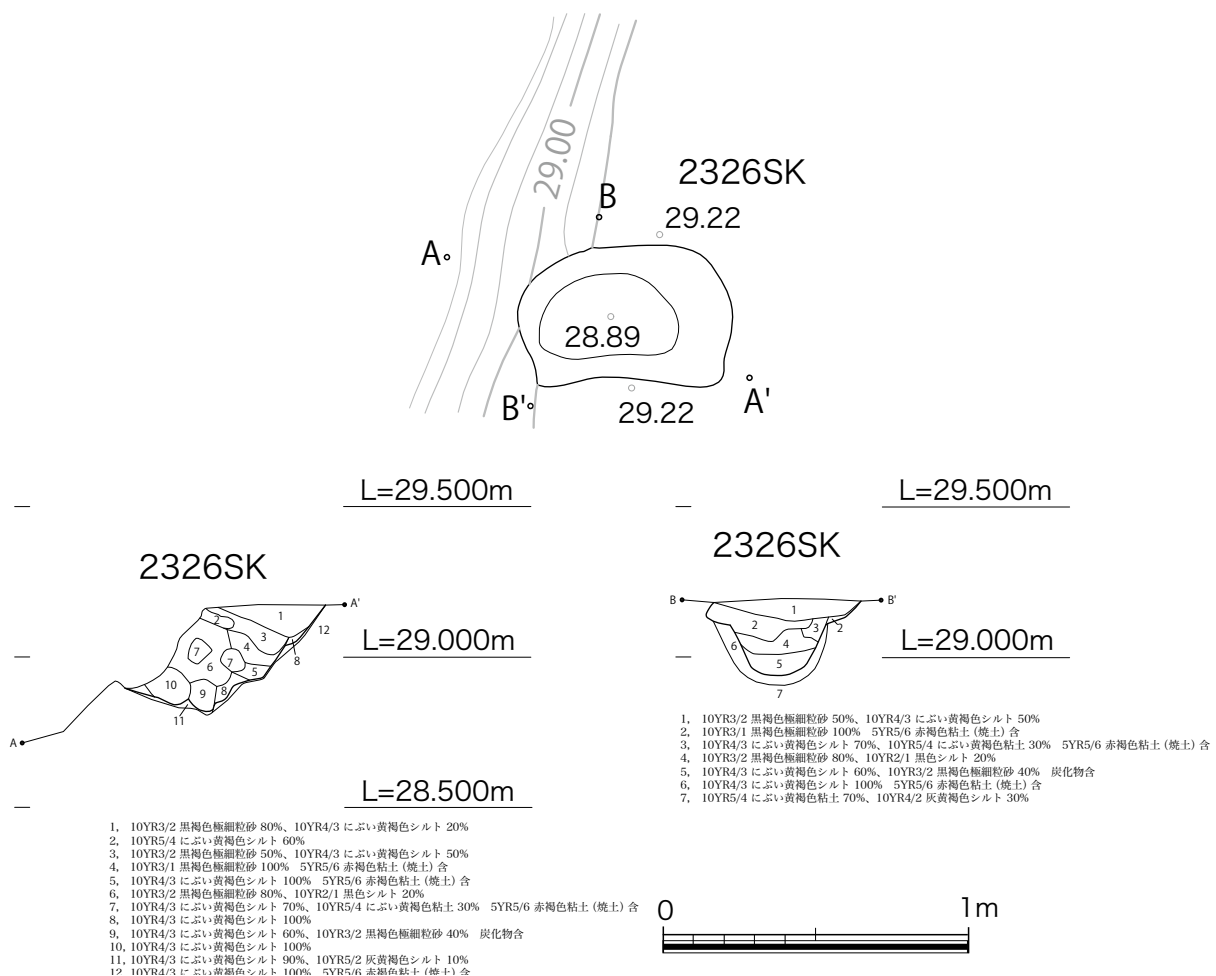
第 7 節 その他の遺構

これまでに紹介してきた竪穴建物跡・掘立柱建物・墓・井戸・溝以外にも、土坑など多種多様な遺構が存在するが、多くは性格が不明なものである。ここではその他の遺構と節を設けて、上記の 5 種以外の遺構を一括して報告することとした。

(1) 煙道付炉穴

2326SK (第 74 図) E 区西部中央に位置し第 1 面目で検出された遺構である。西部が 2078SD により切られている。残存長 0.71 m、幅 0.43 m、深さ 0.33 m を測る小規模な土坑で、平面形は長楕円形を呈する。土坑の壁面は全面にわたって被

熱され赤変していた。横断面は U 字形で地表面近くでは直立気味に立ち上がり、縦断面は V 字形に掘削されて東壁はほぼ 45 度の勾配を持つ斜面となっていた。埋土には焼土ブロックが散在しており、天井部などの赤変した壁が崩落したもののと思われる。出土遺物は全く存在せず、時期は特定できないが、近隣の諸遺跡の類例からみて、縄文時代早期の煙道付炉穴であった可能性が考えられる。ちなみに本遺跡の北側約 1 km に所在する豊橋市多り畑遺跡では、平成 22 年の発掘調査の際に縄文時代早期の竪穴建物跡と土器群が確認されており、その関連が注目される。



第 74 図 煙道付炉穴 2326SK 遺構図 (s=1:25)

遺 構

(2) 集石遺構

236SK (第 75 図) Ab 区で検出された集石遺構である。長径 2.13 m、短径 1.62 m、深さ 0.30 m の断面皿形の浅い土坑で、下半には多くの陶磁器や瓦類とともにチャートなどの円礫が充填されていた。上部は礫などを含まない土壌で覆われていた。平面図には南半部に礫群が描かれていないが、調査上のミスで図化できていないものである。出土遺物 (494~529) からみて時期は E1 期に位置づけられる。

431SK (第 75 図) C 区南東端部に位置する長径 1.14 m、短径 1.12 m、深さ 0.38 m を測る土坑である。底部にチャートなどの円礫が多数含まれていたが、236SK よりは礫群の密度は低い。常滑窯産陶器赤物製品の破片が出土しており、時期はおそらく E2 期であろう。

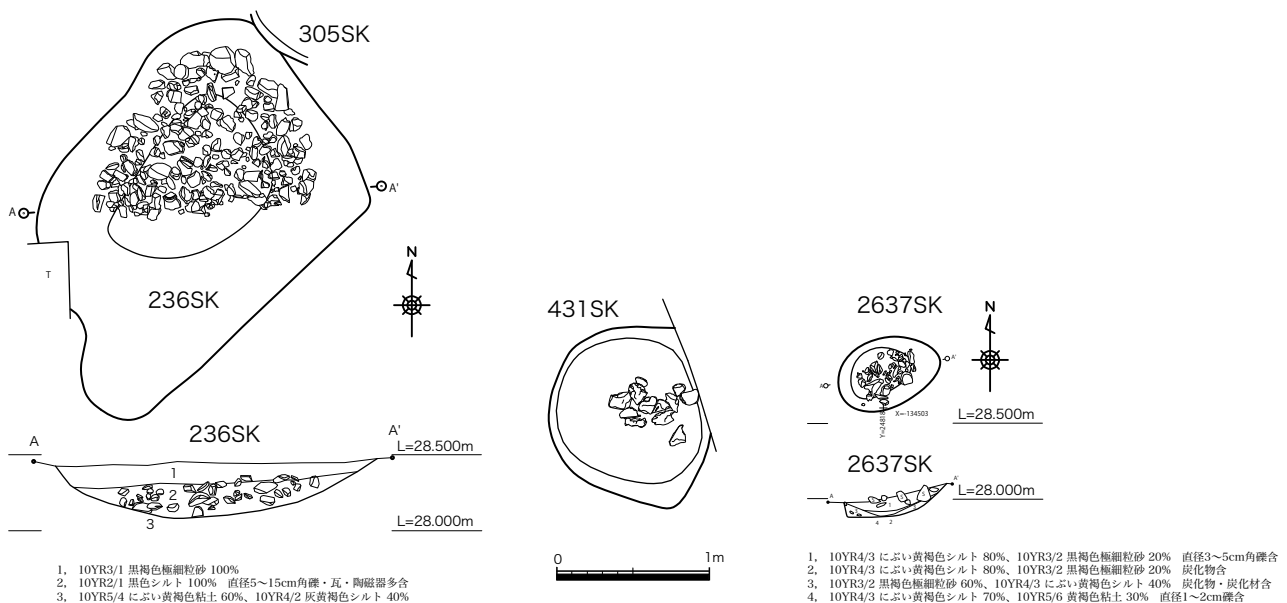
2637SK (第 75 図) E 区北部中央に位置し第 1 面目で検出された集石遺構である。長径 0.75 m、短径 0.53 m、深さ 0.33 m を測る楕円形の土坑で、平面規模に比べやや深い。チャートなどの角礫が炭化物とともに充填されていた。出土遺物は存在しないが、比較的新しいものと思われる。

(3) 池状遺構

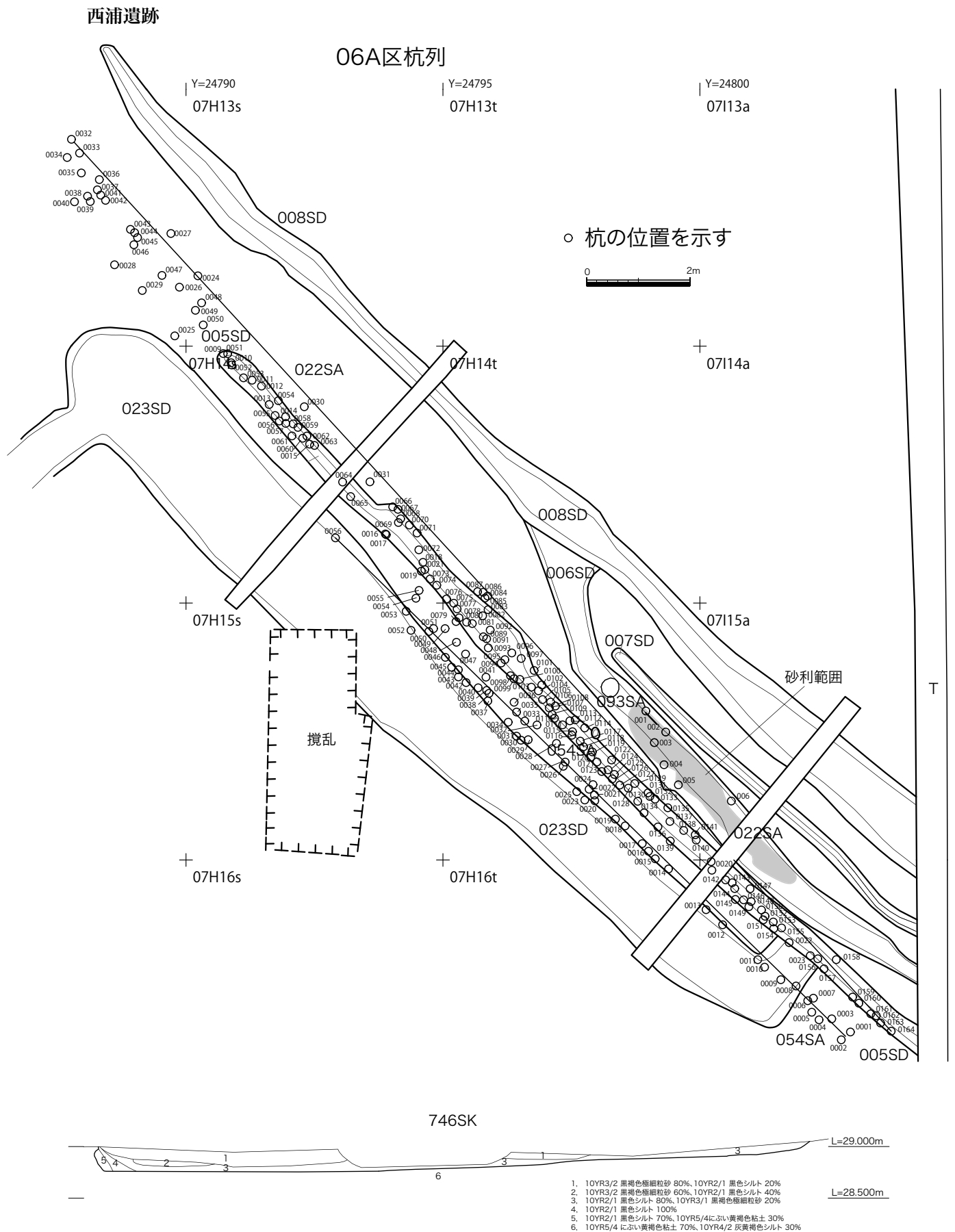
746SK (第 76 図) D 区北半部で検出された浅く平坦な土坑である。平面形は長径 7.04 m、短径 3.32 m の楕円形となり、特に西半部では堀形が下半を内側に括るようになっていた。南東部で 723SK と接続し、601SD にもつながっている。中央から土師器内耳鍋 (598) などが出土しており、時期は E1 期に属する。

(4) 甕埋設遺構

常滑窯産陶器甕が正位置で埋設される土坑には 432SK・2351SK・2354SK (写真図版 19) がある。432SK は C 区南東端部に所在し、全体の形状は不明である。2351SK は E 区南東部に位置し、長径 0.78 m、短径 0.72 m の円形プランを持つ。2354SK も E 区南東端部にあり、直径約 0.68 m の円形プランを持つ。いずれも甕の上部は攪乱やなどにより滅失していた。一方、B a 区で検出された 203SK は土坑内に円礫を充填しその上位に常滑窯産陶器甕の下半部を伏せたものである。甕は赤物製品であることから、これらの甕埋設遺構の大半は E 期に位置づけられよう。(鈴木正貴)



第 75 図 集石遺構 236SK, 431SK, 2637SK 遺構図 (s=1:50)



第 76 図 杭列・746SK 遺構図 (s=1:100)

遺 物

第3章 遺 物

第1節 遺物の概要

西浦遺跡から出土した遺物には、土器・陶磁器類、石器・石製品、金属製品、木製品などさまざまな材質のものがある。遺物の出土量は27リットル入コンテナで86箱（整理作業後）となり、総破片数は数万点になると思われる。大半は土器・陶磁器類であり、石器・石製品、金属製品、木製品などは少ない。

遺構には縄文時代まで遡ると考えられた資料が存在したが、遺物には明瞭に縄文時代に属するものは確認されていない。このため、ここでは弥生

時代以降（B期～E期）の遺物を、大時期区分ごとに節を設けて、さらに遺構出土資料を中心に報告することとしたい。ただし、時期が新しいと判断された遺構から、その遺構の時期よりも古い遺物がまとまって出土する事例も多く存在する。本書では、このような出土資料を、遺物が所属する時期の節で、遺構内出土資料と報告している場合がある（特に第2節）。この場合には、遺構の時期と遺物の時期は対応していないので、この点は誤解のないようにあらかじめ断っておく。

（鈴木正貴）

（参考）2745SB 出土石製舌の詳細写真

舌 260 の全体



舌 260 の下端部



舌 260 の上端部



西浦遺跡

第2節 B期の遺物

0023SD 出土遺物（第77図 1） 1はB3期の高坏脚部。

039SK 出土遺物（第77図 2） 2は壺体部の肩部で、径約6mmの竹管による5個の刺突が施される。

250SD 出土遺物（第77図 3・4） 3・4とも指押圧・ナデ成形・調整のみで作られる鉢。

204SK 出土遺物（第77図 5） 5小型高坏の坏部で、ミガキ調整される。時期はB3期。

542SB 出土遺物（第77図 6） 6は高坏または器台の脚部下半と考えられる。時期はB3期か。

309SB 出土遺物（第77図 764） 764は楕円形を呈する凝灰質砂岩の長辺の片側を剥離して刃部を作り出している刃器。刃部は研磨によってつぶれたようになっており、その他の側辺にも研磨痕がみられる。

548SB 出土遺物（第77図 7・8） 7はナデ調整される甕の脚台部上半。体部内面には煤・炭化物が付着する。8は安山岩の凹基打製石鏃で、片方の基部が欠損する。

549SB 出土遺物（第77図 9） 9はクシ状工具を用いた条痕を施す土器で、B1期以前の土器と考えられる。

959SB 出土遺物（第77図 10） 10はクシによるU字状に跳ね上がる紋様が施された土器体部で、上下の紋様は遺存部が少ないため不明瞭であるが、下位には直線紋、上位には波状紋または同じU字状の紋様があると思われる。時期はB1期か。

438SD 出土遺物（第77図 11～13） 11～13はB1期の壺。11は端面下端に刺突がなされる太頸壺口縁部、12はその底部、13は細頸壺の口縁～頸部で端部が内傾する。

585SD 出土遺物（第77図 14） 14はB1期の古井式の甕脚台部で、ナデ調整される。

426SK 出土遺物（第77図 15） 15は砂粒を多く含む土器で、B1期以前～縄紋時代に属する

可能性が高い。ナデまたはケズリ調整される。

483SK 出土遺物（第77図 16） 16はナデ調整される壺底部。

485SK 出土遺物（第77図 17～19） 17は砂粒多く含む土器で、B1期以前～縄紋時代の深鉢または鉢になる。18・19は古井式土器で、やや不揃いなクシ状工具による直線・波状紋が施される壺体部片、19は受口口縁をもつ太頸壺で口縁部外面が剥離する。

913SK 出土遺物（第77図 20） 20はB2～3期の有稜高坏の坏口縁部で、ミガキ調整される。

整地層出土遺物（第77図 21～23） 21は棒状またはへら状工具による条痕が施される土器で、砂粒の多い胎土をもつ。22は肩部に稜をもつ壺。21・22ともB1期以前～縄紋時代に属する。23は甕脚台部上半。

859SB 出土遺物（第77図 24） 24は不揃いなクシ状工具による波状・直線紋が描かれ、幅約8mmの帯状の赤彩が施されるB1期の古井式壺。

763SD 出土遺物（第77図 25） 25はナデ調整される壺底部

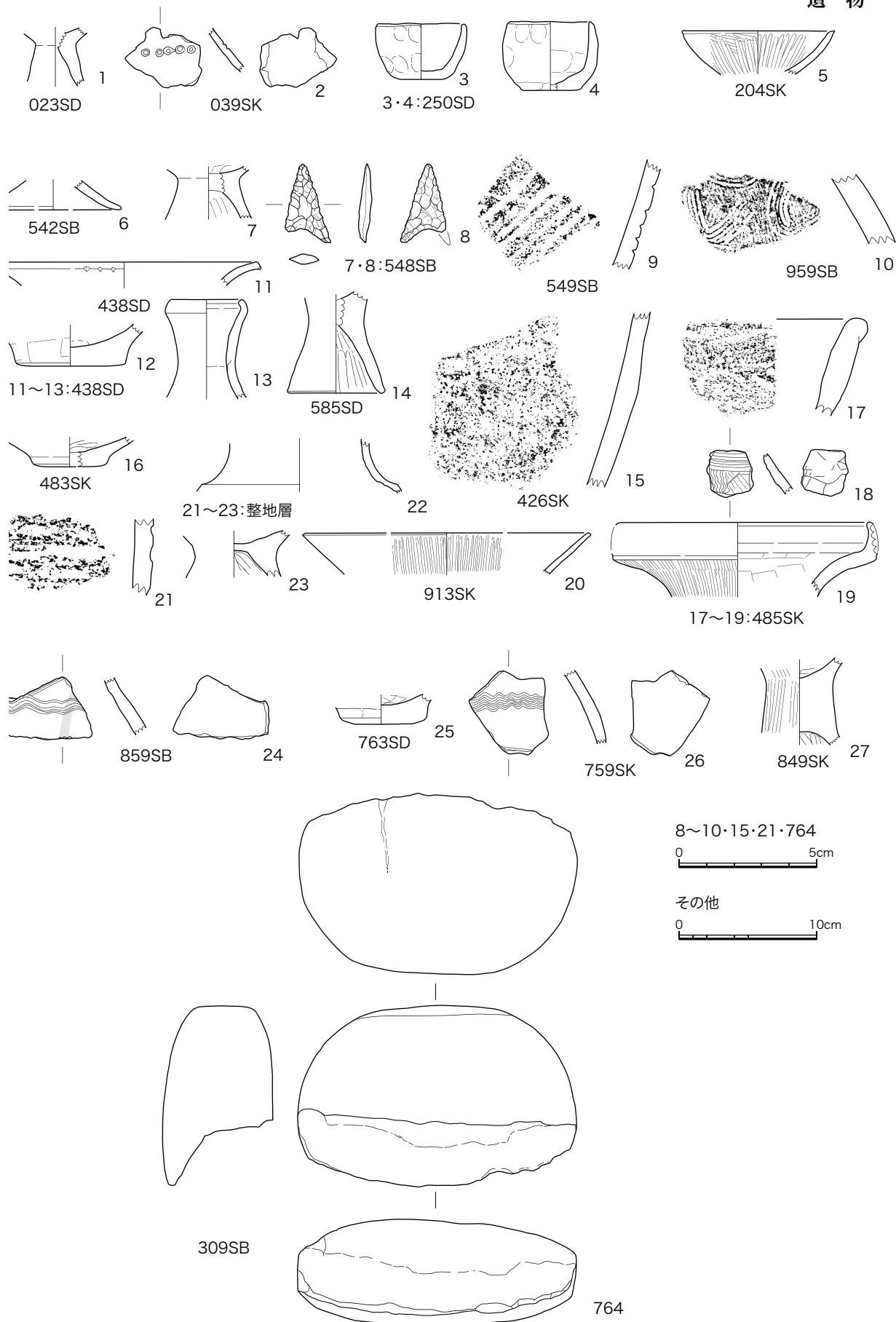
759SK 出土遺物（第77図 26） 26も24と同様のB1期の古井式壺。

849SK 出土遺物（第77図 27） 27の高坏脚部上半は、ハケ・ナデ調整がなされる。

2166SB 出土遺物（第78図 28～33） 28はハケ調整される単純口縁の太頸壺。29はナデ・イタナデ調整される甕で、体部中位にクシまたはイタによる数条の細い沈線が認められる。30はハケ調整される甕脚台部で、接地部に面をもつ。31・32は高坏脚部上半。31は上位にクシによる直線紋が施され、3方向に透し孔が穿たれる。33は口縁部が外反する有稜高坏の坏部で、外面にクシは波状・直線紋が描かれる。内面はハケ調整。時期はB2期か。

2205SB 出土遺物（第78図 34～38） 35は加飾太頸壺で、口縁部外面に凹線紋・3個一対の棒

遺物



第 77 図 B 期の遺物実測図 (1) (s=1:4, 1:2)

西浦遺跡



第 78 図 B 期の遺物実測図 (2) (s=1:4)

遺物

状浮紋、内面に羽状のイタ連続刺突が施される。34 はナデ調整される甕口縁～体部、36・37 はハケ調整される甕脚台部、38 はハケ調整される壺体部下半。時期は B3 期。

2261SB 出土遺物（第 78 図 39） 39 は B2 期の高坏脚部。上半は柱状をなし、下半は内湾して広がる。調整・透し孔の個数は不明。時期は B2 期か。

2379SB 出土遺物（第 78 図 40～48） 40 はハケ調整される鉢の口縁部。41 はナデ調整される小型甕で、頸部下に個数は不明であるが焼成前穿孔がみられる。42・43 は山中式の有稜高坏坏部。両者とも大きく外反する口縁部をもち、外面にクシによる波状紋が描かれる。44～47 は高坏脚部。44～46 は上位にクシによる直線紋が施され、44・45 は柱状、46 はハ字状を呈する。47 はわずかに内湾してハ字状に大きく広がる裾部で、上半は柱状をなすと考えられる。ミガキ調整がなされ、ヨコナデ時についたと思われる横位の沈線がある。48 は単純口縁の太頸壺。口縁部は逆ハ字状に上方に開き、ヨコナデにより端部がわずかに内傾する。体部は円形を呈する。外面はハケ・ミガキ調整、内面はハケ・イタナデ調整される。時期は B2 期。

2384SB 出土遺物（第 78 図 49） 48 と同様の円形の体部をなすと思われる壺。外内面ともミガキ調整される。

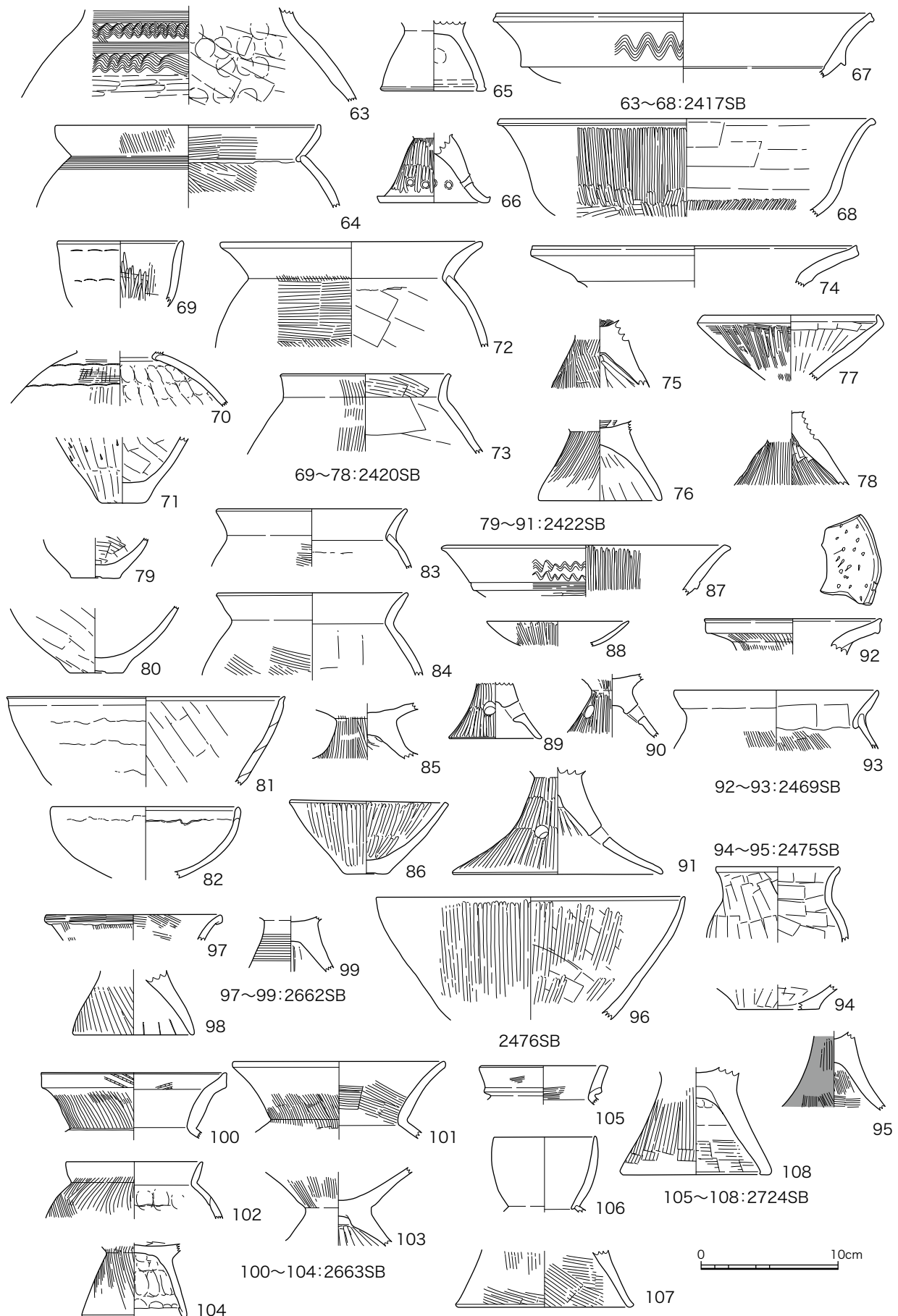
2390SB 出土遺物（第 78 図 50～62） 50・51 は B1 期の古井式の太頸壺。50 はへらによる直線紋と斜線紋、51 はへら沈線区画とクシ直線・波状紋が施される。52 はナデ・ケズリ調整される壺で、体部下半に焼成後の穿孔がある 53・54 は壺体部片。53 はクシ直線紋と細いへらによる羽状紋、内区に平行斜線をもつ山形紋が、54 もクシ直線紋と細いへらによる内区に平行斜線をもつ山形紋が描かれる。55 は頸部に突帯が巡る単純口縁加飾壺。内傾しわずかに拡張して面をもつ口縁部端面には、イタによる斜位の連続刺突が施される。56・57 は高坏脚部上半。クシによる直

線紋が施される。59 はハケ調整される甕脚台部。58 は単純口縁のハケ調整甕。60 も同様の甕であるが、口縁部がわずかに内湾する。61・62 は受口状口縁甕。両者とも口縁部がゆるやかに内湾し、端部が内傾する面をなす。62 は外面にイタによる斜位の連続が施される。52～62 は B2 期になるか。

2417SB 出土遺物（第 79 図 63～68） 63 は加飾太頸壺の体部上半。クシによる直線紋と波状紋が交互に描かれる。ミガキ・イタナデ調整。64 は受口状口縁甕または鉢で、体部上端にクシによる直線紋が描かれる。65 はナデ調整される甕脚台部で、端部が水平な面をもつ。66 はミガキ調整される高坏脚部。2 個一対の透し孔が 5 方向に穿たれる。67 は外反する口縁をもつ山中式の高坏で、外面にクシによる波状紋が描かれる。68 は大型碗形高坏。ミガキ・イタナデ調整される。時期は B2 期前半。

2420SB 出土遺物（第 79 図 69～78） 69 はヒサゴ形壺の口縁部で、外面に二枚貝と思われる工具による横位の連続刺突がなされる。また 70 もヒサゴ形壺または直口壺の体部で、二枚貝による横位の連続刺突と細い工具による直線紋が施される。71 はケズリ・（イタ）ナデ調整される鉢または壺の体部から底部。72 は大きく外反する口縁部をもつ単純口縁甕、73 は短く立ち上がる口縁部をもつ甕で、ハケ・イタナデ調整される。75・76 はハケ・ナデ調整される甕脚台部。74 は有段口縁壺の口縁部になると考えられるが、磨滅しているため調整等は不明である。77 は口縁端部が内上方に折れ曲がる小型高坏の坏部、78 はその脚部の可能性がある。時期は B3 期か。

2422SB 出土遺物（第 79 図 79～91） 79・80 はナデ・イタナデ調整される小型壺の体部から底部。87 は坏口縁部外面にクシによる波状紋と直線紋が描かれる山中式の有稜高坏。81 は内湾する坏部を有する廻間式の有稜高坏で、端部がヨコナデにより外上方に延びる。82 は碗形高坏、88 は小型高坏の坏部。89～91 はミガキ調整される



第 79 図 B 期の遺物実測図 (3) (s=1:4)

遺物

高坏脚部。ハケ調整される 85 は壺または鉢の脚台部か。83・84 はハケ調整される単純口縁甕。86 はミガキ調整される碗形鉢。時期は B3 期。

2469SB 出土遺物（第 79 図 92・93） 92 は単純口縁太頸壺の口縁部で、端部がヨコナデにより上外方にわずかに延び、内面にはヘラ・イタ状の工具によるとと思われる不規則な刺突がある。93 はわずかに内湾する口縁をもつ受口状口縁甕。

2475SB 出土遺物（第 79 図 94・95） 94 の口縁部～体部と底部は同様のイタナデ調整がなされており、同一個体の壺と考えられる。95 は外面が赤彩された高坏脚部で、内面にも赤彩痕はみられる。

2476SB 出土遺物（第 79 図 96） 96 はミガキ調整される廻間式の高坏坏部で、端部はわずかに内傾する面をもつ。時期は B2 期。

2662SB 出土遺物（第 79 図 97～99） 97 は口縁端部が折り返される太頸壺、98 はハケ調整される甕脚台部、99 はクシによる直線紋が描かれる高坏脚部になる。時期は B3 期。

2663SB 出土遺物（第 79 図 100～104） 100・101 は太頸壺。100 は口縁部中位でわずかに折れて段をもち、端部が上方に延びて垂直な面をなす。

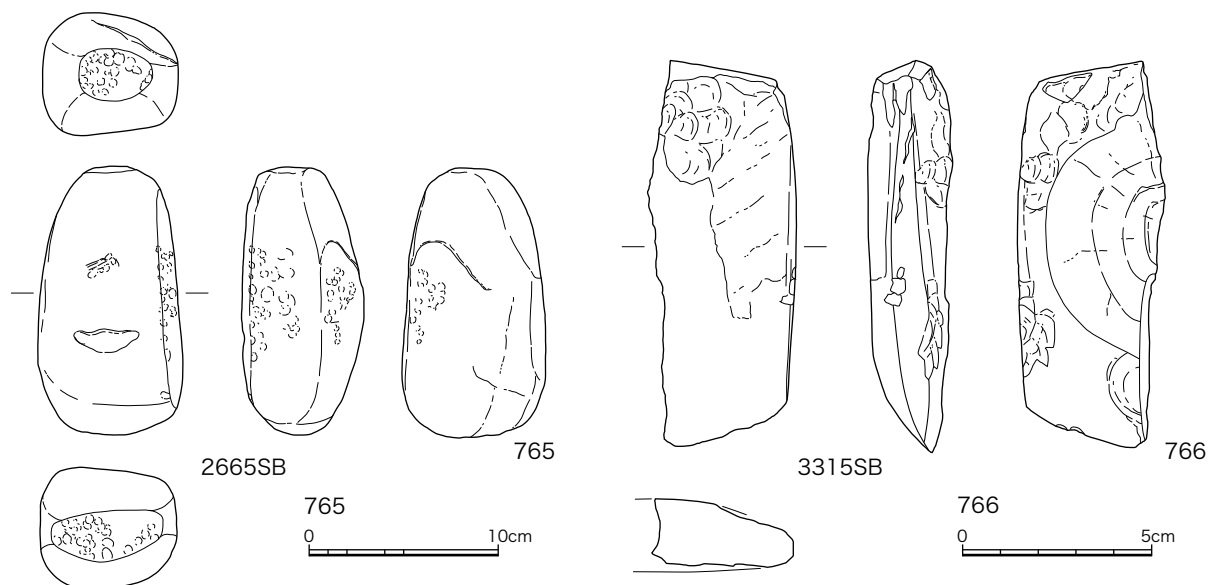
端面と内面にはイタによる連続刺突が施される。102～104 は甕。102 は短く延びる口縁部をもつ単純口縁甕、104 は端部が明瞭に折り返され、外面がハケの後ナデ調整される S 字状口縁甕の脚台部と思われるが、内面に粘土の貼付けはみられない。時期は B3 期。

2724SB 出土遺物（第 79 図 105～108） 105 は有段口縁甕の、106 はヒサゴ形壺の口縁部になる。107・108 は甕脚台部で、両者ともやや大型のものになる。時期は B3 期。

2665SB 出土遺物（第 80・81 図 109・765） 109 は B1 期の古井式壺。体部外面には、上位にヘラによる横位の区画に羽状斜線紋、下位には半裁竹管による横位の区画に斜格子紋が描かれる。765 は片麻岩の叩石。側面の一部が研磨され、上下面を中心に敲打痕がみられる。

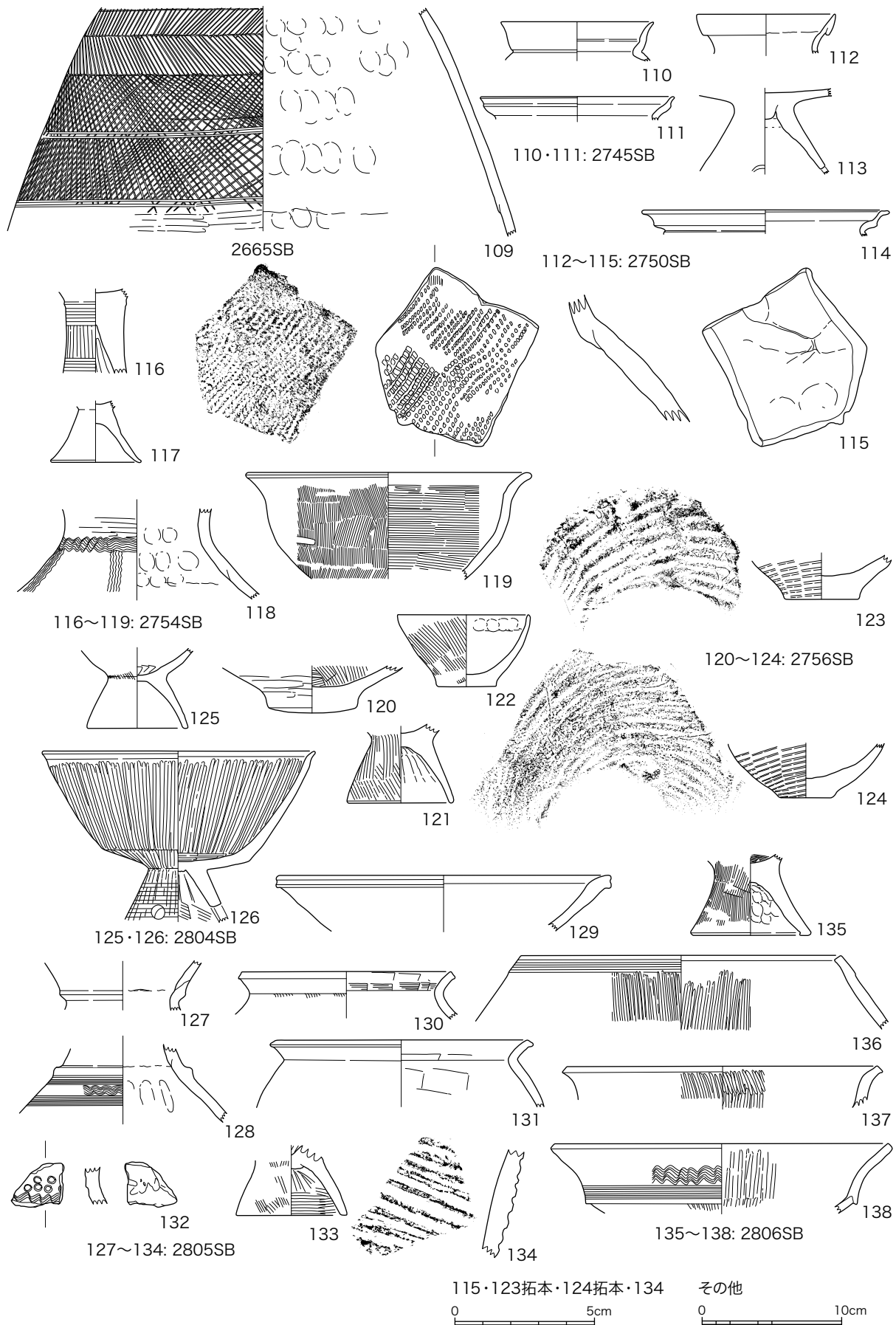
2745SB 出土遺物（第 81 図 110・111） 110 は口縁部にわずかに段を有する有段口縁甕。111 は S 字状口縁甕 B 類。時期は B3 期。

2750SB 出土遺物（第 81 図 112～115） 112 は口縁部が外側に折り返される太頸壺、115 は体部に縄紋を施す壺で、両者とも遠江以東の影響が考えられる。114 は S 字状口縁甕 C 類になる。



第 80 図 B 期の遺物実測図 (4) (s=1:4, 1:2)

西浦遺跡



第 81 図 B 期の遺物実測図 (5) (s=1:4, 1:2)

遺物

時期はB4期。

2754SB 出土遺物（第81図 116～119） 116は高坏脚部で、上位にわずかに盛り上がる突帯が巡り、クシによる直線紋が2段確認される。117はナデまたはミガキ調整される甕脚台部、119はハケ調整される鉢になる。118はクシによる横位・縦位の波状紋が施される古井式太頸壺。時期はB2期か。

2756SB 出土遺物（第81図 120～124） 120はナデ調整される壺底部、121はハケ調整の甕脚台部、122はハケ調整の椀形鉢になる。123・124は平底甕の底部で、両者とも右上がりの螺旋状のタタキ成形がなされる。時期はB3期。

2804SB 出土遺物（第81図 125・126） 125は甕脚台部、126はミガキ調整される廻間式高坏で、脚部上位にクシによる直線紋が描かれる。時期はB3期。

2805SB 出土遺物（第81図 127～134） 127は有段口縁壺の口縁部下半、128は頸部に突帯をもちクシによる直線・波状紋が描かれる太頸壺。129は口縁部がわずかに折れ、端面にヨコナデによる凹線がめぐる高坏または鉢で、口縁端部の外内面に煤・炭化物が付着する。130・131は口縁部が短く、く字状に屈曲する甕で、ナデ調整される。132は竹管による連続刺突とクシによる波状紋がなされる壺体部片。133はハケ調整される甕脚台部。134は棒状の工具による条痕が施された深鉢片。時期はB1期か。

2806SB 出土遺物（第81図 135～138） 135はハケ・ナデ調整される甕脚台部で、端部は水平な面をもつ。136は口縁部がわずかに肥厚し、外面にクシによる直線紋が施される無頸壺でミガキ調整される。137・138は有稜高坏の坏部で、138は外面にクシによる直線・波状紋が描かれる。時期はB2期。

2851SB 出土遺物（第82図 139） ハケ調整される受口状甕で、口縁部は逆ハ字状に内湾して開き、端面は内傾する面をもつ。時期はB3期か。

2854SB 出土遺物（第82図 140・141） 140

はミガキ調整される高坏脚部、141は横・縦位のタタキ成形される甕脚台部か。時期はB3期？。

2906SB 出土遺物（第82図 142～146） 143は半裁竹管による直線・波状紋が描かれた壺体部で、144は口縁端面下端にイタによる連続刺突がなされる甕になる。両者とも時期はB1期。142は外面をミガキ・ハケ、内面をハケ調整された単純口縁太頸壺で、体部最大径が中位よりやや下にある。145はミガキ調整される直口壺の口縁部、146は高坏脚部になる。時期はB3期。

3114SB 出土遺物（第82図 147～152） 147はクシによる直線・波状・扇形紋が描かれる太頸壺体部。148は口縁部が短く立ち上がり、端部に面をもつ甕。149はナデ調整される甕蓋。150は柱状を呈する、151は端部が面をもつ甕脚台部。152は高坏または器台の脚裾部か。時期はB1期。
3117SB 出土遺物（第82図 153） ハケ調整される単純口縁太頸壺の口縁部で、ヨコナデにより端部がわずかに凹面をなす。

3120SB 出土遺物（第82図 154） 中央で強く屈曲する高坏脚部で、4方向に透し孔が開けられる。ナデ（イタか）調整される。

3315SB 出土遺物（第80図 766） 766は砂質凝灰岩の片刃石斧。長辺側の片側が欠損している。また上下辺が斜めになっており、使用・破損後に再利用されている可能性がある。

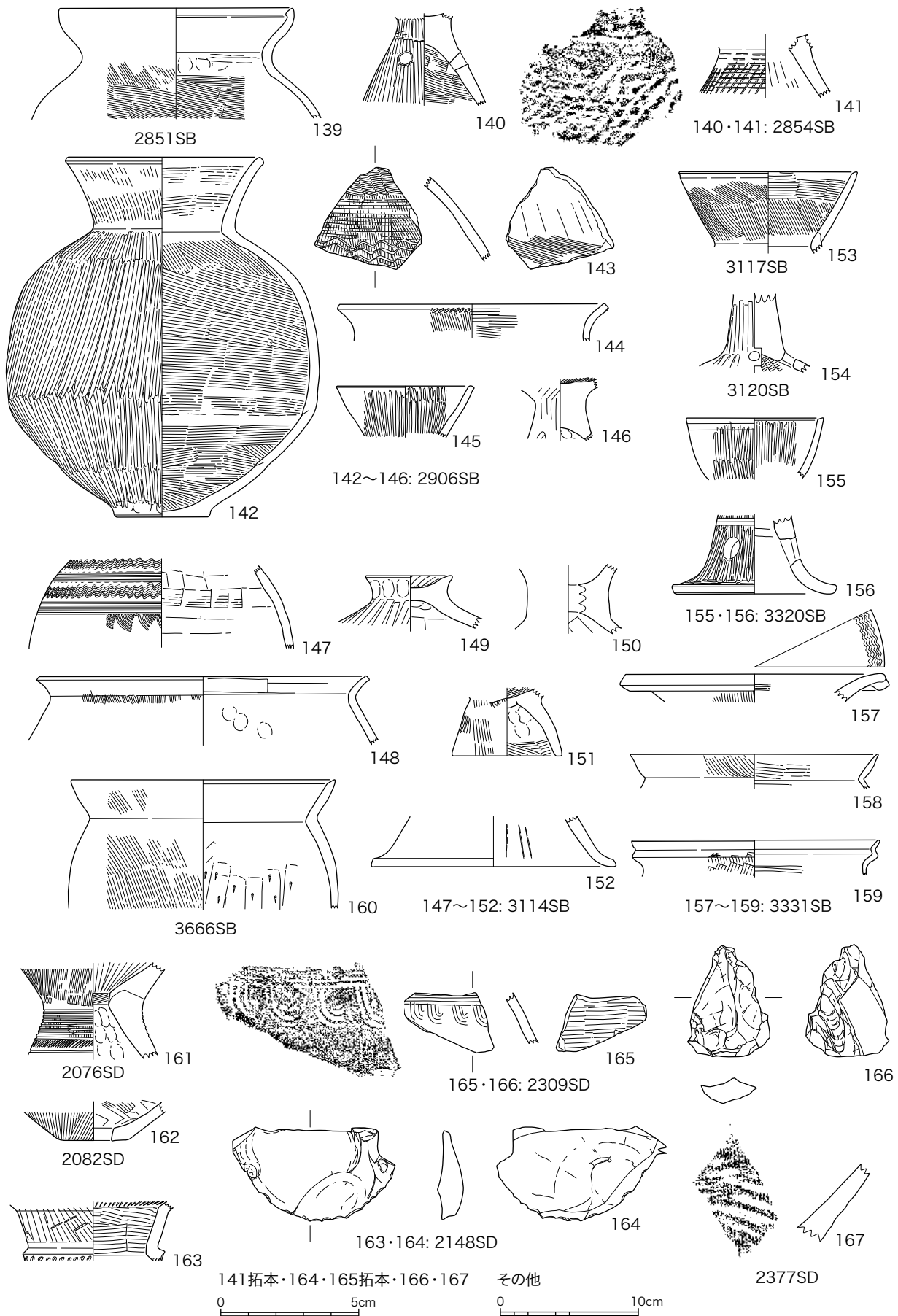
3320SB 出土遺物（第82図 155・156） 155は直口壺口縁部で、端部外面に半裁竹管を用いた沈線がみられる。156は高坏脚部と思われ、やや大きめの透し孔が開けられている。

3331SB 出土遺物（第82図 157～159） 157の太頸壺は、口縁下端部に粘土が付加されて折り返し状をなす。158は単純口縁甕、159はS字状口縁甕B類になる。時期はB3期。

3666SB 出土遺物（第82図 160） 単純口縁甕で、口縁端面が内傾する面をなす。外面はハケ調整、内面はケズリ成形・調整される。

2076SD 出土遺物（第82図 161） 大型の器台か。外面はハケ調整され、ヘラによる横位の直線

西浦遺跡



第 82 図 B 期の遺物実測図 (6) (s=1:4, 1:2)

遺物

紋と二枚貝と思われる細くやや湾曲する工具での連続刺突が施される。

2082SD 出土遺物（第 82 図 162） 底部に焼成前穿孔がある有孔鉢底部。ハケ・イタナデ調整される。

2148SD 出土遺物（第 82 図 163・164） 163 は頸部から屈折して延びる口縁部をもつ加飾太頸壺で、頸部を巡る突帯と口縁内面にイタによる連続刺突が施される。164 は凝灰岩の剥片。母岩から剥離したほぼそのままで、裏面は自然面が残る。下端が調整され刃部として使用された可能性がある。

2309SD 出土遺物（第 82 図 165・166） 165 はクシによる直線紋の下位に U 字状または扇形紋状の連続した紋様が描かれる。166 は松脂岩の剥片で、数方向からの打撃が加えられている。

2377SD 出土遺物（第 82 図 167） タタキ成形された甕。123・124 と同様に底部付近の可能性が高い。

2471SD 出土遺物（第 83 図 168） S 字状口縁甕 B 類。

2722SD 出土遺物（第 83 図 169～171） 169 は碗形鉢、170 は器台脚部、171 は高坏脚部になる。時期は B3 期。

2808SD 出土遺物（第 83 図 172～177） 172～174 は B1 期になる。172 は口縁端面にイタによる連続刺突が施される太頸壺で、ミガキ調整される。174 はその体部から底部か。同じく端面に連続刺突される 173 は、ハケ調整される甕。175～177 は B2 期または 3 期か。175 はハケ調整の後タタキが施される甕体部片。176 はクシによる直線紋が描かれる高坏脚部、177 はナデ調整される大型壺また鉢か。

2809SD 出土遺物（第 83 図 178～182） 178・179 は B1 期になる。179 はへらによる横位の区画内に斜線紋・斜格子紋が描かれる。180・182 は B3 期か。180 は口縁部外面にイタによる連続刺突がなされる受口状口縁甕、182 はミガキ調整される壺の体部で、やや湾曲して平行する 2 条

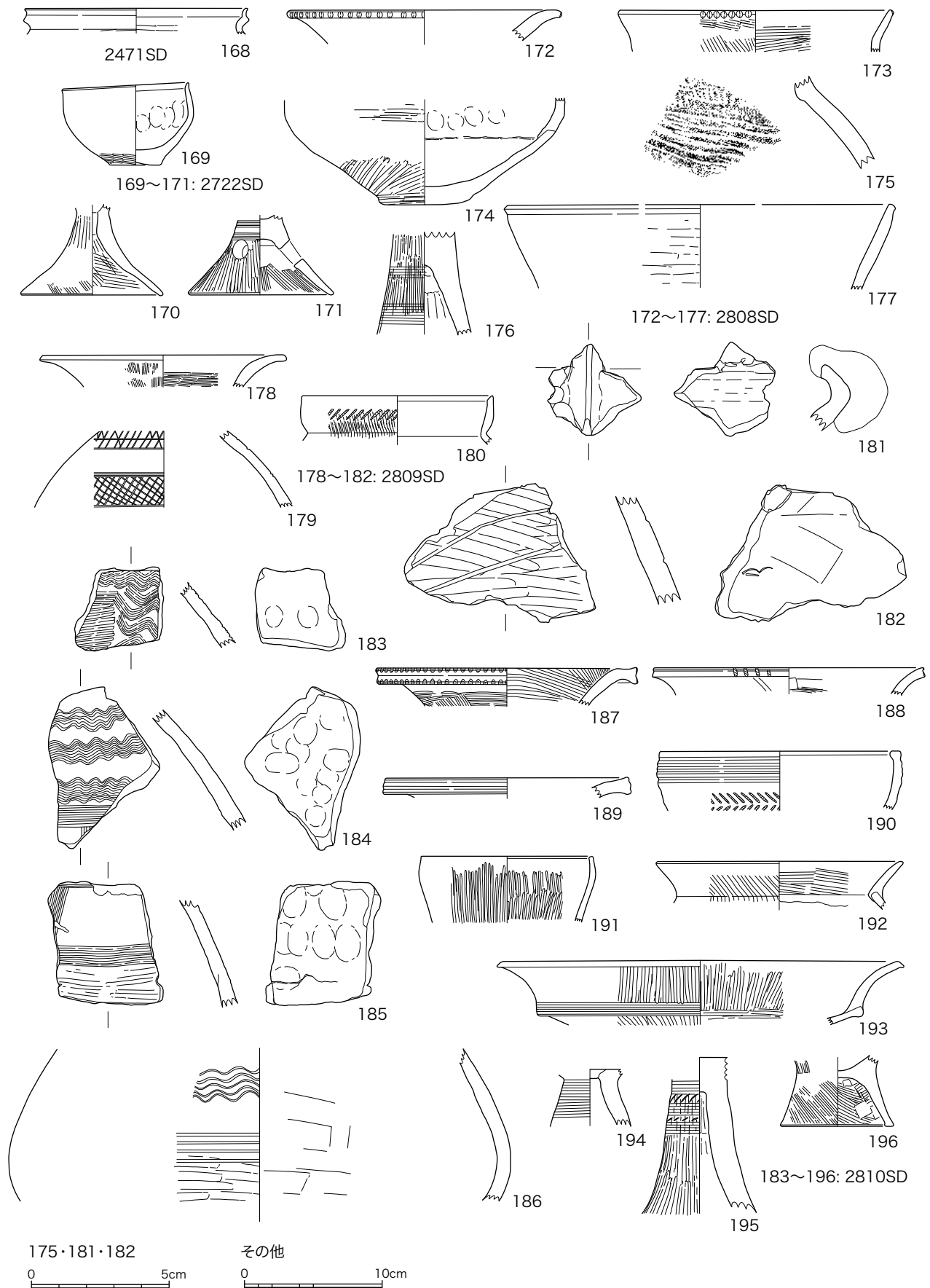
の沈線が引かれている。181 は器種・時期とも不明なもので、強く内湾する端部に粘土が巻き付くように貼付けられる。

2810SD 出土遺物（第 83・84 図 183～196・767） 183～190 は B1 期またそれ以前になる。183 は二枚貝による条痕が、184 はクシによる横位・縦位の直線・波状紋が、185 はやや不揃いな工具による横位・縦位の直線紋が施される。187～189 は太頸壺口縁部になる。187 は端部上下に、188 は端面にイタによる連続刺突が、189 は凹線紋が施される。190 は袋状口縁細頸壺で、凹線紋とイタによる羽状の連続刺突がなされる。186 は壺体部下半で、半裁竹管による直線・波状紋が描かれる。191～196 は B2 期。191 はミガキ調整された直口壺、192 はく字状口縁の甕、196 は端面が水平の面をもつ甕脚台部になる。193 はミガキ調整される有稜高坏の坏部で、外面にクシによる直線紋が引かれる。194・195 は高坏脚部で、195 はクシ直線紋と二枚貝連続刺突が交互に施される。767 は凝灰岩の剥片。裏面はほぼ自然面のままであり、側辺に細部調整が施される。

2812SD 出土遺物（第 85 図 197・198） 197 はミガキ調整される壺体部片で、クシによる直線・波状紋が描かれる。198 は口縁端部下端にイタによる連続刺突が施される甕で、内面はミガキ調整される。時期は B1 期。

3146SD 出土遺物（第 85 図 199～212） 199・200 は加飾太頸壺。199 は口縁端部が折れて、外傾する面をなし、イタによる羽状の連続刺突が施される。頸部には突帯が巡ると思われる。200 は口縁端面がヨコナデにより凹面となるもので、斜位のイタによる連続刺突がなされる。またわずかに段をもつ内面端にもイタによる連続刺突がある。201 は短頸壺で、口縁端部がヨコナデによりわずかに外反する。202～204 は直口壺と思われ、202 の体部外面には赤彩が施される。205 はミガキ調整される高坏または鉢で、外面に棒状の粘土が貼付けられる。206 は甕の小型品か。207 は受口状口縁甕。口縁端は水平な面をもち、外面には

西浦遺跡



第 83 図 B 期の遺物実測図 (7) (s=1:4, 1:2)

遺物

イタによる連続刺突が施される。208・209 は甕脚台部で、208 の内面にはケズリ成形・調整がみられる。210～212 は高坏。210 はミガキ調整される有稜高坏で、破面が研磨されている。時期はB2 期か。

3147SD 出土遺物（第 85 図 213～216） 213 はミガキ調整される直口壺、214 は短く折れる口縁部の端面にイタによる連続刺突が施される甕。ナデ・イタナデ調整。215・216 は甕脚台部。

2008SK 出土遺物（第 85 図 217） クシによる直線紋と斜線紋が交互に施される太頸壺頸部で、円形の貼付浮紋が付く。時期はB1 期。

2063SK 出土遺物（第 85 図 218・219） 218 は口縁部下端にイタによる連続刺突が施される甕で、ハケ・イタナデ調整される。219 はクシによる直線・扇形紋が施される壺体部。時期はB1 期。

2237SK 出土遺物（第 85 図 220） 外面に赤彩が施される高坏脚部。器高は低く、透し孔はやや大きめで、ミガキ調整される。

2363SK 出土遺物（第 85 図 221） ハケ・イタナデ調整される甕で、口縁端面は丸く収束する。

2463SK 出土遺物（第 85 図 222） ハケ・ナデ調整される甕脚台部で、器高は高い。

2563SK 出土遺物（第 85 図 223） S 字状口縁甕 C 類で、口縁端部内面がわずかに凹面をなす。

2698SK 出土遺物（第 85 図 224・225） 224 は端面が下方に拡張される加飾太頸壺口縁部で、

端面に凹線紋が、内面にイタによる 2 段の連続刺突が施される。225 はミガキ調整される碗形鉢。2706SK 出土遺物（第 85 図 226） ミガキ調整される有稜高坏で、口縁端部がヨコナデにより上外方に延びる。

2837SK 出土遺物（第 84 図 768） 細粒花崗岩の磨石・叩石。全体にわずかに研磨されるが、特に下面は顕著な磨痕が残る。上面は欠損しており、その面が敲打面となる。また側面も一部敲打面として使用されている。

3035SK 出土遺物（第 85 図 227） 指押圧・ナデによる成形・調整が行われる台付鉢。

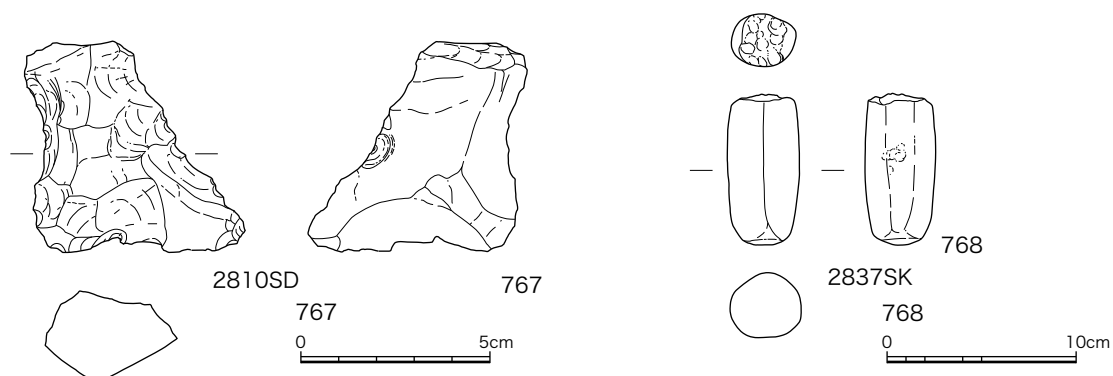
3054SK 出土遺物（第 85 図 228） 柱状を呈する高坏脚部で、裾部でハ字状におおきく広がる。

3083SK 出土遺物（第 85 図 229～231） 229 は口縁部がゆるやかに外反する鉢で、イタナデ・ミガキ調整される。230・231 は S 字状口縁甕の脚台部であるが、内上面に粘土貼付はみられない。

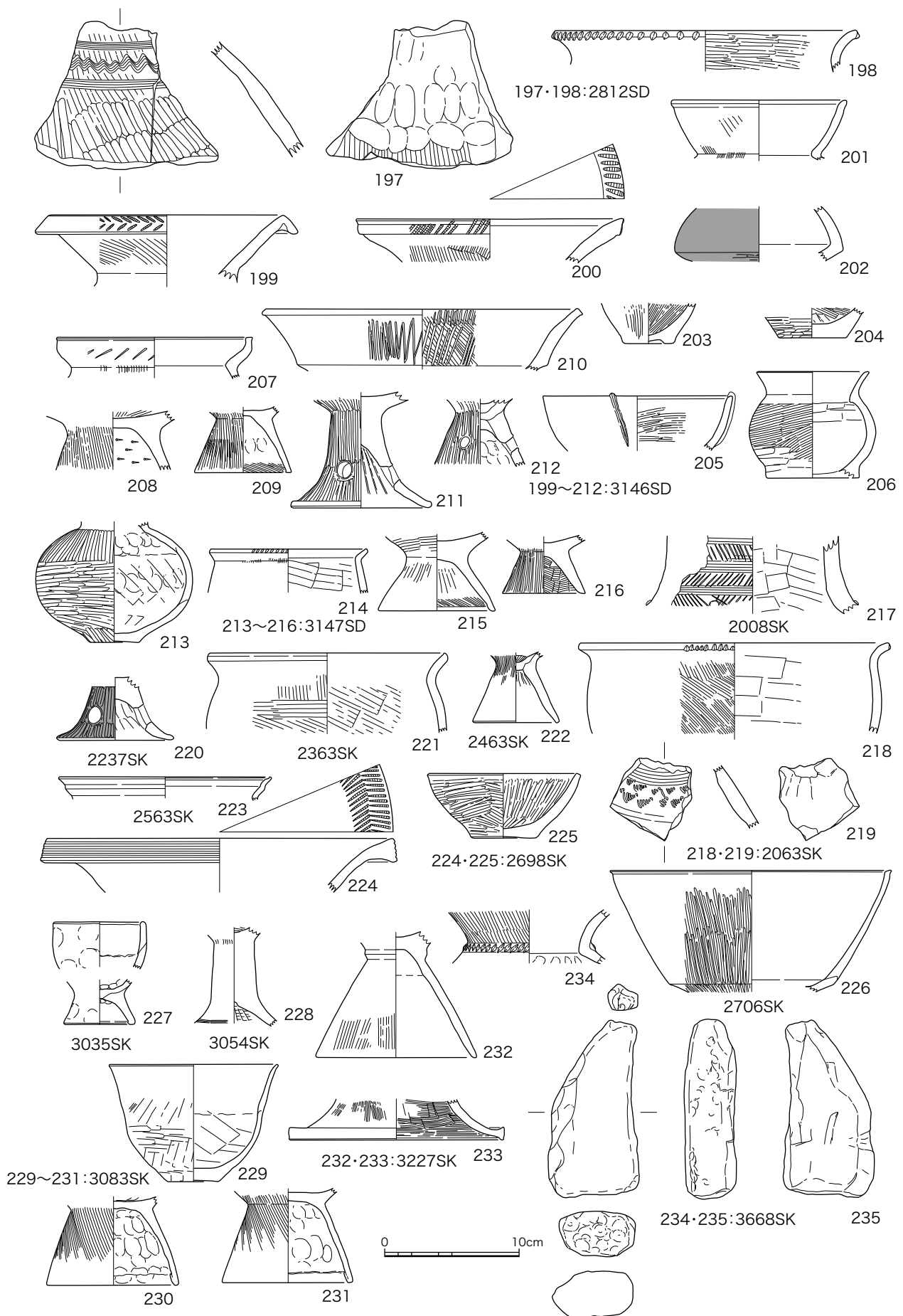
3227SK 出土遺物（第 85 図 232・233） 232 は大型の甕脚台部。体部と脚部の接合部は膨れて突帯状を呈する。233 は高坏・器台の脚台部。

3668SK 出土遺物（第 85 図 234・235） 234 は加飾太頸壺の頸部で、突帯部にイタ角による連続刺突がなされる。235 は片麻岩の叩石。上・下面と側面の一部が敲打面となる。

3667SK 出土遺物（第 86・87 図 236～239） 236 は受口状口縁太頸壺で、体部中位に楕円形を

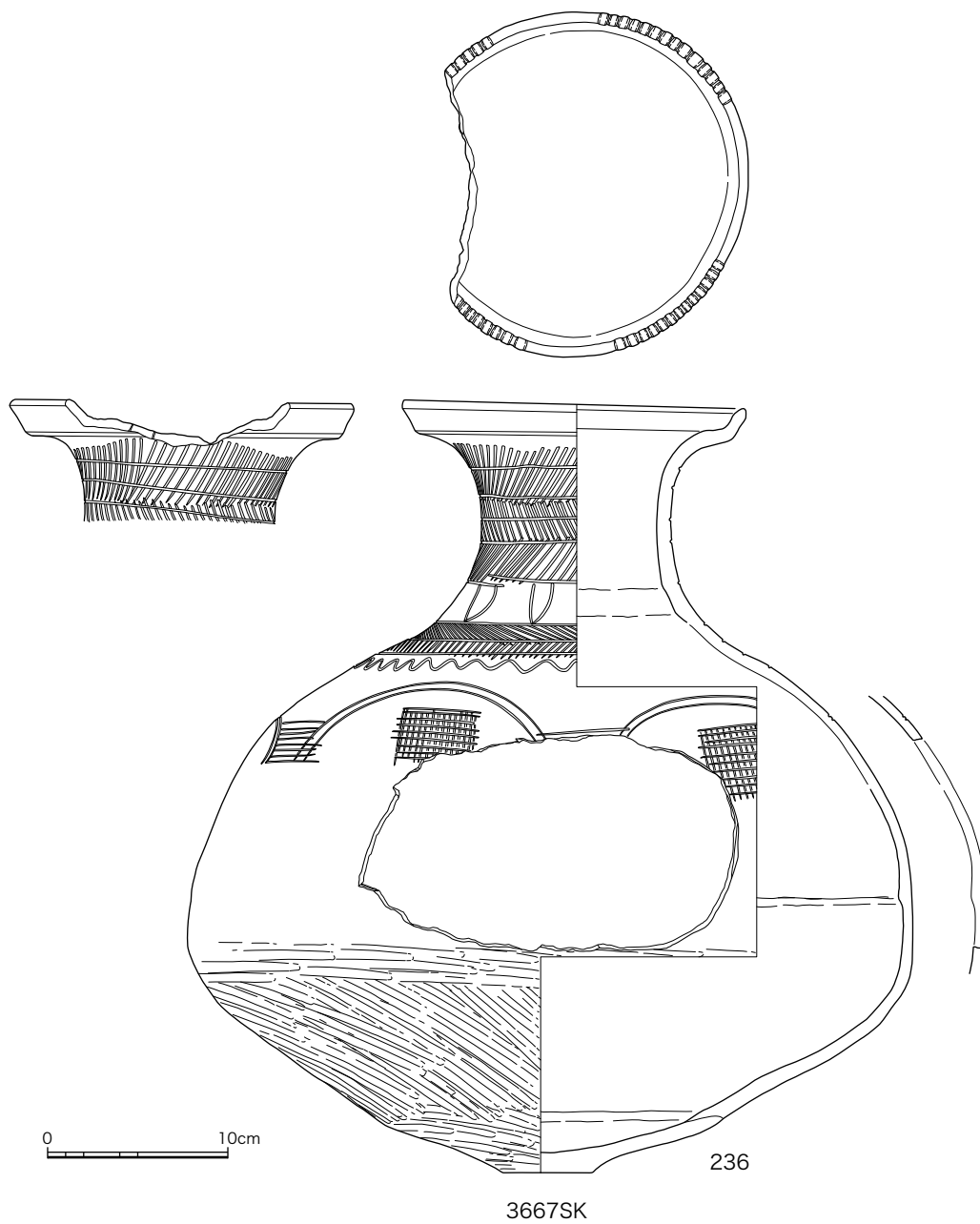


第 84 図 B 期の遺物実測図 (8) (s=1:4, 1:2)



第 85 図 B 期の遺物実測図 (9) (s=1:4)

遺物



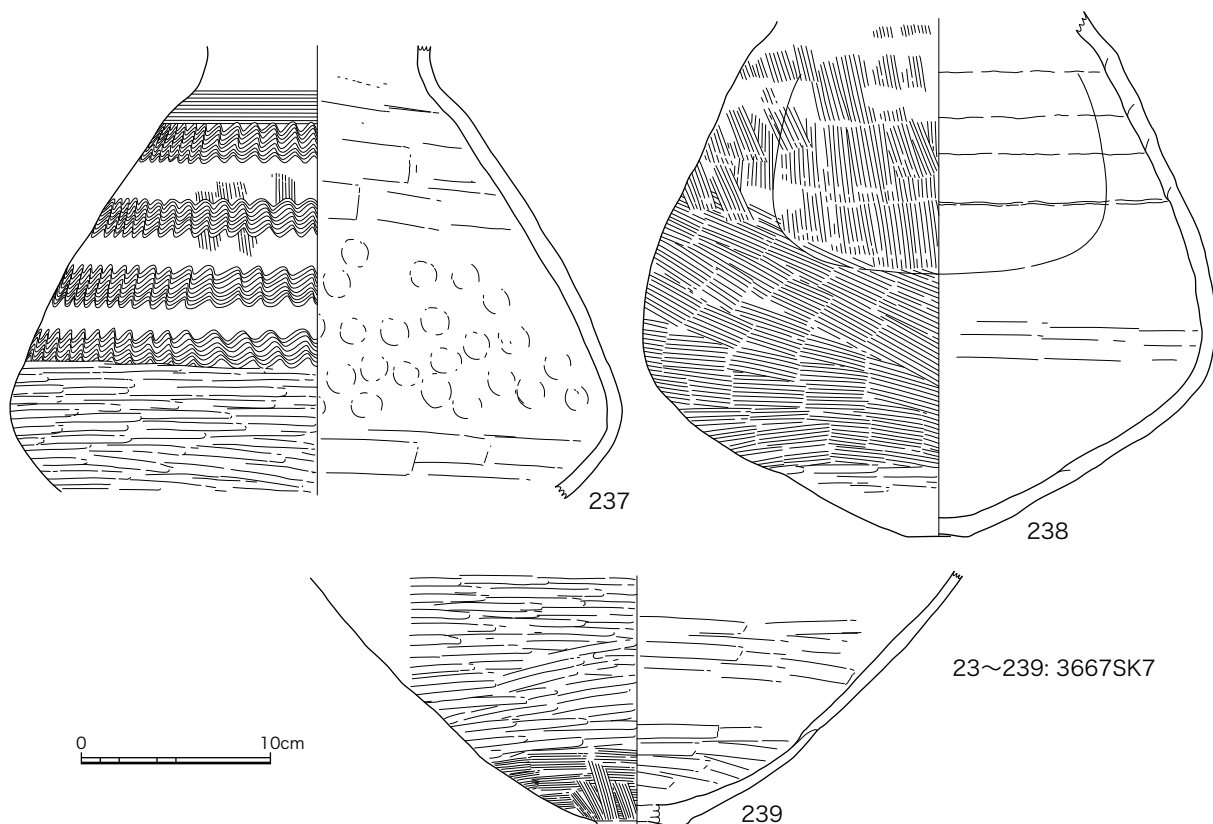
第 86 図 B 期の遺物実測図 (10) (s=1:4)

西浦遺跡

呈する横 20.6 cm・縦 11.8 cm の焼成後穿孔がある。口縁端部内面には、4 方向にイタまたは棒状工具による連続刺突が施され、一部が打ち欠かれている。体部外面はナデ・イタナデ・ミガキ調整され、内面はナデ・イタナデされる。外面頸部にはヘラによる羽状の斜線後、横位の直線紋、V 字状紋、波状紋が描かれ、体部にはヘラによる弧状紋後、横位の直線紋が 5 単位描かれ、弧状紋の下位には縦位→横位で描かれる格子紋がある。また体部内面中位には、0.5~1 cm の円形の凹みが多くみられる。238 は、底部と体部片が 236 の口縁部に、別の体部片が穿孔部に被せられるよ

うな状態で出土している。体部は、最大径が下位あつて縦位に長く伸び、わずかに肩部が膨れる。外面はハケ・ミガキ調整、内面はナデ・イタナデ調整される。一部分が遺存しているだけなので断定はできないが、体部中央に焼成後穿孔があった可能性が高い。237・239 は 236 の穿孔部に被せられるような状態で出土したもので、237 が上位、239 が下位になっていた。237 は外面がハケ・ナデ・ミガキ調整され、わずかに膨らむ肩部にやや不揃いなクシによる直線紋、その下位に 4 段の波状紋が描かれる。239 は体部下半から底部のみが遺存していた。外面はハケ・ミガキ調整、内面は細いイタによるナデ調整がなされる。

(宮腰健司)



第 87 図 B 期の遺物実測図 (11) (s=1:4)

遺物

第3節 C期の遺物

C期の遺物には、須恵器、灰釉陶器、土師器、石製品、鉄製品などが存在する。須恵器の多くは湖西窯系の製品であり、猿投窯系の製品も少量認められる。器種は杯類を中心に、壺・瓶類なども存在した。土師器は甕が主体を成しており、甕、鉢なども出土している。遺物の器種分類や時期は先行研究（鈴木敏則 2000・贅元洋 2000 他）を参考にしており、ここで改めては実施していない。なお、須恵器の実測図にある矢印はヘラケズリ調整と横ナデ調整の境界の位置を示している。

3315SB 出土遺物（第 88 図 240～249） 須恵器杯身（241・242）、杯蓋（240）、壺（243～245）、土師器甕（248・249）、甕（246・247）などがある。240 は湖西窯系須恵器でⅢ期末（7世紀前葉から中葉）に位置づけられる。241 と 242 は湖西窯系の製品とはいえず、猿投窯系か。壺類はいずれも湖西窯系で、244 はⅢ期中（6世紀後半）に属する。土師器甕は内面に横ハケ調整、外面に縦ハケ調整が施され、248 は口縁端部が外反し、249 は口縁部が肥厚し直線的に開くものである。

2745SB 出土遺物（第 88 図 250～260） 須恵器には杯身（251）、杯蓋（250）、はそう（252）があり、いずれも湖西窯系と思われる。250 は 6 世紀末から 7 世紀初頭、251 は土師器甕（256）の内部から出土したもので 7 世紀前葉から中葉に位置づけられる。251 は焼成不良で底部に刻書が認められ、252 にも底部に刻書が存在する。土師器には甕（257～259）、甕（259）、鉢（253・254）などがあり、253 と 254 は北辺東半部に、256 と 259 は東辺北半部に据えられた状態で出土した。これらは基本的に内面に横ハケ調整、外面に縦ハケ調整が施されている。253 は口縁部が直線的に開くのに対し、254 は口縁部が内彎する。甕はいずれも緩く外反するものである。255 は土製支脚で上下端部が欠損していた。基部が斜めに著しく被熱しており脆くなっている。

260 は泥質凝灰岩製の舌である。現存長 8.0 cm、最大幅 1.5 cm、重量 27.1 g。下端部は横断面が隅丸方形を呈し、上部に行くに従い扁平となり、頭部は表裏両面を平坦にして、その結果横断面で隅丸長方形となっている。下端部を丸く仕上げ、上部には両側より径 4 mm 程度の穿孔が施されている。表面はきれいに磨かれて精巧に作られており、使用された痕跡もほとんど認められない（103 頁の写真参照）。銅鐸の石製舌は、銅鐸にする方法から、頭部を穿孔したもの（Ⅰ）、頭部に溝を持つもの（Ⅱ）、特別な加工を加えず自然石を利用したもの（Ⅲ）の 3 類に分けられ（服部信博 2002）、本例は頭部の表裏両面を平坦にして穿孔したⅠb に属しており、このタイプは三重県で 3 例、静岡県で 2 例、山陰地方で 2 例が確認されているだけで、愛知県では初例である。

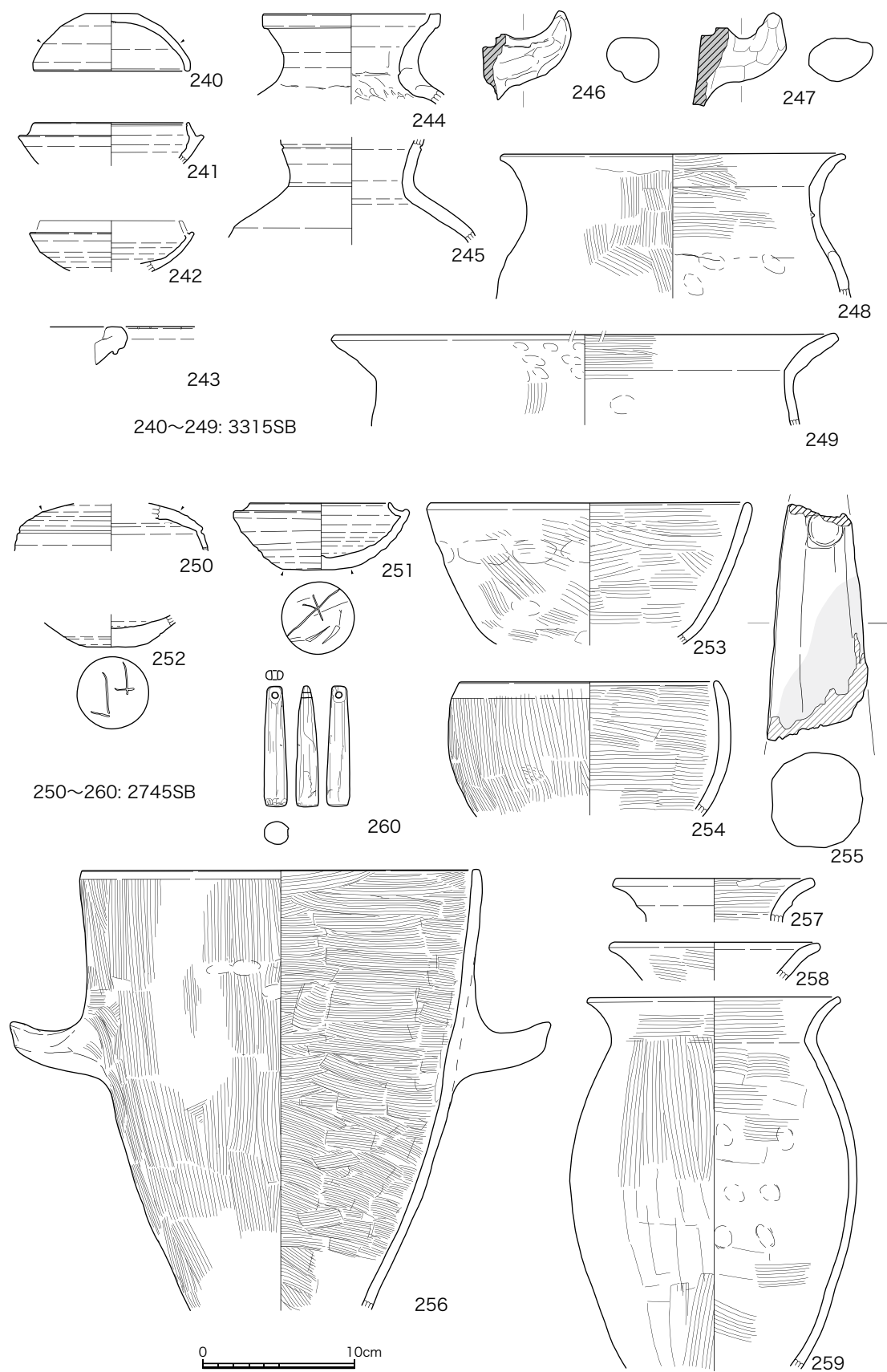
2477SB 出土遺物（第 89 図 261～266） 261 は須恵器鉢で底部外面に刻線が数条刻まれている。262 は須恵器杯身でⅢ期末（7世紀前葉から中葉）に位置づけられる。263～266 は土師器甕で、263 は口縁部がやや内彎気味になるもの、264 と 265 は外反するもの、266 は平底となる底部である。C1 期。

2377SD 出土遺物（第 89 図 267～278） 267 と 268 は須恵器杯身でⅢ期末（7世紀前葉から中葉）に位置づけられる湖西窯系の製品である。269～272 は土師器甕の把手部、273～277 は土師器甕であり、甕口縁部の形状はややバラエティーに富んでおり、時期幅が存在するかもしれない。278 は鉄鏃で刃部先端などが欠損し、全体の形状は不明である。C1 期。

2750SB 出土遺物（第 89 図 279） 279 は凝灰岩製砥石である。直方体の石材の最も広い上下面がよく摩滅し曲面となっている。側面と先端面も磨かれた痕跡が認められるが、上面には 1 条溝が設けられ、その部分も摩滅している。

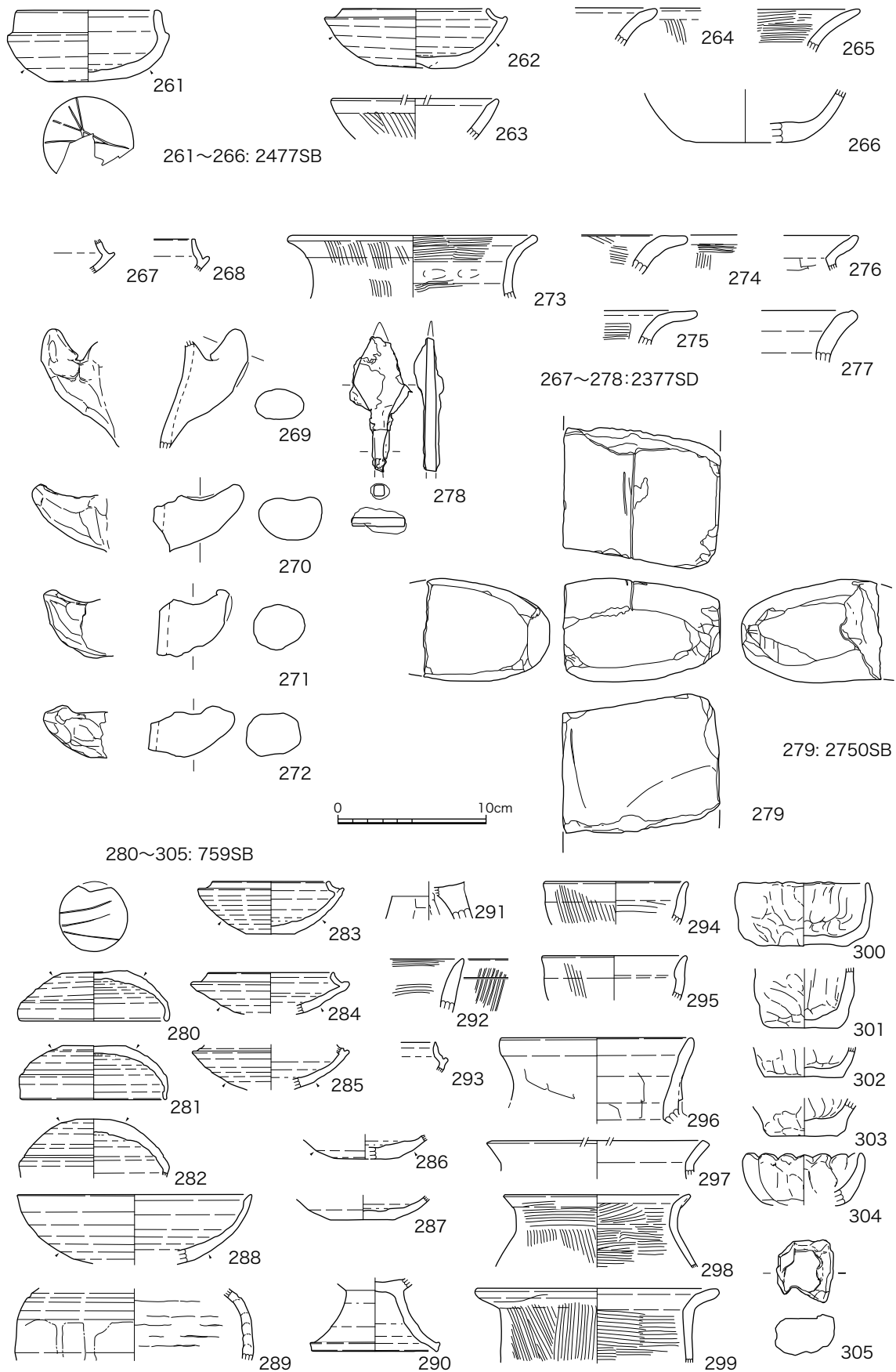
759SB 出土遺物（第 89 図 280～305） 須恵

西浦遺跡



第 88 図 C 期の遺物実測図 (1) (s=1:4)

遺物



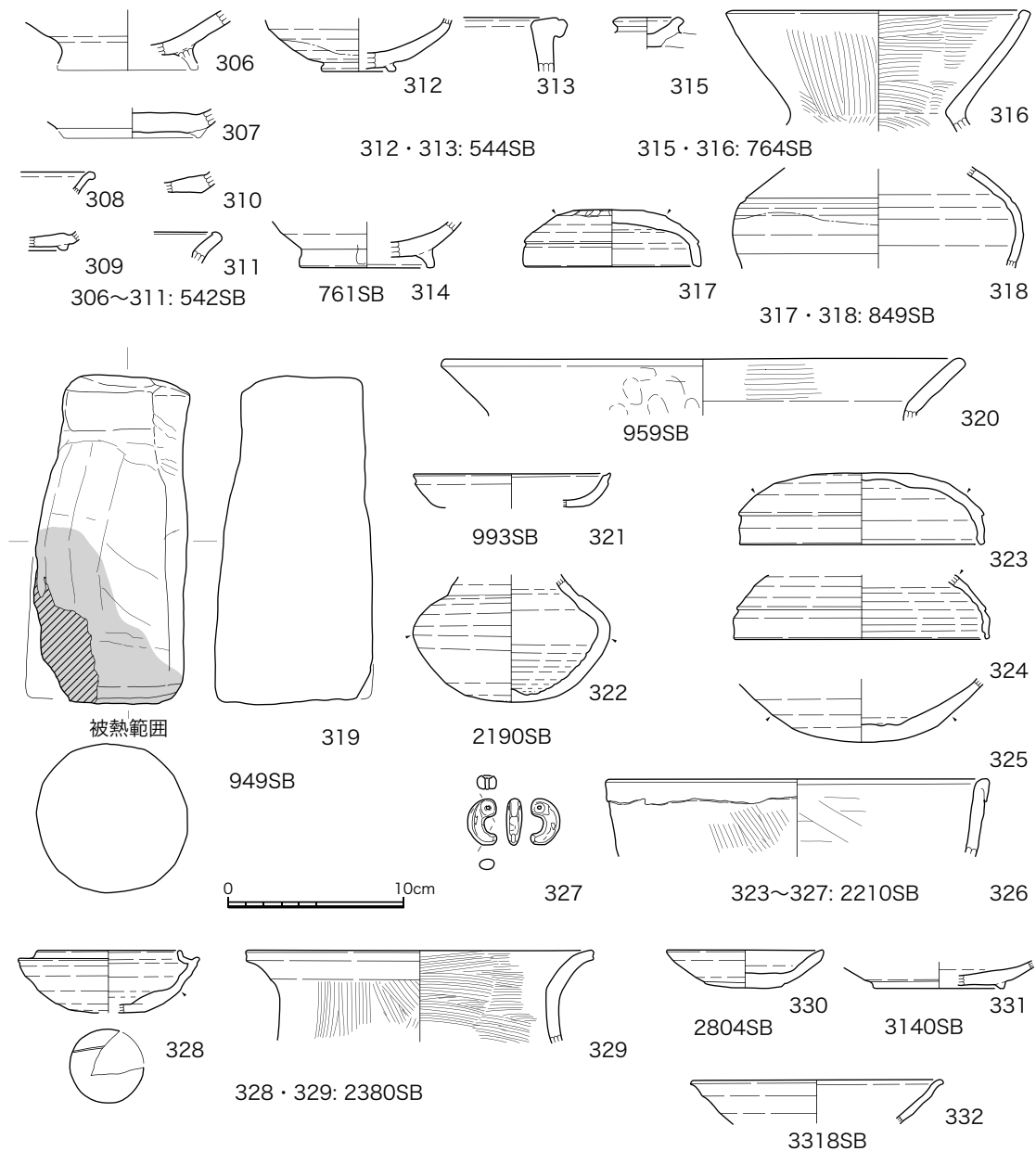
第 89 図 C 期の遺物実測図 (2) (s=1:4)

西浦遺跡

器杯身 (283~287・293)、杯蓋 (280~282)、無蓋高杯 (288)、瓶類 (289)、脚付壺類 (290)、土師器台付甕 (291)、土師器甕 (296~299)、甗 (292)、鉢 (294・295・300~304) などがある。須恵器杯類 (283~287) は概ね湖西窯系でIV期 (7世紀中葉から後葉) に位置づけられる。無蓋高杯 (288) も湖西窯系の製品であるが、時期はやや新しくIV期後半 (7世紀後半) に属する。これら

の須恵器に比べると、須恵器杯身 (293) は6世紀代に属しやや古くなっている。土師器鉢は外面に縦ハケ調整が施され口縁端部がやや反るタイプ (294・295) と手づくね状で指押圧痕が乱雑に残るタイプ (300~304) がある。305 は上面に灰色を呈する面を持つ粘土塊である。何かの土型の可能性も考えられる。

542SB 出土遺物 (第90図 306~311) 306



第90図 C期の遺物実測図(3) (s=1:4)

遺物

は焼成不良の湖西窯系須恵器高盤、308～310は灰釉陶器（または軟質白色陶器）、311は土師器甕の口縁部である。渥美湖西型山茶碗（307）も出土したが、全体としてはC3期の資料と考えられる。

544SB 出土遺物（第90図 312・313） 312は古瀬戸後Ⅲ期の灰釉浅碗であるが、遺構の時期は清郷型鍋の口縁部（313）で考慮したい。C3期か。
761SB 出土遺物（第90図 314） 314は折戸53号窯式期～東山72号窯式期に平行する灰釉陶器碗である。

764SB 出土遺物（第90図 315～316） 315は湖西窯系須恵器の有蓋高杯の蓋か壺蓋と思われる製品で、6世紀後葉～末葉の資料と考えられる。
316は土師器壺で315よりは古いと考えられる。

849SB 出土遺物（第90図 317～318） 317は7世紀前半に属する須恵器杯蓋、318は須恵器長頸瓶と推測される。318は759SB出土須恵器（289）と同一個体である可能性が考えられる。

949SB 出土遺物（第90図 319） 319は土製支脚で、現存する最大径は9cmを越えており、高さは18.7cmを測る。上端部のみ円筒形に作り、下部はわずかに開く形に成形している。表面はヘラケズリ調整され、下部は斜めに被熱された痕跡が残る（被熱範囲は図を参照）。最も被熱された部分は脆く欠損していた。

959SB 出土遺物（第90図 320） 口縁部が直線的に開く土師器甕口縁部（320）などがある。

2190SB 出土遺物（第90図 322） 322はやや焼成不良の湖西窯系須恵器短頸壺であるが、時期は不明。

2210SB 出土遺物（第90図 323～327） 323は6世紀中頃から後半にかけての須恵器杯蓋であるが、湖西窯でも猿投窯でもない製品である。
324は6世紀末頃の須恵器杯蓋、326は土師器鉢の口縁部である。石製品として滑石製勾玉が1

点（327）存在する。

2380SB 出土遺物（第90図 328・329） 328は7世紀中葉から後葉の湖西窯系須恵器杯身で、底部外面に刻書が存在する。329は緩く外反する土師器甕の口縁部である。

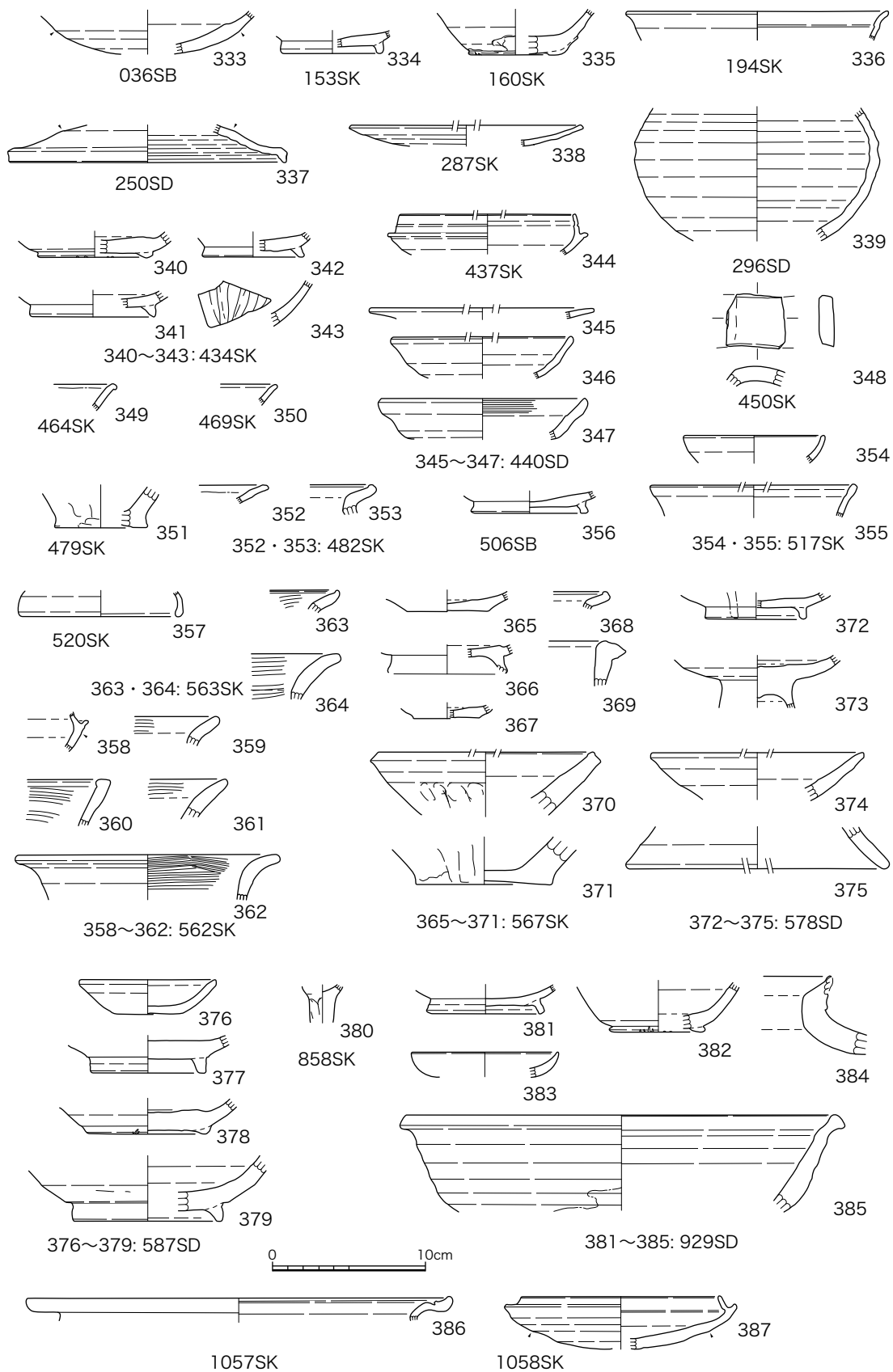
3140SB 出土遺物（第90図 331） 331は折戸53号窯式期～東山72号窯式期に平行する灰釉陶器皿である。

3318SB 出土遺物（第90図 332） 332は折戸53号窯式期～東山72号窯式期に平行する灰釉陶器皿である。

その他の遺構の出土遺物（第91・92図 333～418） 土坑や溝などの遺構から、折戸53号窯式期～東山72号窯式期に併行する灰釉陶器の碗や皿が出土している。333は**036SB**から出土した須恵器瓶類で内面に円弧紋のタタキ調整が施されている。337は250SDから出土した須恵器壺で8世紀後半に位置づけられる。440SDからは灰釉陶器碗（346）と段皿（345）および土師器非ロクロ調整皿（347）が出土したが、土師器皿はおそらく中世前期に属するだろう。348は450SDから出土した須恵器平瓶で8世紀以降のものである。562SKでは土師器甕の口縁部（359～362）がやや多く出土している。380は858SKから出土した製塩土器片である。388は近代以降の2002SDから出土した須恵器壺類の体部片であり、外面に縄蓆紋タタキが、内面に円弧紋タタキが施されていた。湖西窯系でも猿投窯系でもないものと見られる。

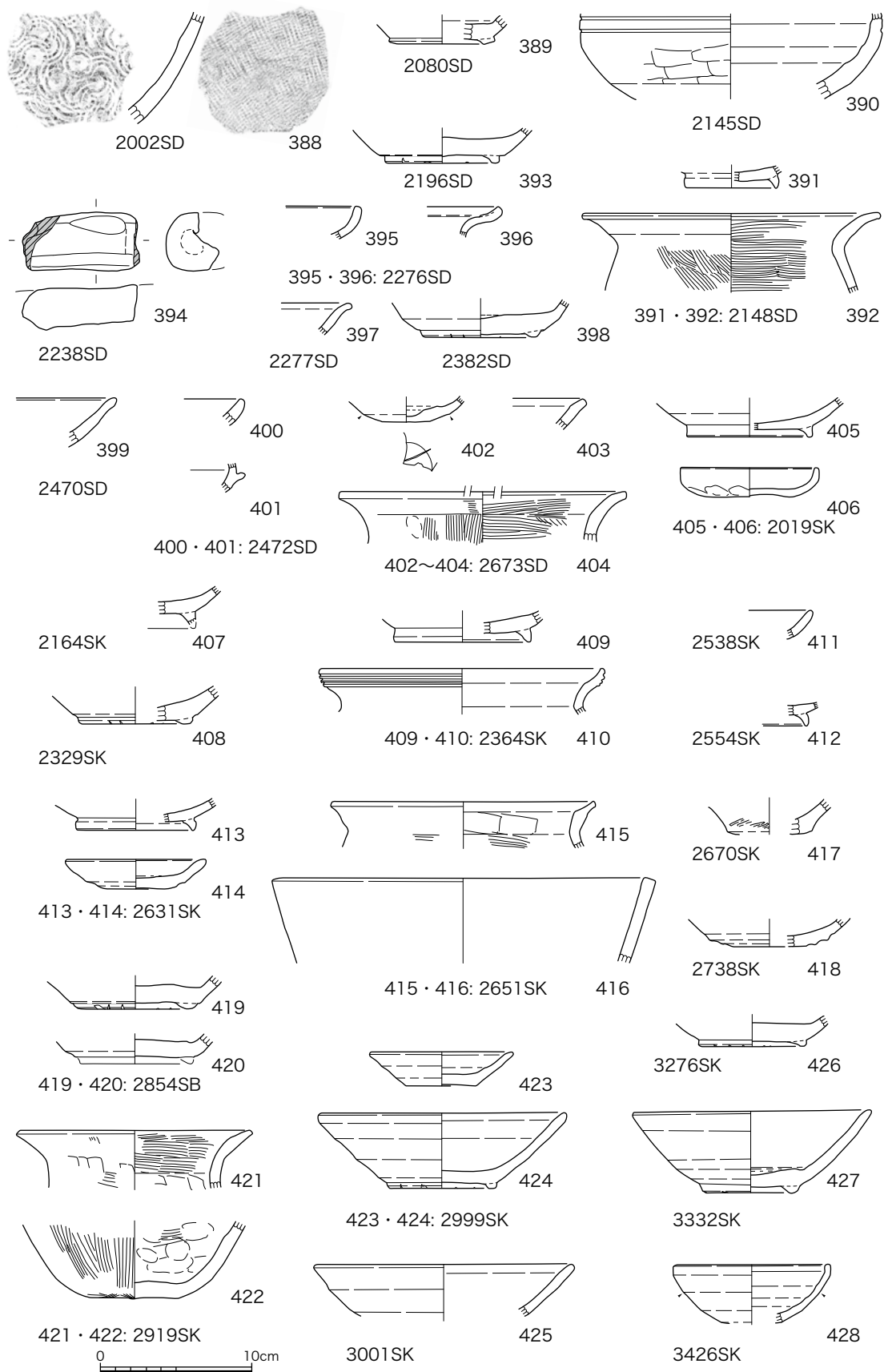
遺構外出土遺物（第106図 742～753） 最後に遺構以外の地点から出土したもののうち、特筆すべきものを紹介しておく。745は屈曲した棒状の須恵器片であるが、正確な器種は不明である。土馬か。C区では一定量の土師器清郷型鍋（746・747）が認められる。C区で検出された古代の掘立柱建物跡に伴うものだったかもしれない。

西浦遺跡



第 91 図 C・D 期の遺物実測図 (1) (s=1:4)

遺物



第 92 図 C・D 期の遺物実測図 (2) (s=1:4)

西浦遺跡

第4節 D期の遺物

D期の遺物には、陶磁器類、土師器、石製品、金属製品などが存在する。この中で陶磁器類については、D1期には渥美湖西型山茶碗類、尾張型山茶碗類、常滑窯産陶器、中国製磁器などがある。D2期およびD3期には、瀬戸・美濃窯産陶器、常滑窯産陶器、中国製磁器などの他に静岡県に所在する初山窯産陶器・志戸呂窯産陶器なども認められる。なお、これらの遺物の器種分類や時期は先行研究（藤澤良祐 2007・中野晴久 1994 他）を参考にしている。

001ST 出土遺物（第93図 429～461） 瀬戸・美濃窯産陶器、常滑窯産陶器、初山窯産陶器、土師器などの製品がある。

瀬戸・美濃窯産陶器には、天目茶碗（429）、尾呂茶碗（431）、鉄釉稜皿（433・434）、灰釉平碗（436）、灰釉四（三）耳壺（437）、鉄釉小瓶（438）、播鉢（441）などがある。所属時期の幅は広く、437は古瀬戸後Ⅲ期、436は古瀬戸後Ⅳ期古段階、441は古瀬戸後Ⅳ期新段階、438は大窯第1段階、433は大窯第3段階前半、434は大窯第2か3段階、429は連房式登窯第5か6小期、431は連房式登窯第7小期に位置づけられる。常滑窯産陶器には鉢（442）と甕（443）があり、それぞれ中野編年の8型式と9型式に属する。静岡産の陶器としては志戸呂窯産陶器播鉢（440）と初山窯産陶器天目茶碗（430）・播鉢（439）がある。440は古瀬戸後Ⅳ期、439は大窯第3段階後半、430は大窯第3か4段階に併行する時期である。その他に折戸53号窯式期～東山72号窯式期に併行する古代灰釉陶器碗（435）や、第6型式に属する渥美湖西型小皿（432）なども含まれてしまっている。

土師器には、非ロクロ調整皿、内耳鍋（455～457・459～461）、釜（454）、南伊勢系鍋（458）などがある。非ロクロ調整皿は、内外面に横ナデ調整が施され口径が17cm前後を測るA類（444～446）、外面のみに横ナデ調整が施され口

径が11cm前後を測るB類（447）、外面のみに横ナデ調整が施され口径が9cm前後を測るC類（448・449）、内外面ともに横ナデ調整が施され口径が9cm前後を測るD類（450～453）に区分できる。非ロクロ調整皿A類は、底部から体部にかけて緩やかに屈曲し、口縁部内面を横ナデ調整することにより外側にやや反る形状となっている。岩原分類（岩原剛 2004）のB11類にやや似ている。非ロクロ調整皿B～D類は、底部から緩やかに彎曲して口縁部に至るもので、内面は平滑となる。岩原分類のB10類に該当するだろう。

内耳鍋には、体部から口縁部が大きく屈曲し口縁端部を外側に折り返す内耳鍋A類（いわゆるくの字形内耳鍋：455～457）、体部と口縁部の境界部分でわずかに屈曲し口縁部が直立する内耳鍋B類（いわゆる内彎形内耳鍋：459）、体部から口縁部にかけて全く屈曲しない内耳鍋C類（いわゆる半球形内耳鍋：460・461）がある。459は体部と口縁部の境界部の外面に沈線が巡る。釜（454）は直立する口縁部のみが残存し、その高さはやや短い。南伊勢系鍋（458）は内側に粘土が折り返された口縁部が非常に薄くなったものである。

001ST 出土遺物は、古代から江戸時代までの遺物を含んでしまっており、一括性には乏しいといえる。陶磁器類でみると、15世紀後半と16世紀後半に属する資料がやや多く感じられ、土師器も同様の傾向が認められると思われる。

003SD 出土遺物（第103図 663） 志戸呂窯産陶器播鉢（663）は、胎土が紫褐色を呈するもので、古瀬戸後Ⅳ期に併行する製品と思われる。この他には土師器鍋類と土師器皿が存在する。

004SD 出土遺物（第103図 659～662） 土師器皿（659～661）、土師器鍋類と石臼（662）が出土した。土師器皿は非ロクロ調整皿で、659と661は口縁端部上面に横ナデ調整によってできた

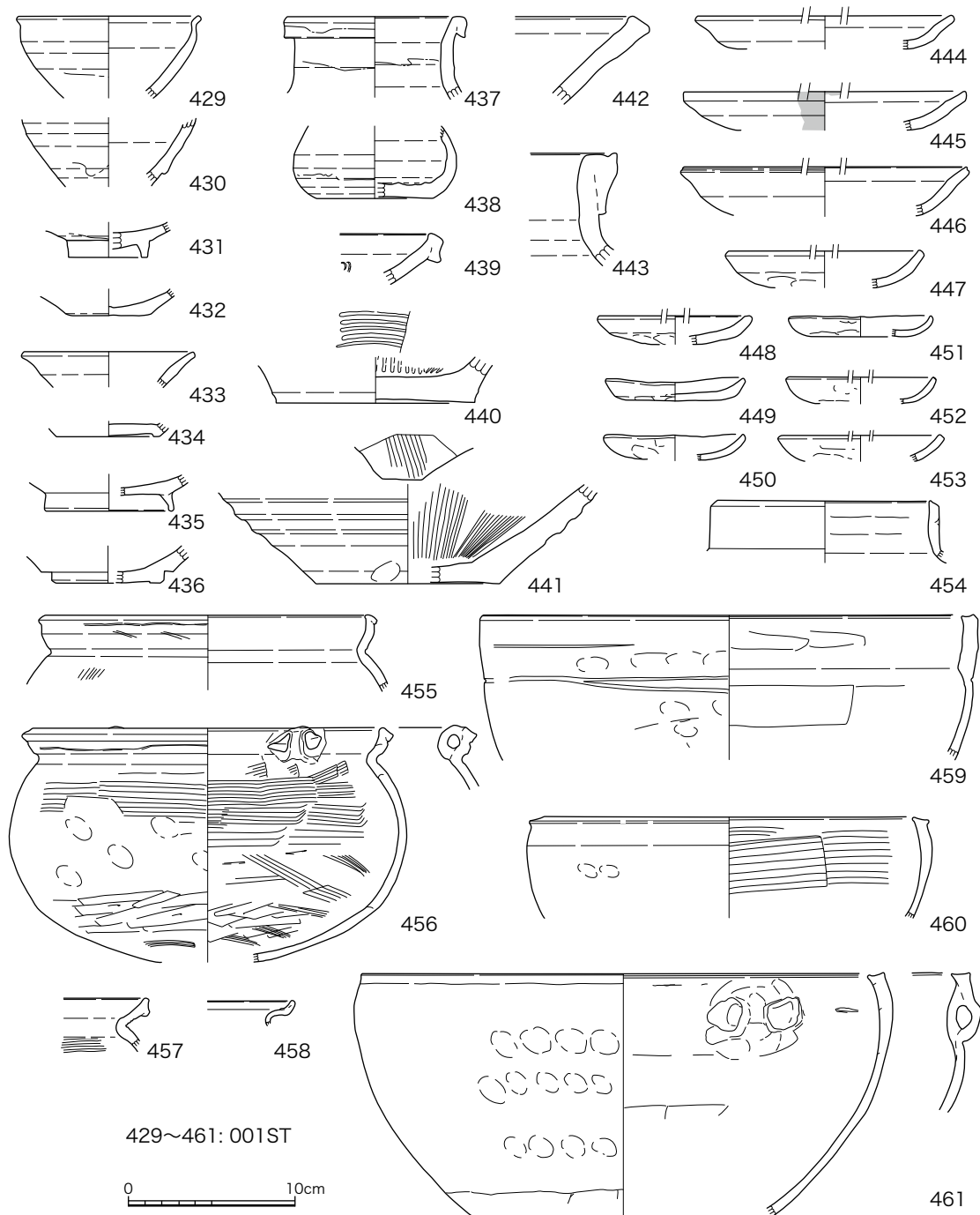
遺物

面が存在する。岩原分類の B12 類に相当するだろう。662 は挽白の上白で把手を付けるための方形の穴が穿たれていた。下面に掘り込まれた溝は放射状に刻まれているが、その密度はまばらで作りは精巧とはいえない。

018SX 出土遺物（第 103 図 664） 664 は根石

と思われる石材に近接して出土した土師器非ロクロ調整皿である。非常に浅い器形で外面には掌圧痕と思われる凹凸が認められる。土師器皿の存在から D 期の範囲に収まるものと理解されるが、E 期まで下る可能性を否定できない。

021SD 出土遺物（第 103 図 665） 665 は土師



第 93 図 D 期の遺物実測図 (s=1:4)

西浦遺跡

器内耳鍋 A 類である。

044SD 出土遺物（第 103 図 666） 665 は土師器内耳鍋 C 類で、口縁部が強く内彎していることから 17 世紀代と推測される。

055SD 出土遺物（第 103 図 667～673） 瀬戸・美濃窯産陶器天目茶碗（667）、土師器非ロクロ調整皿（670～672）、土師器内耳鍋 A 類（668・669）、土師器内耳鍋 C 類（673）などが出土した。672 は口縁端部上面に横ナデ調整によってできた面が存在するもので、659 よりも全形が深いので古いと思われる。667 は古瀬戸後Ⅳ期新段階に位置づけられることなどから見て 15 世紀後半を主体とする資料といえるかもしれない。

059SK 出土遺物（第 103 図 674～676） 674 は初山窯産陶器搦鉢の口縁部で薄い錆釉が施されている。大窯第 3 段階に相当する資料である。675 は土師器内耳鍋 A 類、676 は土師器内耳鍋 B 類で、両者とも 16 世紀代と推測される。

063SK 出土遺物（第 103 図 677） 677 は土師器内耳鍋 C 類で、口縁部がやや強く内傾することから 17 世紀代に入る可能性がある。

070SK 出土遺物（第 103 図 678） 678 は土師器非ロクロ調整皿 D 類である。

081SK 出土遺物（第 103 図 679） 679 は土師

器内耳鍋 A 類である。

084SK 出土遺物（第 103 図 680） 680 は瀬戸・美濃窯産陶器灰釉平碗で、古瀬戸後Ⅳ期古段階に位置づけられる。

2854SB 出土遺物（第 92 図 419・420） 419 は知多半島産の尾張型山茶碗と思われるが、渥美湖西型に近い形状を呈する。420 は渥美湖西型山茶碗の底部片である。両者とも藤澤良祐編年の第 6 型式に属するものである。

2919SK 出土遺物（第 92 図 423・424） 渥美湖西型山茶碗類などが出土した。423 は小皿、424 は山茶碗で、ともに第 6 型式に属する。

3001SK 出土遺物（第 92 図 425） 渥美湖西型山茶碗の口縁部で第 6 型式に属する。

3276SK 出土遺物（第 92 図 426） 渥美湖西型山茶碗の底部で第 6 型式に属する。

3332SK 出土遺物（第 92 図 427） 渥美湖西型山茶碗で第 6～7 型式に属する。

遺構外出土遺物（第 106 図 742～753） 最後に遺構以外の地点から出土したものうち、特筆すべきものを紹介しておく。751 は体部から口縁部にかけて 2 段に横ナデ調整が施された土師器非ロクロ調整皿である。中世でもやや古い時期に属すると思われる。

遺物

第5節 E期の遺物

E期の遺物には、陶磁器類、土師器、瓦、石製品、金属製品、木製品などが多様な種類が存在する。この中で陶磁器類については産地も多様となり、瀬戸・美濃窯産陶磁器、常滑窯産陶器、肥前窯産陶磁器、関西系磁器などがある。なお、これらの遺物の器種分類や時期は先行研究（藤澤良祐 2007・中野晴久 1996 他）を参考にしている。

128SD 出土遺物(第 94・95 図 462～493) 瀬戸・美濃窯産陶磁器、常滑窯産陶器、肥前窯産磁器、土師器、瓦器、瓦などの製品がある。

瀬戸窯産陶器には灰釉丸碗(462)、腰鍔茶碗(463・465)、仏餉具(478)、植木鉢(480・481)などが、瀬戸窯産磁器には広東茶碗(467)などが、美濃窯産陶器には尾呂茶碗(464)、筒形香炉(466)、広東茶碗(468)、箱形湯呑(470・471)、灰釉片口(475・476)、仏餉具(477)、瓶類(479)などが、常滑窯産陶器には 19 世紀代に位置づけられる壺(482)、肥前窯産磁器には染付丸碗(469・472・473)、染付皿(474)などがある。瀬戸・美濃窯産陶磁器では第 7～11 小期に位置づけられるものが大半を占めており、18 世紀後半～19 世紀前半の一括資料と見ることができる。土師器には内耳鍋 C 類(483・484)があるが、これが 18 世紀後半まで新しくなるかは不明である。瓦器では火熨斗(485)が存在する。瓦は大多数が棧瓦葺きに伴うものであり、ここでは軒棧瓦(488～493)のみを図示した。丸瓦部の瓦当面紋様は左巻き三つ巴紋に 12 珠紋を巡らせている。490～493 の平瓦部の瓦当面紋様は 7 子葉紋の中心飾りの両端に上向き唐草紋を置き、その上位に 3 順転唐草文を、下位に 1 反転唐草文を配置するものである。489 はこれとは異なる紋様構成だが全体像は不明である。

236SK 出土遺物(第 96・97 図 494～529) 瀬戸・美濃窯産陶磁器、肥前窯産磁器、関西系磁器、土師器、瓦などの製品がある。

瀬戸窯産陶器には鉄釉丸碗(496)、腰鍔茶碗

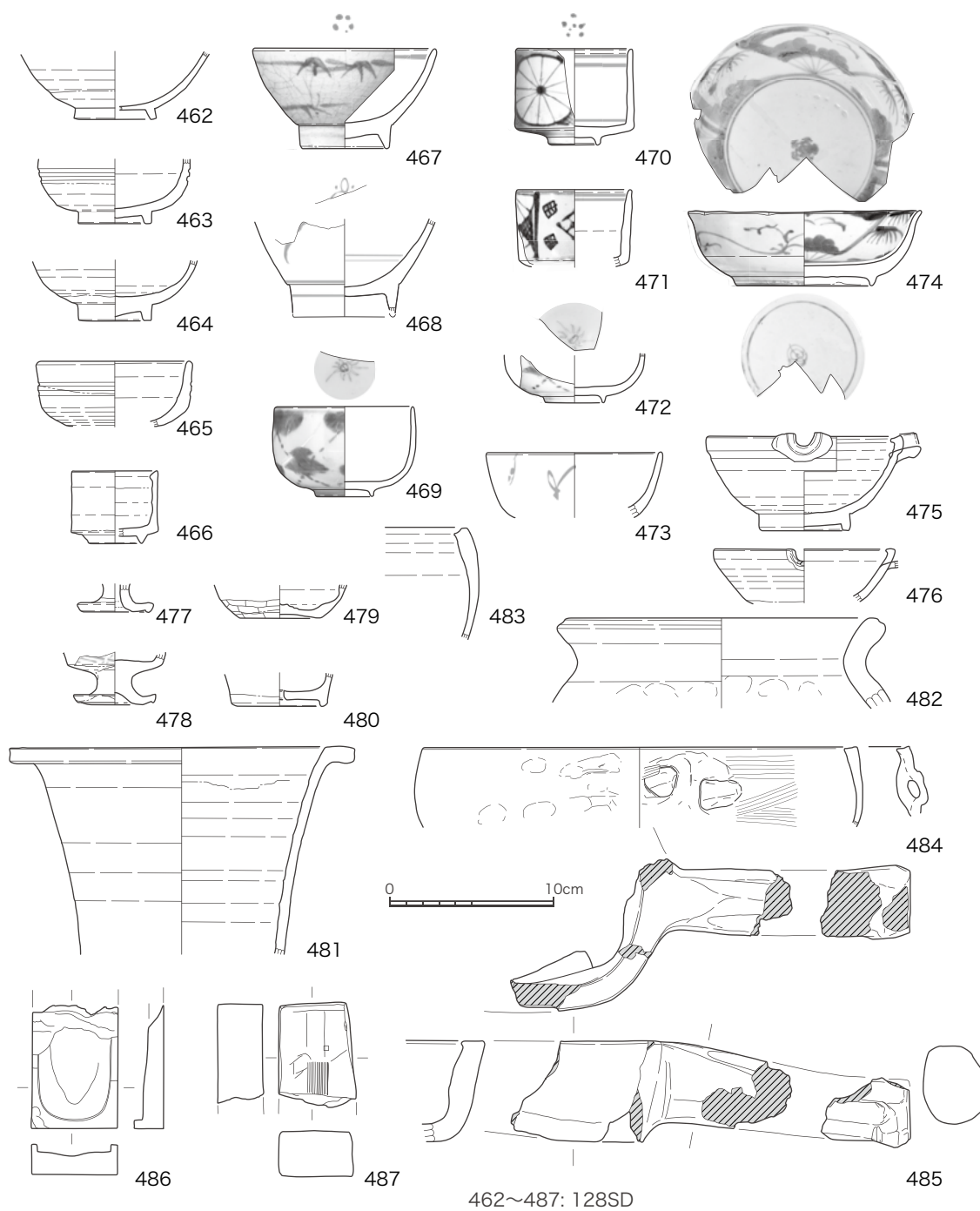
(498)、御室茶碗？(499)、鎧茶碗(505)、ひょうそく(501)、播鉢(512・513)、刷毛目徳利(514)、練り鉢(520)などが、美濃窯産陶器には尾呂茶碗(494・495・497)、広東茶碗(503)、箱形湯呑(504)、摺絵皿(509)、御深井皿(510)、筒形香炉(519)などが、肥前窯産磁器には染付丸碗(506)、白磁小杯(500)、上絵付徳利(502)、染付八角鉢(511)、染付水滴(516)などが、関西系磁器には染付丸碗(507・508)、などがある。瀬戸・美濃窯産陶磁器では、最も新しいものとしては第 11 小期に位置づけられるもの(501・514)があるが、それよりかなり古い第 4～7 小期に位置づけられるものも相当量含まれる。この結果、17 世紀末～19 世紀前半の資料群と考えられることになる。土師器には焙烙(517・518)が存在するが、皿類は見られなくなる。瓦は大多数が棧瓦葺きに伴うものであるが、軒棧瓦(522)は意外と少ない。本資料群で目立つ丸瓦(524～527)と伏間瓦(528・529)を中心に図示した。丸瓦は内面にコビキ B 手法の痕跡が残存し、タタキが多く観察される。伏間瓦は中央部に小孔が 2 個並んで設置されていた。これらの瓦は大棟部の材料群と考えられる。

262SK 出土遺物(第 98 図 530～541) 瀬戸・美濃窯産陶磁器、常滑窯産陶器、肥前窯産磁器などの製品がある。

瀬戸窯産陶器には徳利(538・539)、瓶掛(541)などが、瀬戸窯産磁器には染付湯呑(534)などが、美濃窯産陶器には尾呂茶碗(531)、広東茶碗(530)、湯呑(533)などが、肥前窯産磁器には染付丸碗(535)と箱形湯呑(532)などが、常滑窯産陶器には赤物甕(536)と竈(537)、などがある。536 は 19 世紀前半、537 は 18 世紀に位置づけられ、瀬戸・美濃窯産陶磁器では、第 11 小期に位置づけられるもの(534 など)が最新資料である。

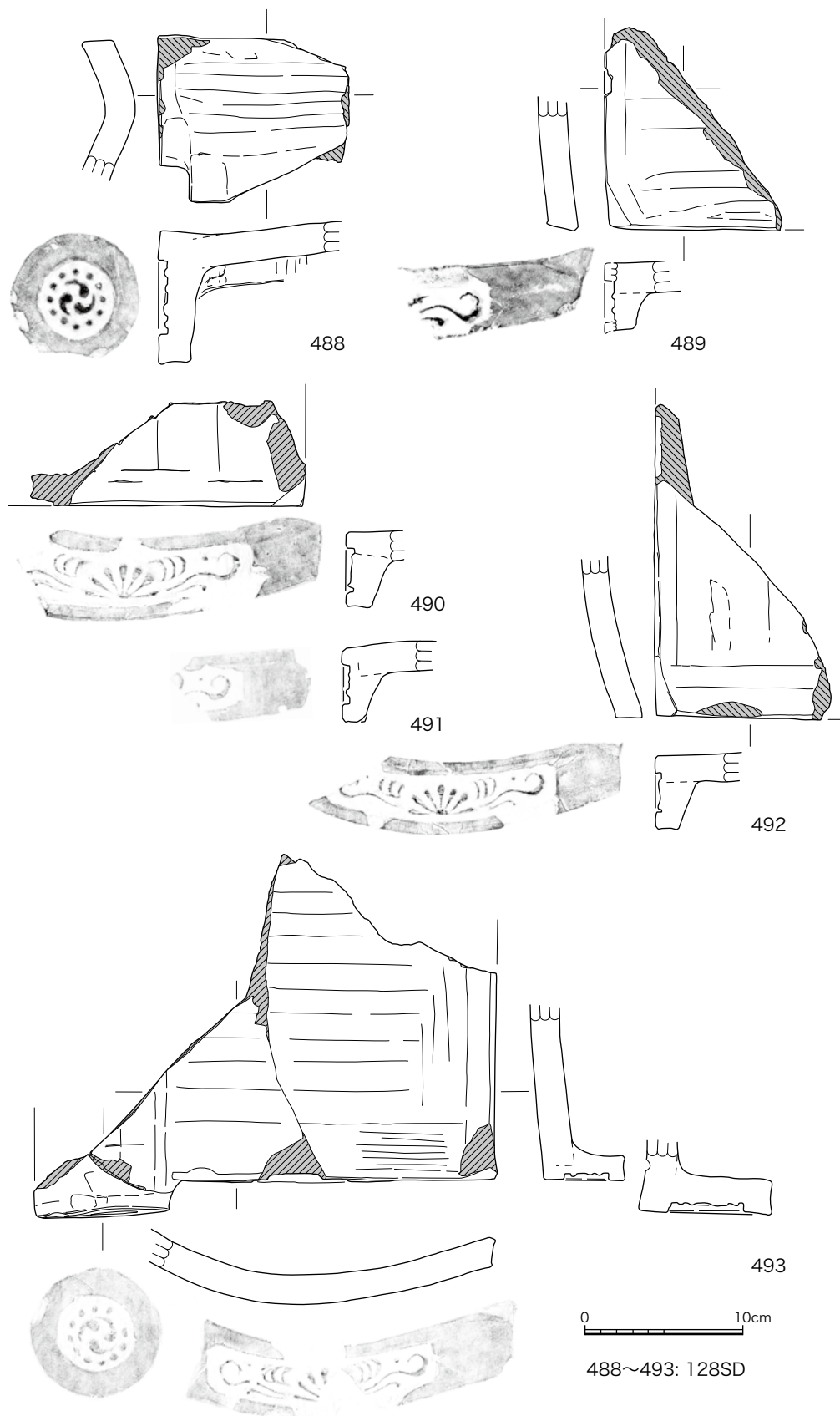
265SK 出土遺物(第 98 図 542～545) 美濃窯

西浦遺跡



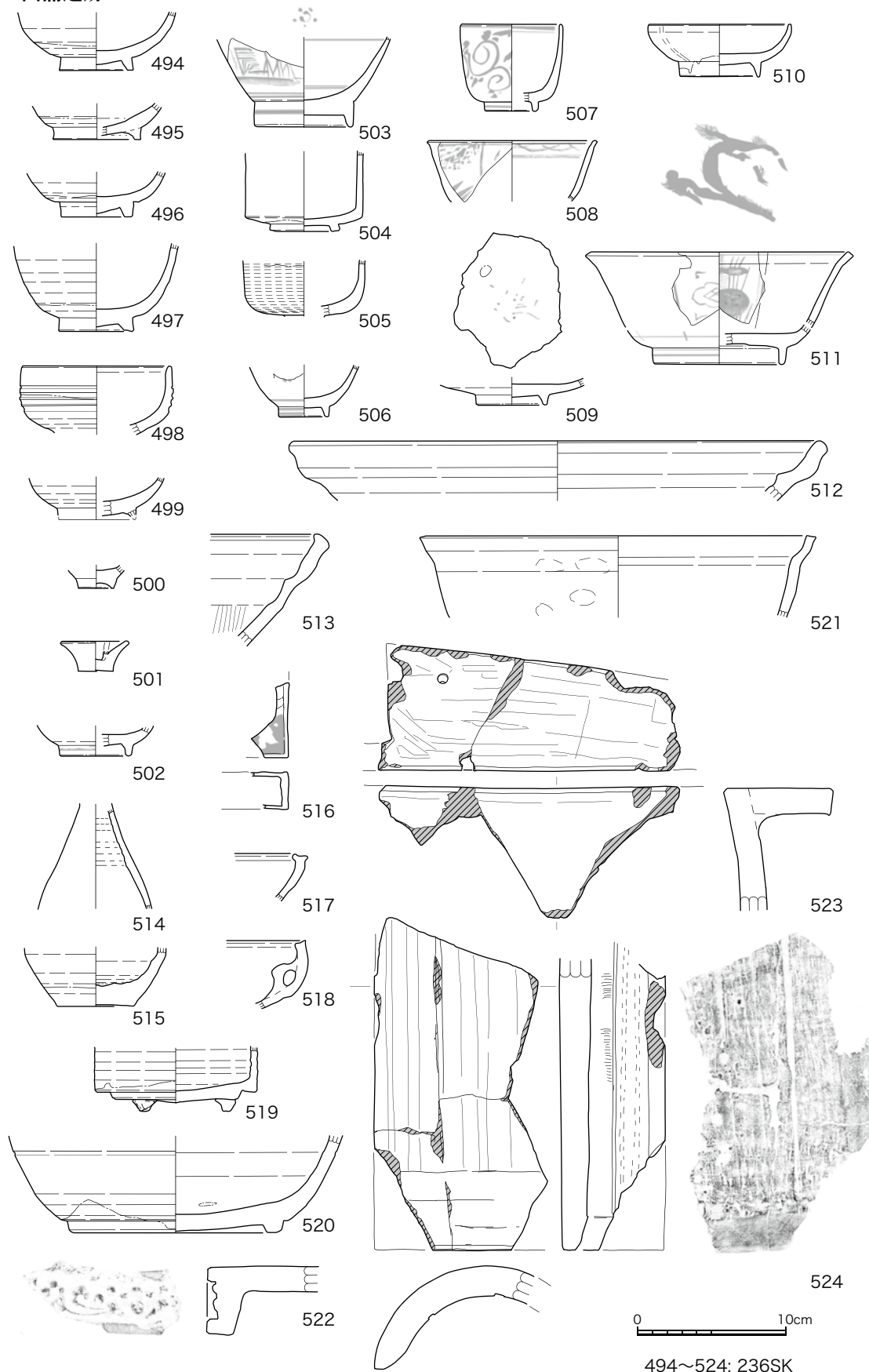
第 94 図 E 期の遺物実測図 (1) (s=1:4)

遺物



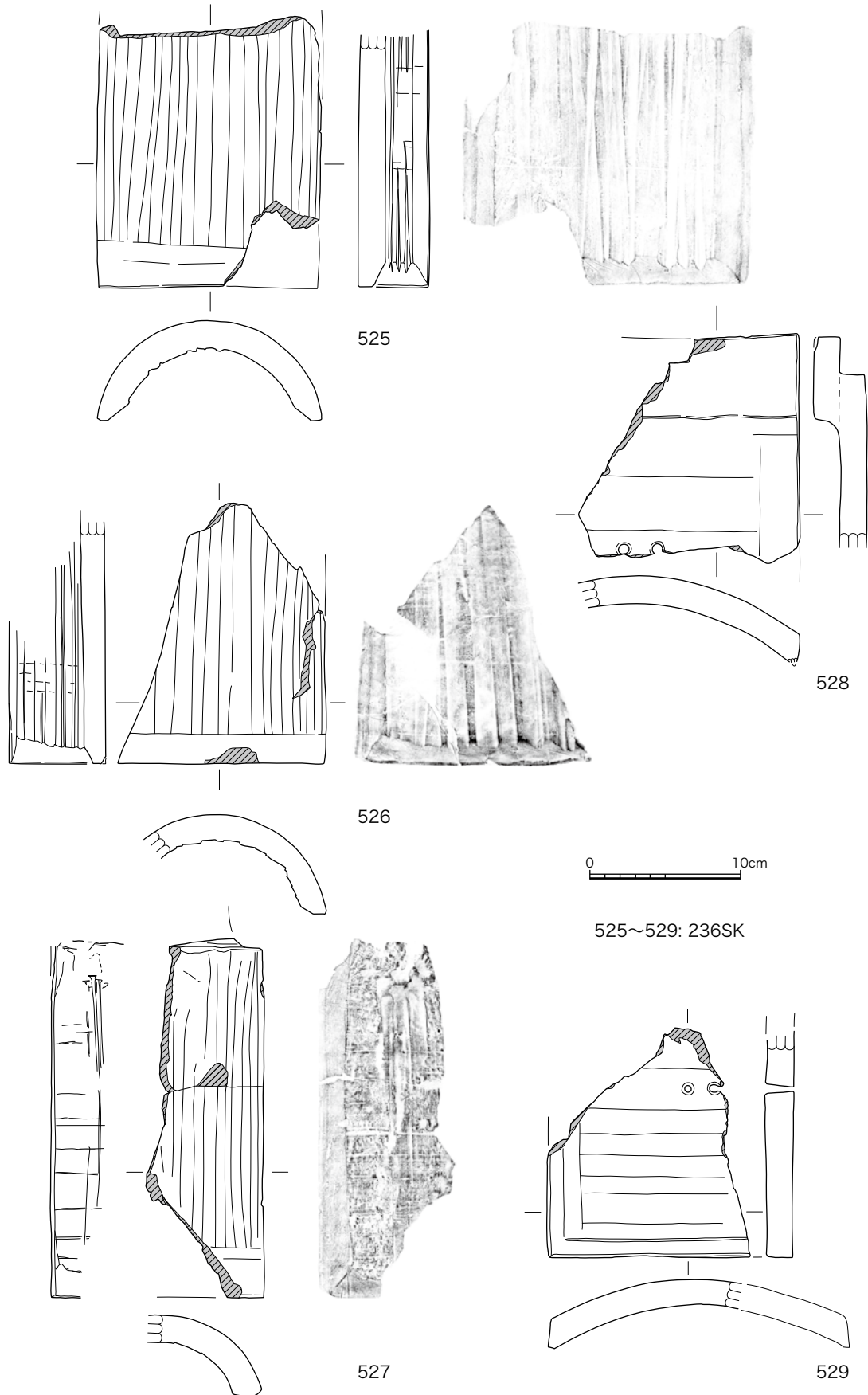
第 95 図 E 期の遺物実測図 (2) (s=1:4)

西浦遺跡



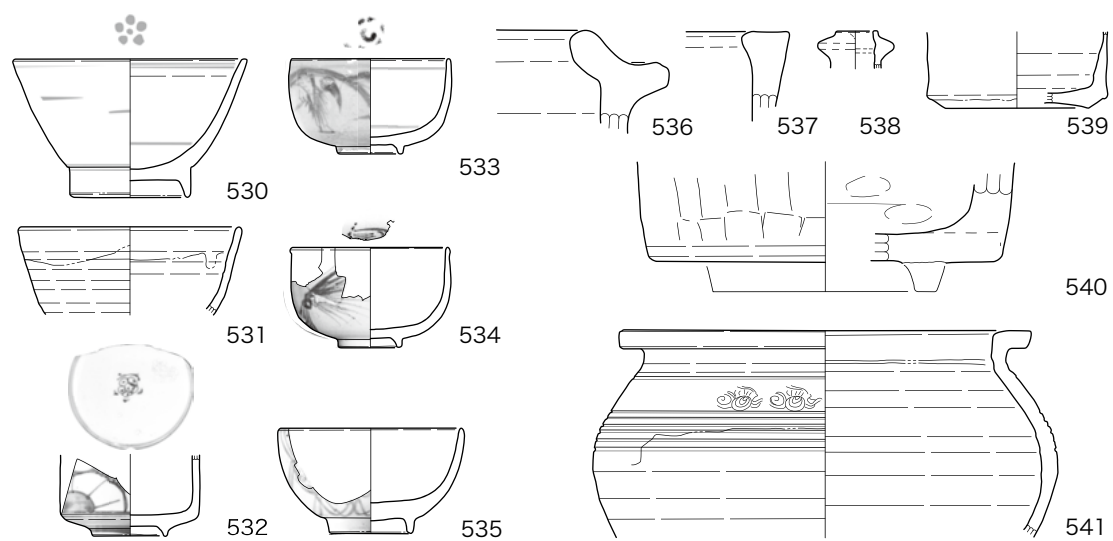
第 96 図 E 期の遺物実測図 (3) (s=1:4)

遺物

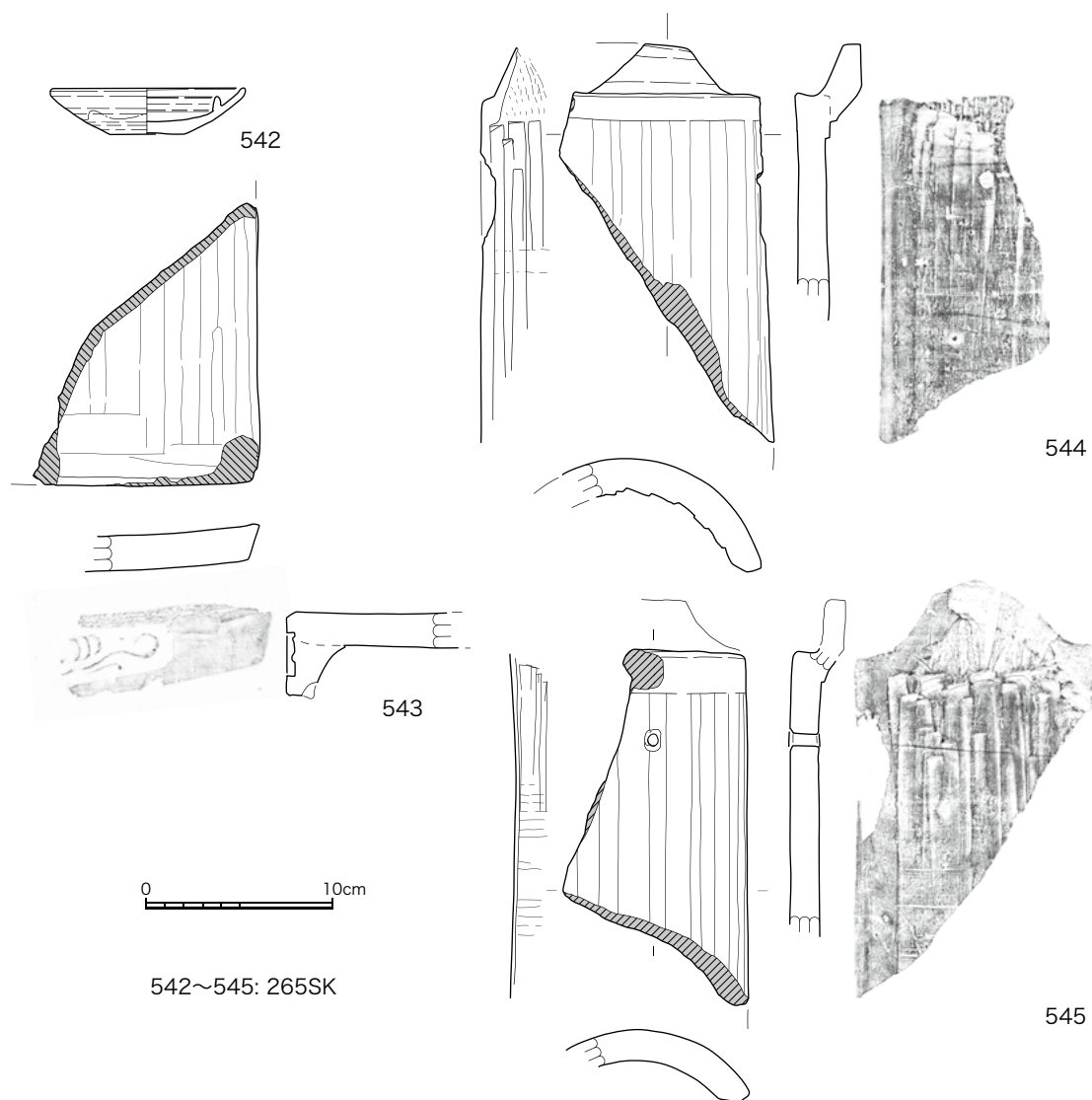


第 97 図 E 期の遺物実測図 (4) (s=1:4)

西浦遺跡



530~541: 262SK



542~545: 265SK

第 98 図 E 期の遺物実測図 (5) (s=1:4)

遺物

産陶器灯明皿 (542)、瓦などの製品がある。瓦は大多数が棧瓦葺きに伴うものであるが、軒棧瓦 (543) と丸瓦 (544・545) を図示した。

426SK 出土遺物 (第 99・100 図 546～594) 瀬戸・美濃窯産陶磁器、常滑窯産陶器、肥前窯産磁器、土師器、瓦、石製品などの製品がある。完形品の小碗が多い点が特筆されよう。

瀬戸窯産陶器には腰鎗茶碗 (556・557)、箱形湯呑 (561)、仏餉具 (564)、播鉢 (579～582)、片口 (570)、花瓶 (575)、練り鉢 (578)、甕 (583) などが、瀬戸窯産磁器には染付端反碗 (567) などが、美濃窯産陶器には灰釉小碗 (546～552)、尾呂茶碗 (558)、小杉碗 (559)、箱形湯呑 (560・562)、仏餉具 (563)、片口 (568・569)、蓋物 (574)、小瓶 (576) などが、肥前窯産磁器には染付小碗 (554・555)、白磁小碗 (553)、染付徳利 (577) などが、常滑窯産陶器には 18 世紀に位置づけられる赤物甕 (584) などがある。瀬戸・美濃窯産陶磁器では、最も新しいものとしては第 10 小期に位置づけられるもの (557・560・567・583) があるが、多くは第 8～9 小期に属するものであった。土師器には口径が小さい非クロ調整皿 (565・566) や焙烙 (586～588) が存在する。585 は土人形で頭部が欠損している。瓦器には鍋 (589) があり、残存していないが口縁部に双耳が付くと思われる。石製品には刻書が施された硯と砥石が存在する。590 は裏面全体に絵画風の刻書が認められるが、そのモチーフは不明。建物を描いたものか？砥石は直方体のもの (591・593) と縦断面が三角形となるもの (592・594) がある。

438SD 出土遺物 (第 101 図 599～609) 瀬戸・美濃窯産陶磁器、肥前窯産磁器などの製品がある。瀬戸窯産陶器腰鎗茶碗 (599)、同灰釉縁釉小皿 (601)、美濃窯産陶器天目茶碗 (600)、土師器内耳鍋 A 類 (606～609)、土師器内耳鍋 C 類 (602)、土師器羽付鍋 (603)、土師器釜 (605)、土師器南伊勢系鍋 (604) などがある。土師器類は 16 世紀前後に位置づけられるが、第 10 小期に位置

づけられるもの (599) が最新資料となる。

441SD 出土遺物 (第 101 図 610～633) 瀬戸・美濃窯産陶磁器、常滑窯産陶器、肥前窯産磁器、石製品などの製品がある。

瀬戸窯産陶器には灰釉丸碗 (610・614)、長の (617) などが、瀬戸窯産磁器には染付湯呑 (618) などが、美濃窯産陶器には柳茶碗 (611～613)、広東茶碗 (615・616)、箱形湯呑 (620～622)、徳利 (626)、灯明皿 (628)、片口 (629) などが、肥前窯産磁器には染付丸碗 (619・623) と染付端反碗 (624) などが、常滑窯産陶器には朱泥小瓶？ (627) と火鉢 (630)、竈またはクド (631)、壺 (632) などがある。多くの瀬戸・美濃窯産陶磁器は、第 8～11 小期に位置づけられるものである。

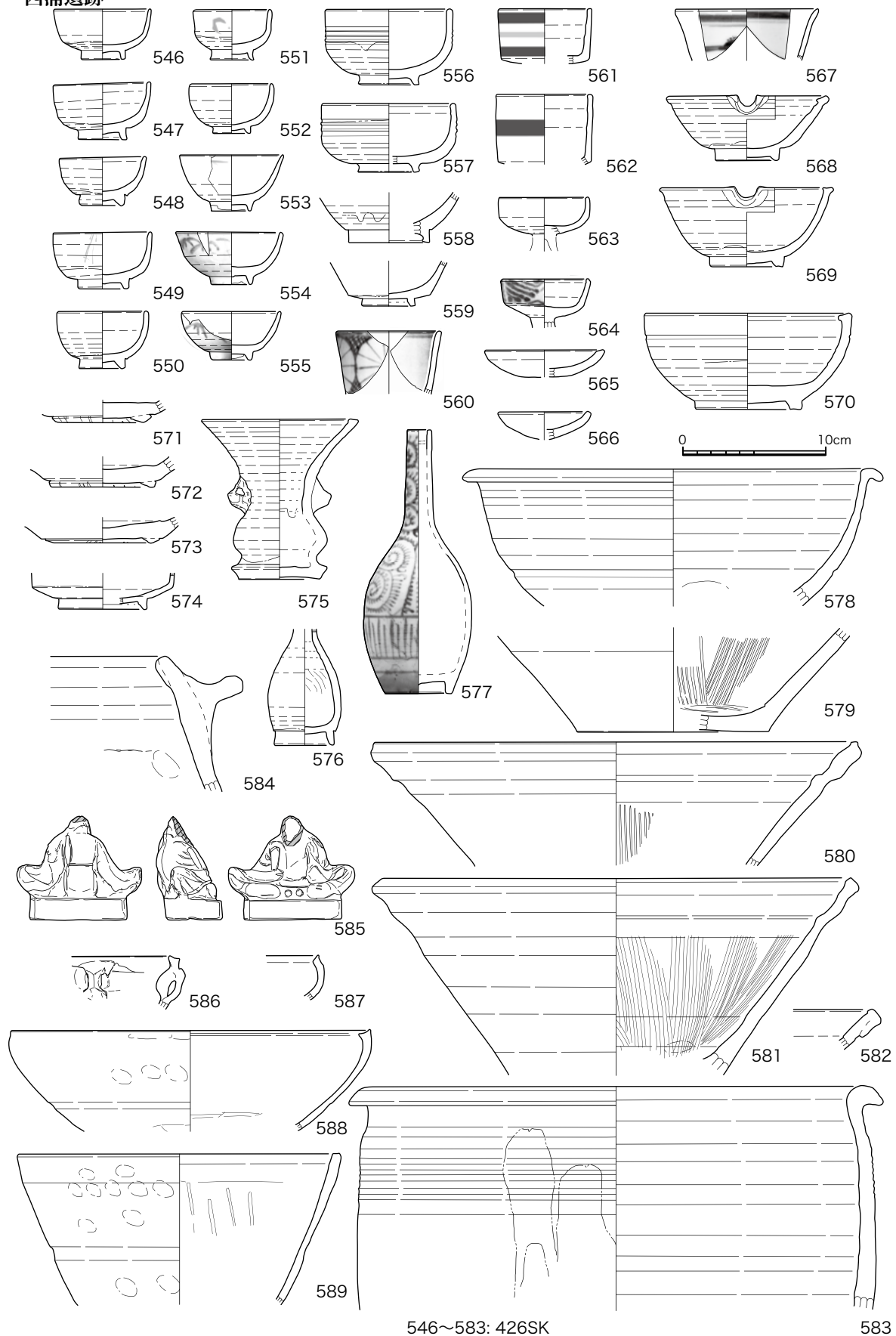
583SD 出土遺物 (第 101 図 634～638) 瀬戸窯産陶器腰鎗茶碗 (635)、肥前窯産陶器端反碗 (634)、近世志戸呂窯産陶器火入れまたは香炉 (636)、常滑窯産陶器真焼き甕 (637)、円盤状石製品 (砥石か：638) などがある。甕は 18 世紀後半に位置づけられる。

746SK 出土遺物 (第 100 図 595～598) 瀬戸窯産陶器御室茶碗 (596)・美濃窯産陶器尾呂茶碗 (595)、土師器釜 (597) と土師器内耳鍋 C 類 (598) などがある。597 は口縁部がかなり内傾し屈曲部がなだらかに、598 は全体の形状が扁平になっており、両者とも 18 世紀に属するだろう。

3668SK 出土遺物 (第 102 図 639～658) 瀬戸・美濃窯産陶磁器、常滑窯産陶器、肥前窯産磁器、石製品などの製品がある。

瀬戸窯産陶器には端反碗 (639)、腰鎗茶碗 (644)、梅文皿 (645)、仏餉具 (647)、練り鉢 (652) などが、瀬戸窯産磁器には端反碗 (642) などが、美濃窯産陶器には広東茶碗 (640)、湯呑 (641)、蓋 (643)、片口 (648)、有耳壺 (649)、染付徳利 (650)、白磁花瓶 (651) などが、肥前窯産磁器には仏餉具 (646)、などが、常滑窯産陶器には赤物甕 (653) などがある。瀬戸・美濃窯産陶

西浦遺跡



第 99 図 E 期の遺物実測図 (6) (s=1:4)

遺物

磁器は、概ね第10～11小期に位置づけられる。瓦は大多数が棧瓦葺きに伴うものであるが、ここでは軒先ではない棧瓦（654～658）を中心に図示した。658からみて棧瓦は一辺が27～28 cmを測る規模であったことが想定される。

148SK 出土遺物（第103図 691～693） 美濃窯産陶器尾呂茶碗（691）と土師器焙烙（692）と砥石（693）などがある。692は他の土師器内耳鍋や焙烙とは異なり、横ナデ調整による端面を作らず口縁端部が丸くなるものである。この種の焙烙は新城市内に所在する遺跡でよく見られるものである。この資料群の時期は18世紀後半に属すると思われる。

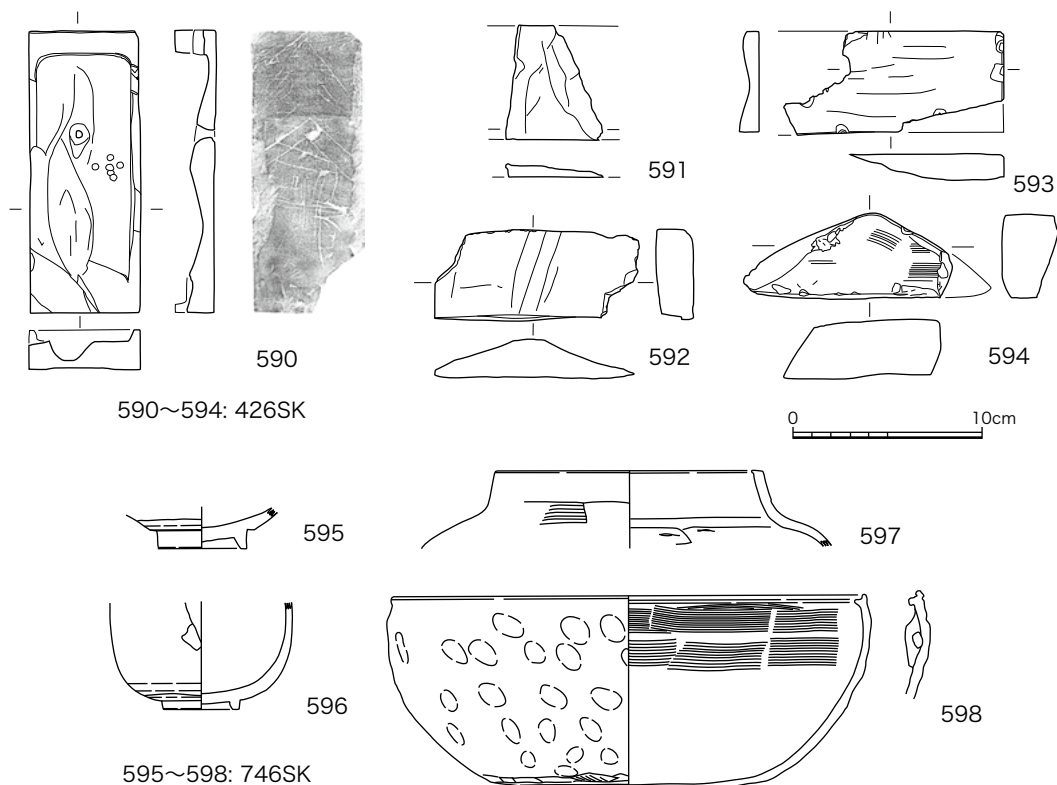
182SK 出土遺物（第103図 695～697） 瀬戸窯産陶器腰鍔茶碗（695）と瓦器双耳鍋（696）と常滑窯産陶器真焼甕（697）などがある。696

は口縁部が受口状となっている。695は連房式登窯第8小期に位置づけられ、697は18世紀中頃に属する。

428SK 出土遺物（第104図 707・708） 軒棧瓦の瓦当面を転用した砥石様製品（707）と木製結桶底板（708）が出土した。詳細な時期は特定し難いが、江戸時代後期と思われる。

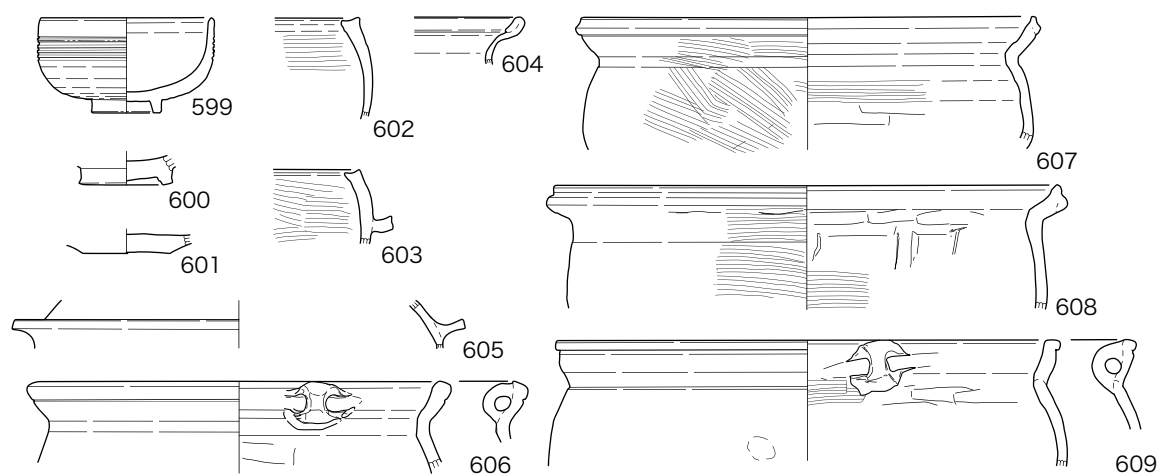
724SK 出土遺物（第104図 723・726） 口縁部が直立気味に立ち上がる土師器非ロクロ調整皿（723・724）と土師器焙烙（726）が存在した。726は図示した以外にも破片が多数存在するがうまく接合ができない状態であった。725は古代灰釉陶器平瓶である。

2488SK 出土遺物（第104図 735～737） 土師器非ロクロ調整皿（735・736）と瀬戸窯産陶器片口鉢（737）がある。詳細な時期は特定し難

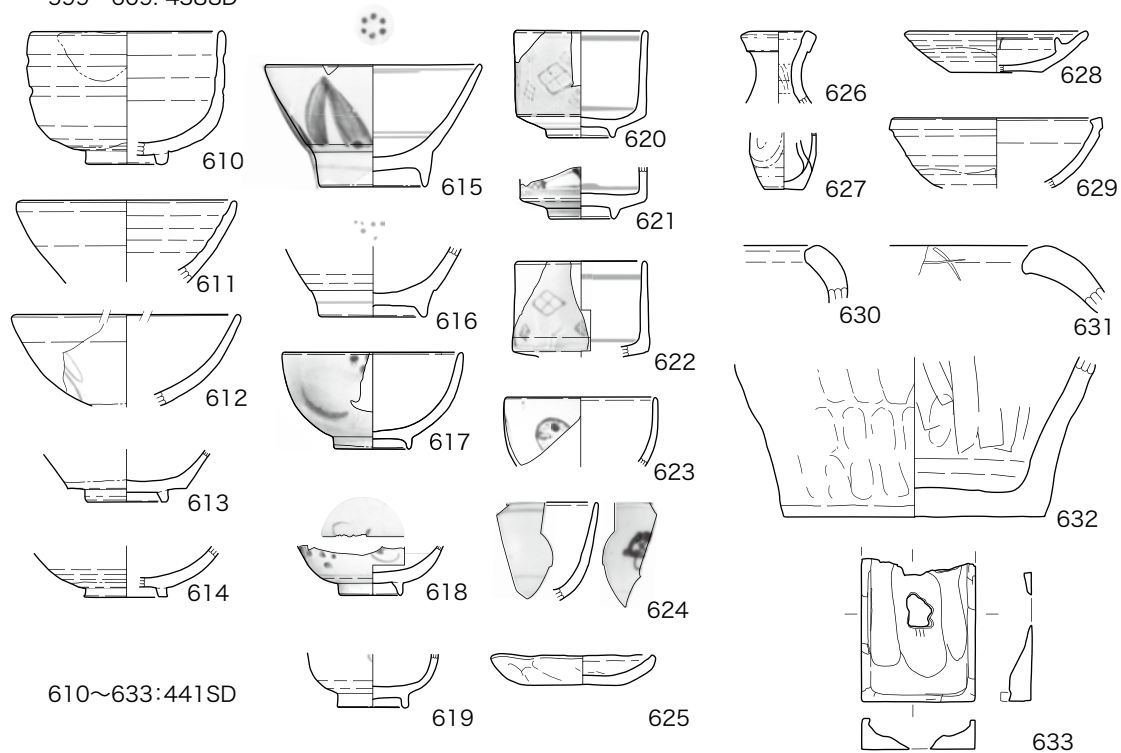


第100図 E期の遺物実測図(7) (s=1:4)

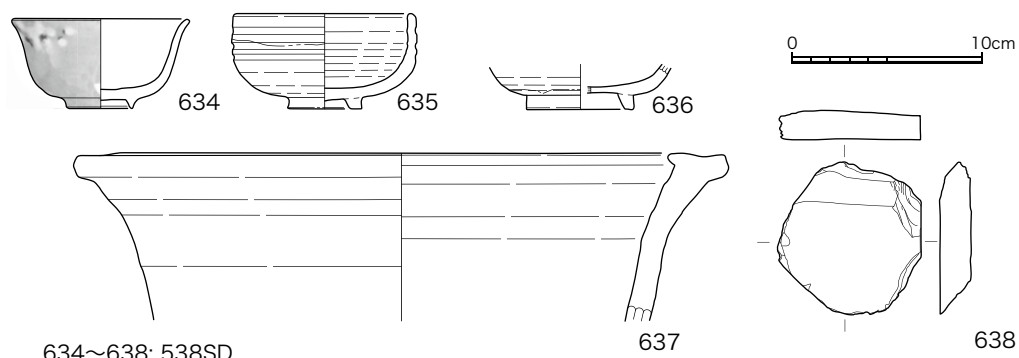
西浦遺跡



599~609: 438SD



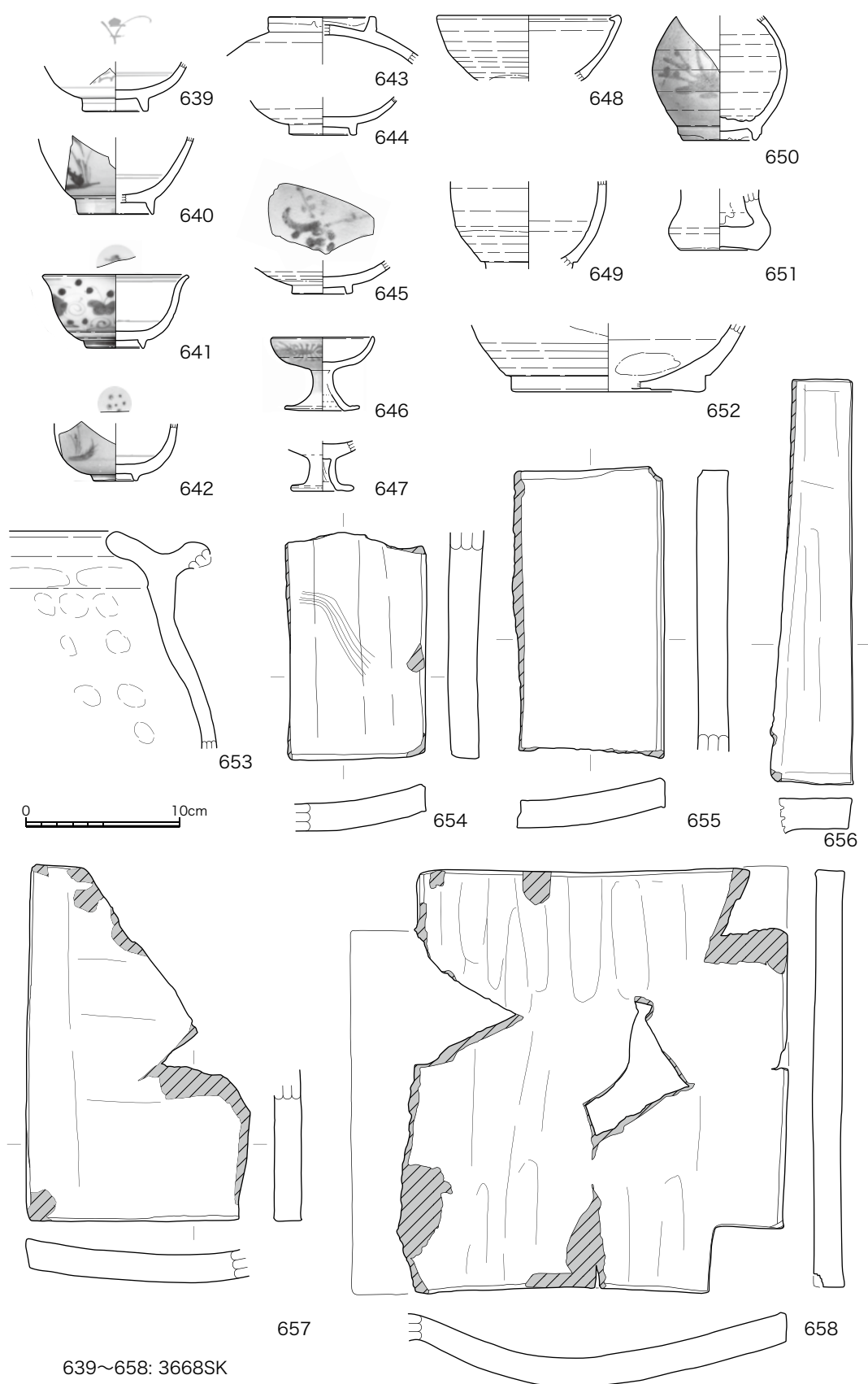
610~633: 441SD



634~638: 538SD

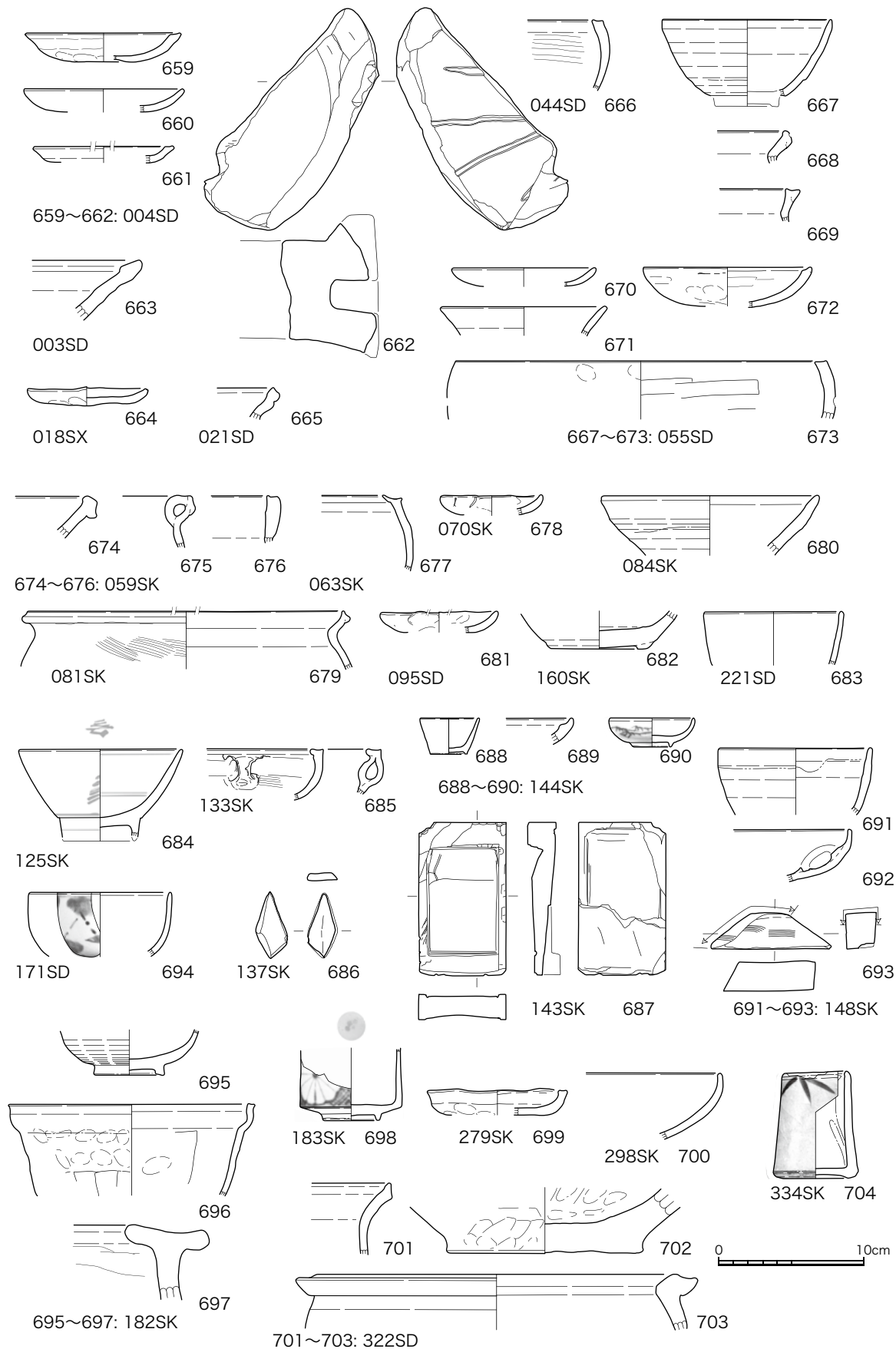
第 101 図 E 期の遺物実測図 (8) (s=1:4)

遺物



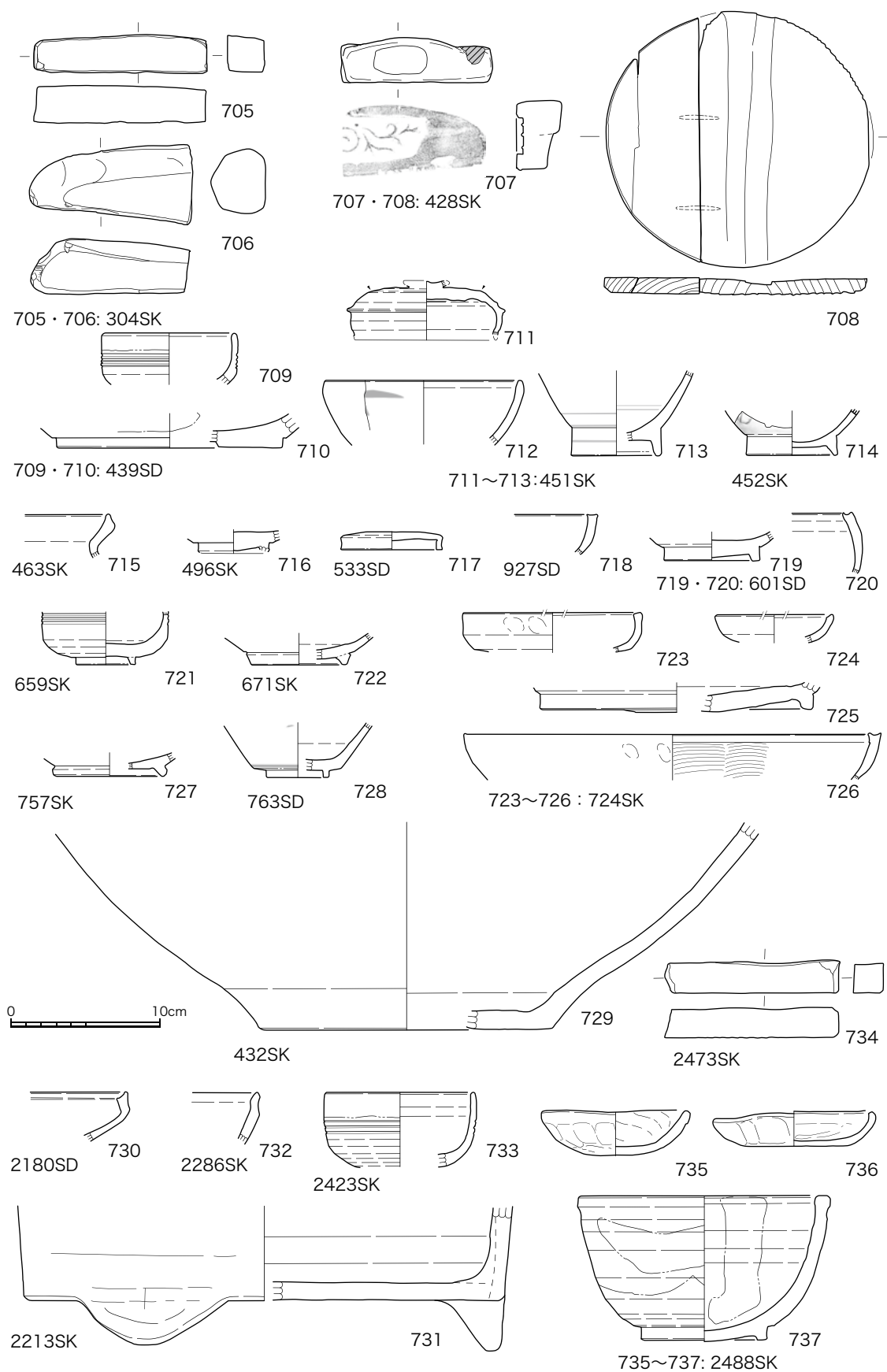
第 102 図 E 期の遺物実測図 (9) (s=1:4)

西浦遺跡



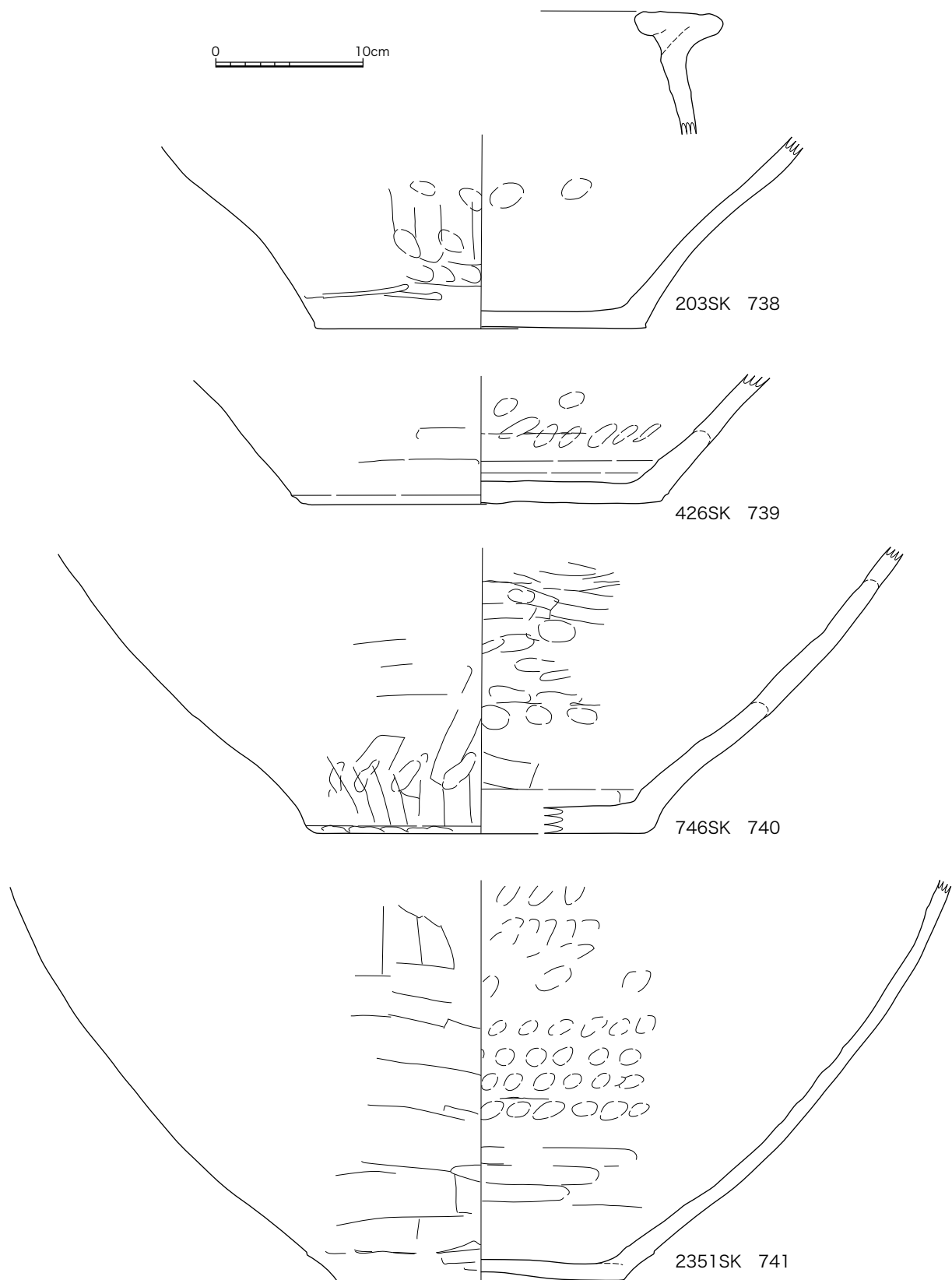
第 103 図 E 期の遺物実測図 (10) (s=1:4)

遺物



第 104 図 E 期の遺物実測図 (11) (s=1:4)

西浦遺跡



第 105 図 E 期の遺物実測図 (12) (s=1:4)

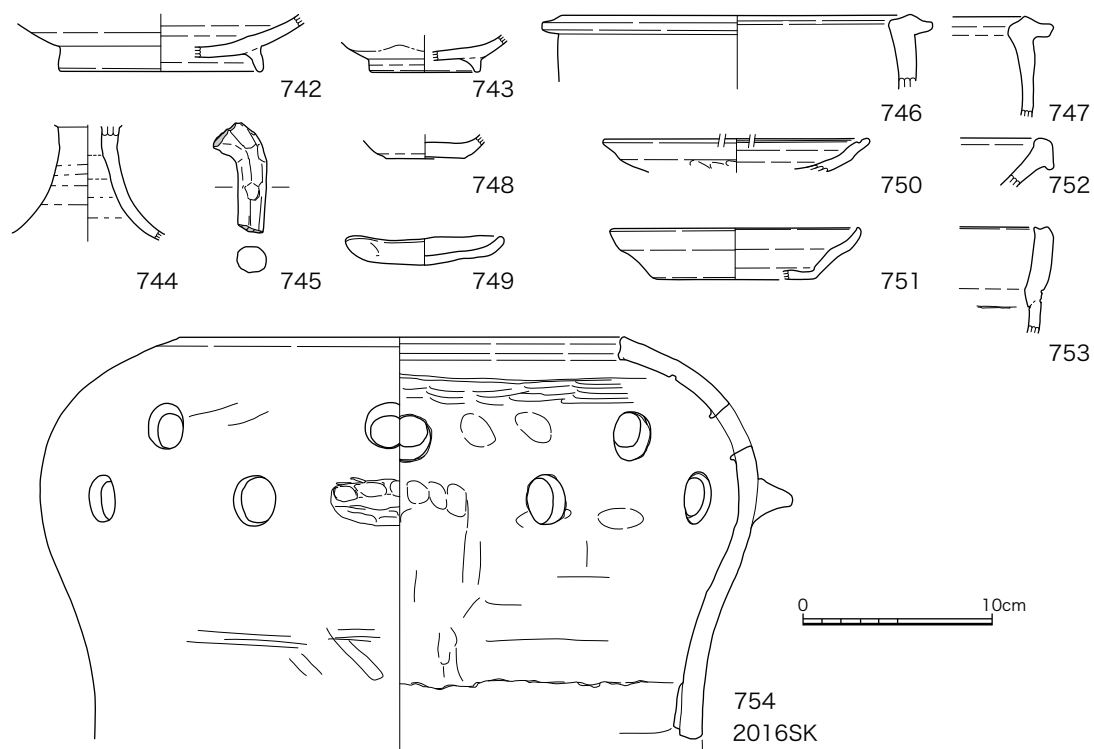
遺物

いが、江戸時代後期と思われる。735・736 は底部から丸みをもって屈曲し直立気味に口縁端部に至るもので、焼成は比較的に良好である。737 は連房式登窯第 5 小期に位置づけられることからみて、土師器皿も 18 世紀前半に属する可能性が考えられる。

埋甕出土遺物(第 104・105 図 729・738～741) 土坑中に正位置に配置された甕が伴う遺構がいくつか検出されているが、ここではこれをまとめて紹介したい。729 は 432SK に埋設された赤物甕、738 は 203SK に埋設された真焼甕、739 は

426SK に埋設された赤物甕、740 は 746SK に廃棄された赤物甕、741 は 2351SK に埋設された赤物甕である。基本的には上位は滅失しており、口縁部破片がかろうじて残存した資料は 738 のみであり、これは 19 世紀に位置づけられる。

2016SK 出土遺物(第 106 図 754) 平面が方形プランを持つ土坑の中央部に倒立した状態で埋設された蚕火鉢が 1 点出土している。周囲には多量の炭化物が充填されていた。754 は平面形が楕円形を呈し底部はおそらく人工的に除去されたものであろう。長径の両端部に持ち手が付き、体



第 106 図 E 期の遺物実測図 (13) (s=1:4)

西浦遺跡

部には複数の円孔が並んで設けられていた。常滑窯か三河西部の新川窯で生産されたものと思われる、時期は明治30年代以降の資料である。近代に石巻村で桑畑ができ養蚕が営まれた証左として紹介しておきたい。

その他の出土遺物（第107図 755～763）755と756は杭列022SAに伴う杭である。この杭列の杭群は、節を多く持つ直径10cm程度の丸太材を用い、地面に打ち付ける側を斜めに削って作られるものである。金属製品には、これまで紹介してきたものの以外にも鉄製釘、鉄製刀子、碗型鉄滓などの金属関連遺物などがある。ここでは銅銭（757～763）のみを紹介したい。多くは渡来銭であるが、一部に寛永通寶（757）が含まれていた。（鈴木正貴）

岩原剛 2004「東三河の中世土師器皿・試論」『三河考古学談話会 2004年7月東三河部会発表資料』

鈴木敏則 2000「古墳時代湖西窯編年の再構築に向けて」『須恵器生産の出現から消滅 第1分冊 発表要旨』第1回 東海土器研究会

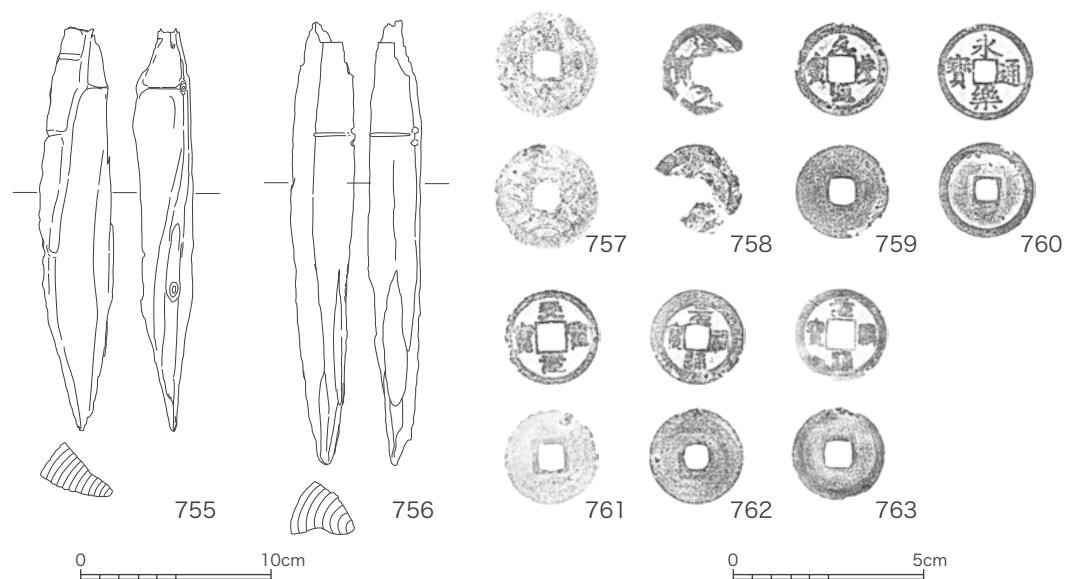
中野晴久 1994「生産地における編年について」『中世常滑焼をおって』資料集』日本福祉大学知多半島総合研究所

中野晴久 1996「常滑焼の研究～近世赤物について～」『知多古文化研究10』

賛元洋 2000「古代湖西窯編年の再構築」『須恵器生産の出現から消滅 第1分冊 発表要旨』第1回 東海土器研究会

服部信博 2002「銅鐸に伴う「舌」について」『研究紀要 第3号』愛知県埋蔵文化財センター

藤澤良祐 2007「総論」『愛知県史 別編窯業2 中世・近世瀬戸系』愛知県



第107図 E期の遺物実測図(14) (s=1:4, 1:2)

第4章 自然科学的分析

第1節 豊橋市北部、西浦遺跡における地下層序と表層地形解析

鬼頭 剛（愛知県埋蔵文化財センター）

はじめに

豊橋市北部、石巻町の西浦遺跡にて地下層序を観察する機会を得た。その層序解析、放射性炭素年代測定および表層地形解析の結果を報告する。

試料および分析方法

地下層序解析のため、調査区において地表面や遺構検出面からバックホーにより掘削し層序断面を露出させ、層序断面図の作成と試料採取を行なった。層序断面図の作成にあたり、層相・粒度・色調・堆積構造・化石の有無などの特徴を詳細に記載した。層序断面からは放射性炭素年代測定用試料を採取した。

放射性炭素年代測定は加速器質量分析（AMS）法により測定を行なった。試料は125 μmの篩により湿式篩別を行ない、篩を通過したものを酸洗浄し不純物を除去した。石墨（グラファイト）に調整後、加速器質量分析計にて測定した。測定された¹⁴C濃度について同位体分別効果の補正を行なった後、補正した¹⁴C濃度を用いて¹⁴C年代を算出した。¹⁴C年代値の算出には半減期としてLibbyの半減期5568年を使用した。¹⁴C年代の暦年代への較正にはCALIB4.3を使用した。測定は株式会社パレオ・ラボ（Code No.; PLD）に依頼した。

調査地周辺における現在の表層地形解析のため等高線図を作成した。作成は愛知県豊橋市発行の「都市計画基本図（1/2500）」にプロットされた標高値を用いて筆者が作成した。

分析結果

深掘層序

北から南へ順に地点1（06E区）、地点2（06D

区）、地点3（06Ab区）、地点4（06Aa区）のそれぞれ1地点でバックホーによる掘削を実施した（第108図）。また、地点5（06Aa区）では調査区の南端に設定されたトレンチ断面で層序の確認を行なった。各地点の層序の特徴を以下に述べる。

最も北側に位置する地点1（06E区）では深度約4 mの層序断面を得た（第109図）。下位層より、標高25.58～26.72 mは径10～20 cmの角礫～亜角礫を主体とする大礫層である（第110図）。礫種は石灰岩、チャート、結晶片岩からなる。礫は全体に風化をしているが、下部層ほど風化が著しく、手ガリ（草刈りガマ）で引っかくと簡単に崩れてしまうものもみられる。基質はシルト質粘土～粘土からなり、基質の量に対して相対的に礫の方が多い礫支持礫層である。標高26.72～26.93 mは黄褐色粘土層である。堆積構造はみられず全体に塊状で、粘土の固結度は高い。礫が散在してみられるところもある。本層と下位層である大礫層との境界面直上、標高26.75 mで放射性炭素年代測定用の試料を採取した。標高26.93～28.33 mは最下位層と層相の似る径10～20 cmの角礫～亜角礫を主体とする大礫層である。含まれる礫は、風化の程度の進んだものと、手ガリでは簡単に破壊されない新鮮なものとが混在する。基質はシルト質粘土からなり、礫支持礫層である。標高28.33～28.92 mは礫混じりの粘土質シルト層であり、その上を覆う標高28.92～29.13 mも礫混じりの粘土質シルト層からなる。標高29.13～29.23 mは黒褐色を呈する礫混じりのシルト層である。標高29.23～29.42 mは黒褐色を呈する礫混じりのシルト層からなる。本層が遺物包含層となっている。標高29.42～29.74 m

西浦遺跡

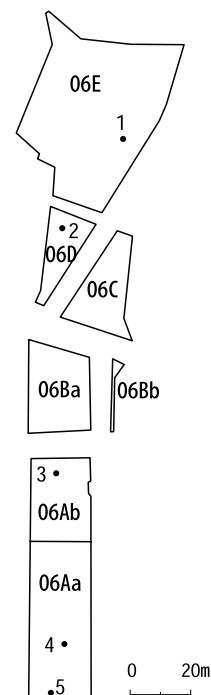
は黒褐色を呈する礫混じりシルト層である。堆積構造はみられない。本層は現世のブドウ畑の耕作土となっており、頂部（標高 29.74 m）が地表面である。

地点 2（06D 区）では深度約 6 m の層序断面を得た。下位層より、標高 23.22～27.83 m は径 10 cm 程度の角礫を主体とする大礫層である。基質は粘土からなり、礫支持礫層である。礫種は石灰岩、チャート、結晶片岩からなる。礫は手ガリで簡単に破壊されるほど風化の進んだものと、固くて新鮮なものとの混在する。本層の下底、標高 23.30 m で放射性炭素年代測定用の試料を採取した。標高 27.83～28.03 m は風化の進んだ礫の混じる粘土層である。下位層と本層との境界は明瞭である。堆積構造はみられず、地層は全体に塊状・均質である。標高 28.03～28.82 m は最下位層と同じように径 10 cm 程度の角礫を主体とする大礫層である。礫種は石灰岩、チャート、結晶片岩からなる。基質は粘土からなり、礫支持礫層である。下位層と上位層との層理面はそれぞれ明瞭である。標高 28.82～29.22 m は明灰褐色の粘土層である。管状で、黒褐色の粘土で充填された草本植物に由来すると思われる根跡がみられる。本層の下位層である礫層との境界は明瞭であるが、上位層との境界は起伏をもち不明瞭となる。本層の上部からは 7 世紀の考古遺物が出土する。標高 29.22～29.88 m は黒褐色を呈する粘土質シルト層である。現在のブドウ畑耕作土であり、根跡が多数みられる。頂部（標高 29.88 m）が地表面である。

地点 3（06Ab 区）では深度約 4.7 m の層序断面を得た。下位層より、標高 24.85～25.36 m は黄褐色の粘土層からなり、粘土層の中にさらに粘土からなる礫状のブロックを含む。堆積構造はみられず、全体に塊状である。礫が含まれる場合もあるが、礫の風化が著しく、手ガリで簡単に崩れるいわゆるくさり礫状を呈する。本層の下部、標高 24.86 m で放射性炭素年代測定用の試料を採取した。標高 25.36～26.25 m は黄褐色を呈する

粗粒砂層からなる。全体に塊状を呈し、堆積構造はみられない。基質には粘土を含む。標高 26.25～27.96 m は黄褐色ないし橙褐色の礫層である。礫種は石灰岩、チャート、結晶片岩からなる。礫支持礫層で、角礫を主体とする。基質は粘土からなる。標高 27.96～28.46 m は黄褐色～橙褐色を呈する礫混じりの粘土層である。標高 28.46～29.06 m は黒褐色の粘土混じりの礫層である。標高 29.06～29.40 m は粘土混じりの礫層で、現代の攪乱層となる。本層の下底と下位層との層理面付近が江戸時代後期ころの検出面である。標高 29.40～29.62 m は灰褐色の礫混じり粘土層である。人工的な盛り土で、頂部（標高 29.62 m）が現世の地表面となる。

地点 4（06Aa 区）では深度約 2.7 m の層序断面を得た。下位層より、標高 26.96～28.48 m は橙色～橙褐色の大礫層で、角礫を主体とする（第 111 図）。礫種はチャート、石灰岩、結晶片岩が



第 108 図 西浦遺跡における深堀調査地点
数字は地点番号を示す。

自然科学的分析

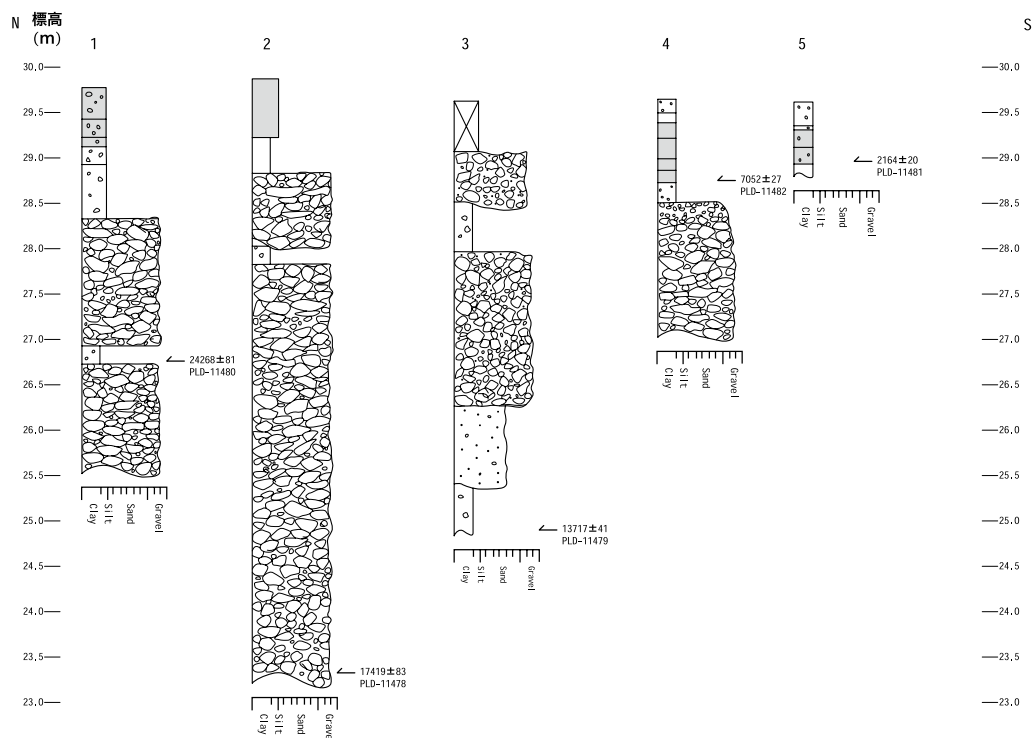
見られる。本地点よりも北側に位置する地点（地点1～3）に比べて、地層全体に占める礫の割合は減少し、基質支持礫層となる。礫は淘汰不良である。基質は粘土からなり、上部に向かうに従って色調が灰色へと変わる。標高 28.48～28.72 m は黄灰色～灰色粘土層となる。全体に塊状・均質で、まれに礫を含む。標高 28.72～29.98 m は灰黒色を呈する粘土層である。堆積構造はみられない。本層の下底、標高 28.73 m で放射性炭素年代測定用の試料を採取した。本層からは戦国期以降の遺物が検出される。標高 28.98～29.36 m は黒褐色を呈する粘土層である。堆積構造はみられない。本層からは 15 世紀～17 世紀の考古遺物が検出される。標高 29.36～29.44 m は橙色～赤褐色を呈する粘土層である。現世水田の床土として利用されていた地層である。標高 29.44～29.65 m は灰色を呈する礫混じりの粘土層となる。19 世紀の遺物が出土し、水田耕作土と思わ

れる。頂部（標高 29.65 m）は地表面である。

地点 5（06Aa 区）では調査区の南端に設定されたトレンチにおける層序断面である。地表面から深度 0.8 m である。下位層より、標高 28.79～28.95 m は灰褐色～黄灰色の粘土層である。標高 28.95～29.31 m は黒褐色の粘土層である。堆積構造はみられず塊状・均質で、15 世紀～17 世紀の戦国期の遺物が出土する。本層下部の標高 28.96 m で放射性炭素年代測定用の試料を採取した。標高 29.31～29.35 m は橙色～赤褐色を呈する粘土層である。堆積構造はみられず、18 世紀初頭の考古遺物が出土する。当時の水田の床土と推定される。標高 29.35～29.61 m は灰黒色の粘土層である。19 世紀以降の考古遺物が出土する。本層の頂部が現在の地表面である。

放射性炭素年代測定

地点 1 から地点 5 までの各地点で 1 試料を得



第 109 図 南北層序断面図柱

状図上の数字は地点番号を、柱状図右側の数値は放射性炭素年代値 (Cal yrs BP) と測定コード番号を示す。

西浦遺跡

て、合計 5 試料の放射性炭素年代値を得た(第 1 表)。数値年代の古い値では、地点 1 (06E 区) の大礫層と大礫層との間に挟まれた標高 26.72～26.93 m にみられた黄褐色粘土層の標高 26.75 m から採取した土壌が 24268±81 yrs BP (PLD-11480) の値であった。また、地点 2 (06D 区) の標高 23.22～27.83 m の大礫層の下部では、標高 23.30 m で得た土壌が 20725 cal yrs BP (BC 18775) (PLD-11478) と 2 万年を超える数値を示した。いっぽう、新しい年代値では、地点 4 (06Aa 区) の標高 28.72～29.98 m の灰黒色粘土層の下部、標高 28.73 m で採取した土壌が 7925, 7900, 7865 cal yrs BP (BC 5975, 5950, 5915) (PLD-11482) を示した。地点 5 (06Aa 区) の標高 28.95～29.31 m の黒褐色粘土層の標高 28.96 m で採取した土壌は 2150 cal yrs BP (BC 200) (PLD-11481) と、今回の調査地点の中でもっとも新しい数値年代を示した。

調査地周辺の表層地形解析

東西約 2.0 km、南北約 1.6 km の解析範囲において標高 12 m から標高 130 m までの等高線が描ける(第 112 図)。解析範囲全体を概観すると、先ず目につくのが、図の中央部を東から西へ流れる三輪川の流路に沿い北西—南東方向で、西側に開いた深い谷地形がみられ、台地を明瞭に開析していることがわかる。この谷地形について、西浦遺跡を通る南北方向の地形断面図を作成すると、現在の三輪川は両側を急傾斜の崖に挟まれ、極めて深い谷地形を形成していることがわかる(第 113 図)。平面では、地形勾配は等高線間隔の幅となって現われ、幅が狭ければ勾配は急であり、広ければ緩傾斜となる。三輪川を境としてこの谷は、北側では等高線の間隔は狭く全体に傾斜は急である。いっぽう、南側では間隔が広く緩傾斜となっている。今回はさらに詳細な考古遺跡の立地を解析するため、標高 29 m から標高 31 m の間のみさらに 0.2 m の等高線間隔で描いた。すると、石巻町の三輪川を挟んだ南側の台

地には標高 30～32 m に平坦面が認められる。調査地点を通る南東 - 北西方向の地形断面図を作成すると(第 114 図)、標高 32 m 以上の地形断面に見られる平均傾斜は 12 ‰ (‰ (パーミル) は千分率)、標高 30 m 以下の傾斜が 9 ‰ に対して、標高 30～32 m の西浦遺跡の範囲では 5 ‰ と、極めて水平に近い緩傾斜が現われた(第 114 図)。また、西浦遺跡は三輪川の南側崖面の標高 30 m 前後の平坦面に立地している。三輪川を挟んだ対岸(北側)の台地面が標高 27 m 付近に見られることと比較しても、そこよりもさらに 3 m も高い場所に平坦面があるのがわかる。

考察

西浦遺跡の地下層序

西浦遺跡において深掘を実施した。それらの地下層序を観察すると、地層全体では標高 28～29 m 付近を境にしてそれよりも下位で見られるような礫を主体とする粗粒な層相と、上位のシルト～粘土を主として細粒なものが卓越する層相とに大きく二分される。下位で見られる礫層は角礫～亜角礫を主として、堆積粒子がつくる配列にみられる方向性、専門的に言えばファブリック (fabric) は認められず、淘汰度も悪く、礫と



第 110 図 地点 1 (06E 区) における
深掘地層断面写真

自然科学的分析

礫とが不規則に配列していた。このような礫の堆積の仕方は多量の降雨があったときに泥流となって礫を下流へ運ぶ土石流などで形成されたものである。この礫層の堆積年代について、今回もともと北側に設定された調査区（06E区）の地点1において、大礫層と大礫層との間に挟まれる黄褐色粘土層の標高 26.75 m から採取した土壌は 24268 ± 81 yrs BP (PLD-11480)、それより南へ 30 m の地点 2（06D区）の標高 23.22~27.83 m でみられる大礫層の、粘土からなる基質部分を採取した試料（標高 23.30 m）で 20725 cal yrs BP (BC 18775) (PLD-11478)、地点 2 からさらに南へ約 80 m の地点 3（06Ab区）では、礫層ではないが、標高 24.85~25.36 m の黄褐色粘土層から採取した試料（標高 24.86）が、16465 cal yrs BP (BC 14515) と 2 万 4000 年から 1 万 6000 年前の古い値を示した。また、それらの数値年代は北から南へ向かって次第に新しくなる傾向がある。

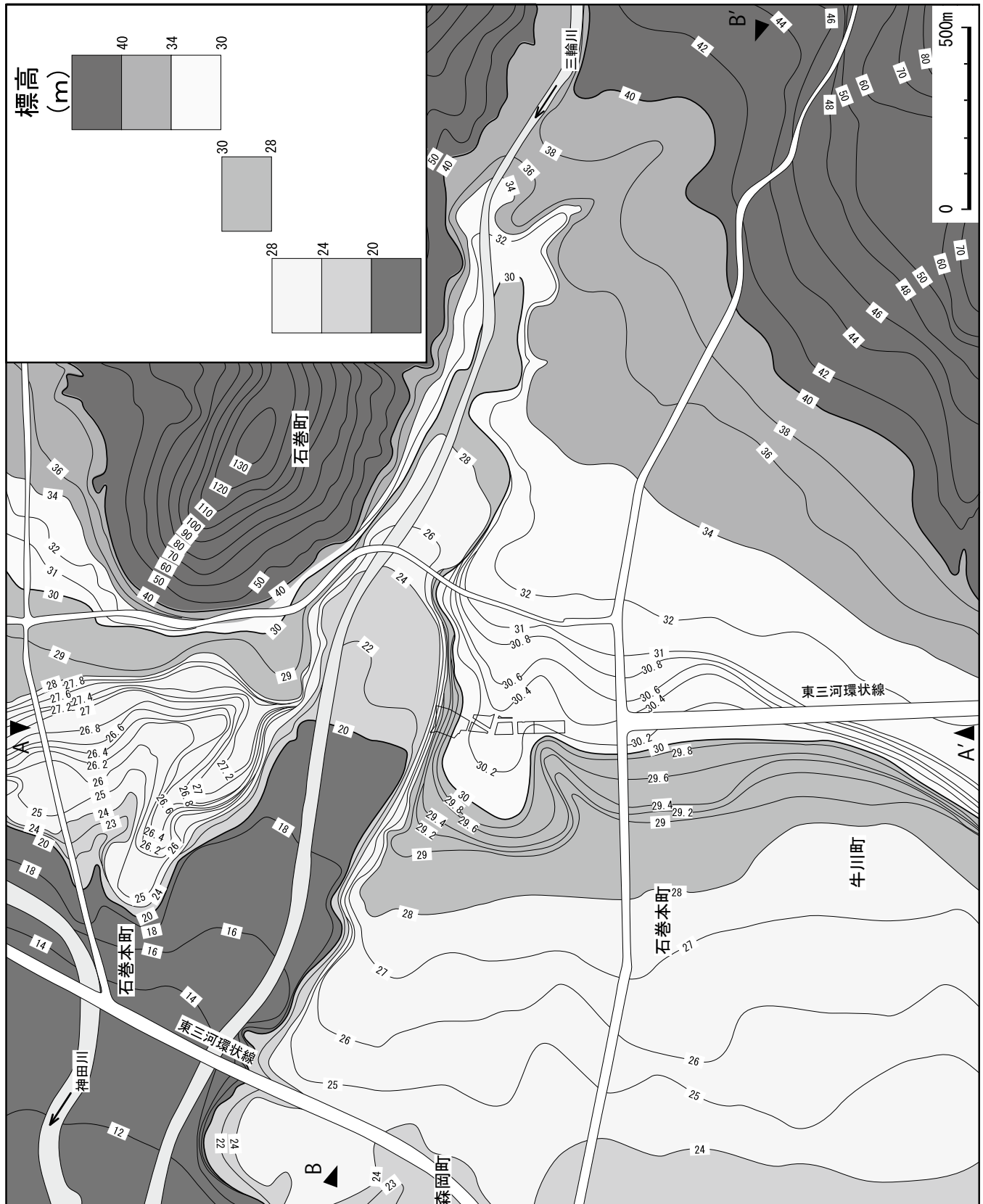
ところで、豊橋平野流域における中～上部更新統と完新統の研究は石井（1928）により、台地を構成した地層が古期更新層、低地を構成する地層が新期更新層とされたのが最初である。その後、地質学的には嘉藤（1957）、松沢・嘉藤（1961）、糸魚川（1979）、木村ほか（1981, 1982）により、地理学的には町田・大倉（1960）、井関（1980）により研究がなされた。これらのうち、今回の調査地周辺の地形・地質について論じたものに木村ほか（1981, 1982）や中島（2008）があり、豊橋市の天伯原台地以北に分布する第四系は、中部更新統が小野田層、旧期扇状地堆積物、南大清水層に区分され、中～上部更新統は中位面である福江層、豊川層、小坂井層、新期扇状地堆積物と、下位面を構成する低位段丘堆積物に区分される。上部更新統～完新統は現在の河川流路がつくる低地に分布する沖積層である。これらの地層のうち、西浦遺跡のつくる台地およびその周辺には、中島（2008）により新期扇状地堆積物が区分されており、それは中期更新世の中位の支流性扇状地面を

構成する地層とされる。また、木村ほか（1981, 1982）はこの新期扇状地面を構成する地層を豊川の右岸側と左岸側で分け、右岸側を上長山礫層、左岸側を牛川礫層とした。中島（2008）の新期扇状地堆積物はこの両者を含むものである。中島（2008）は層相の特徴を、淘汰の悪い中～大礫サイズの亜角礫からなり基質は茶褐～橙色を呈し、上位には層厚 1 m 程度の黒ボク、黒褐～橙色の土壤が重なると記載した。この層相の特徴は今回、西浦遺跡で観察された礫層とほぼ同じである。ただ、中島（2008）によれば新期扇状地堆積物の堆積する豊橋市仁連木町や田原市田原町巴江の路頭ではクサリ礫はほとんどみられないとしたが、今回の調査では礫層の下部ほど風化が著しいところもみられた。同じ層相であっても地域的にわずかな差異をもっている可能性がある。中島（2008）が指摘しているように、豊川周辺の中～上部更新統の年代については、年代を決定できる火山灰（テフラ）などの年代データがほとんどない。今回の調査において礫層の間に挟まれた粘土層からは約 2 万 4000 年～1 万 3000 年前の、礫層を覆う細粒堆積物から約 7900 年と約 2100 年前の数値年代が得られた意義は大きい。



第 111 図 地点 4（06Aa 区）における
深掘地層断面写真

西浦遺跡



第 112 図 西浦遺跡周辺の等高線図

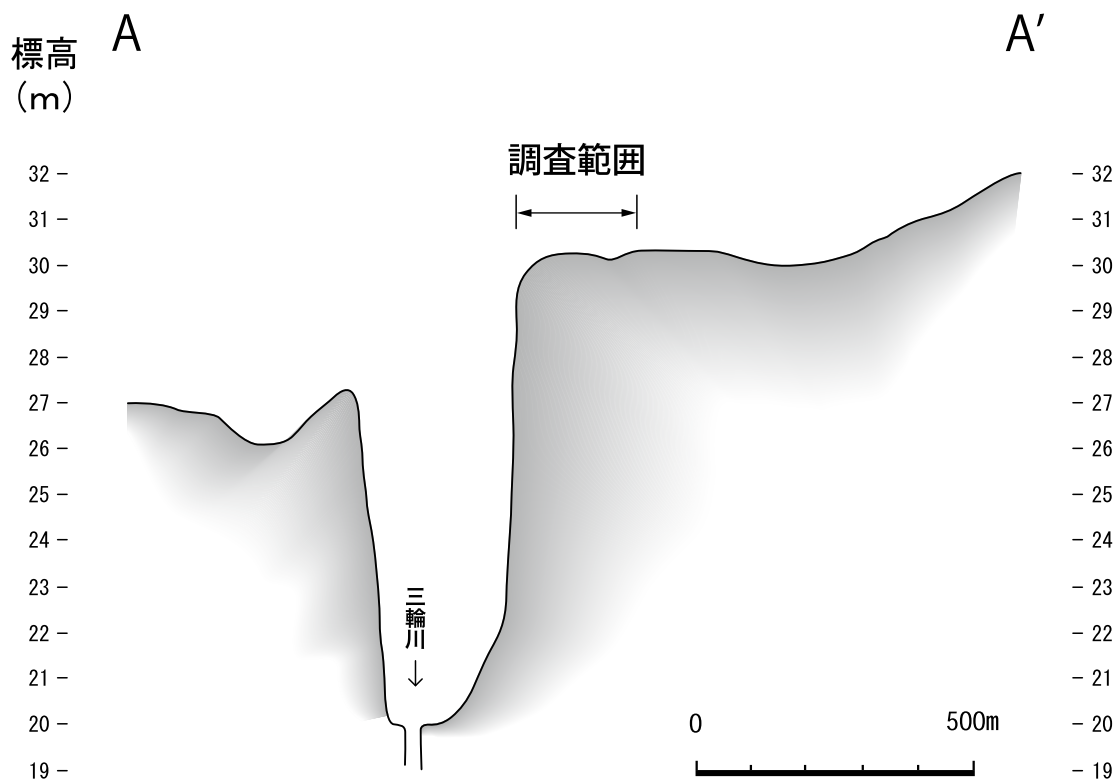
等高線は 1/2500 豊橋市都市計画基本図の標高値を基に作成。
 (西浦遺跡に関係のある標高のみさらに等高線間隔が異なる (0.2m) ことに注意。) 図の中央には設定された調査区を示す。

自然科学的分析

西浦遺跡周辺に現われる表層地形構造

表層地形解析では東西約 2.0 km、南北約 1.6 km の解析範囲中央に、現在の三輪川の流路に沿って標高 12~34 m の等高線がつくる、北西—南東方向の谷地形が明瞭に認められる（第 112 図・第 113 図）。この谷地形は三輪川を挟んで北側と南側で緩傾斜面をつくる台地を開析している。等高線間隔は地形の傾斜の程度を表わすが、三輪川を境にした北の斜面に比べて、南の斜面の方が全体に等高線の間隔が広く、より傾斜の緩やかな斜面であることがわかる。さらに、全体に緩やかな斜面ではあるが、西浦遺跡の調査地点付近は特に傾斜の緩やかな場所にあたっていることがわかる（第 114 図）。また、調査地点のある標高 29~31 m をさらに 0.2 m 間隔で区分すると、調査地点は西側に張り出した舌状地形の直上にあることがわかる。また、もっとも南側の調査区(06Aa

区)には、調査中から腐植物といった植物遺体を含む灰黒色ないし黒褐色を呈する粘土層が堆積しており、それが沼沢地的な水域に堆積したものか、谷を埋積したものなのか、その成因について不明な点があった。しかし、表層地形解析の結果からは、南端の調査区(06Aa 区)を通る北東—南西方向に幅約 150 m で長さ約 200 m の谷地形が読み取れ、黒褐色粘土層は谷を埋積したものであることがわかった。この灰黒色~黒褐色粘土層の堆積年代について、放射性炭素年代測定により地点 4 の標高 28.73 m で灰黒色粘土層の下部から採取した土壌が 7925, 7900, 7865 cal yrs BP (BC 5975, 5950, 5915) (PLD-11482) を、地点 5 の黒褐色粘土層の標高 28.96 m で採取した土壌が 2150 cal yrs BP (BC 200) (PLD-11481) の数値年代を示し、少なくとも約 7900 年前以降から谷を埋積する環境にあったことがわかる。



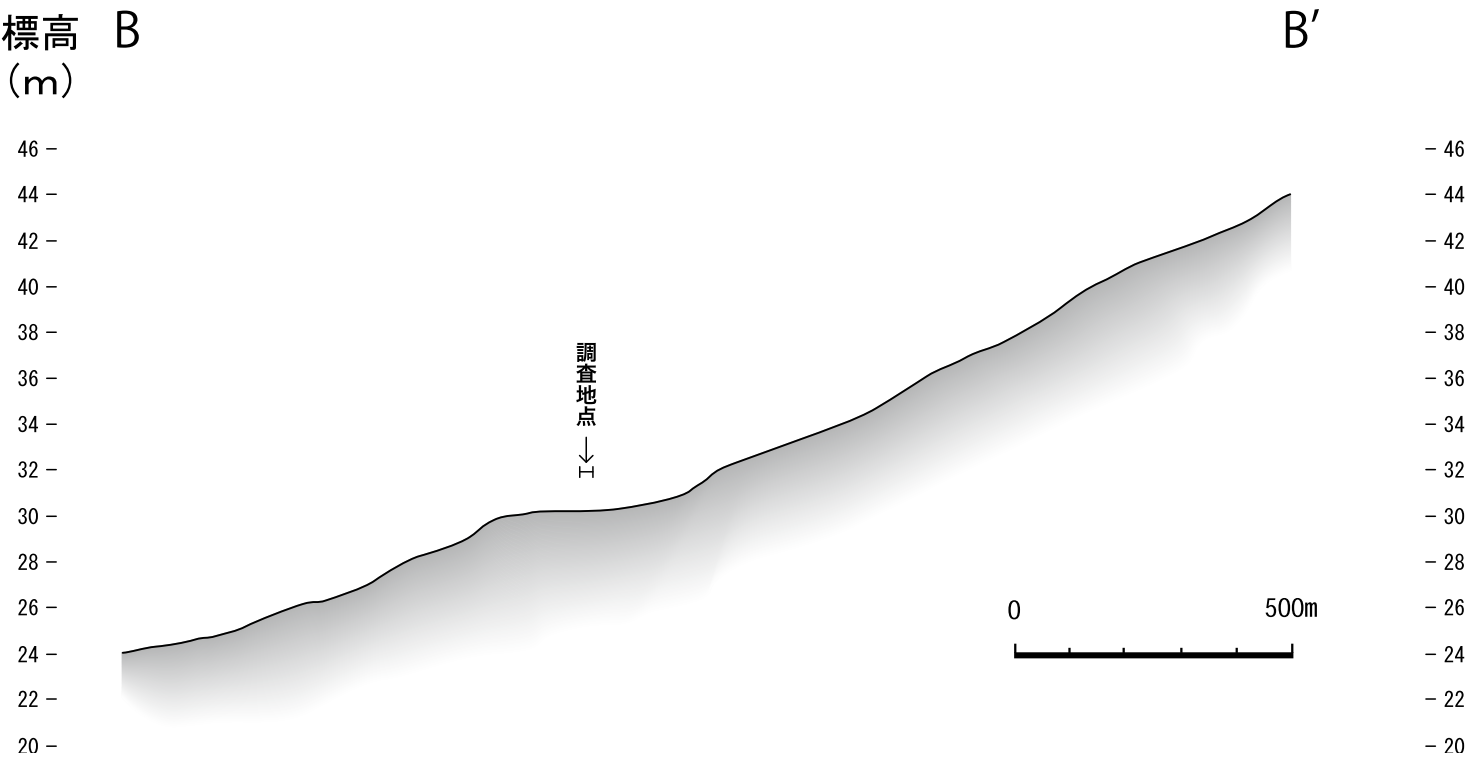
第 113 図 南北 (A-A') 地形断面図

水平距離に比べて垂直方向が強調されていることに注意。

西浦遺跡

第 1 表 放射性炭素年代測定結果

地点	調査区	標高 (m)	堆積物	試料の種類	¹⁴ C年代 (yrs BP)	δ ¹³ C PDB (‰)	暦年代較正值 (1 σ, cal AD/BC)	暦年代較正值 (1 σ, cal yrs BP)	1σ 暦年代範囲 (cal AD/BC, probability)	1σ 暦年代範囲 (cal yrs BP, pobability)	Lab code No.(method)
1	06E	26.75	黄褐色粘土層	土壌	24268±81	-25.82±0.19	較正曲線範囲外	較正曲線範囲外	較正曲線範囲外	較正曲線範囲外	PLD-11480(AMS)
2	06D	23.30	大礫層	土壌	17419±83	-25.78±0.31	BC 18775	20725	BC 19105-18445(100%)	21055-20390(100%)	PLD-11478(AMS)
3	06Ab	24.86	黄褐色粘土層	炭化物	13717±41	-22.78±0.15	BC 14515	16465	BC 14745-14285(100%)	16695-16235(100%)	PLD-11479(AMS)
4	06Aa	28.73	灰黒色粘土層	土壌	7052±27	-25.39±0.20	BC 5975,5950	7925,7900	BC 5980-5945(56.1%)	7930-7895(56.1%)	PLD-11482(AMS)
5	06Aa	28.96	黒褐色粘土層	土壌	2164±20	-20.17±0.14	5915	7865,	BC 5920-5890(43.9%)	7870-7840(43.9%)	PLD-11481(AMS)
							BC 200	2150	BC 200-175(51.9%)	2150-2125(51.9%)	
									BC 345-320(48.1%)	2295-2270(48.1%)	



第 114 図 南東—北西 (B-B') 地形断面図
水平距離に比べて垂直方向が強調されていることに注意。

自然科学的分析

西浦遺跡の立地する舌状地形は平面において東西約 600 m、南北約 170 m と見積もられ、調査区はまだその一部を調査したに過ぎない。表層地形解析からは今回の調査区から西側にまで広く平坦地が認められ、今後、西側にも遺物や遺構が認められる可能性がある。

謝辞

本論を作成するにあたり、愛知教育大学理科教育講座地学領域の星 博幸博士には関連文献の入手にあたり、たいへんお世話になった。放射性炭素年代測定では株式会社パレオ・ラボ AMS 年代測定グループの小林紘一氏・丹生越子氏・伊藤 茂氏・廣田正史氏・瀬谷 薫氏・Zaur Lomatatidze 氏・Ineza Jorjoliani 氏にお世話になった。分析試料の整理・保管と原図の作成では整理補助員の前田弘子氏・鈴木好美氏にお手伝いいただいた。記して厚くお礼申し上げます。

文献

- 井関弘太郎, 1980, 愛知県の地質・地盤 (その 1) 「地形・地質・地盤の概況」, 愛知県防災会議地震部会, 43p.
- 石井清彦, 1928, 7 万 5 千分の 1 地質図幅「豊橋および同説明書」, 商工省, 40p.
- 糸魚川淳二, 1979, 愛知県の地質・地盤 (その 2), 「表層地質」, 愛知県防災会議地震部会, 22p.
- 嘉藤良次郎, 1957, 豊橋市の洪積層, 名古屋地学, 10, 4-6.
- 松澤 勲・嘉藤良次郎, 1961, 豊橋市域の地質 附豊橋市域地質図, 愛知県建築部, 豊橋市, 27p.
- 木村一朗・荒巻敏夫・大澤正吾・池田芳雄, 1981, 豊川中流および下流の段丘と更新統 (その 1, 段丘面), 愛知教育大学研究報告 (自然科学), 30, 221-232.
- 木村一朗・荒巻敏夫・大澤正吾・池田芳雄, 1982, 豊川中流および下流の段丘と更新統 (その 2, 段丘堆積物), 愛知教育大学研究報告 (自然科学), 31, 195-210.
- 町田 貞・大倉陽子, 1960, 豊川中・下流の段丘地形, 地理学評論, 33, 551-563.
- 中島 礼, 2008, 豊橋及び田原地域の地質, 中—上部更新統・完新統, 第 8 章 中—上部更新統・完新統, 地域地質研究報告 (5 万分の 1 地質図幅), 産総研地質調査総合センター, 66-84.

西浦遺跡

第2節 西浦遺跡出土の大型植物遺体

佐々木由香・バンダリ スタルシャン（パレオ・ラボ）

はじめに

西浦遺跡は愛知県豊橋市石巻町に位置し、石巻山の南麓、三輪川左岸の河岸段丘北端部の標高約30 mに立地する。遺跡は大きく弥生時代中期～古墳時代前期、古墳時代後期、平安時代～鎌倉時代、戦国時代～江戸時代前期、江戸時代後期～近代に区別され、弥生時代中期以降の各時代に集落が営まれていた複合的な集落遺跡であることが確認されている。ここでは縄文時代？、弥生時代中期、弥生時代後期から古墳時代前期、7世紀、中世後半？、江戸時代（18世紀）、明治時代の土坑または竪穴住居跡の覆土から採取した土壌を水洗することによって得られた炭化種実などを同定し、食用などに利用された植物あるいは周辺植生について検討する。

試料と方法

試料は土壌試料を水洗した54試料である（第2表）。試料が採取された遺構は2006年度調査のAb区（06AB）から検出された土坑1基（304SK）、E区（06E）から検出された土坑8基（2016SK, 2212SK, 2326SK, 2637SK, 2645SK, 2651SK, 2948SK, 3667SK）と竪穴住居跡5棟（2417SB, 2422SB, 2745SB, 2906SB）である。試料の内訳を第2表に示す。試料の時期は、2326SKが縄文時代？、3667SKが弥生時代中期、2212SKと2417SB, 2422SB, 2906SBが弥生時代後期から古墳時代前期、2651SKと2745SB, 2948SKが7世紀、2637SKが中世後半？、304SKが江戸時代（18世紀）、2016SKが明治時代、2645SKが時期不明である。

土壌の水洗は重量を計量後、0.5 mm目の篩で水洗して浮遊物を回収した。大型植物遺体の抽出および同定は、浮遊物のみを対象とし、実体顕微鏡下で行った。計数が困難な試料や多数含まれて

いる試料は記号（+）で示し、一部重量を計量した。同定された試料および残渣は（財）愛知県埋蔵文化財センターで保管している。

結果

同定の結果、木本植物では針葉樹のヒノキ炭化枝・炭化種子・炭化苞鱗と、スギ炭化枝・炭化種子、マツ属複維管束亜属炭化枝・炭化苞鱗の3分類群、広葉樹のハンノキ炭化苞鱗と、コナラ属アカガシ亜属炭化果実、コナラ属炭化子葉、ヒサカキ属炭化種子、モモ炭化核、キハダ炭化種子、サンショウ属炭化種子の7分類群、草本植物のミズヒキ炭化果実と、サナエタデ・オオイヌタデ炭化果実、ボントクタデ炭化果実、アキノウナギツカミ炭化果実、タデ属炭化果実、ハコベ属炭化種子、アカザ属炭化種子、ササゲ属アズキ亜属アズキ型炭化種子（以下アズキ型とする）、ササゲ属炭化種子、マメ科炭化種子、アカネ属炭化種子、ニガクサ属炭化果実、オナモミ属炭化総苞、イボクサ・ツユクサ炭化種子、オオムギ炭化果実・炭化種子、イネ炭化果実・炭化種子、アワ炭化種子、コムギ炭化種子、イネ科炭化種子の19分類群の計29分類群が見いだされた。オオムギかコムギであるが、残存が悪く種の同定に至らなかった一群をオオムギ・コムギとした。この他に科以下の同定ができなかった不明種実をAからDに分類し、識別点を欠く一群を同定不能種実とした。植物以外には炭化した虫えいと子嚢菌が得られた。さらに生のメヒシバ属果実が得られたが、遺跡の立地から判断して生の種実が残存しないと考えられるため、検討から外した。遺構別にまとめた同定結果（3667SKのみ採取位置別）および試料の詳細を第3表に示す。

時期別に得られた炭化大型植物遺体を記載する（不明種実・球果、同定不能種実、虫えい、子嚢

自然科学的分析

菌は除く)。部位名は1分類群内で複数産出しているもののみ記載した。

[縄文時代?]

2326SK：同定可能な種実は何れも得られなかった。

[弥生時代中期]

3667SK：壺 (No.1200) 内の土壌では頸部以外から炭化種実が得られ、サンショウ属とサナエタデ-オオイヌタデ、タデ属、ササゲ属、ニガクサ属、オナモミ属、イネ果実・種子、コムギがわずかに得られた。

[弥生時代後期から古墳時代前期]

2212SK：オオムギ-コムギがわずかに得られた。

2417SB：イネ果実がわずかに得られた。

2422SB：同定可能な種実は何れも得られなかった。

2906SB：マツ属複雑管束亜属枝とイネ果実・種子がわずかに得られた。

[7世紀]

2651SK：アワがやや多く、ミズヒキとイボクサ-ツユクサ、イネ果実・種子、イネ科がわずかに得られた。

2745SB：コナラ属とモモ、ミズヒキ、アズキ型、アカネ属、イネ果実・種子がわずかに得られた。

2948SK：イネ果実・種子が多く、タデ属とアカザ属、マメ科、アカネ属、アワがわずかに得られた。

[中世後半?]

2637SK：キハダとイネ果実がわずかに得られた。

[江戸時代 (18世紀)]

304SK：イネ果実がわずかに得られた。

[明治時代]

2016SK：得られた大型植物遺体は非常に多かった。ヒノキとスギ、マツ属複雑管束亜属の枝、イネ果実と種子が非常に多く、ヒノキ種子・苞鱗とスギ種子、マツ属複雑管束亜属苞鱗、ハンノキ、コナラ属アカガシ亜属、ヒサカキ属、サナエタデ-オオイヌタデ、ボン

トクタデ、アキノウナギツカミ、ハコベ属、アカネ属、オオムギ果実・種子、コムギ、オオムギ-コムギ、イネ科がわずかに得られた。

[時期不明]

2645SK：マメ科がわずかに得られた。

考察

遺構によって時期が異なるため、時期別に考察を行う。

縄文時代?とされた遺構である2326SKからは同定可能な種実は何れも得られなかった。わずかに子囊菌が得られたが、土中に含まれていたものや材に付随して土坑内にもたされたと考えられる。

弥生時代中期の遺構である3667SKの壺内からは栽培植物のイネやコムギ、栽培植物と野生植物双方の可能性のあるササゲ属がわずかに得られた。このほかに、木本植物のサンショウ属と、草本植物が数分類群得られたが、いずれもわずかな量で、利用されたかは不明である。利用されない種も含めて草本植物が多種あり、含まれていた種実がすべて炭化していることを合わせて考えると、壺内には埋没時に炭化種実がもたらされたことが推定される。

弥生時代後期から古墳時代前期の遺構からは、土坑である2212SKからオオムギ-コムギがわずかに得られ、竪穴住居跡2棟からはイネがわずかに得られた。2906SBからはマツ属複雑管束亜属枝が得られていることから、焚きつけなどに利用された可能性がある。

7世紀の遺構では炭化種実が多く残っていたが、同定できたものは少なく、ほとんどは残存が悪いために同定不能とした種実であった。土坑と竪穴住居跡からは栽培植物としてモモとイネ、アワ、栽培植物か野生植物双方の可能性のあるアズキ型、野生植物で利用の可能性があるコナラ属と利用の可能性が低い草本植物数分類群が得られた。草本植物では林縁に生育するミズヒキやアカネ属が複数の遺構から得られた。

中世後半?の2637SKでは、同定不能種実が

西浦遺跡

多く含まれていたが、栽培植物のイネと木本植物のキハダがわずかに得られた。キハダの種子は食用可能で、青森県など東北地方の竪穴住居跡から炭化してよく見いだされる分類群である。利用後の残渣が土坑内に堆積した可能性がある。

明治時代の 2016SK からはイネと、オオムギやコムギといった栽培植物のほか、針葉樹のヒノキとスギ、マツ属複雑管束亜属が非常に多く含まれていた。針葉樹は複数の部位が産出していることから、遺構のごく近くに生育し、何らかの要因で炭化したと考えられる。このほか、食用とならないハンノキ属やヒサカキ属がわずかに産出しており、遺構周辺に森林または植栽された植生があったことが推定される。コナラ属アカガシ亜属は食用可能であるが、食用にしない果実破片のた

め、自然落下したものが炭化したか、皮を剥いた後、不要な果皮を燃やした可能性がある。

以上の出土した炭化種実から、遺構内に特定の種実が多く得られるような傾向はみられなかったが、時期ごとに利用された種実が明らかになった。特にイネは縄文時代？と時期不明を除くすべての時期から得られており、各時期で栽培・利用されたことが推定される。

引用文献

- Jacomet, S. and collaborators Archaeobotany Lab. (2006) Identification of cereal remains from archaeological sites. 2nd edition, IPAS, Basel Univ.
- 小畑弘己・佐々木由香・仙波靖子 (2007) 土器圧痕からみた縄文時代後・晩期における九州のダイズ栽培, 植生史研究 15(2), 97-114.

自然科学的分析

第 2 表 西浦遺跡の大型植物遺体試料一覧

試料 No.	調査区	グリッド	遺構番号	遺物番号	時期	コンテナ	備考	サンプル 重量 (kg)	土器	石器	
1	06Ab	7I7a	304SK		江戸時代 (18 世紀)	7-1		5.87	○	×	
2	06E	6H9t	2016SK		明治時代	7-10		0.39	×	×	
3						7-10	内部	2.03	○	×	
4						7-10	焼土	1.31	○	×	
5				5I20e		2212SK		弥生時代後期から古墳時代前期	7-11	サンプル	2.06
6		6H1s	2326SK		縄文時代？	7-11	サンプル	1.56	○	×	
7		5H20s	2417SB		弥生時代後期から古墳時代前期	7-11	サンプル	5.93	○	○	
8		6H3t	2422SB		弥生時代後期から古墳時代前期	7-2	カマドサンプル	0.59	×	×	
9		6I1d	2637SK		中世後半？	7-9	サンプル	1.71	○	×	
10						7-6	土壌サンプル 1/11	2.27	×	×	
11						7-2	土壌サンプル 2/11	2.48	○	×	
12						7-6	土壌サンプル 3/11	3.27	×	×	
13						7-2	土壌サンプル 4/11	1.79	○	×	
14						7-2	土壌サンプル 5/11	1.40	○	×	
15						7-2	土壌サンプル 6/11	1.41	×	×	
16						7-2	土壌サンプル 7/11	1.89	×	×	
17						7-6	土壌サンプル 8/11	1.97	○	×	
18						7-6	土壌サンプル 9/11	1.82	○	×	
19						7-2	土壌サンプル 10/11	1.24	×	×	
20						7-6	土壌サンプル 11/11	1.54	○	×	
21				—			7-3	サンプル	1.63	○	×
22				6I1e			7-3	サンプル 1/4	1.87	○	×
23							7-3	サンプル 2/4	3.34	○	×
24							7-3	サンプル 3/4	2.85	○	×
25							7-3	サンプル 4/4	3.49	○	×
26		6H2r	2645SK			不明	7-11	サンプル	7.53	○	×
27		6I1d	2651SK		7 世紀	7-4	サンプル	27.35	○	×	
28		6I1f	2745SB	No. 875	7 世紀	7-9		2.34	○	×	
29				No. 878		7-3		4.21	○	×	
30				No. 879		7-9		11.13	○	×	
31				No. 876		7-9		2.93	○	×	
32		—	2906SB	No. 949	弥生時代後期から古墳時代前期	7-3		1.45	○	×	
33				No. 1169 内の土		7-6		1.20	○	×	
34		6I1f	2948SK		7 世紀	7-6	サンプル	1.95	○	×	
35						7-7	土壌サンプル上層	7.74	○	×	
36						7-7	土壌サンプル下層	8.60	○	×	
37		6H9t	3667SK	No. 1200 内	弥生時代中期	7-5		7.49	○	×	
38				No. 1200 内		7-5	壺内の土	1.60	○	×	
39				No. 1200 内頸部		7-5	壺内の土 (首) 頸部	0.30	×	×	
40				No. 1200 内上層		7-5, 8		3.72	○	×	
41				No. 1200 内上層		7-8	壺内の土 (上)	2.84	○	×	
42				No. 1200 内下層		7-8		4.06	○	×	
43				No. 1200 内下層		7-8	壺内の土 (下)	2.82	○	×	

第3節 西浦遺跡出土木製品の樹種同定

黒沼保子（パレオ・ラボ）

はじめに

西浦遺跡は豊橋市石巻町に所在し、弥生～近代の各時代に集落が営まれていた集落遺跡である。ここでは調査区 06Aa 区から出土した杭材を中心に 47 試料の樹種同定を行った。

試料と方法

試料は 06Aa 区から出土した杭 46 点（No.1～46）と、06C 区から出土した曲物底板 1 点（No.47）の計 47 点である。

剃刀を用いて試料の 3 断面（横断面・接線断面・放射断面）から切片を採取し、ガムクロラルで封入してプレパラートを作製した。これを顕微鏡で観察・同定し、写真撮影を行った。

結果

樹種同定を行った結果、マツ属複雑管束亜属、ヒノキ、スギ、スギまたはヒノキ科、クリ、ヤブツバキ、ヒサカキ属の計 7 分類群が確認された。なお、針葉樹において分野壁孔のやや不鮮明なものは？を付けた。結果の一覧は第 4 表に示す。

まとめ

曲物底板は板目材で、樹種はスギであった。曲物には一般的に割裂性の大きいスギやヒノキなどの針葉樹が用いられる。

杭材は針葉樹ではスギ、ヒノキ、スギまたはヒノキ科、マツ属複雑管束亜属、広葉樹ではクリ、

ヤブツバキ、ヒサカキ属が用いられていた。全体的に針葉樹の割合が多かったが、状態が悪くスギまたはヒノキ科までの同定しか出来なかったものが多い。木取りはマツ属複雑管束亜属・ヤブツバキ・ヒサカキ属は丸木、ヒノキなどの針葉樹とクリは割材で使用されている。

杭材は一般的に軽軟なものから重硬なものまで幅広く利用されており、材質による樹種選択ではなく径の大きさに着目して適度な直径の材は丸木のまま、大きいものは割裂して使用しやすい大きさに揃えて利用する傾向がある。当遺跡では重硬で小径の樹種は丸木で、径がやや大きいものは割材で利用されており、また割材で利用されているクリや針葉樹類は割裂性が大きい特徴があることから、材の直径と材質によって加工方法を適宜使い分けていたと推測される。

また杭材は周囲に生育している樹木を利用するために、周囲の植生を反映していることが多い。しかしスギやヒノキは植林および流通材の可能性もあるため、植生を反映するとは言い難い。ヤブツバキは照葉樹林帯の代表樹種であり、ヒサカキは照葉樹林の下木として一般的である。クリやマツ属複雑管束亜属のアカマツは陽樹で伐採後の森林に二次林としてよく生育する。特に当遺跡のマツ属複雑管束亜属は直径が小さく丸木のままで利用されていることから、遺跡周辺の二次林を利用した可能性が考えられる。

西浦遺跡

第4表 樹種同定結果一覧

写真番号	調査区	グリッド	遺構	器種	樹種	木取り
1	06Aa	7H14s	005SD	杭	クリ	割材
2	06Aa	7H14s	005SD	杭	マツ属複雑管束亜属	芯持丸木
3	06Aa	7H14s	005SD	杭	クリ?	割材
4	06Aa	7H14s	005SD	杭	ヒノキ	割材
5	06Aa	7H14s	005SD	杭	クリ	割材
6	06Aa	7H14s	005SD	杭	スギまたはヒノキ科	割材
7	06Aa	7H14s	005SD	杭	スギまたはヒノキ科	割材
8	06Aa	7H14s	005SD	杭	クリ	割材
9	06Aa	7H14s	005SD	杭	ヒノキ?	割材
10	06Aa	7H14s	005SD	杭	クリ	芯持丸木
11	06Aa	7H14s	005SD	杭	ヒノキ	芯持丸木
12	06Aa	7I16a	005SD	杭	スギまたはヒノキ科	割材
13	06Aa	7H14s	005SD	杭	スギまたはヒノキ科	割材
14	06Aa	7I16a		杭	マツ属複雑管束亜属	割材
15	06Aa	7I16a		杭	クリ	割材
16	06Aa	7H13r		杭	マツ属複雑管束亜属	芯持丸木
17	06Aa	7H13r		杭	ヒノキ	割材
18	06Aa	7H13r		杭	クリ	割材
19	06Aa	7H13r		杭	ヒノキ?	芯持削出
20	06Aa	7H13r		杭	スギまたはヒノキ科	割材
21	06Aa	7H13r		杭	ヒノキ?	割材
22	06Aa	7H14s		杭	スギ?	芯持丸木
23	06Aa	7H14s		杭	ヒノキ	芯持丸木
24	06Aa	7I16a	022SA	杭	クリ	割材
25	06Aa	7I16a	022SA	杭	クリ	割材
26	06Aa	7I16a	022SA	杭	スギまたはヒノキ科	割材
27	06Aa	7I16a	022SA	杭	クリ	割材
28	06Aa	7I16a	022SA	杭	ヒノキ?	割材
29	06Aa	7H15t	022SA	杭	クリ?	不明
30	06Aa	7H15t		杭	マツ属複雑管束亜属	芯持丸木
31	06Aa	7H15t		杭	スギ	割材
32	06Aa	7H15t		杭	ヒサカキ属	芯持丸木
33	06Aa	7H15t		杭	スギまたはヒノキ科	割材
34	06Aa	7H15t		杭	ヤブツバキ	芯持丸木
35	06Aa	7H14s		杭	スギまたはヒノキ科	割材
36	06Aa	7H14s		杭	ヒサカキ属	芯持丸木
37	06Aa	7H15t		杭	スギまたはヒノキ科	割材
38	06Aa	7H14s		杭	クリ	割材
39	06Aa	7H14s		杭	クリ	割材
40	06Aa	7H14s		杭	マツ属複雑管束亜属	芯持丸木
41	06Aa	7H14s		杭	ヒノキ?	芯持丸木
42	06Aa	7H13r	054SA	杭	ヒノキ?	芯持丸木
43	06Aa	7H13s	054SA	杭	ヤブツバキ	芯持丸木
44	06Aa	7H15t	023SA	杭	ヒノキ?	芯持丸木
45	06Aa	—	023SA	杭	ヒノキ	割材
46	06Aa	7H14s	023SD	杭	ヤブツバキ	芯持丸木
47	06C	6I18c	428SK	曲物底板	スギ	板目

第5章 考察・まとめ

第1節 遺構の変遷

ここでは、今回の西浦遺跡の発掘調査で検出された遺構の変遷を整理する。確認された遺構は、竪穴建物跡、掘立柱建物跡、方形周溝墓、土器棺墓、溝、井戸、土坑などさまざまであるが、基本的にはほぼ同じ遺構面から検出されたものである。このため、遺構面から遺構の時期を決定することは基本的にできないので、他の遺構との重複関係や覆土などから出土した遺物の時期を手がかりに検討しなければならない。そして実際には覆土から出土した遺物に頼らざるを得ない状況であった。ただ、掘立柱建物跡の場合は、覆土そのものがほとんどなく柱穴に混入したわずかな資料を参考にせざるを得なかった。このように、ここで実施した遺構変遷の検討は、限られた資料から大胆に時期を推測した場合もあり、誤謬が存在する可能性があることをあらかじめ断っておきたい。

(1) A 期（縄文時代早期）

縄文時代の遺構としては、煙道付炉穴 2326SK が存在するのみである。近隣に早期の居住域が存在したと思われるが、西浦遺跡では集落の存在の痕跡は確認できていない。

(2) B1 期（弥生時代中期）

概ね古井式期から山中式期前半までの遺構としては、竪穴建物跡 8 棟（2418SB・2665SB・2805SB・2807SB・3089SB・3114SB・3320SB・3665SB）と土器棺墓 3667SK が存在する。建物跡は台地端部の E 区にまばらに分布し 3114SB 付近で複数の遺構が重複する。

(3) B2 期（弥生時代後期から古墳時代初期）

概ね山中式期後半から廻間 I 式期前半までの遺構としては、竪穴建物跡 19 棟（2261SB・2379SB・2384SB・2390SB・2417SB・2440SB・2475

SB・2476SB・2754SB・2806SB・2852SB・2854SB・2902SB・2903SB・2908SB・3086SB・3140SB・3316SB・3666SB）が存在する。2422SB も該当するかもしれない。建物跡は台地端部の E 区に全体に分布し、北東端部と北部中央と南部中央で複数の建物跡が重複する部分がある。B2 期はさらに細分が可能であろう。なお、B1 期で確認された墓に関する遺構はこの時期は確認できなかった。

(4) B3 期（古墳時代前期）

概ね廻間 I 式期後半から廻間 II 式期までの遺構としては、竪穴建物跡 15 棟（2419SB・2420SB・2469SB・2662SB・2663SB・2664SB・2724SB・2741SB・2755SB・2756SB・2851SB・2853SB・2906SB・3180SB・3317SB）と方形周溝墓 3 基（1601SZ・1602SZ・1603SZ）が存在する。また、性格不明の溝 2722SD も確認された。建物跡は、B3 期と同様に、台地端部の E 区に分布し、東端部と西端部で複数の建物跡が重複する部分がある。この時期は E 区南部で方形周溝墓群が現れる。2906SB と 3317SB は方形周溝墓に切られて存在するが、これを建物跡の時期を誤認したものと理解するか、B3 期はさらに細分できてそのいずれかの段階で墓域になったと考えるかは、なお検討の余地が残る。方形周溝墓群は C 区北端部にも展開する可能性があるものの、それ以上南に向かって遺構が広がることはないようである。

(5) B4 期（古墳時代中期）

廻間 III 式期以降の遺構としては、竪穴建物跡 4 棟（2420SB・2750SB・2907SB・3331SB）が存在する。依然として建物跡は台地端部の E 区に分布するが、検出量は激減する。

考察・まとめ



第 116 図 主要遺構変遷図 (2) (s=1:150)

西浦遺跡

(6) C1 期（飛鳥時代）

7 世紀前葉から中葉を主体とする時期。湖西窯系須恵器編年（鈴木敏則 2000）のⅢ期末の製品を含むものであり、一部でⅢ期中（6 世紀後半）まで遡る遺構もあるかもしれない。この時期の遺構としては、竪穴建物跡 18 棟（307SB・539SB・545SB・547SB・579SB・586SB・756SB・764SB・849SB・959SB・993SB・2190SB・2209SB・2210SB・2260SB・2477SB・2745SB・3315SB）、掘立柱建物跡 2 棟（1502SB・1541SB）、溝（2377SD・2415SD・2646SD・2647SD）などがある。建物跡は E 区だけではなく C 区と D 区および B 区北端部まで拡がって分布するようになり、台地端部からやや内奥部にも開発が進むようになる。溝 2415SD は台地の崖際を画する施設と思われるが、溝 2377SD も台地の崖際から約 15 m 離れた位置で崖面に併行するものであった。溝 2377SD と崖の間にも建物跡が数棟存在しており、溝の持つ意味は不明である。溝 2377SD から南へ少し離れた部分で竪穴建物跡が展開しており、これらは一般的な居住域と見ることができる。

(7) C2 期（白鳳時代）

7 世紀中葉から後葉を主体とする時期。湖西窯系須恵器編年のⅣ期前の製品を含むものである。この時期の遺構としては、竪穴建物跡 9 棟（308SB・538SB・546SB・548SB・568SB・571SB・759SB・949SB・2380SB）、掘立柱建物跡 1 棟（1557SB）、溝（323SD）などがある。建物跡は E 区では激減し、C 区と D 区および B 区北端部が中心となる。C 区南東部で複数の建物跡が重複する部分があることから、C2 期はさらに細分が可能であろう。

(8) C3 期（平安時代）

概ね 10 世紀を主体とする時期。折戸 53 号窯式期～東山 72 号窯式期の灰釉陶器を含むものである。この時期の遺構としては、竪穴建物跡 7

棟（309SB・542SB・544SB・761SB・2262SB・2804SB・3318SB）、掘立柱建物跡 6 棟（1555SB・1565SB・1566SB・1567SB・1568SB・1571SB）、溝（332SD・2148SD）などがある。建物跡は B 区から E 区までの範囲に分布するが、C 区に竪穴建物跡と掘立柱建物跡が集中している。C3 期はさらに細分が可能であろう。南北溝 2148 SD は東西を画するように存在するが、集落や屋敷を囲うようには思われないためその意味は不明である。

(9) D1 期（鎌倉時代）

12 世紀～13 世紀を主体とする時期で、第 6 型式前後の渥美湖西型山茶碗類が供伴する。この時期の遺構としては、掘立柱建物跡 7 棟（1514SB・1519SB・1520SB・1529SB・1533SB・1556SB・1564 SB）、溝（050SD・052SD・168SD・2191SD・2196SD・2382SD・2432SD・2470SD・2471SD・2472SD・2673SD）などがある。建物跡は E 区と C 区に分布し、全て掘立柱建物跡となっており、竪穴建物跡は消滅する。建物跡以外の遺構を含めると、この時期に初めて A 区に遺構が展開するようになっている。溝は矩形になるもの（2196SD・2382SD など）があり、歪な方格地割を形成している。2 条の溝が併行する場合（2470 SD と 2472SD・2196SD と 2382SD など）もあり、その間は道路である可能性が考えられる。建物跡は溝で画された区画 002 と区画 003 に展開しており、これらが屋敷を成していた可能性が高い。

(10) D2 期（室町時代から戦国時代）

15 世紀～16 世紀を主体とする時期の遺構としては、A 区で溝 3 条（004SD・044SD・124SD）が確認される程度である。001ST もこの時期に含めても良いかも知れない。遺物の出土状況からみて付近に居住域が存在する可能性を指摘できるが、具体的な遺構はここでは検出されていないということであろう。

考察・まとめ

(11) D3 期（江戸時代前期）

17 世紀前半を主体とする時期の遺構としては、掘立柱建物跡 3 棟（1554SB・1558SB・1574SA）、溝（002SD・003SD・055SD・095SD・096SD・190SD）の他に 001ST も存在する。遺構の分布としてはほぼ全域に及んでいるが、密度は低く散漫としている。A 区周辺の開発を進めるため、A 区では道路状遺構が設置された。E 区でやや規模が大きい掘立柱建物跡が存在する。周囲に区画施設は確認されなかったが屋敷が展開したと思われる。

(12) E1 期（江戸時代中期）

18 世紀末から 19 世紀前半を主体とする時期の遺構としては、掘立柱建物跡 5 棟（1536SB・1545SB・1551SB・1570SB・1572SB）、溝（128SD・171SD・221SD・250SD・438SD・440SD・583SD・601SD）、井戸（305SK・426SK）、池（746SK）などがある。Ab 区から B 区にかけて溝が方形状に巡るもの（128SD・221SD・250SD）があり、内部に掘立柱建物跡 1570SB・1572SB と井戸 305SK が展開する。これらは方形屋敷と考えられる。C 区でも溝が確認されるが、この地点のみ

の成果だけでは周囲の状況は不明である。E 区から D 区北端部では掘立柱建物跡が展開しており、前代から引き続き屋敷であったと思われる。

(13) E2 期（江戸時代後期）

19 世紀を主体とする時期の遺構としては、掘立柱建物跡 2 棟（1560SB・1561SB）、溝（005SD・008SD・109SD・128SD・139SD・156SD・169SD・439SD・441SD・518SD・522SD・533SD・583SD・2147SD・2180SD・2413SD）、井戸（304SK・428SK・2290SK）などの多くのものがある。Ab 区から B 区にかけて溝で囲まれたが方形状に巡るもの（128SD・221SD・250SD）が引き続き存在し、内部に井戸 304SK があって、掘立柱建物跡 1570SB・1572SB も継続したかもしれない。ただし、139SD・156SD・169SD が掘立柱建物跡を切る形で存在するため、E2 期の中で 1570SB・1572SB は最終的には廃絶していることになる。C 区では、E1 期に比べると溝の位置が変更されており、E 区の建物は北側に移動している。E 区の南寄りの部分に東西方向の小溝がいくつかあり、これは屋敷境などの区画を示した遺構の可能性はある。

第 2 節 総 括（遺跡の変遷）

これまでの分析の結果、今回の西浦遺跡の発掘調査では 5 期 13 段階に大別して遺構変遷を把握することができた。実際には、さらに詳細な時期区分を設定することができるだろうし、遺構の重複が激しい部分では細分した方が適切な場合も多いと思われる。しかし、現実には遺構の時期認定が細かいレベルでは困難であることから 13 段階区分に止めざるを得なかった。さて、これらの分析の結果を踏まえ、今回の調査成果を地域史の中に位置づけていくと、次のように整理されよう。

1) 西浦遺跡は三輪川により開析された台地端部に所在するが、[表層地形解析](#)の結果、調査区は標高 30 m 前後の西側に舌状に伸びる平坦地に

立地していることが分かった。そして南部（A 区）では、谷地形が観察され沼沢地的な様相を持つことが想定された。

2) 西浦遺跡では、旧石器時代から縄文時代、および弥生時代前期において集落が営まれた痕跡は認められない。唯一発見された古い遺構は煙道付炉穴のみである。この遺構の存在は、三輪川を挟んで北側に所在する「多り畑遺跡」で縄文時代早期の遺構や遺物が発見されたことに大きく関連するものと思われる。

3) 西浦遺跡で最初に集落が営まれたのは弥生時代中期（古井式期から山中式期前半）である。その範囲は台地端部で舌状に伸びる平坦地の北

西浦遺跡

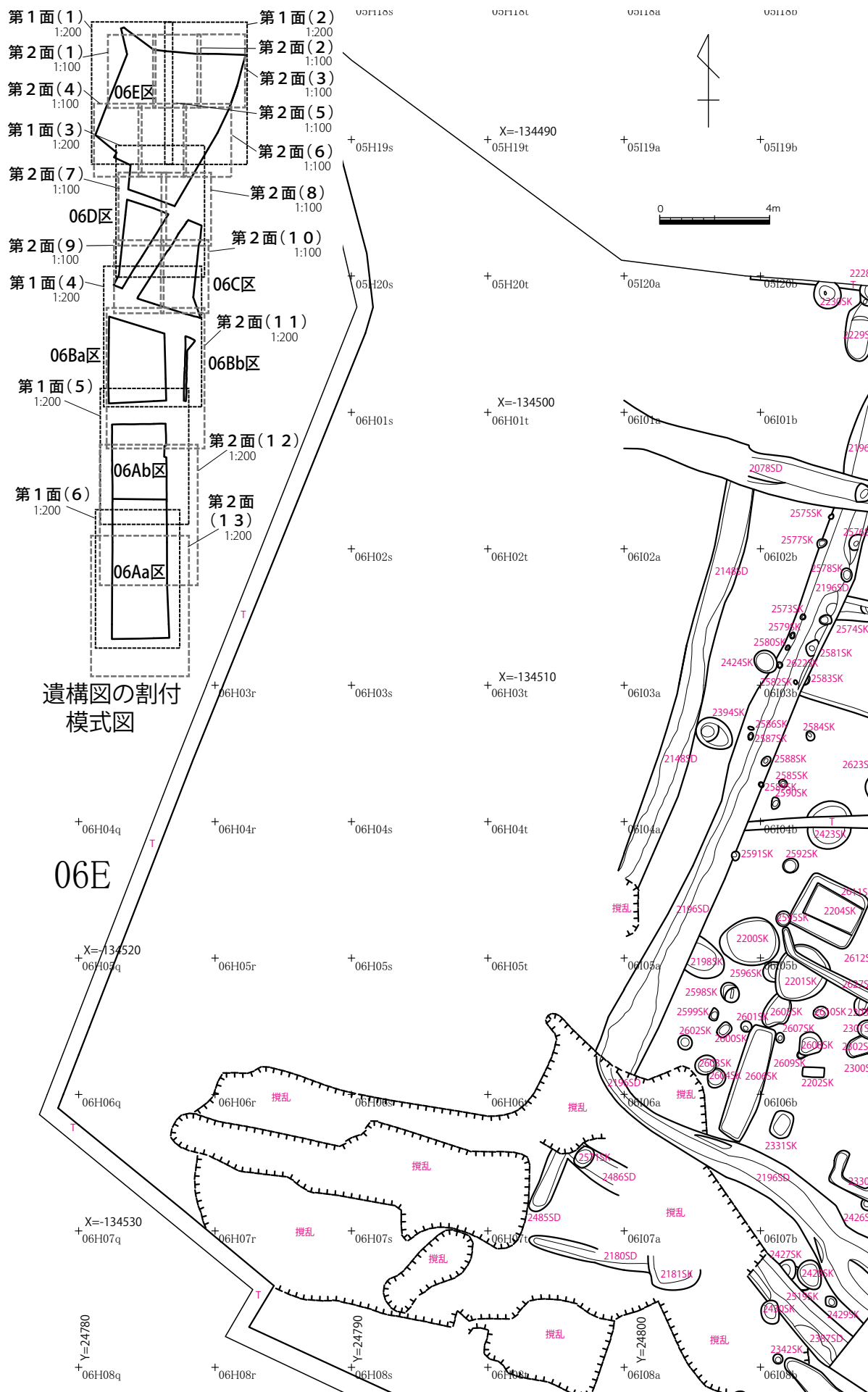
端である E 区に限定される。現状では竪穴建物のみで構成され、環濠を持たない集落である。平面形が楕円形を呈する竪穴建物跡の存在は注目される。一方、わずかに地形が低くなる E 区南部では土器棺墓が造営された。C・D 区では全く開発はされていないようである。なお、銅鐸の舌はこのあたりの時期の所産と推察されるが、それに関連する遺構は発見されていない。ただ付近に銅鐸埋納遺構が存在しても想像に難くない。

- 4) このような集落のあり方は、若干の断絶を含む可能性が残されるものの、基本的には廻間Ⅲ式期以降まで継続する。ただし、廻間Ⅰ式期後半から廻間Ⅱ式期までのある段階で、E 区南部では方形周溝墓が造営された。この遺構のあり方からみて、高い平坦地からやや下がった地点で墓域が形成されたものかもしれない。
- 5) しばらく集落の断絶が認められるが、再び集落が営まれたのは 6 世紀後葉以降である。その範囲は台地端部からやや奥に入った B 区北端部まで拡大する。竪穴建物と掘立柱建物で構成されており、7 世紀前葉前後で東西方向の区画溝が出現する。7 世紀中葉では E 区の建物跡が減少し、C 区に遺構は集中する。
- 6) しばらく集落の断絶が認められるが、再び集落が営まれたのは 10 世紀である。その範囲は E 区から B 区南部まで拡大する。竪穴建物と掘立柱建物で構成されており、C 区に掘立柱建物が集中する。また南北方向の区画溝が出現するが、その意義は不明である。建物の方位は概ね共通するが規格性があると評価することはできない。一般的な集落跡と推定される。
- 7) 少しの断絶があるものの、12～13 世紀には掘立柱建物のみで構成された集落が営まれた。遺構の範囲は全調査区に拡大するが、居住域は E 区と C 区に限定される。E 区では、直線的ではないが矩形になる区画溝が出現し、区画と道路を形成している。区画の内側には 2 棟前後

の掘立柱建物が建つものがあり、区画のいくつかは屋敷を形成したと見られる。168SD は集落の南を画する溝の可能性も考えられる。

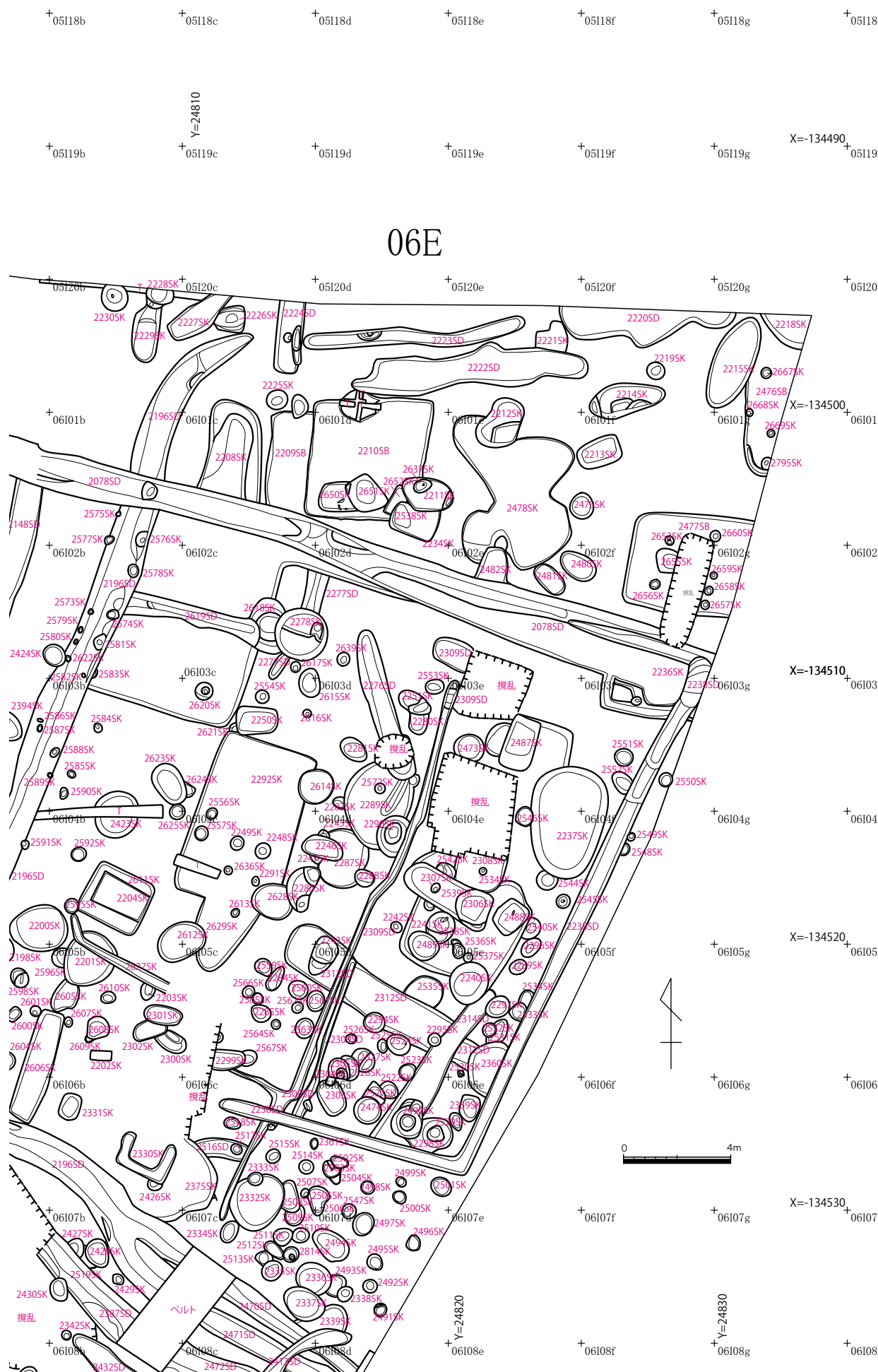
- 8) しばらく集落の断絶が認められるが、再び集落が営まれたのは 17 世紀である。その前の 15 世紀後半から、南部の A 区を中心に溝などの遺構が掘削され、総体的に低地となる部分の開発が進められたものと推察される。三ツ口池開削との関連も注目される。17 世紀の遺構には掘立柱建物があり、B 区で集落の南を画する溝や柵列なども確認された。
- 9) 少しの断絶があるものの、18 世紀以降には掘立柱建物で構成された集落が営まれた。遺構の範囲は全調査区に拡大するが、居住域は E 区と B 区に限定される。B 区を中心にして堀状遺構で区画された屋敷が存在し、北部に掘立柱建物を、南部に井戸や集石遺構を置く遺構配置が確認された。E 区の屋敷では、屋敷割の特定はやや難しいが掘立柱建物と井戸の組み合わせが確認される。A 区で確認された道路状遺構（平行する溝 2 条）より南側は水田や畑などの生産域であったと思われる。
- 10) 上記の状況は 19 世紀に入っても同様であるが、B 区の建物が不明瞭となっている。これ以降は、若干の異同があると思われるが、概ね現在の集落景観に至るものと推察される。なお、明治時代において一部で養蚕業が営まれた痕跡として蚕火鉢も発見されている。
- 11) 以上の結果、西浦遺跡は弥生時代中期以降にいくつかの断絶を経ながら現在まで継続する集落遺跡であることが判明した。このいくつかの断絶については、本当に断絶が存在するのか、資料の分析や解釈に問題があつて断絶したようにみえるのかは検討の余地があると考えられる。今回の報告ではその問題に大きく足を踏み入れることができなかったが、重要な課題として残されていると思われる。（鈴木正貴）

遺構図版



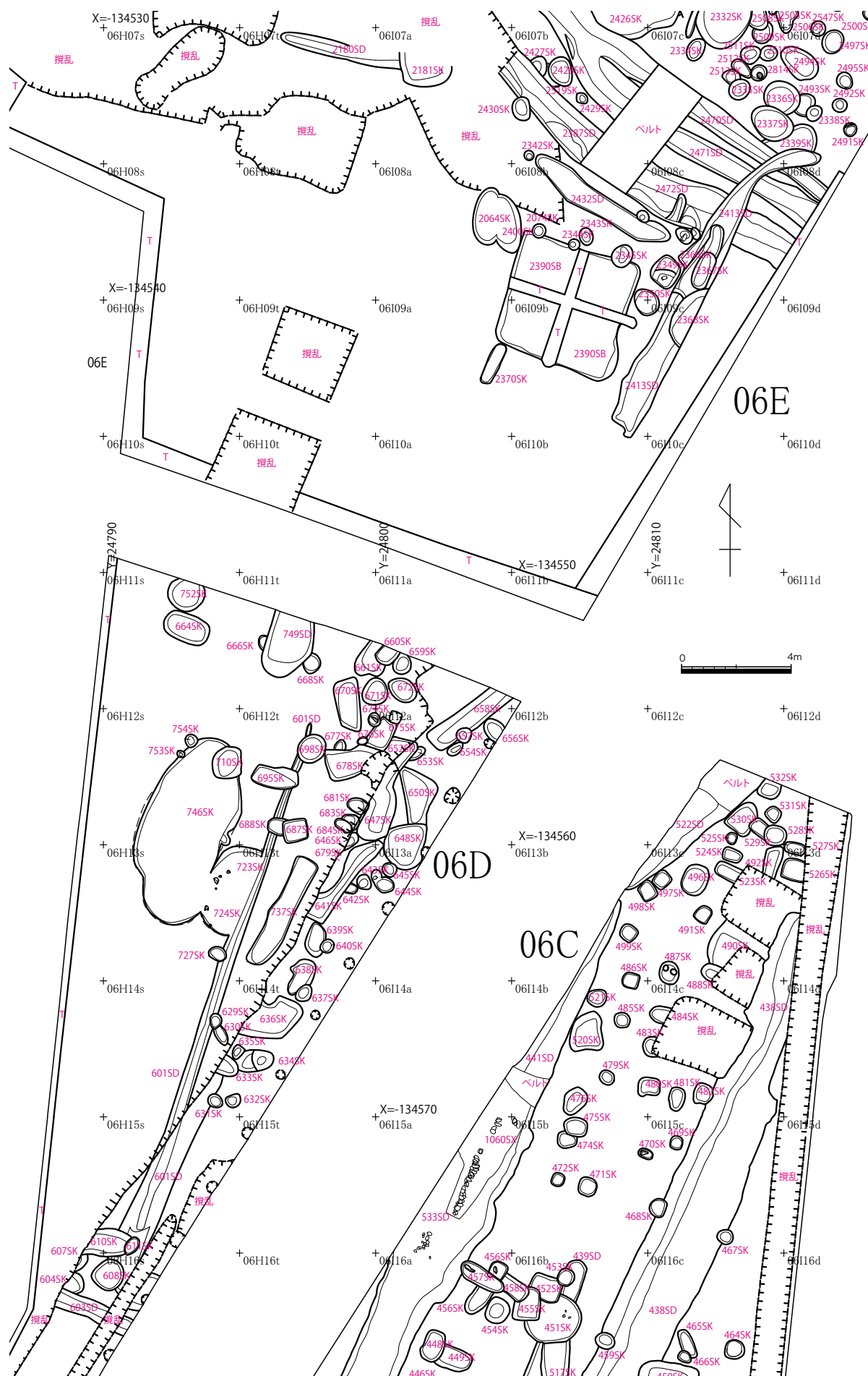
1面遺構図(1) (s=1:200)

西浦遺跡



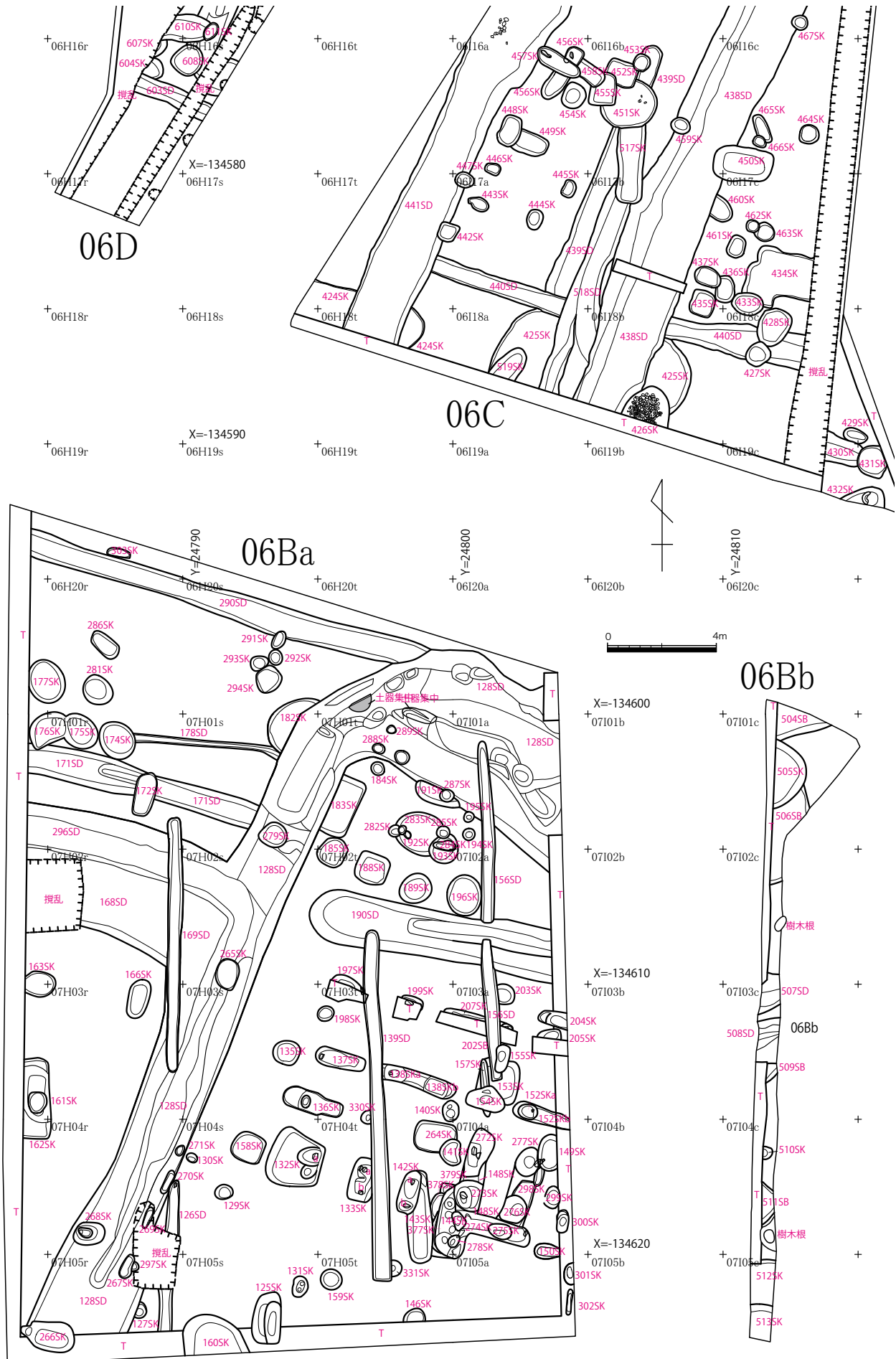
1 面遺構図 (2) (s=1:200)

遺構図版



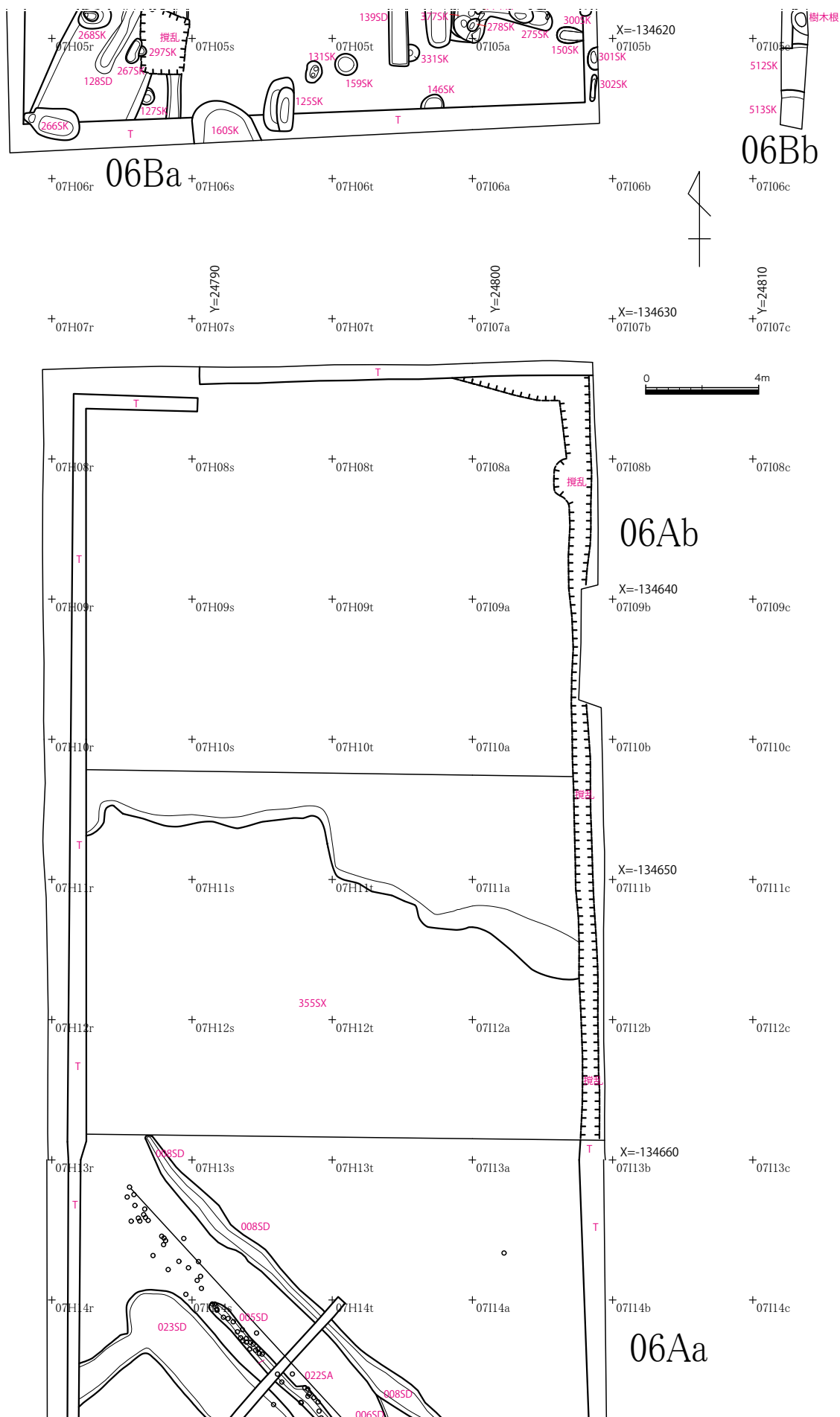
1面遺構図(3) (s=1:200)

西浦遺跡

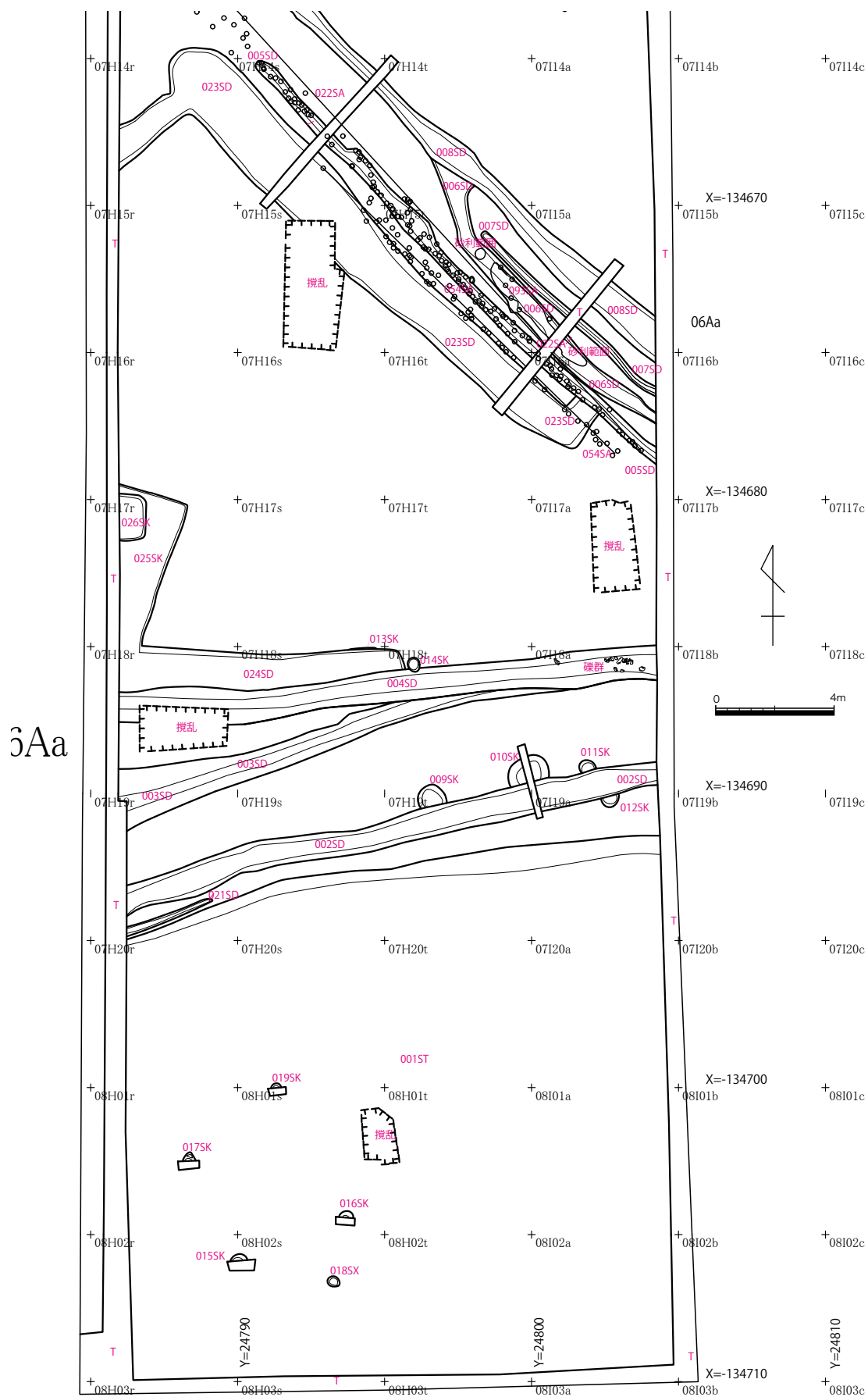


1 面遺構図 (4) (s=1:200)

遺構図版



西浦遺跡



1 面遺構図 (6) (s=1:200)

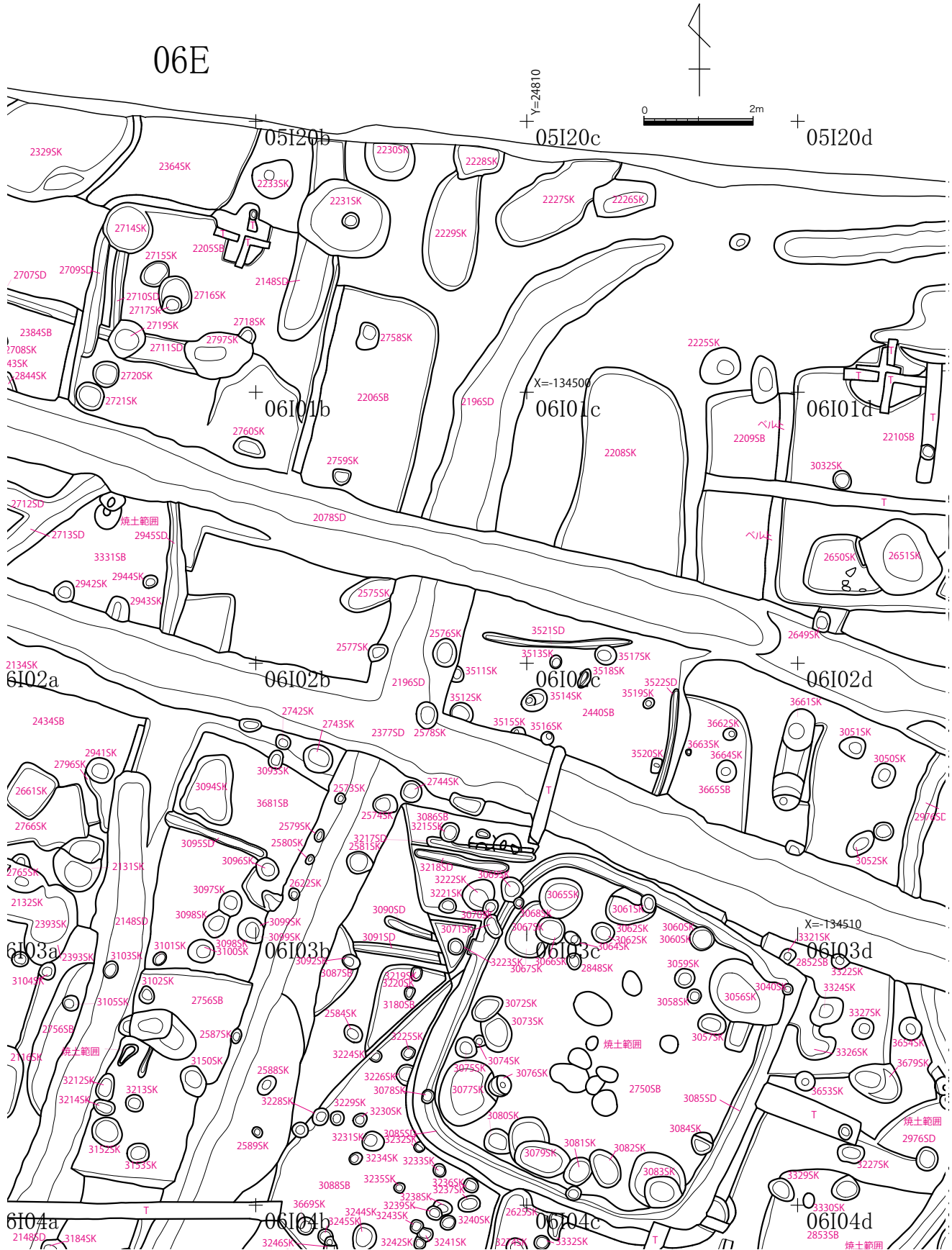
西浦遺跡

+05I19b

X=-134490 +05I19c

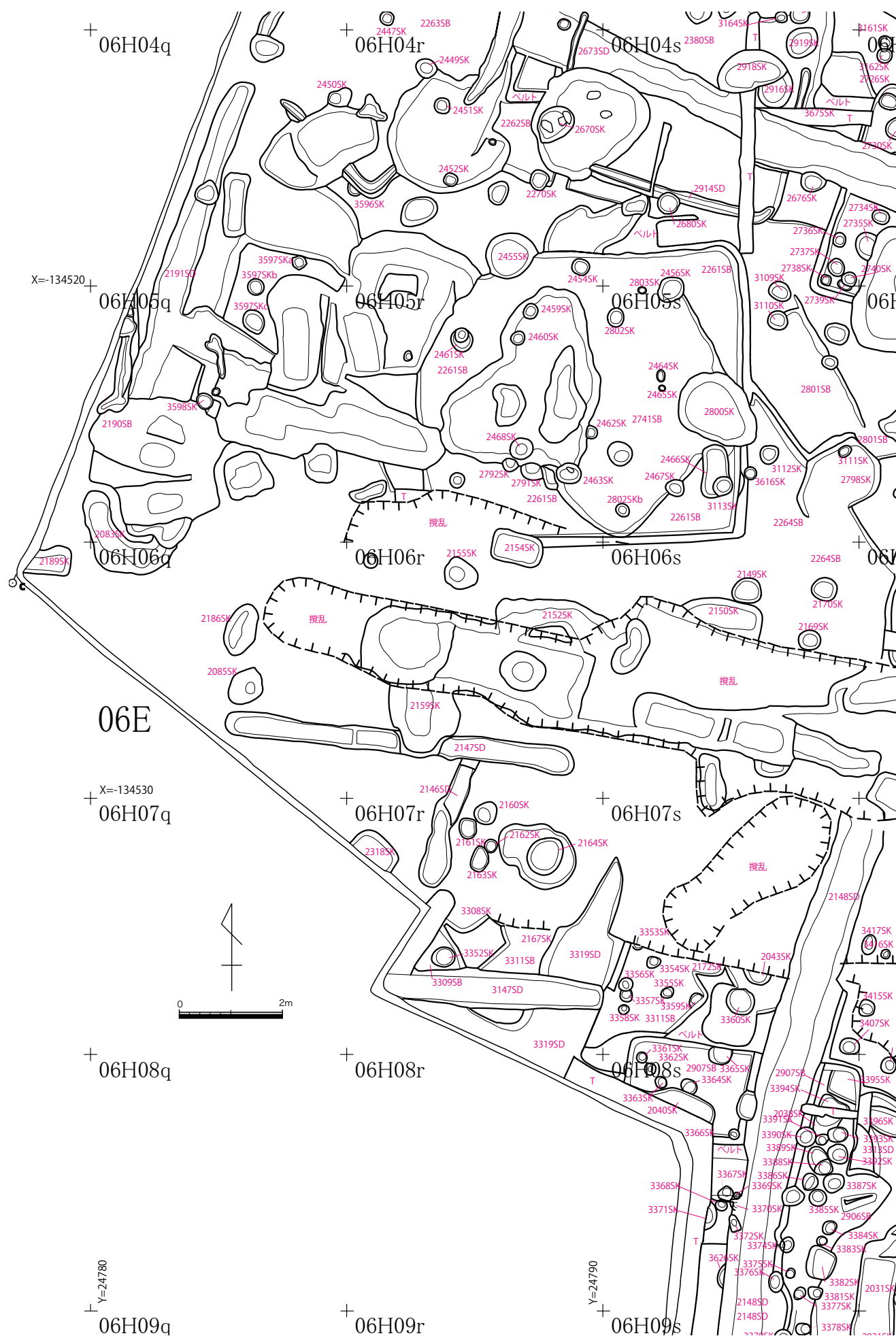
+05I19d

06E

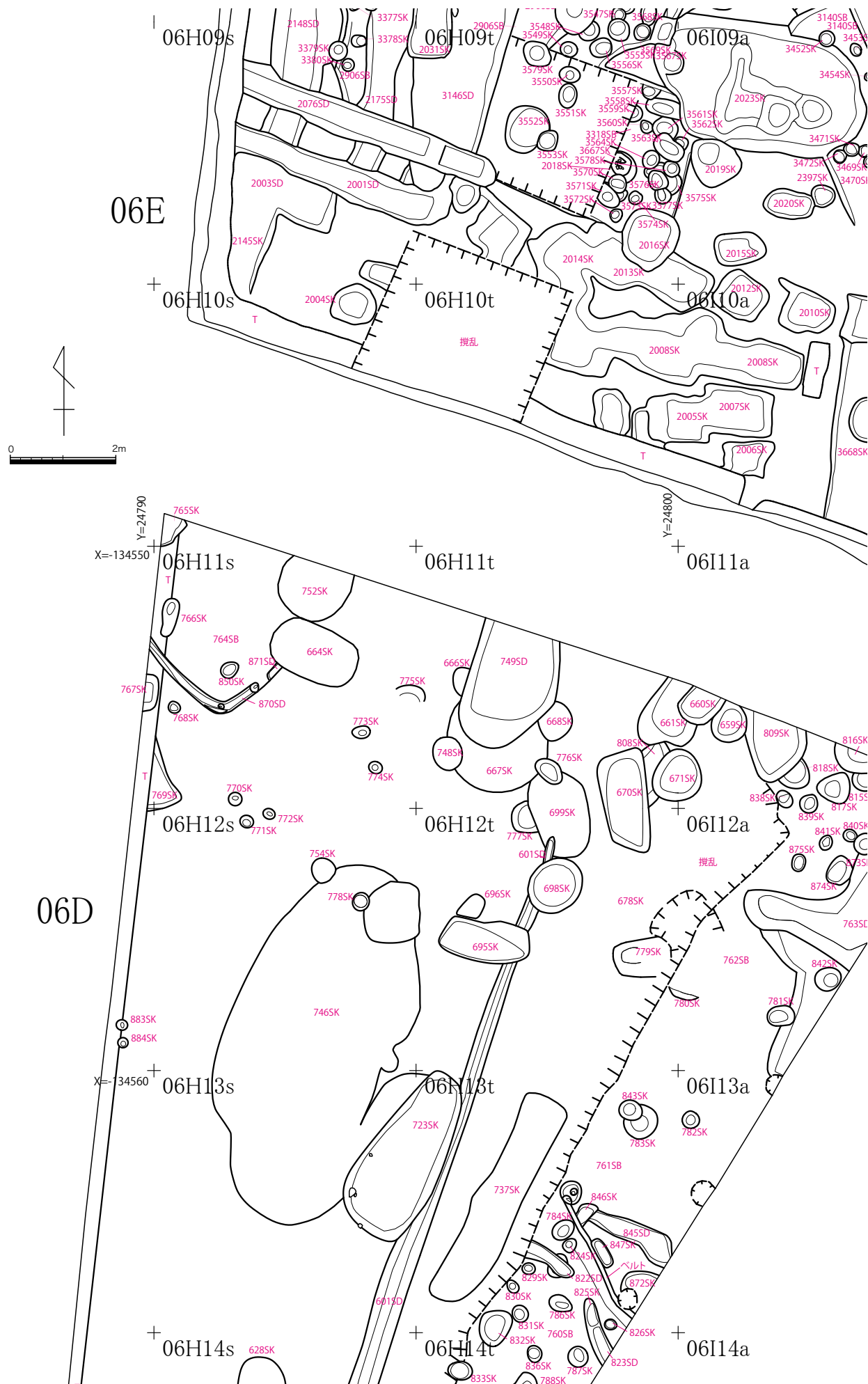


2面遺構図(2) (s=1:100)

西浦遺跡

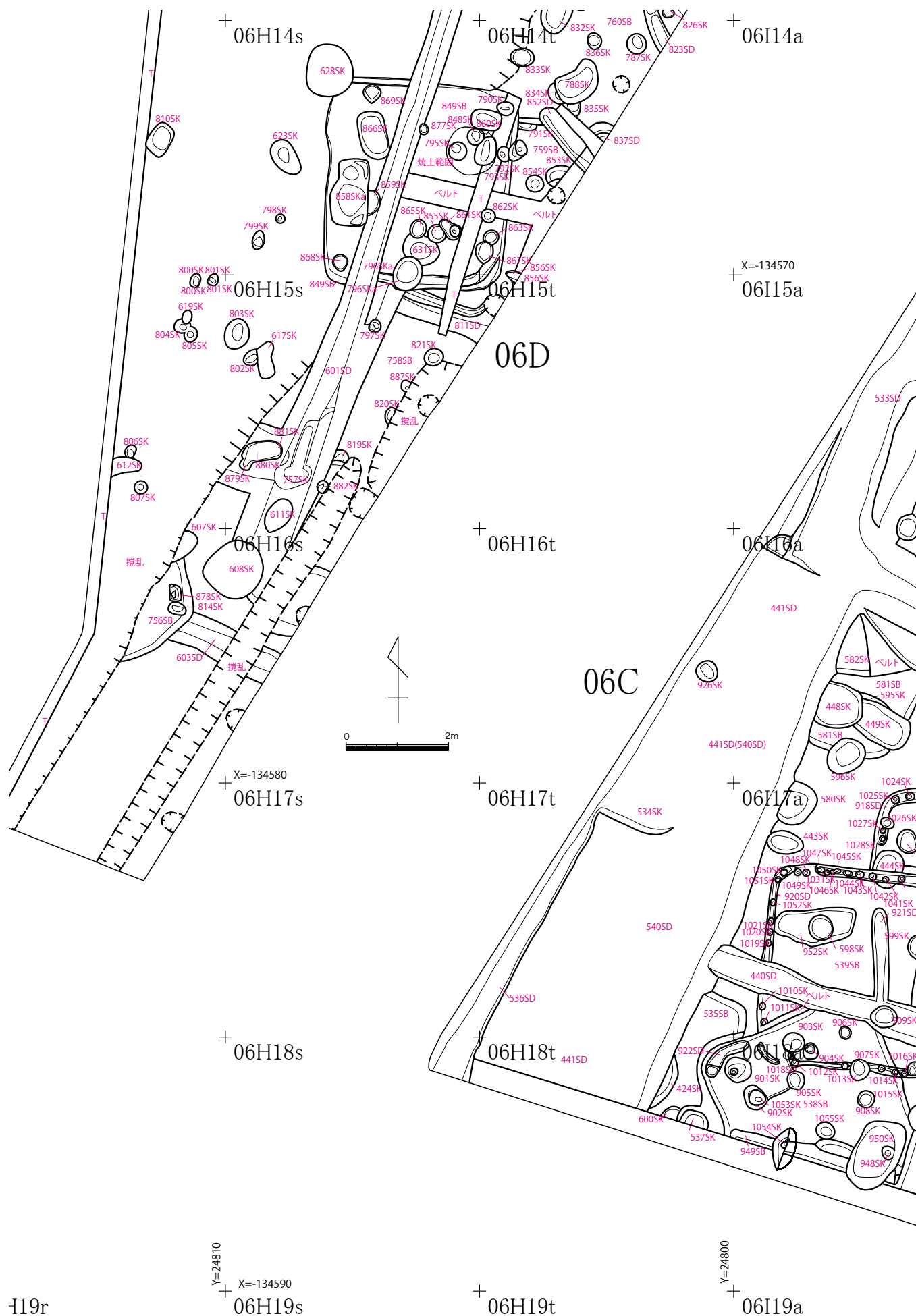


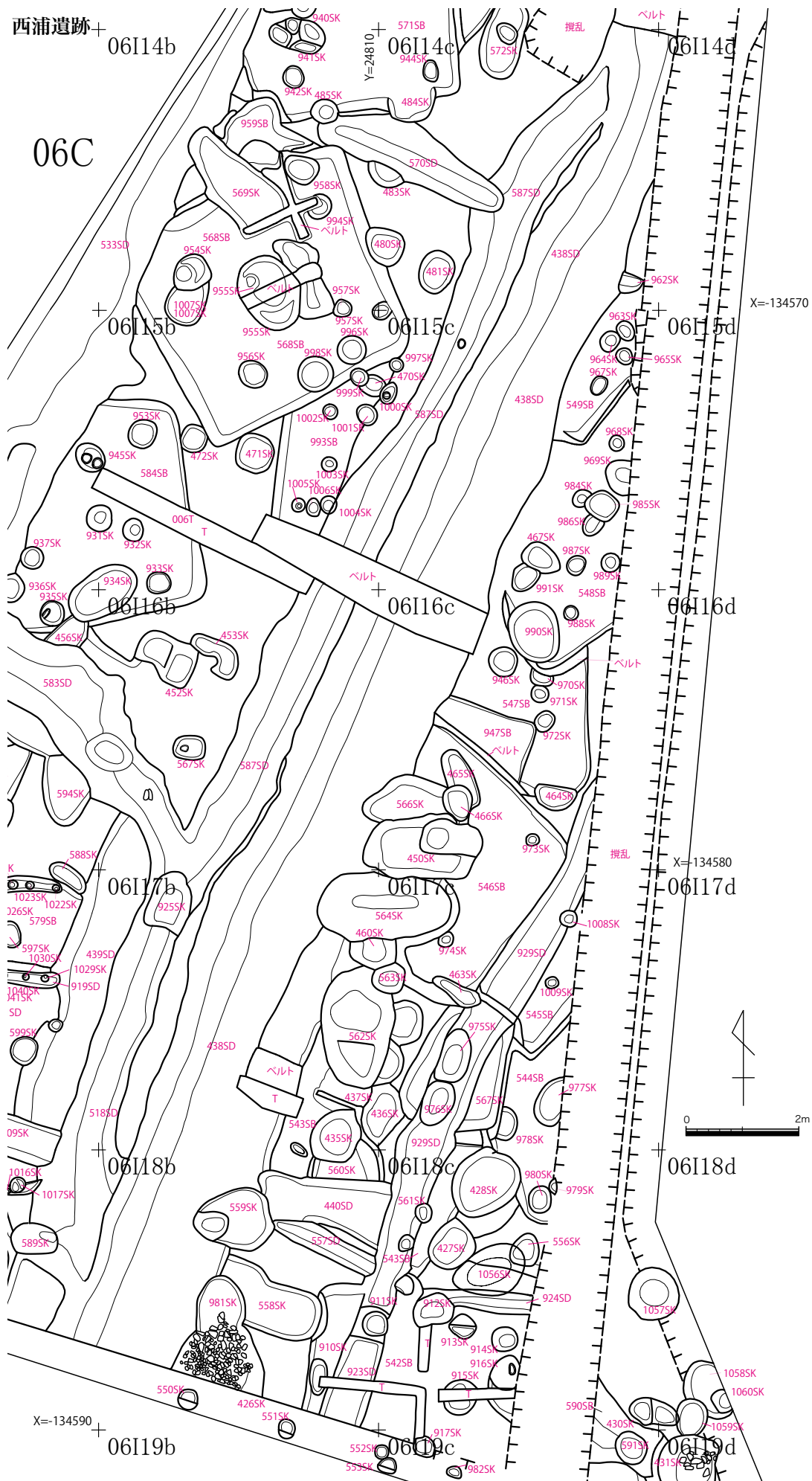
遺構図版



2面遺構図 (7) (s=1:100)

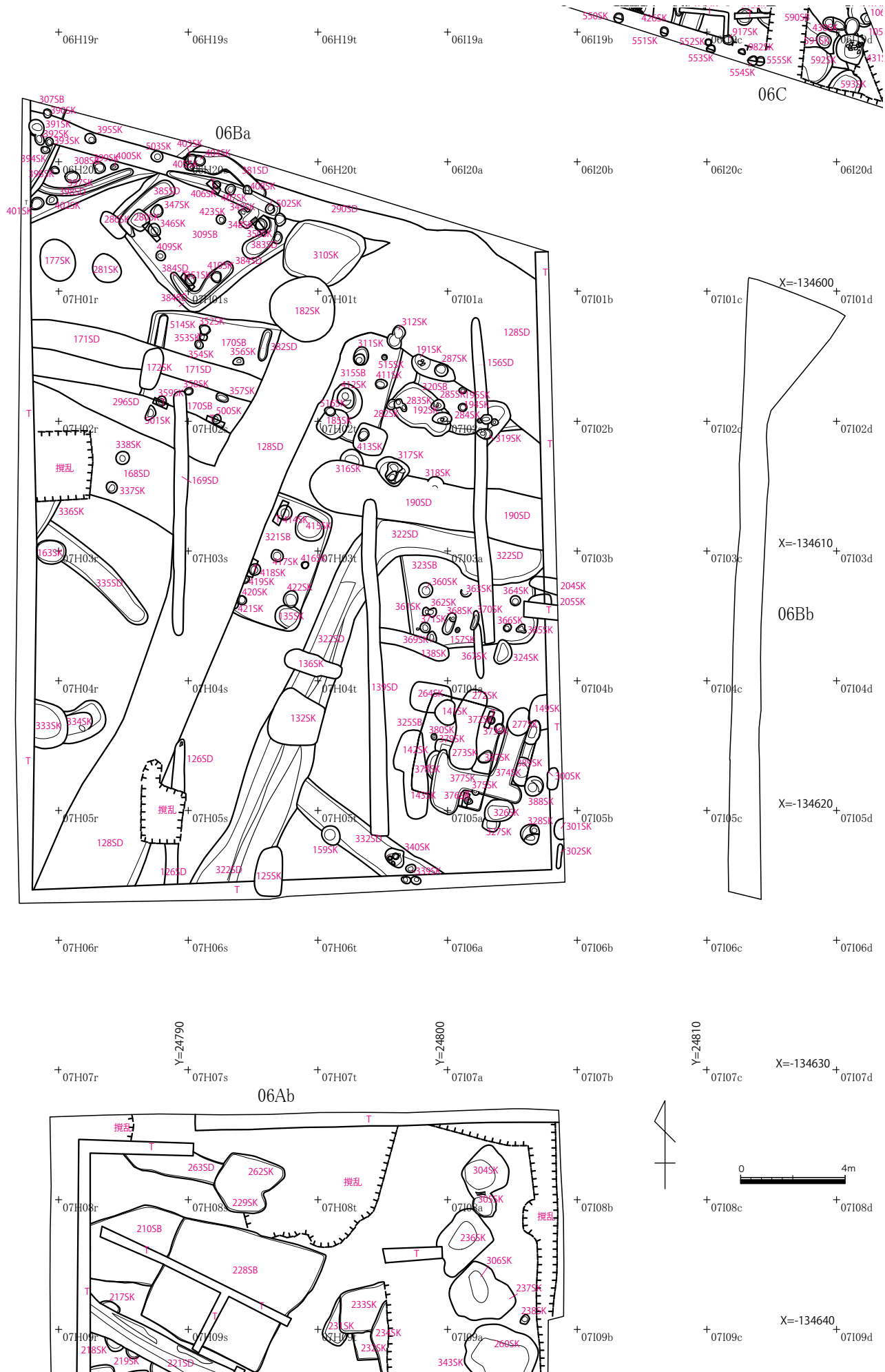
遺構図版





2面遺構図 (10) (s=1:100)

遺構図版



2面遺構図(11) (s=1:200)



遺跡遠景（西から） 左側に石巻山がみえる。



遺跡遠景（南から）

写真図版 2



Aa 区 1 面全景 (北から)



Ab 区 2 面全景 (東から)



Ba 区 1 面全景 (南から)



Ba 区 2 面全景 (東から)

写真図版 4



CD 区 1 面全景 (西から)



CD 区 2 面全景 (東から)



C 区南壁土層断面 (北から)



E 区 1 面全景（南から）



E 区東壁土層断面（西から）

写真図版 6



E 区 2 面全景 (東から)



E 区 2 面全景 (北から)



3667SK 土器棺最上面（西から）



3667SK 土器棺上面（北西から）



3667SK 土器棺中面（西から）



3667SK 土器棺下面（西から）



3667SK 完掘状況（西から）

写真図版 8



539SB 完掘状況 (南から)



539SB 周溝 (東から)



2261SB 完掘状況 (南東から)



2263SB 完掘状況 (北から)



2379SB 完掘状況 (南東から)



2417SB 地床炉 (南から)



2422SB 完掘状況 (東から)



2422SB 地床炉 (南西から)



2420SB 完掘状況（北東から）



2662SB 完掘状況（南西から）



2750SB 地床炉群（西から）



2663SB 完掘状況（北から）



2750SB 完掘状況（西から）

写真図版 10



2756SB 完掘状況（南から）



2756SB 地床炉断面（西から）



2741SB 完掘状況（南西から）



2754SB 完掘状況（西から）



2804SB 完掘状況（東から）



2806SB 地床炉（南から）



2851SB 遺物出土状況（東から）



2851SB 地床炉（南から）



2853SB 完掘状況 (北東から)



2854SB 完掘状況 (南から)



2907SB 完掘状況 (東から)



2908SB 完掘状況 (東から)



3088SB 完掘状況 (南西から)



3089SB 完掘状況 (南西から)



3114SB 完掘状況 (南西から)



5131SB 完掘状況 (北東から)

写真図版 12



2745SB 完掘状況 (西から)



2745SB 土器出土状況 (東から)



2745SB カマド断面 (西から)



2745SB 土器出土状況 (南から)



2745SB 土器出土状況 (西から)



2745SB 舌出土状況 (南から)



949SB カマド支脚出土状況 (東から)



949SB 支脚装着想定状況 (南西から)



309SB 完掘状況 (南西から)



579SB 完掘状況 (北から)



760SB 土層断面 (南西から)



849SB 完掘状況 (南西から)



2210SB 土層断面 (南から)



2380SB 完掘状況 (東から)



2477SB 完掘状況 (西から)



3315SB 完掘状況 (北西から)

写真図版 14



2326SK 完掘状況（西から）



2326SK 土層断面（南西から）



2748SK 土層断面（南から）



2948SK 土器出土状況（南から）



2919SK 土器出土状況（東から）



3083SK 土器出土状況（南から）



2810SD 土器出土状況（南から）



3146SD 土器出土状況（南から）



2533SK・2534SK 土層断面（東から）



2581SK 土層断面（南から）



2638SK 銭貨出土状況（南から）



2637SK 礫出土状況（東から）



2999SK 遺物出土状況（北から）



3332SK 遺物出土状況（東から）



018SK 遺物出土状況（南から）



131SK 礫出土状況（南から）

写真図版 16



2290SK 土層断面 (西から)



426SK 礫出土状況 (南から)



304SK 土層断面 (南西から)



426SK 完掘状況 (北東から)



305SK 土層断面 (南西から)



428SK 土層断面 (北から)



3668SK 完掘状況 (南から)



2016SK 遺物出土状況 (西から)



002SD 完掘状況 (東から)



128SD 土層断面 (東から)



004SD 土層断面 (西から)



322SD 土層断面 (南西から)



005SD 完掘状況 (北西から)



438SD 土層断面 (南から)



2148SD 土層断面 (南から)



441SD 完掘状況 (北から)

写真図版 18



587SD 礫出土状況 (南から)



601SD 土層断面 (南から)



2196SD 土層断面 (南から)



2148SD 土層断面 (南から)



2377SD 土層断面 (西から)



2470SD など完掘状況 (東から)



2808SD 土層断面 (東から)



3146SD 土層断面 (東から)



203SK 遺物土状況 (西から)



432SK 甕出土状況 (南から)



2354SK 甕出土状況 (西から)



2351SK 甕出土状況 (西から)



2473SK 土層断面 (西から)



236SK 礫群出土状況 (南東から)



131SK 土層断面 (南西から)



2488SK 遺物出土状況 (西から)



746SK 完掘状況（南西から）



746SK 土器出土状況（東から）



D 区東壁土層断面（西から）



Ba 区掘立柱建物跡（南から）



Bb 区全景（北から）



写真図版 22







236



236



写真図版 26



280



317



324



281



711



387



283



251



262



328



240



428



373



388



261



290



388



261



381



372



702

写真図版 27



260



327



278



298

746

299

703



380



319



254



322



300



253



244



301



259



256

写真図版 28



427



424



437



667



385



438



378



571



419



426



377



405



423



330



414



664



736



735



664



736



735



672



406



699



672



406



751



写真図版 30



534



535



617



618



506



641



469



533



634



497



494



464



504



466



610



645



690



564



647



478



646

写真図版 31



写真図版 32



598



456



459



604

605

458

386



585



583



729



632



760

762

761

763



633

486

687



693

705



662



485



493



488



490



492

愛知県埋蔵文化財センター調査報告書 第 165 集

西浦遺跡

2011 年 3 月 31 日

編集・発行 公益財団法人 愛知県教育・スポーツ振興財団
愛知県埋蔵文化財センター

印刷 サンメッセ株式会社